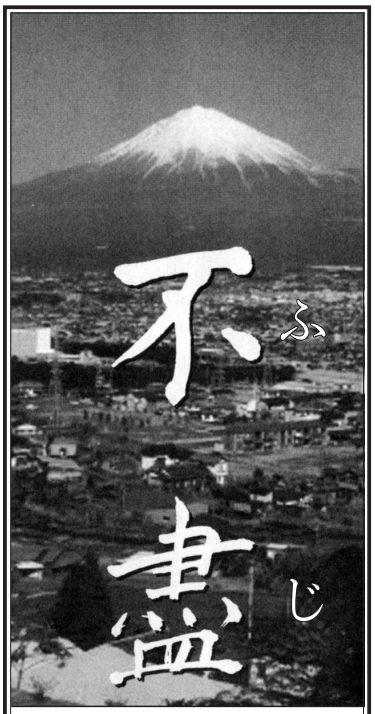



題字・牧野衛　背景・實川欣伸

日本山岳会
静岡支部会報
2014(平成26)年秋季
第76号

# 第四回中部ブロック四支部交流会が開催されました。

中村　博和

越後、信濃、山梨、静岡の四支部持ち回りで毎年開催されている中部ブロック交流会が今年は静岡支部主催にてアマギシャクナゲ開花期を狙い五月十七日、十八日に行われました。

県東部の支部会員を主に準備を進め、渉外担当の諏訪部支部会員の尽力にてホテルの営業部長との度重なる交渉の末、ホテル伊東ガーデンを会場にリーズナブルかつ快適な一泊二日の交流会となりました。

初日十四時の受付開始に備えてホスト役の静岡支部メンバーは十二時集合。おそろいのオレンジTシャツに着替え、ゲストの三支部参加者をお出迎えしました。総勢七十一名の参加者が集い、先ずは天城山登山の事前学習を兼ねて、山口康裕支部会員による「天城山の現状」について講演。

## 目次

第四回中部ブロック四支部交流会　1頁
第二回ハイキングセミナー　4頁
リニア中央新幹線建設問題について　7頁
静岡県知事申し入れ書　9頁
富士山伝説の記録を追って　實川　欣伸　11頁
富士山五百登達成　有元　利通　14頁
人生が分岐する瞬間　聲高　一枝　20頁
オートルートに挑む　白鳥・大島・小田・諏訪部　21頁
第全国30回支部懇談会　埼玉大会に参加　34頁
今後の行事予定　35頁

次にユネスコエコパークで注目必至の南アルプスについて、加藤弘司支部会員による「南アルプス南部源流域の森と人」と題し、講演していただきました。両氏ともスライドや動画を駆使した見ごたえかつ熱意ある講演に惹き込まれました。

ホテルの各部屋に移動して入浴後、宴会場にて懇親交流会が盛大に行われました。ホテルの売り料理である焼きアワビを堪能しつつ、越後支部からの〝雪中梅〟、山梨支部からの紅白ワイン、信濃支部のご祝儀にてビールの追加注文もされ、静岡支部会員諸氏からの各種差し入れの酒にて酔うほどに会話も弾みました。前半は各支部からの支部紹介、後半は諏訪部会員のギターに合わせて皆で山の歌を歌い楽しい宴となりました。

翌日は晴天の下、天城山万三郎コース5班編成、遠笠山コース2班編成にて出発。万三郎コースは山口講師による解説を交えつつ、新緑とツツジを楽しみながら万二郎から万三郎へ。シーズン最盛期で山頂は人、人、人の大混雑でしたが、狙い通りあざやかなアマギシャクナゲの群落を楽しむことができました。遠笠山コースは時間調整の都合もあり實川支部会員に倣って二登頂を果たしました。

両コース、ゴルフ場下の駐車場に集合して解散式を行い、ホテルに戻って温泉にて汗を流し、充実の二日間を終えました。

# 第二回ハイキングセミナー報告

有元　利通

第二回ハイキングセミナーを6月8日(日)実施した。今回は、登山実技で安倍奥・八紘嶺(1918m)、テーマはシロヤシオを見に行きませんかということで募集してあった。

今回はマスコミでの紹介は一社もなくダイレクトメールで送った過去参加者（リピーター）とその紹介の人、石井スポーツ(松坂屋北館)のチラシを見て申し込んだ人で締め切ったところで19名であったがその翌日も、翌々日も申込が有り、人数的にも、保険をかける上でも可能であったので認めた。結局23名の申込があった。しかし、逆にキャンセルが締切前に一人、実施三日前に一人、二日前に一人前日の夜8時過ぎに二人と出て実際に参加したのは18名（男9、女9）であった。二年ぶり三年ぶりの参加の40歳代の女性二人もあった。毎回ではないけれど、山やコースに魅力があったり日程が合ったりすると参加するという感じなのであろう。一方で昨年から4回連続参加の人もいる。色々である。

声を聞いていると国内の山を結構登っている女性も数名おられるし懸垂下降もやって欲しいというような声もあったが、片方で持ち物に地図、磁石とあったから今回買ったんですよ、使い方とか教えてくれるのかと思ったという声もあった。

我が支部で行うハイキングセミナーは基本的に初心者対象です。広島支部のように中級コース、上級コースの登山教室まで開催できるようになればそれはそれで意義あることであろうが現在そこまでの余力は無いと思う。

さて、本題の今回の報告に移ります。

梅雨に思いの外早く入ったので天気が気になるところでした。5月31日静岡市の番町市民活動センターで事前打合会を開いたときは当日30％曇りくらいで実施可能とみていましたが週間予報で一時は40％曇り時々雨くらいの予報にもなりましたが当日朝の予報は曇り、降水確率は午前中20％、午後40％、夕方から30％の予報になり、静岡駅南口に皆さんが集合して岩崎会員運転のマイクロバス定刻の7時前に出たときは曇りで予報通り、サークルK昭府店で途中乗車の有元を拾う頃には南は曇っているものの西や北の山の方は青空がのぞいていてこれ幸いという感じでした。バスの中の種々の案内は篠原会員が年の功で上手く進めてくれていました。山に向かうにつれて青空が広がる感じでした。途中、「真富士の里」と梅ヶ島梅園（コンヤ

温泉街の下）のところの公衆トイレで休憩。梅ヶ島梅園のトイレで元会員の石間宏美さんと彼女の車に便乗してきた諏訪部会員と合流。有元は、ここで保険代（第一回、第二回分を合わせて）を石間さんに支払うことができた。

標高900m余の梅ヶ島温泉街を抜けてバスは安倍峠、身延町に抜ける林道を上っていく。途中の「鯉ヶ滝（恋仇）」の滝は水量が豊富で見応えがありました。

予定の9時より10分早く安倍峠分岐の第二登山口へ到着。青空、晴でした。挨拶、会員、セミナー生の順で自己紹介、班分けをし、篠原会員の指導でストレッチを行い注意事項を述べ9時5分A班から出発。雨が降ってしばらくたった後で空気は澄み、道も適度に締まって歩きやすい方でした。5月22日の下見、予想の通りで富士見台の下は若干のシロヤシオがありましたがほぼ終わりでした。富士見台では東はガスで富士は見えませんでした。一本目の休憩を取った後、9時55分、出発。この上のザレ場のところも雨後時間が経っているので落ち着いていました。長い急登のロープのあるところを登り切っていくとこの辺りはシロヤシオも満開でミツバツツジも結構な色を添えてきれいでした。登り切ったところで二本目の休憩でした。時に単独や二人組の登山者が追い越していきます。

偽ピークを二つ、三つやり過ごして11時14分、目指す八紘嶺の山頂に着きました。沼津の労山（「沼駿山の会」）の人たちが清掃登山ということで登って昼食中でした。我々の一行も予定より15分ほど早く着き、休憩30分として昼食になりました。

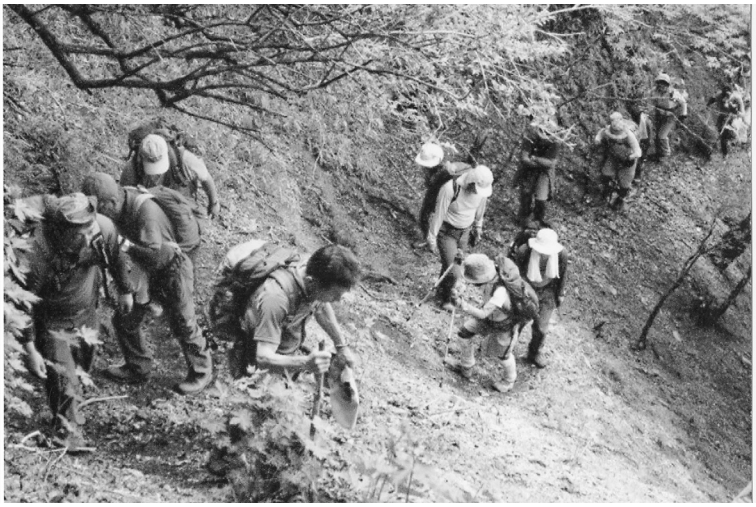
雨に遭わずに登山と昼食が終わり幸いでした。山頂は曇り、東は霧というような状況でした。団体が下っていったので食後、全員の集合写真を撮影しました。皆さんの笑顔が見えて幸いでした。午後は降水確率が上がるので早めに下山です。11時50分、下山開始。下りも、シロヤシオ、ミツバツツ

ジ、ヤマツツジ、卯の花、ベニバナウツギ等を愛でながら進みます。少しずつ霧が出てきます。富士見台の手前の鞍部で休憩、休憩中に雨がパラパラ、ザックカバーや雨具をつけました。富士見台を過ぎるともうすぐですが雨とか木の根、段差でやや下りにくそうで下りに時間がかかります。予定より25分ほど遅れて第二登山口へ下山。10分早く出たので35分の遅れです。それでも大粒の雨に遭うこともなくお目当てのシロヤシオの他花々を愛でることができ幸いなセミナーでした。

この後は、静岡市営の「黄金の湯」に寄り、入湯してさっぱりして、また暖まってバスで静岡まで無事に帰り解散でした。バスの中では大島支部長から韓国の岩山とストックの話などもありました。下界の静岡では雨は降ってなかったということで山の天気でした。

（有元）

参加支部会員：大島康弘、岩崎充弘、篠原　豊、諏訪部豊、小笠原誠、増田次郎、有元利通



## リニア中央新幹線 建設問題について

今、ＪＲが進めようとしているリニア中央新幹線建設について、静岡県民・特に南アルプスの自然環境を心配する我々岳人も非常に危惧している。

ニュースでも連日報道され

○「南アルプスを世界遺産」の前段としての『エコパーク』登録指定への支障

○リニア建設工事で、大井川が毎秒２トンの減水

○トンネル工事残土３６０万立方㍍処分地は大井川上流の河川敷で、崩壊・崩落の危険性が増大。

○大井川の上流で毎秒２トンの減水が予想され、流域の７市２町の上水道、農業用水６３万人分の水利権の喪失

○リニアが使う大電力が浜岡原発の再稼働に繋がる危惧等

この件につき

静岡県山岳連盟（代表　滝田博之）

静岡市山岳連盟（代表　松永義夫）

静岡県勤労者山岳連盟（代表竹本幸造）

（公益社団法人）日本山岳会静岡支部

（代表　大島康弘）が連名で

静岡県知事　川勝平太氏に「リニア中央新幹線南アルプストンネル工事に関する申し入れ書」を提出。

翌十一日（木曜日）静岡新聞と毎日新聞朝刊に記事が掲載された。

## 大井川流量低下回避を

### リニア工事で県山岳連等　ＪＲへの指導　県に要望

静岡県山岳連盟、静岡市山岳連盟、県勤労者山岳連盟、日本山岳会静岡支部の４団体は１０日、リニア中央新幹線の工事で大井川の流量を低下させないことや渓谷に残土を投棄しないことについて、ＪＲ東海に対し指導するよう求める川勝平太知事宛の要望書を県に提出した。

要望書は「南アルプスの破砕帯を貫通するトンネルが地下水脈を思わぬ方向に導くことは容易に想像できる。豊かさと便利さのために貴重な自然をこれ以上壊すことに慎重でなければならない」と指摘し、計画経路の変更も視野に入れ、県がＪＲ東海を指導するよう求めている。

日本山岳会静岡支部の大島康弘代表は県庁で開いた記者会見で「景観が壊され、生態系にも影響が出ると考えられ、見過ごしできない」と述べた。

南アルプスとリニア建設を考える
市民ネットワーク静岡　でも

**七月二十一日（労政会館）で**

「南アルプスとリニア講演会」を開催。

「大井川の水・地下水への影響」
柴崎直明（福島大学教授）

「南アルプスの自然と
残土への影響」
佐藤博明（静岡大学名誉教授）

**九月二十五日（労政会館）**

「南アルプスをリニアから守る
静岡集会」を開催。

国連生物多様性条約の10年ネットワーク代表　坂田昌子さん
山岳写真家　白籏史郎さん
が講演し南アルプスの自然保護を訴えた。

9月一ケ月の新聞記事を見てもこの問題を憂慮する関連記事が多い。

**9月5日（金）**

**「JRは責任対応を」**
**望月環境相環境対策求める**

望月義夫環境相は（衆院静岡4区）は4日、環境省で記者団のインタビューに応じ、JR東海リニア中央新幹線工事に伴う環境影響に関し、「JR東海は責任ある事業主体として適切な対応をしてもらいたい。

**9月20日（土）**

牧之原市の西原茂樹市長はリニア中央新幹線について、
「早期に建設すべきでない」

**9月25日（木）**

望月義夫環境相はJR東海リニア中央新幹線の環境影響評価（アセスメント）書の順守は事業者の義務との認識を強調した。

**9月25日（木）**

**9市2町首長ら南アルプス視察**

JR東海リニア中央新幹線工事が予定されている南アルプスで大井川の流量現象が予測されている問題を受け、静岡市と流域8市2町の首長、議長らが10月10日に工事予定地を視察する。

**リニア中央新幹線南アルプストンネル工事**

## 県山岳四団体、危惧を表明

**支部長　大島康弘**

リニア新幹線計画の概要が本年になって明らかになり、トンネル残土の流域投棄、大井川の流水量の減少が問題になっています。

二水会の席上でも、この問題に関して地元の山岳界が何の危惧も表明しないのはおかしいのではないか、県に対して何らかの働きかけが必要ではないか、申し入れをするなら、県の主な山岳団体と共同歩調をとったらどうかとの提案もあり、県岳連の滝田会長、市岳連の松永会長、労山の竹本理事長と 8 月 20 日、《あざれあ》で会合を開きました。

話はとんとん拍子にまとまり、八木功さん（支部会員、リニア沿線ネットワーク）、多家一彦さん（支部会員、県会議長）の協力を得て 9 月 10 日、県庁を訪れ、池谷暮らし環境部長と面談し、川勝知事宛の申し入れ書を提出しました。さらに 10 月 9 日、市長に面談し同じ内容の申し入れ書を手渡しました。

申し入れ書の内容は以下の通り、南アルプスの景観の破壊、生態系へ悪影響があってはならないというものです。知事や市長の姿勢は自然保護の観点では私達の主張と共通しており、県の主要山岳団体がこぞって声を上げたことは大きな意味があると思います。

支部として今後の進み行きに注目し、エコパークにも登録認定された南アルプスの自然がこれ以上破壊されることのないように今後も積極的な対応をしたいと思います。支部会員の皆様の協力を宜しくお願いします。

**静岡県知事　川勝平太　殿**

**平成２６年９月１０日**

## リニア中央新幹線南アルプストンネル工事に関する申し入れ書

**静岡県山岳連盟　（代表　滝田博之）**
**静岡市山岳連盟　（代表　松永義夫）**
**静岡県勤労者山岳連盟　（代表　竹本幸造））**
**公益社団法人　日本山岳会静岡支部（代表　大島康弘）**
**連絡先　427-0011　島田市東町 1584**
**電　話　0547-34-3032**

リニア中央新幹線、南アルプストンネル工事の残土処分と地下水湧出に関してＪＲ東海の対策は現段階において、ずさんであると言わざるを得ません。

大井川の上流、二軒小屋の地下５００ｍ付近を貫通するトンネル掘削の残土は斜坑より二軒小屋付近に運び上げられて、谷筋の中部電力残土置き場に上積み、一部は伝付峠北方の尾根付近にも投棄されるとのこと。私たち静岡県の岳人は、残土をこの美しい渓谷や山に投棄することによって大井川上流の自然景観が破壊されるのではないかと大きな危惧を抱いています。

さらに水の問題が指摘されています。地下水脈は私たちの理解を超えるほどに複雑で、今なお、年間４ｍｍの隆起を続けている南アルプスの破砕帯を貫通するトンネルが地下水脈を思わぬ方向に導くことは容易に想像できます。また、調査の結果、トンネル工事で大井川の水量が毎秒２トン減水すると予測されていますが、その場合はポンプで大井川に戻すとのこと。トンネルの５００ｍ上部を流れる大井川までポンプで汲み上げるとは恐れ入りますが、そのためには２００００ｋｗもの大規模な揚水設備が必要になり、リニア新幹線の膨大な電力消費をさらに押し上げることになります。

先の敗戦の後、農薬、水質汚濁、大気汚染などにより、多様な生物に溢れていた野山の豊かな生態系はすでに取り返しのつかないほど破壊されています
私たちは豊かさと便利さのために貴重な自然をこれ以上壊すことに慎重でなければなりません。静岡県が、リニア新幹線のトンネル工事により、大井川上流域の生態系や自然景観が破壊されるであろうことを深刻に受け止め、計画経路の変更も視野に入れながらＪＲ東海を指導するよう、次の２点について知事に要請いたします。

１）残土を大井川渓谷に投棄しないこと。
２）大井川の水量を低下させないこと

時を同じくして、本年６月、南アルプスはユネスコエコパーク登録承認されました。
南アルプスは太古の自然が息づく、日本に残された数少ない地域です。この地域を保全することが、リニア新幹線のトンネル工事に優先することは言うまでもありません。私たち静岡県の山岳関係者は、南アルプスの大自然を享受してきた者として、その豊かな生態系を私たちの子孫に手づかずのまま継承することが、最も大切と信じるからです。

上記について知事の見解をお伺いできれば幸甚です。

# 富士山 伝説の記録を追って

實川　欣伸

私が1000回達していない頃、仲間から御殿場の強力で梶　房吉と言う人が1672回の記録を持ち富士山検定に出題されていると聞かされた。当時聞き流していたが、どんな人物か知りたくなり調べたが、登山記録は1672回で詳細は不明だった。仕事で50年間で登った記録で、仲間からは気にすることはないよと言われた。

然し知った以上気になり、年間200登頂を始めた頃で記録を破れればと思った。

昨年、世界文化遺産に決定の年に更新したいと頑張ったが6月末の内定から決定後の8月初め迄、現役登頂記録保持者と言う事でマスコミに追われ登頂回数が伸びず、12月4日の1619回の登頂で断念、今年4月エベレストに挑戦、高度順応のロブチェイースト6119mに登り、BCに到着した翌日、アイスホールでシェルパ大量遭難で登山を断念5月5日に帰国したが精神的に落ち込んだ毎日で、この状態が続いてはまずいと考え5月11日に今年初の富士登山に行くが登りに6時間以上要し、仲間達が實川の富士登山は終わったとささやかれた。その後一か月以上調子が戻らず、苦しい登山が続きこのままでは完全に駄目になると思い、今年初めての一日2回登頂に挑戦、時間はかかったもの登り終えて自信を取り戻す。

6月中旬になるとマスコミから記録更新は何時かと問い合わせが続き、思い切って7月16日と断言した翌日に台風の接近

を知り戸惑う、現実強風雨の悪天候で思うように登れず更新日までの5日間で10登頂を残す事になり12日から14日迄は一日2登頂15日は3登頂をして午後20時30分に帰宅シャワーを浴びて21時に富士市の吉原駅にむかう。22時に吉原駅に仲間6名と途中まで応援の2名も到着田子の浦港へ

暗黒の海面に手を浸し契りをし石を拾う。

23時に出発、30分程で富士塚に到着石を納め登山の安全を祈願。

16日0時過ぎに吉原商店街へ久保田前支部長宅と西川支部会員店舗で激励を受け、商店街を抜け段々と明かりも少なくなる樹林帯を歩き、午前4時に村山浅間神社に着く。ここは寺と神社が敷地内にあり寺は改装中であった。朝食をとり30分ほどで出発、石畳の小道を歩き参道に入る、村山古道の案内板や標識が新しい天照教迄の登山道は沢のように荒れていて所々迂回させられた。木漏れ日が見え天気が良いので天照教奥の院へ、仲間達は初めて木々に囲まれた社の光に輝き聳え立つ富士山の姿に感動していた。

富士山麓キャンプ場で小休止、炭焼き小屋跡へ向かうと昨晩途中迄車で伴走してくれた2人と今朝から更に3人加わり、冷たい飲み物などを補給してくれた。高鉢を通り大倒木帯へ数体の仏像が鎮座している。

青空の下、花が咲き蝶が乱舞する光景はアルプスのお花畑を歩いているようだ。二合目あたりでは倒木の下を潜り、跨ぐ苦戦の連続である。

登山道の木々が低くなり森林限界が近くなる。13時に6合目の山小屋で待つ仲間の声援を受ける。伴走の仲間が増え15～16人で頂上へ向かう。元祖七合目当たりから風が強くなり強風の中山頂へ、大勢の人々の祝福を受ける。何時も見ている景色と変わらないのだろうか　半世紀振りの記録更新の今日この目で見る景色は格別であった。誰もが破れると思わなかった162回と言う伝説の記録それを29年間なんとなく登り続けた結果で、富士山世界遺産の年に現役日本一登行で翌年に真の日本一登行者になれるとは考えても出来ないことが、現実に達成出来たことに驚きを感じる。

街中でも自然の中でも歩くことが好きだった。キャンプでも登山でも何で良い自然と接することが好きだった。富士山に登ろうと思わなかった。中国研修生の富士山に登りたいの一言から一緒に登り富士山の虜になった。宿命というか運命を感じる。富士山を千回登った時、仲間が「富士山を千回愛し、富士山に千回愛された男」と言った。これからも富士山を愛し愛され続けたい・・・

# 富士山　１７１９回登頂

2014年9月10日現在

日本山岳会静岡支部　實川欣俾

| 登　頂　方　法 | | 回　数 | 合計回数 | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | |
| １回　登頂 | × | 695 | 695 | |
| ２回　連続　登頂 | × | 475 | 950 | |
| ３回　連続　登頂 | × | 8 | 24 | |
| ４回　連続　登頂 | × | 2 | 8 | |
| ４回　登山道一筆登山 | × | 2 | 8 | |
| ５回　連続　登頂 | × | 1 | 5 | |
| ６回　連続　登頂 | × | 1 | 6 | |
| ８回　連続　登頂 | × | 1 | 8 | |
| （記　念　登　頂） | | （所要時間） | | |
| | | | | |
| 東京駅----東海道----富士山 | | 43時間 | 3 | |
| 親不知---日本縦断--富士山--沼津千本浜 | | 3000m29座 | 1 | （29日間） |
| 下田海岸--伊豆縦断---富士山 | | 38時間 | 1 | |
| 下田富士山---伊豆縦断--富士山 | | 38時間 | 1 | |
| 富士五湖—- 一周---富士山 | | 35時間 | 1 | |
| 沼津千本浜海岸--須山----富士山 | | 17時間 | 2 | |
| 田子の浦—--村山古道—---富士山 | | 18時間 | 5 | |
| 天保山—--東海道—----富士山 | | 8日間 | 1 | |
| 合　計 | | | 1719 | |

# 富士山五百登達成とその後

有元　利通

昨年十一月六日に富士山四百八十登までいき、ストップしていました。昨年は高地性肺水腫で入・退院した後、低山からならして六月から「二五〇〇m以上ドクターストップ」のところを登っていきましたが十一月六日までに五二登まで登れたので今年はもう少し早くから登ろうと思っていました。

雪が緩んで来るのを待って五月二四日富士宮口新五合目に入山。車内泊して翌二五日、新五合で泉脇君と實川さんに会った。一緒になった泉脇君（今年度入会、無所属から静岡支部へ移籍）と一緒に六時二分に登り出す。晴天、曇天の中を登り、九合五勺十時十七分。この上でブル道に出て、ここから胸突き八丁の沢の夏道沿いに行かずに以前私が「岳人」の「かわら版」コーナーで残雪期の登りのエスケープルートとして紹介した三島岳直登コースを登った。ここは南西側の尾根で雪は少なくアイゼンが効く程度に雪があるので残雪期にはとても都合が良い（無雪期には落石を起こすから不可）。十一時八分、三島岳頂上に抜けた。四八一登を記した。写真を数枚撮ってからお鉢伝いに馬ノ背の下に下り剣ヶ峰に登っていった。十一時二八分剣ヶ峰着。剣ヶ峰で晴れてまた曇った。剣ヶ峰を八分で辞して富士宮口頂上奥宮前に移動。十一時五十分、雪の深い夏道・胸突き八丁をピッケルで確保しながら下った。一時四十三分、新五合目に下った。この日、途中新六合で支部の篠原さんと連れ、旧知の斉藤さん、下りで旧知の矢後某氏などに会った。新五合目に下った後、お茶会だというので實川、實川さんの連れてきた沼津で料理店を開いているというイタリア人、實川さんとよく登っている斉藤さん、新六合宝永山荘の次男の細君、渡井利歌ちゃん、千葉の平野都ちゃん、泉脇君などと茶会を楽しんだ。

次は五月三十日入山、三十一日登頂。晴天で快適だった。お鉢までの所要時間も前回三島岳までが五時間六分が四時間三十分になった。この日は九合五勺で今年千登を目指している都倉さんが下ってくるのに会った。頂上お鉢で斉藤さん、逗子高校教員の与志平君に、下りの八合で矢後氏らに会った。

かくして五月は二登、一月の検診で見つかった前立腺癌の疑いで四月県総で精密検査結果は悪く六月三日～六日検査入院（五月十九日、術前検査）。十日検査結果、黒。十三箇所の細胞を採って一箇所から癌細胞が見つかった。

六月は入山が遅れた。四、五月は山

梨百名山、第二回小島烏水祭と四国百山、五月、六月とハイキングセミナー、総会、定例会、本部総会、降ってわいたリニア中央新幹線問題の会議や集会と追われた。

結局、六月富士山に入山できたのは十二日夜が最初で翌十三日登頂を皮切りに十四、十六、十七、十九、二十日、二三、二五、二六、二七、二十九日と登った。十一登。二十四日、県総でほぼ一日、他への転移が無いかの造影剤を入れての検査を受け、三十日に結果を聞きに行った。リンパ、他の臓器への転移は無いという結果で少しほっとした。後はどこでどの治療法にするかだった。県総では切除か放射線で切る・散らすかだった。いずれも時間がかかる、日数がかかる、それと後遺症の心配。今夏を、今シーズンを棒に振りたくないと思った。そこでインターネットで調べて日帰りも可能な最先端医療で保険の利かない「高エネルギー焦点式超音波治療法ＨＩＦＵ」を選んだ。この設備があるところは県内では浜松の一民間病院だけだった。県総の担当にそう話して了解してもらって浜松の病院への紹介状とデータのコピーを焼いてもらうことになった。

七月は一日、二日、三日、五日と登り六日に一日二登をやった。二登目で四九九登になった。

七日に県総で紹介状とデータを受領して八日に浜松の病院へ行った。その前に、かみさんの元の同僚が浜松にいてその人にかみさんが電話をしたら偶偶その人の従兄弟さんがその病院の外科医として勤務されているということでその方から泌尿器科の医師で有り、院長である先生の方へ話が通じていた。超音波（ＨＩＦＵ）治療は九月十七日となりそれまでは薬での治療となった。そこまでは富士山に登れることになった。有り難い。

七月十二日(土)に、天気予報もにらんで友人・知人達へ五百登をやると直近の一週間前に知らせ、流しておいた。楽しみに待っていてくださった支部の榛葉華子さんやハイキングセミナーに

よく来てくれる赤堀栄子さん（当日は都合が付かなくなり不参加だったが）にも知らせた。十一日、午後自宅を出て祝賀会用のワインや差し入れにいただいた酒などを新六合の宝永山荘に上げて新五合に下りてくるとこの前マナスルに登頂して、いやその前二、三年富士山のガイドをやって三年ほどで

「登山家」になってしまった鈴木裕久君と会った。私は横浜での勤めを終わってくる長女の恵那を新富士に迎えに行き、拾ってまた新五合目に上がってきた。車内泊とした。歩くのが遅いからと榛葉さんは同夜宝永山荘に宿泊して先行されていた。浜松の延原君も遅いからと先行していた。誰か同行のため来てくれると悪いからと遅めの七時二分に恵那と新五合目を出た。八合で都倉さんと会った。九合で支部の小林勇さんと会った。九合五勺下で下りの實川さんと常連の加茂さんに会った。頂上で榛葉さん、延原君、超一二〇〇登の佐々木さん、恵那と記念写真を撮った撮影は鈴木裕久君がやってくれた。山頂には一時間半で登頂するトレランの鈴木靖一君もいた。持って上がったビールの百CCのチビ缶を居合わせた人にも振る舞って乾杯をした。幸いかな！！剣ヶ峰にも回って写真を撮った。

その後、裕久君と恵那を共に下った。二時半、新六合の宝永山荘に着いた。夕方から祝賀会であったので榛葉さんは「山の歌の会」があるからと帰られた。夕刻、祝賀会場には常連の實川さん、延原君、泉脇君、加茂さん、裕久君、靖一君、「富岳温泉花の湯」の高嶋さん、山友の三尾さん、平野都ちゃん、鴉さん、斉藤さん等も集まってくれ当夜同宿の人も巻き込んで祝っていただいた。有難う。皆さん。抜けていた人がいたらごめん、支部の岩崎君も飲まないから先に帰っていなかったんだっけ？

今年は二月の雪が多かったので富士宮口も初めて雪かきをやった。やらなかったら七月一杯、一般の人は山頂まで登れなかったかもしれない。七月、新七合の下を二回と九合五勺の上を三回やって頂上まで雪を踏まずに登れるようにした。私もガイドとして加わっ

た。九合五勺からの上を二、十五、十六日と、お鉢登頂後ちょっと下ってスコップで掘った。十五日には一番下の昨年十一月中、下旬頃の氷をツルハシやピッケルで掘ってはかきだした。深いところは雪が三mあった。十六日には両側のコースロープが見えるところまで広げた。

十六日作業を終えて下る頃、實川さんが同行の人達と田子の浦の零メートルから登ってきた。元祖七合ですれ違った。下で待ってるぞ、と声を出して新六合の祝賀会場、宝永山荘へ下った。

その後、十七、二十、二三、二四、二七日と登って二十七日は下界での祝賀会を静岡駅南トンカツの店「とんき」で六時から行った。支部の照内さん、久保田さん、大島さん、杉本宣明さん、八木さん、長谷川さん、岩崎君、近藤さん、青野さん、熊岡さん、元同僚の小林、林、山本、土屋、黒柳さん、ガイドの元締めの天野さん、富士山頂での知り合い雨木さん、元朝日新聞記者の洞口さんの妹さんと友人の女性と集まって頂き祝って頂きました。有難うございました。

残る七月は二九、三十日と登りました。三十日は唯一御殿場口から登下山しました。登り五時間四十分、下り一時間五四分くらいでした。

八月は一日、二日、三日、五日、六日と登り、七日、八日はガイドとして福岡の十二名の方を案内して九合泊まりで登りました。一三、一五、一六、

一八、二〇、二一日と登り、

## 山梨百名山完登

二二日は、五月十六日に丹沢の大室山を登って山梨百名山が残り一座になっていたのでそちらへ向かいました。それは山梨百名山の困難な山の内の数座に入る南ア・笹山（黒河内岳二七二三m）です。ここも以前は白根南嶺の農鳥岳から南下して広河内岳経由で行くかまたは南の転付峠から北上するか、その北の奈良田越から北上するしかないと言われていましたが数年前に奈良田温泉からほとんど直登するルートが開かれて健脚なら日帰りが可能となりました。それで、今回はこのコースから登りました。朝三時四五分に家を出て六時奈良田着。同十三分スタートで笹山山頂に十一時二四分着でした。同四〇分北峰。午後二時四三分奈良田へ下山で山梨百名山が無事に終わりました。

さて、中断の富士山ですが翌々日から再開です。二四、二五、二七、二八、二九、三〇、三一日と登りました。

## 竜爪山・文殊岳百登

九月は、五月十五日に竜爪山・文殊岳が九九登となっていたので百登をどこかでと考えていました。そこで、思い立って二日、車は午前中、十二ヶ月点検に出していたので富士山はこの日は無しで車を受け取って帰宅して車を置いてからバイクで則沢林道終点へ。さっと登ってツルリンドウ、チャボホトトギス、ミズヒキソウ、キンミズヒキソウ、キツネノカミソリ?ササユリ、山頂の野栗等を見て百登達成。自分では今年は山の三冠達成！みたいな気分です。

さて、再び富士山ですが、三日、四日、六日、八日、九日、十日、一二日、十二日は七月六日以来の一日二登でした。一登目登り三時間三四分、下り一時間一五分。二登目登り四時間一〇分、下り一時間二三分くらいでした。この日は新六合目、雲海荘泊まり。十三日、一度新五合目に下って新六合目まで登り返して、七時一五分新六合再出発。新六合で斉藤さんと一緒になってこの日の行を共にする。十時六分、頂上奥宮前着。ガイドの角田君、「新版日本三百名山」を買ってくれた延原君と会い代金を受け取る。十時四五分、剣ヶ峰着。十二時一五分過ぎに御殿場口頂上から御殿場口、宝永第一火口経由（最近言われる、「プリンスルート」）で下る。途中、七合四勺わらじ館に立ち寄って話す。この日はバイトの女の子の池田とも子ちゃん、小林さんの他野沢温泉で雪かき中に両肩、両腿等に大けがをしてリハビリ中の親父さんの橋詰さんも上がっていたのでけがの様

子、治療などのことも聞いて三〇分もいたろうか。酷いけがであったことがよく分かった。宝永第一火口にまだ残っている残雪や火口内壁の北側の壁に突如開いた大きな穴やそこから流れた土砂流の痕などを見て二時五二分、新六合に戻った。三時に新五合に下山して帰宅した。尚、この「プリンスルート」経由の下山は八月に三度歩いている。この砂地は下りにこそ良いもので登りに歩くのは向いていないと思うが「プリンスルート」という名前に惹かれて歩くアルパイン・ツアーなどで募集した団体さんが近年多くなった。

この後は、十四、十五、十六日と登り今年六十登となり、一昨年の年間最多登頂数に並んだ。そして通算五四〇登まで達成した。

十七日浜松の病院に入院してＨＩＦＵ治療を受けて上手くいった。しかし、カテーテルが入った体で自由には動けない。早く山に復帰できる日を待っているのが九月二十日の現状です。このほか、昨年の肺水腫で退院の後も静岡市立病院に三ヶ月ごとにかかっていて六月だったかな、レントゲンを撮ったら線のような影が映っているというのでまた一ヶ月後にレントゲンを撮って何ともなかったから良かったが今年は病院と山、富士山との往復であった。七月分のガソリン代の請求が約六万、八月分が約七万円（富士山以外は、浜松の病院一往復と奈良田温泉往復くらい）、高速料金の深夜割引、土・日・祝日割引の率の減、平日割引の廃止、消費税引き上げなどで高くついた。加えて、登山優先で保険の利かない治療選択して退院した日に治療費約一〇三万円を支払ったから高い登山費用となった（この後の治療費も混合診療にはならないので保険は利かないが術後の毎月の検査、半年後の生検を受けることになる。やむなし）。

しかし、富士山五百登、山梨百名山完登、文殊岳百登達成がうれしい年である。尚、私の昨年一月からの登山活動はfacebookにほとんど写真でｕｐしてあるのでfacebookをやっておられる方はそちらでご覧ください。

# 人生が分岐する瞬間

聲高　一枝

この春、私はヒマラヤへ行く機会に恵まれエベレスト街道をルクラの町からエベレストBC迄トレッキングしてきた。これまでの私と言えば『死なない山にユルく』がモットーで道中は見たことのない山々の連続。私の旅のことは何時もアマダブラムが見守ってくれていた。

この方角のアマダムラム、あの方向からのアマダムラム、その場所からのアマダムラム、アイゼンもピッケルも使えない私が当然それらの山へ登られる訳もないのだが、ロブテェイーストのCⅠまでなら連れて行ってくれるとの事で、最後自分にとっては少し怖い岩場凄い、高所凄い。空を見上げると端が紺色混じりの空色で地球からの宇宙の端を見たような気がした。目の前には今までで一番美しい顔をしたアマダムラムがこちらを見ていた。ただ息をすること、身体を保つことが大変な世界で広大な運河、満天の星空、月明かりに浮かび上がるヒマラヤの山々、エベレストのアイスフォール、凍り付く空気、様々な極端そんなわけでヒマラヤからの帰国後はと言うと山に真面目に取り組んでみるかと色々と模索してみている。

これまた私には無関係だと思っていた岩登り講習にも出かけてみた。

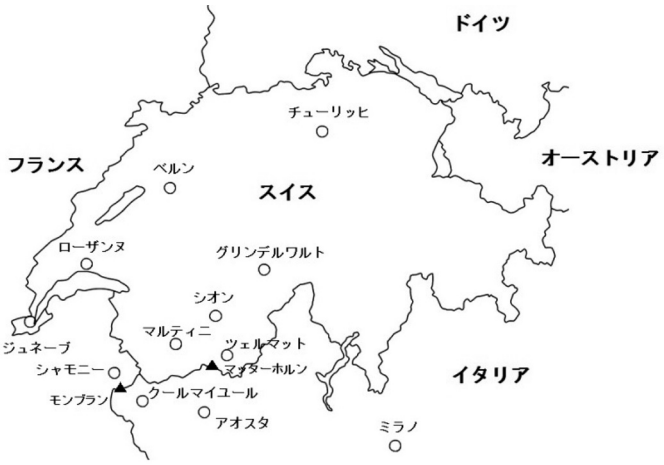
世界は広い。どんどん出かけてみよう。いろんなことをしてみよう。又5年後、自分がどこに到達しているのかを楽しみにして。

# オートルートに挑む

諏訪部　豊

オートルート(Haute Route)とはフランス語で「高い道」という意味のスキーツアールートである。モンブランの麓シャモニーからマッターホルンの麓ツェルマットまで3000m級のコル（峠）をいくつも越え、氷河を滑ったり登ったりして辿る世界中の山スキーヤー憧れのルートである。

宿泊は全て山小屋を使い、標準で6泊7日を要する。小屋が開業する3月中旬から雪が少なくなる5月上旬までの限られた期間しか踏破できない。各小屋の宿泊数から推定して毎年3500人程度がこのルートを訪れているとのこと。




## ●第1日目、4月15日、快晴

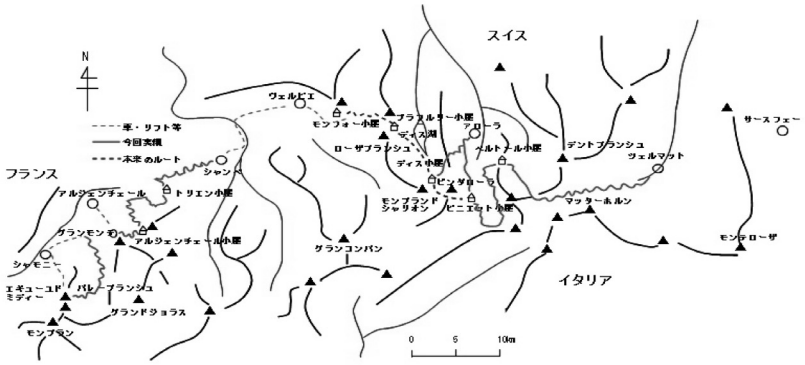
中部国際空港～ヘルシンキ～ジュネーブ～シャモニー

このオートルートに静岡支部の4名（白鳥勝治さん、大島康弘さん、小田直美さん、それに私諏訪部）が今年春に挑戦した。天候も含めて道中さまざまな出来事があり、完全踏破とはいかなかったが何とかゴールのツェルマットに到達することができた。

ここにその記録を述べる。

快晴下での飛行で、機内からは白山や薬師岳、立山、剣などがくっきりと見えた。ヘルシンキでの入国審査後、乗り換え便でジュネーブ着。空港にはシャモニー在住の神田泰夫さん（今回の旅行代理店、雄踏町（現浜松市）出身、65才）が出迎えてくれた。

神田さんの車でシャモニーに移動し、神田さん所有のシャレーに落ち着く。ここが我々のこれからのベースとなる。




**●第2日目、4月16日、快晴**

グランモンテスキー場にて足慣らしシャモニー郊外にあるグランモンテスキー場は、傾斜は中級程度だが相当なアイスバーンで滑りにくい。また円安のせいもあって物価が高い。

**●第3日目、4月17日、晴**

バレーブランシュを滑る

今回のオートルートをガイドしてくれるイタリア人山岳ガイドのジジ・アイローネ氏（以下ジジ）と合流。ローブウェイでエギューユ・ド・ミディーまで登り、バレーブランシュ（フランス語で「白い谷」、いわゆるモンブラン氷河）を滑る。周囲はモンブラン・デ・タキュール、グランカピュサン、ツールロンド等々が迫り、素晴らしい景観に感嘆する。雪のなくなるモンタンベールまで滑り、モンタンベール鉄道でシャモニーに戻った。夜はレ・プラにある神田さんの自宅に招待されてバーベキューパーティーとなった。

モンブラン・デ・タキュールを見上げ

**●第4日目、4月18日**

**オートルート第1日目、曇り時々雪**

グランモンテスキー場～アルジェンチェール氷河～アルジェンチェール小屋

いよいよ今日から本番のオートルートが始まる。2日前のグランモンテス

キー場最上部からアルジェンチェール氷河に向けて滑り出す。30度ほどの荒れて硬い急傾斜だ。太ももが痛くなる頃、アルジェンチェール氷河に降り立つ。ここからクライミングスキン（シールのこと。以下スキン）を着け、アルジェンチェール小屋を目指して氷河を登る。この日の行程は半日で終わり。小屋は清潔で広く快適だ。ランチはオムレツとビールにした。夕食はスープ、メインディッシュ、デザートと一応コース料理の形式でスープとメインディッシュはおかわり自由だ（以後どの小屋も同様だった）。夜も雪は降り続いていた。

**●第5日目、4月19日**

**オートルート第2日目、曇り後風雪**

アルジェンチェール小屋〜パッソンのコル〜トゥール氷河〜スーペリアル・トゥールのコル〜トリエン小屋

天気予報は良くなかったが朝の内は青空だった。アルジェンチェール氷河を一旦滑ってパッソンのコルへの取付きに到着。雪と岩のミックスなので板をザックに付けてアイゼンで登る。ジジは念のためロープを出してアンザイレンする。コル直下は傾斜がきつくなり、厳しい登りとなった。天気が次第に悪化し、この頃から雪が降り出した。登り着いたパッソンのコルの視界は50mと言ったところ。一旦トゥール氷河を滑り、すぐにスキン登行となった。この頃からホワイトアウト状態となり、パーティーがバラけないようにアンザイレンする。ジジは地図とGPSで現在位置を確認しながら進む。他パーティーのガイドとも相談している。

パッソンのコル直下、徐々に降雪がひどくなる。

つぎの峠であるスーペリアル・トゥールのコルへの雪壁は長く傾斜がきつかった。アイゼンを履いてアンザイレンして登るが途中休憩は一切なし。ようやくコル直下の岩の下で小休止。出発する時、大島さんの手が震えている。「大丈夫ですか？」と訊くと「うん大丈夫」との返事。いや大丈夫じゃない。小田さんに「大島さんがかなり寒がっていますよ」と告げる。小田さんが大島さんのフードを被せようとするがへ

ルメットで滑ってすぐに戻ってしまう。何も出来ずにジジに引っ張られるようにして出発した。

すぐにコルに出てここでアイゼンからスキーに履き替えた。ガイドブックではこの日の行動時間は6時間。我々は目指すトリエン小屋はコルのすぐ先だと思っていた。しかしここからトリエン・プラトー（台地）の縁を回り込む長いトラバースが待っていた。視界が悪くて雪面の傾斜が良く分からない。容赦なく横殴りの雪が吹き付け、時々やって来る突風時には歩みを止めて耐風姿勢を取らなくてはならない。私は3回ほど風に倒された。その内の1回は人頭大の雪がぶつかってきた。アンザイレンしているので誰かが倒れればその度に全員が止まって起き上がるのを待たなければならない。寒さで体力が消耗していく。まつげに着いた雪で前が見えなくなる。ジジが「急げ！」とせかす。

視界が悪くなり、ガイドのジジはＧＰＳを見ながら進む

大島さんの消耗が特に激しく、だんだんと意識が遠のき、転倒して外れたスキー板にブーツをセットするのが自分だけでは出来なくなった。ついには歩くのが覚束なくなり、ジジは細紐を出してそれで大島さんを引っ張ることになった。時々視界が開けて先行するパーティーが見えた。その度にジジは大声で何かを叫んでいる。彼らからの返事はなかった。まだ夜は迫ってはいなかったが何もビバーク準備のない我々は明るい内に小屋に辿り着かなくては大変なことになる。

緩い傾斜を登り下りしながらようやくトリエン小屋への登り口まで辿り着いた。目の前の斜面を登り切れば待望のトリエン小屋だ。私と白鳥さんが先行することになった。とその時、上方の小屋方向から2人が急いで下りて来るのが見えた。そして大島さんに駆け寄り、両脇を支えてくれた。ジジが大声で応援依頼していたのが功を奏したようだ。彼ら2人とジジに大島さんを託した小田さんは大島さんのザックも一緒に背負って先行することにした。小屋から下りてきた2人はスノーボートが必要と判断したようで一人が小屋

へと駆け上がり、小田さんを追い越して行った。そして応援をさらに2人増やしてスノーボートを持って再び下りて行った。意識のない大島さんは、こうしてスノーボートに乗せられ、救助に来てくれた小屋の従業員や他パーティーのガイドたちと一緒にようやく小屋に到着した。

小屋に運び込まれた大島さんは、直ぐに食堂のストーブの前に運ばれて毛布を何枚も掛けられた。小田さんの話ではこういった場合は声を掛けて意識を呼び戻さなくてはならないとのこと。小屋の従業員や他のガイド、そして居合わせた客の方々には大いに感謝したい。大島さんに対してはもちろんのこと、大したことのない私たちにも「大丈夫か？濡れた服を乾かせ！」と気遣ってくれた。日没が遅いので気付かなかったが時計は既に19時を回っていた。

35度以下だった大島さんの体温は幸い次第に上昇し、2時間後には意識も戻った。そして「明日はみんなと続きを行く」と言う。しかし小屋の手配でヘリコプターが明朝来ることになり大島さんはそれに乗って病院に行くことになった。

**●第6日目、4月20日**

**オートルート第3日目、快晴**

トリエン小屋～エカンディのコル～アルペティ谷～シャンペスキー場～シャモニー

昨日の荒天が嘘だったかのような素晴らしい晴天で明けた。ヘリコプターは7時半に来た。ヘリコプターには大島さんの他に付き添いで白鳥さんが乗り込んだ。ジジの話では「ヘリコプターはスイスのシオンから来るのでその辺りの病院に運ばれるだろう」とのこと。

残った我々3名はこの日前半の予定であったエカンディのコル経由でシャンペに下るコースを辿ることにした。トリエン小屋から新雪を滑ってエカンディのコル下に到着。アイゼンで雪壁を登って行く。固定ロープが何本も下がっていて短いが緊張する登りだった。

トリエン小屋から見た朝のトリエン・プラトー

エカンディのコルに出ると目の前に長大な新雪斜面が広がった。早速スキーに履き替えて滑走に入る。小田さんは「いい雪だ。いい雪だ」と喜々として滑って行くが私は標高が高いのですぐに息が切れる。ジジは辛抱強く何度も休みを入れてくれた。

快晴無風で下から日帰りスキーヤーが何人か登って来る。「ボンジュール」と彼らとも気楽に挨拶を交わした。「天気が良ければこんなに余裕があるのに。昨日は本当に最悪の日だった」とつくづく思った。

樹林帯まで下り、ようやくシャンペスキー場のボトムに達した。5分ほど待つと神田さんが車で迎えに来てくれた。大島さん達はマルティニの救急病院に入ったとのこと。すぐにそこに向かうが大島さんは24時間心電図を採っているので1日以上の入院とのこと。我々はここにいても仕方ないのでシャモニーに戻った。

エカンディのコルへの登り口

予定では今日はこの後ヴェルビエまで車で移動してリフトを乗り継いでモンフォー小屋に入る予定だった。しかしそれは諦め、明日はディス湖のダムからプラフルリー小屋を目指すことになった。小屋は全て予約制なので予定の順延はできない。だから予定が狂った場合は先回りするルートを車で辿ってその日泊まる予定の小屋を目指すことになる。午後はシャモニーの日本料理屋「さつき」で昼食にした。この店もどれもこれも高い。

## ●第7日目、4月21日、雨と雪

クールマイユールスキー場にて滑る

我々の期待に反して朝から天気が悪い。朝来たジジは「天気が悪いので今日が今シーズン最終日のクールマイユールスキー場で軽く滑ろう」と提案してきた。神田さんも「それがいいよ。イタリアの旨いピザやパスタを食べてきたらどう?」と言う。彼らの言う通りにするしかない我々3名はその提案に乗ることにした。

ジジの車で一路イタリアのクールマイユールに向かった。私にとって初めてのモンブラントンネルは全長11㎞余り。長くそしてどこまでも真っ直ぐだった。

クールマイユールスキー場は中規模なスキー場とのことだがそれでも八方尾根スキー場程度の広さだった。この

シェブル峠を目指す。奥はモンブラン・ド・シェイ

外観は小さいが中は広いディス小屋

日は中間部のゲレンデのみオープンしていた。湿った雪が降りしきり、ゲレンデは荒れていた。ここを何本か滑ったがどれも長いコースだった。ジジは冬にここでスキー教師をしているのであちこちで声を掛けられていた。

ランチはクールマイユールの町のレストランで予定通りピザとパスタだった。さすがイタリアだ、どれも旨い、そして安い。ビールやワインも含めてシャモニーの半値程度だった。町では薬局にも立ち寄り、白鳥さんが胃薬を、そして先日から熱が出ていると言う小田さんが風邪薬を購入した。

**●第8日目、4月22日、晴**

**オートルート第4日目**

アローラスキー場〜シェブル峠〜ディス小屋

昨日はオートルートに復帰できなかったのでこれでモンフォー小屋とプラフルリー小屋の都合2軒の山小屋を飛ばしてしまったことになる。したがって今日はこの日の予約を取ってあるディス小屋を目指すことになった。

神田さんの車で我々3名とジジは1時間ほど走った先にあるアローラを目指す。谷のどん詰まりにあるアローラ

スキー場はまだ雪が豊富だった。Jバーリフトでゲレンデ上部まで上がる。ここからスキン登行となりシェブル峠を目指す（ここは地図ではColではなくてPasとなっているので峠と記す）。

シェブル峠直下の長いハシゴ

シェブル峠からは別の風景が広がった。シェイロン氷河の先には今日の宿ディス小屋が見える。シェブル峠からの下りは25mの急な鉄ハシゴだった。それが上部で2つに分かれていて2つのハシゴを横に踏み換える。ちょっとしたスリルだ。スキー板をザックに付けているので重く、途中で腕が疲れてしまった。

シェブル峠からアローラ方面を見下ろす

ハシゴを下りてから少し滑り、スキン登行でディス小屋を目指す。ディス小屋は雪崩を避けるために岩の突起の上に建っている。周囲を山に囲まれた素晴らしい位置にある。オートルートのほぼ中間にあるので賑やかだ。地元の子供達だろうか小学生程度の少年少女10名ほどがいた。満席の夕食時はすごい喧噪だった。

**●第9日目、4月23日、晴**

**オートルート第5日目**

ディス小屋〜シェブル峠〜アローラスキー場〜ビニエット小屋

朝食時に小田さんが「また熱が出てきた。これ以上は無理なので一人でアローラに下る」と言う。それを聞いたジジは「ノー！」と強く拒否した。白鳥さんが「私が一緒に下ります」と言ったがジジは「ノー！」を繰り返した。ガイドなしでの行動はダメらしい。何かあったらガイドの責任問題になるの

で仕方ないことだろう。と言うことで全員で昨日のルートを辿ってアローラに下りることになった。

昨日降りたシェブル峠下の長いハシゴを今度は登り、峠からアローラに向かって滑り下りる。途中からゲレンデの圧雪斜面に出る。雪面はコチコチだが久しぶりの平らな斜面に「圧雪ゲレンデは何て楽ちんなんだろう」と楽しくターンを繰り返した。

昨日乗って出発したJバーリフト乗り場に降り立ち、電話で神田さんに迎えを依頼した。すると白鳥さんが「私もここで終わりにします」と言い出した。「えー！私はどうすればいいんでしょうか？」との問いに「諏訪部さんだけでもツェルマットまで行って下さい」との返事だった。「では遠慮なくそうします」と応えた。

仕切り直しとなったジジと私はJバーリフトで再びゲレンデ上部に向かい、中間部まで滑って左手の尾根を登り始めた。尾根を乗越すとピエジェ氷河が続いていた。ここも絶景だった。登るにつれて右手のピンダローラが目の前に迫って来る。中段にある懸垂氷河が大きい。目指すビニエット小屋は前方正面だ。今日は天気も良く、時間にも余裕があるのでジジも写真をたくさん撮らせてくれた。のんびり休んでスキンにワックスを塗る余裕もあった。

13時少し過ぎにビニエット小屋着。ランチ時に小屋に着くと当然ランチとビールとなる。これは半分うれしく半分悲しい。なぜならガイドのランチとビールは客持ちだからだ。ジジがそれほど飲んべえでないのが幸いだった。

ベルトール小屋。他パーティーの２人がハシゴを登っている

**●第10日目、4月24日、快晴**

**オートルート第6日目**

ビニエット小屋～モンコロン氷河～レベックのコル～オートアローラ氷河～ベルトール小屋

寒いが快晴に明けた。小屋からしばらくは緩い斜面を滑る。スキン登行でレベックのコルを目指すが北側斜面なので日が当たらず風がとても冷たい。ようやくコルに上がると日当たりと新

しい景色が待っていた。コルからは左手のオートアローラ氷河を滑る。適度な傾斜の楽しい滑走だった。かなり下まで滑り、雪のなくなった尾根を乗越すとその先にはまた新たな広い氷河が待っていた。ここをスキンで登る。遙か上部のコルにベルトール小屋が見えた。

長いスキン登行の後、ようやくベルトールのコルに飛び出した。目の前には広大な雪原が広がり、その先に半分顔を出したマッターホルンが見えた。途中は抜けてしまったがようやくここまで来たという感じだった。ここで景色を楽しんでいた他の山スキーヤーも「Well done!（良くやった）」と歓待してくれた。雪原の左にはデントブランシュ（4357m）が大きい。

憧れのベルトール小屋は写真で見た通り本当に巨岩の中段に建っていた。この小屋に入るには長い鉄ハシゴ（2つに分かれていて全長30mはあるだろうか？）を登らなくてはならない。ジジが「スキーとストックをよこせ」と言う。彼のスキーも一緒にしばって岩陰に置いた。ジジが「天然のスキー置き場だ」とおどける。なるほど。

小屋へのハシゴは一応アンザイレンして登った。ベルトール小屋は何もかも驚きの小屋だった。トイレは外にあり、そこに行くには半分が空中の通路（と行っても鉄枠でしっかり作ってあるが）を歩かなくてはならない。また小屋が八角形の建物であり、階段は急で踏み板は三角形だ。布団も建物に合わせて扇形に並べてあった。13時半に着いたのでここでもランチとビールを頼んだ。

**●第11日目、4月25日、曇り後晴**
**オートルート第7日目**

ベルトール小屋～テートブランシュのコル～ツムット氷河～ツェルマット

今日の天気が悪いのはディス小屋での情報で前から分かっていた。何とか視界の良い内にクレバス帯を抜けたいジジは朝食後すぐに出発だと言う。例

マッターホルン北壁をバックにガイドのジジと

の長いハシゴも一応アンザイレンした。「急いで下りろ」とせかす。少し滑ってからテートブランシュのコルに向かってスキン登行となった。小雪がちらつく天気にせかされ、他のパーティーと競争するかのようにして登った。休憩はまったくない。

ようやくコルに着き、スキンを外して直ぐに滑降に入る。テートブランシュ（３７０７ｍ）を往復する時間的余裕はない。時々雲に隠れてしまうがマッターホルンを右手に見ながらのスキーは憧れていただけに嬉しかった。ジジはＧＰＳと雪面に立っている赤ポールを見ながら慎重に下る。ヒドンクレバス（隠れたクレバス）を警戒しているのだろう。「俺のシュプールを外すな！」と何度も言う。

幸い雪は止み、青空さえ見えるようになった。クレバス帯を過ぎると粉雪と緩い傾斜で快適なスキーとなった。やがてマッターホルンの裾を巻くようにとても長い斜滑降を経てそして林の中に入った。しばらく滑ると雪が一旦消えて林道歩きとなった。５分間ほど歩くとスタッフェルのスキー場に出た。ここからはまだ雪の残っている林道を滑る。対岸にツムット村の古い家並みを眺め、フーリの下を過ぎてもまだ雪が残っていたのでそのまま滑る。

ツムット村。ツェルマットからハイキング道が通じている

やがてマッターフィスパ川右岸の道に合流し、フーリ行きゴンドラ駅近くの雪が消えた地点で滑走終了となった。記念の写真を撮って、スキーをザックに付け、舗装路を歩く。

１０分ほどでツェルマットの繁華街に出た。今日泊まるホテルに荷物を預け、電車で帰るジジと一緒にツェルマット駅まで歩く。駅前のレストランでジジと最後のランチとなった。ビールで乾杯していると同じような連中が「おめでとう」と言って乾杯しに来る。凍傷で黒くなった私の顔がオートルート全コース踏破に見えたのだろうか。全コースでなかったのが少し残念だが見知らぬ仲間とツェルマット到着を祝いあった。

ジジにこの後の予定を訊ねると「２

日休んでからまた同じコースをガイドする」と言う。「ワオー！で、今度は何日の予定？」と訊くと「5泊6日」とのこと。これも「ワオー！」ものだ（ちなみに我々は7泊8日の予定だった）。

ジジと駅前で別れ、ホテルに戻った。電車で移動して来た白鳥さんと小田さんがホテルに到着し、二人も祝ってくれた。3人でツェルマットの古い家屋が保存されている地区を見物したり、ミッシェル・クロ（ウインパーと一緒にマッターホルン初登頂後滑落死）の墓を見たりした。夕食は「せっかくだからスイス料理を」と言う小田さんのリクエストでホテル近くのレストランでチーズフォンデューにした。噂通りスイスはフランスよりもさらに物価が高かった。

**●第12日目、4月26日、晴**

ツェルマット〜シャモニー

白鳥さんも小田さんもスキー道具を持ってこなかったのでツェルマットでのゲレンデスキーはなしとなった。小田さんの症状が回復せず、それどころではないようだ（帰国後肺炎だったことが判明）。電車でシャモニーまでのんびり帰ることとする。

ツェルマットから見た朝のマッターホルン

マルティニからシャモニーに向かう山岳鉄道は実に素晴らしい。断崖絶壁を走るのだが所々に集落が点在し、これだけでも充分に観光資源になると思えるほどだ。気前の良い運転手が我々を運転席に招き入れてあれこれ説明してくれる。この鉄道はこの時はトンネル工事のためにスイス・フランス国境近くの駅で折り返し運転となっていた。そこからはバスでシャモニーに戻った。

マルティニの病院には結局2日間入院していた大島さんは22日に退院し、今回の旅行の目的の一つでもあったスイス転勤時代のスイス人旧友を訪ね、そこに泊まっているとのこと。体調が元に戻ったことを知り、安心した。

**●第13日目、4月27日、雨**

**シャモニー滞在**

朝から冷たい雨となった。元々予備

日だったのでこの日は特に何も予定がなかった。天気も悪いので宿舎でのんびり休養することにした。私は神田さんに教えてもらってピッケル鍛冶シャルレの旧工場を見に行った。夕食はミディーロープウェイ駅近くの中華料理屋にした。

**●第14日目、4月28日、曇り**

**アオスタ観光**

予備日2日目は神田さんの案内でイタリアのアオスタ市内観光をすることになった。体調の回復しない小田さんは宿舎で休養をし、白鳥さんと私が神田さんの車に乗る。21日に続き、再びモンブラントンネルを通ってイタリアに入る。アオスタまでの道中は小さな古い城が点在していて楽しい。アオスタは紀元前11年にローマ帝国の支配下に入り、多くの古代遺跡を残した。劇場遺跡がその代表だが地下にも教会や回廊など多くの遺跡がある。地下にあるのは川の洪水で埋まってしまったためだそうで、洪水の後に家が建てられたために多くが埋没したままとのこと。さらに古代都市の特徴である城壁も一部残っているが後世の人がその壁を利用して家を建てたため城壁にへばり付くようにして建っている家が点在していた。アオスタは古代と中世、現在が立体と平面で混在している興味深い町だった。

アオスタの古代ローマ時代の劇場跡

**●第15日目、4月29日、晴**

シャモニー～ジュネーブ～ヘルシンキ～中部国際空港

長かった今回の旅も遂に帰国の日を迎えた。神田さんの車でジュネーブ空港に向かう。神田さんの話では「スイスは物価も高いし人間関係もやっかいなのでフランスに住んでジュネーブに通う人が多い」とのこと。そのせいで朝の道路は通勤ラッシュだった。

ジュネーブ空港では先に来ていた大島さんと合流した。久しぶりに会った旧友たちの充実した暮らしぶりに大いに刺激を受けたとのこと。

2週間に渡って世話になった神田さ

んとはここで別れ、我々4人は往路と同じヘルシンキに向かう。上空からモンブランを始めアルプスの山並みがくっきり見えた。

ジュネーブ国際空港にて。右から2番目が神田さん。

ヘルシンキからの帰国便はガラガラだった。搭乗率20％ほどだったろう。これはゴールデンウィークの始めのためだろう。日本からの出国便は逆に満席に近かっただろうと想像する。

名古屋に着いたらかなりの雨が降っていた。空港に駐めてあった小田さんの車で東進し、順次無事に帰宅した。

## 公益社団法人日本山岳会 ═第30回全国支部懇談会に参加═

十月十八日（土）～十九日（日）に行われた埼玉大会に大島康弘支部長・長田義則・小沢桂子・青野興起・杉本孝夫・木村勝利・熊岡達雄・厚美ゆり子・会友山崎郁郎・里見清子・10名が参加。

大久保晴美支部長の開会挨拶から始まり「埼玉県の山岳遭難事例と安全対策」「日本地質学発祥の地・秩父からの報告」の講演があり懇親会に入りました。

翌日はAコース両神山Bコース武甲山Cコース琴平丘陵の3グループに分かれ山行。昨年の静岡大会が大変参考になりましたの声が多くの実行委員の方から聞かれました。

## ※ 今後の支部行事

十月二十六日（日）
　第三回ハイキングセミナー
十一月　定例会無し
十一月八日（土）～九日（火）
　懇親山行　蕎麦粒山
二十七年一月十一日（日）
　新年会　ホテルシティオ
　十一時　受付
　十一時四十分　開宴

十一月一日現在
富士山登頂
一七五八回　実川会員
五五〇回　有元副支部長

発行責任者　大島康弘
事務局　〒四二〇―〇八七一
　静岡市葵区昭府二―二十六―九
　有元利通方
電話番号　〇五四七―三四―三〇三二
支部メール　sz@jac.or.jp
ホームページ
http://www.jac.or.jp/info/shibudayori/shizuokasibu/Past-activities/Buranch-Conference-report/B
編集委員　照内豊
　諏訪部豊
　熊岡達雄
会報問い合わせ　〇五四―二四七―二二〇六
印刷所　静岡市駿河区中村町一六六―一
　株式会社　三創
　〇五四―二八二―四〇三一

静岡県の地質と化石産地
トウヨウゾウ
ナウマンゾウ
シカ
トラ
ワニ
鯨類
海牛類
サメ・エイ
硬骨魚類
アンモナイト
レピドシクリナ
貝化石
サンゴ
沖積層
更新世の地層
新第三紀の地層
古第三紀の地層
中生代白亜紀の地層
中・古生代の地層
第四紀火山噴出物
深成岩類
変成岩類
糸魚川ー静岡構造線
赤石岳
中央構造線
十枚山
井川
浜石岳層群
富士山
瀬戸川層群
庵原層群
愛鷹山
城山層
富士
佐久間
水窪層
富士川
沼津
狩野川
熱海
白浜層群下白岩層
興津川
修善寺
伊東
伊平層
静岡
駿河湾
城層
二俣
安倍川
土肥
湯ヶ島
天城山
焼津
根古屋層
引佐町谷下
島田
掛川
天竜川
浜名湖
大井川
松崎
久能山層
白浜層群
浜松
相良
浜松市
佐浜層
小笠層群
掛川市
掛川層群
御前崎
女神層群
下田
石廊崎
牧ノ原市
古谷層
0
30km

2014
国民の祝日「山の日」
山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝。
2016年8月11日！
全国「山の日」制定協議会

南アルプスの大自然
豊かな生命のみなもと
静岡市

題字・牧野衛　背景・實川欣伸

日本山岳会
静岡支部会報
2015（平成27）年夏季
第77号

# 平成二十七年度（２０１５年）日本山岳会　静岡支部・通常総会に於いて大島康弘前支部長が再任されました。

（日時・４月８日　場所：労政会館第三会議室）

翌五月の支部定例会で二期目を迎える支部長より新役員が発表されました。

＊参照『静岡支部組織と役割』ｐ．９

## 目次

☆最高に愉しい集いの場を創ろう　支部長二期目の抱負　大島康弘　2
☆百十周年を目前に　大石　惇　4
☆山の恵みに感謝し山に親しむ　公益事業委員会　中村博和　5
☆集会・山行委員会の目指すもの　集会・山行委員会　諏訪部豊　6
★会務報告
◆27年度支部総会報告　大島康弘　7
・組織と役割一覧表　9
・集会・会員山行予定表　10
◆懇親山行　中村博和　11
◆仁王山　大島康弘　11
◆一月の山伏　篠原　豊　12
◆竜爪山　勝又千華　14
◆ハイキングセミナー
・大谷崩の頭　有元利通　15
・竜爪山　小笠原誠　17
☆高山植物の悲鳴　望月照夫　18
会員動向　講演・写真展・出版　19
編集後記　永野敏夫　20

# 最高に愉しい集いの場を創ろう

## 二期目の抱負にかえて

大島　康弘

この表題『最高に愉しい集いの場を創ろう』は2年前支部長に推挙されたとき、支部会報『不盡』に投稿した時と同じものです。今思えばちょっと気恥ずかしい思いがしますが当時の意気込みが、このタイトルを思いついたのでしょう。２期目を担当するに当たって、改めて初心に戻り、敢えて同じ表題で抱負を述べることにしました。

先ず、役員の陣容ががらりと変わりました。事務局長の有元さん、『不盡』編集係の照内さん、諏訪部さん、会計の杉本さんが退任されることになりました。最後まで会務を滞りなく支えていただき本当に有難うございました。そして、諸先輩には親身な助言とお力添えをいただき心よりお礼申し上げます。

今後も静岡支部の良き伝統を引き継ぎ、「山に行けなくなった人も酒を飲まない人も若い人も、そこへ行くと何故か元気になれる」集いの場を創り、公益法人の名に恥じない支部を目指して最善を尽くす所存です。どうぞ宜しくお願い致します。

### 新体制の組織

さて、新体制の発足するに当たり、今年度より公益事業委員会、集会山行委員会、会報編集委員会を新たに立ち上げました。そして各委員長と事務局で役員会を構成し、重要な問題をそこで練ることにいたしました。月例集会（２水会）は会員の交流の場としてあらゆる話題を取り上げたいと思います。

各委員会の布陣と役割は別図（７頁）に示す通りです。委員会が有名無実にならぬよう、必要に応じて委員会を開催します。事務局長は当面、支部長が兼任致します。

### リニア新幹線問題

毎秒２トンと予測される大井川の水流の減少と３６０万立米に及ぶトンネル廃土の河川敷投棄による自然景観と環境破壊を憂えて、県の山岳４団体（県岳連、市岳連、静岡労山、ＪＡＣ静岡支部）が南アルプスを貫通するトンネル工事に反対する申し入れ書を、昨年９月県と市に提出したことは『不盡76号』に報告した通りですが、ＪＲ側の減水対策はさらに混沌の様相です。リニア新幹線トンネル工事による漏水を、本流に戻すために更に椹島まで12㎞の導水トンネルを掘るというのです。この方法では二軒小屋椹島間の流水の減少は避けられないし、導水トンネルの廃土は何処に積み増しするというのでしょう。

工事期間の短縮のために二軒小屋付近に斜坑を掘り、取り出した廃土を上流域に捨て、更に導水トンネルを掘るというのは、利潤のためには環境は二の次というＪＲの姿勢が透けて見えます。

大井川上流の山々の恵を最も享受している我々岳人が手をこまねいていては、流域の自然景観と生態系は悪化するばかりです。県の山岳３団体と連携しながら、私たち一人一人がこの問題に関心を寄せ、問題提起をしてゆくことが重要であると考えます。

### 山の日

２０１６年より『山の日』（８月11日）

が国民の祝日となります。山の日制定には山岳関係者の努力が大きかったと聞いています。静岡支部でも山の日の記念行事について提言がありました。リニア問題を機に県岳連、静岡県労山、市岳連とは協力関係が築けたので山の日の記念行事についても共働して、関係自治体、企業、官庁に働きかけたいと考えています。

山の日の記念行事は新しく発足した公益事業委員会の重要な仕事の一つになります。2年前の全国支部懇談会を盛会に導いた静岡支部の実力をこの記念行事にも発揮し、盛大に祝おうではありませんか。

## 支部会報『不盡』

静岡支部が存在感を示す最も効果的媒体の一つは会報だと思います。わたくしは以前『不盡』の編集に携わって、静岡支部には論客や文章家がたくさんいることを知りました。『不盡』は半年毎の発行なので、十分吟味して充実した内容の会報を編むことが可能です。会報編集委員会には一層のご尽力をお願いしたいと思います。

『不盡』は20ページ足らずの小さな冊子ですが、一般の山岳関係者にとっても読み応えのある、きらりと光る会報がお手元に届くことと思います。

## 文殊山荘

竜爪山の中腹、東海自然歩道の脇に建つ『文殊山荘』（所在地：静岡市牛妻２４８０）をご存じの方は多いと思います。山荘は荻野会員とご長男が自らの手で平成元年より9年をかけて完成した堂々としたログハウスです。

荻野さんから山荘を日本山岳会静岡支部に引き継いでほしいとのお話しが一年前にありました。6月中旬に支部会員有志で山荘の大掃除をすることにいたしました。

今後、使用契約、インフラの確保、メンテナンス費用など明らかにしなければならない問題はありますが、大いに活用させていただきたいと思っています。

冒頭で申し上げた「山に行けなくなった人も若い人も酒の飲めない人もそこへ行くと何故か元気になる」集いの場の一つが『文殊山荘』になればと願っています。

## 会員の増強

『山』２０１４年12月号に衝撃的報告が掲載されました。会員数５，０００人強では毎年５００万円の赤字を計上することになり、「**日本山岳会の財政は破綻の道を歩み、１２０周年を迎えることは困難であろう**」というのです。

静岡支部では昨年８名の新入会員を迎え、会員増加の割合が32支部中６番目にランクされました。今後も引き続き会員の増強を図って行きたいと思います。今では入会の条件は緩和され、山が好きならどなたでも、現役、ＯＢを問わず入会できるので所属する山岳会の山仲間や友人を是非ご紹介ください。

会員山行には会員以外の方も気軽にお連れください。一人でも多くの人が、希望を抱いて入会していただくよう皆様のご協力をお願い致します。

二期目の抱負はいささか風呂敷の広げ過ぎの感はありますが、更に愉しい静岡支部を皆様と共に築いて行きたいと思います。

以上

# 日本山岳会 110周年を目前に

元支部長　大石　惇

日本山岳会は１９０５年〈明治38年〉10月発起人の城数馬、小島久太、高野鷹蔵、高頭仁兵衛、武田久吉、梅沢親光、河田黙氏らによって設立され、まもなく満１１０年を迎えようとしています。創立当時は近代登山の黎明期をリードした英国山岳会などの精神とシステムをいち早く取り入れ、創立しようとされた先見の明には頭が下がる思いです。

私の入会は１９６５年ですが、静岡大学山岳部のホームグランドであった南アルプスを卒業して、ヒマラヤの未踏峰を目指して士気が高揚していた時期です。当時の日本国は外貨の持ち合わせが少なく、登山隊を派遣する外貨枠を国から得るのに厳しい審査がありました。特に行動計画と遠征資金がマッチして機能しているかどうかが外貨を得られるか否かの境目であったようです。日に日に夢が膨らむが、どうしたら行けるようになるのかが判らない。当時、京都大学学士山岳会は、登山と学術調査を通してすでに数々の海外遠征経験と輝かしい実績とを持っておられ、また、日本山岳会もマナスル登頂をめざして数次にわたる偵察隊を出し情報が蓄積されつつあった。そうした中で文献やアルピニストたちが集まっている日本山岳会に、静岡支部長の山本朋三郎氏と前支部長の牧野　衛氏の推薦で入会が適った。教えを授かりに京大や本部に日参したものである。

日本山岳会に入会して感じたことは、山好きには実に居心地のいい会だったことを覚えている。「山が好き」の一言で集まっている団体で、登山はもちろんであるが、氷河や地質などの研究者、画家の方や写真家、小説家や音楽家、詩人や俳人などなど実に多士済々の山岳会で、年齢の差も感じられない、開けた明るいおおらかな人たちの集まりだったことである。

当時、静岡支部長の山本朋三郎さんは、「鹿肉を食う会」から出発してのちに「もみじ会」と名が変わったが、年に1回全国から錚々たる会員を静岡の山に呼び寄せ、交流と親交とを深めていった。我々のような若蔵はめったに会われない人たちと、山ばかりではなく気安くいろいろな問題についても考えを伺うことができたことが嬉しかった。それは、山という大きな自然の懐が、人間同士を強く結び付ける教育の場であったのだろう。

今、日本山岳会のみならずさまざまな組織で、入会者が少なく高齢化に向かっており、このまま行けば自然消滅にもなりかねない団体が増えてきている。子供たちの自然体験の機会が著しく減っていること、辛い危ないことから遠ざけようとする親や教師、核家族化による少子化の影響もあるかも知れないが、そのような数の問題ではなさそうだ。人間は個では生きて行けない存在であるのに、同じ志を持つ組織や団体に対しての帰属意識が失われてきているからではないかと思える。電子機器の急速な発達やコンビニ文化などの浸透によって、周りの人たちとの関わりがなくとも個々で生きて行ける、そんな錯覚を持つ人たちが増えてきているからではないだろうか。普通に日常生活を営むには、それで過ごせるかも

しれないが、趣味でも仕事でも何か事を起こそうとする時は、一人は極めて弱い。同じ気持ちや考えを持つ仲間や集団に助けられることや、教えられることが実に多い。コミニケイションを取りにくいからと避けるのではなく、その中に身を置いて、自分にないもの自分の弱い所を補充してゆく、そんな気概をもって組織に参加してほしい。

会員が減少傾向にあるからと数を増やすことに偏りすぎて、質の低下を招いては伝統ある山岳会は消滅に向かうであろう。山に対する尊敬と畏敬の念と憧れを忘れない品格のある「山好きの人たちの集まり」として継続発展して行きたいものです。

静岡支部も現在まで創立当初から変な方向に向かっているとは思わないが、110年前に生まれた山岳会の精神にもう一度回帰して、富士山や南アルプスのような広くて大きな包容力と厳格さをもった支部に発展して欲しい。

# 『山の恵みに感謝し　山に親しむ』

公益事業委員会　中村　博和

公益事業委員会の委員長を拝命しました中村博和です。日本山岳会入会3年目の若輩者ですが、皆様よろしくお願い致します。

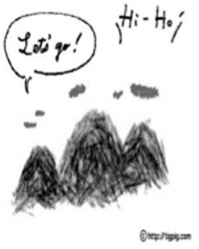
山は高校山岳部入部を機に始め、大学では山岳サークル、社会人になって同好会及び個人山行にて月2～3回の里山低山山行、夏はアルプステント縦走というスタイルを30年間続けて来ました。

山初心者をアルプスに誘うべく、仲間を募って山行を重ねつつ、公益的な取り組みとしては、地元沼津市で青年活動（沼津市青年教育振興協議会）に24歳から現在まで携わる傍ら、植林・枝打ち・下草刈ボランティア（富士山フォレスターズ）や富士山清掃活動（NPO法人富士山クラブ）、障害者との富士山登山やスキー教室（静岡ハンデスキークラブ）、車椅子を押して上高地・スイスアルプス旅行（静岡県ふれあいの翼）など様々な団体にてボランティア活動をして来ました。

JAC静岡支部として公益事業を展開するにあたり「山の日」の趣旨である、「山の恵に感謝し、山に親しむ」事業を策定、実施して行きたいと考えています。

大島支部長の抱負にもありますように「山の日」の記念行事は当委員会の最大の事業です。白鳥副委員長の構想を具現化し、岳人のみならず山登りをしない一般の方にも山の素晴らしさをアピールできるイベントを創って行きたいと思います。

「山の日」を大いに祝いたく皆様のご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。



# 『集会山行委員会の目指すところ』

集会・山行委員会　諏訪部　豊

日本山岳会は本部としても各支部としても会員の増強は待ったなし状態です。静岡支部は支部としてはとても恵まれた環境下にあります。静岡県は人口も比較的多く、著名な山にも近い、という他県の人からみれば羨ましくなるような良い環境なのです。その我が静岡支部でさえ会員の増加は遅々としたものです。「何とかなるさ。今のままで平気だよ」とこのまま座して傍観している状況でないことは明らかです。

確かに日本山岳会の生い立ちから言えば会はサロン的役割が主でした。静岡支部も今まで通りその路線を踏襲する道もあります。「日本山岳会に入るに値する人だけが入れば良い。無理して増員することはない」とお高くとまるのも選択枝の一つです。しかしその選択はまたジリ貧になるかも知れないことを覚悟することでもあります。恵まれた環境にある静岡支部が歩む道ではありません。

ではどうすれば会員増を図れるか?私なりに考えました。

その結論が会員山行の活性化です。ハイキング程度の山もそれなりに楽しいのですがさらにその上のレベルを目指す人たちにどう対応するかがこれまではあいまいでした。その解決策が会員山行の充実です。

街の山岳会が盛んだった頃は南・北・中央アルプスや八ヶ岳などの高峻山岳に登るのは当たり前のことでした。会のレベルにもよりますが岩登り、尾根歩き、冬山、沢登り、山スキーなどメニューも豊富でした。我が支部にそれと同じことを求めるのは年齢構成や地域的な広がりを考慮すると無理なのは分かります。しかしその何分の一かは可能だと思うのです。

私は山に一人で登るのも好きですが、人を山に連れて行くのも好きです。自分が感激した山を他の人が同じように感激するのを見るのが好きです。山にある景色、空気、風、水、岩、雪、樹木、花、温泉など自然の良さに感動し、テントや山小屋で過ごす楽しい活動を味わって欲しいのです。さらには山の歴史、人物、宗教、文学、写真、絵画、映画、麓の人々の暮らしなど山の持つ文化面への興味も深めてもらいたいと思います。そうすれば一回の山行が何倍にも楽しくなります。

そのためにはやはりそれら山の魅力が一杯詰まった高峻山岳へ行くのが最良です。となれば最低一泊は必要です。そういった機会を年に数回設定するのがとりあえずの施策です。「日本山岳会に入ればこんな登山ができる。あんな楽しみもある」という魅力を作り、それを広めていくのです。山好きな人がみんな入りたくなる会にしようではありませんか。

支部会員の皆さんにはどうかご理解を頂き、出来る範囲で結構ですのでご協力を賜れば幸いです。さあ山に登りましょう。

# 会務報告

## 平成27年度通常総会報告

大島　康弘

日時27年4月8日　会場　静岡労政会館5F

### 第1号議案　平成26年度事業報告

**本部・他支部**

第二回小島烏水祭26年4月13日～14日1名出席
JAC通常総会6月21日　3名出席
日本三百名山改訂版発行 支部10名執筆
支部登山指導者講習会9月13日 西澤参加
支部合同会議9月20日～21日大島・諏訪部
支部登山指導者講習会9月27～28日 西澤
全国支部懇談会(埼玉)10月18～19日 10名
自然保護全国集会(広島)11月22～24日白鳥
支部長会議・晩餐会12月6日　15名
新日本山岳誌改訂版2015年3月31日
支部で19名執筆

**支部事業**

通常総会　2014年4月9日労政会館
40名出席　懇親会31名参加
4支部ブロック交流会　5月17日～18日
於ホテル伊東ガーデン
記念講演　山口康裕・加藤弘司、記念
山行　万三郎岳・遠笠山登山　静岡33
名、越後13名、信濃9名、山梨15名、
定例会　5月14日　労政会館　28名
定例会　6月11日　労政会館　20名
定例会　7月9日　労政会館　18名
懇親会　8月31日　ホテル　18名
中華民国山岳協会訪問団歓迎懇親会
8月25日　有元出席
山岳4団体リニア新幹線南ア・トンネル工事に反対する申し入書　知事宛提出
9月10日
定例会　9月10日　労政会館　21名
定例会　10月8日　労政会館　20名
山のグレーディング検討会
2015年3月17日　大島・永野・有元
定例会　12月10日　労政会館　21名
新年会　2015年1月11日
ホテルシティオ静岡　47名
ハイキングセミナー・懇親山行・会員山行については、別途報告を参照ください。

### 第2号議案　平成26年度会計報告

支出の部

| 科目 | 決算額 | 備考 |
|---|---|---|
| 登山教室経費 | 310,754 | 交通通信・日当 |
| 一般事務費 | 8,073 | 封筒・ラベル |
| 会報印刷費 | 146,340 | 支部報75・76号 |
| 通信費 | 77,430 | 会報発送・ハガキ |
| 会場費 | 15,450 | 総会・定例会 |
| 参加助成金 | 29,870 | 自然保護・集会 |
| 行事費 | 2,160 | 支部懇談会 |
| 雑費 | 334 | 振込手数料 |
| 支出合計 | 590,411 | |

収入の部

| 科目 | 決算額 | 備考 |
|---|---|---|
| 繰越金 | 23,671 | |
| 支部事業交付金 | 202,500 | 1.500×135名 |
| 支部運営交付金 | 135,000 | 1.000×135名 |
| 新入会員奨励金 | 32,000 | 4.000×8名 |
| 登山教室参加費 | 103,000 | 三回分 |
| 中部B交流会残金 | 51,700 | |
| 雑収入 | 60,897 | 祝儀・残金・利子 |
| 収入合計 | 821,774 | |

☆別途積立金　590,411　H23.11.18定期預け入れ

## 第3号議案案　平成27年度役員人事

『静岡支部組織と役割』参照

## 第4号議案　平成27年度事業計画

### 本部・他支部

第31回全国支部懇談会4月11日～12日(四国)
第３回烏水祭　飯野山登山　５名
関西支部80周年記念集会5月30日～31日
六甲山登山　３名
ＪＡＣ通常総会　6月20日
支部合同会議　9月26日～27日
支部長会議・晩餐会　12月5日

### 支部事業

通常総会　4月8日　労政会館　46名
中部ブロック交流会(越後)4月5～6日
岩室温泉大橋ホテル　角田山登　11名
新年会　２０１６年1月10日　日曜日
藤枝（会場未定）青島酒造見学、
納涼懇親会8月19日(ホテルセンチュリー)
その他
会員山行・ハイキングセミナー・定例会については「集会・会員山行予定表」及び静岡支部ホームページをご覧ください。

## 第5号議案　平成27年度予算

支出の部

| 科　目 | 予算額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 登山教室経費 | 90,000 | 交通・通信・保険 |
| 一般事務費 | 100,000 | 封筒・ラベル |
| 会報印刷費 | 130,000 | 支部報77・78号 |
| 通信費 | 120,000 | 会報発送・ハガキ |
| 会場費 | 80,000 | 総会・定例会 |
| 参加助成金 | 40,000 | 自然保護委員会 |
| 行事費 | 30,000 | 全国支部懇談 他 |
| 雑費 | 20,000 | 振込手数料 |
| 記念・積立金 | 108,863 | 記念誌・記念行事 |
| 支出合計 | 718,863 | |

収入の部

| 科　目 | 予算額 | 備　考 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 230,363 | |
| 支部事業交付金 | 214,500 | 1.500×143名 |
| 須部運営交付金 | 143,000 | 1.000×143名 |
| 新入会員奨励金 | 20,000 | 4.000×5名 |
| 登山教室参加費 | 90,000 | 3,000×30名 |
| 雑収入 | 20,000 | 祝儀・残金・利子 |
| 収入合計 | 718,863 | |

☆別途積立金　590,411　H23.11.18定期預け入れ

## 会員異動

（2015年　3月31日現在）

### 入会者

15483　泉脇修司
15493　岩見昌樹
15495　三ツ井孝
15575　西沢正二
15605　高野啓一
15613　西川卯一
15661　寺田忠史
15666　長野和義
（申請中）勝又千華・米沢正信

### 転入者

11908　平尾　清（本部より）

### 転出者

15203　武田裕光(群馬支部へ)

### 新永年会員

5834　大石　惇

### 物故者

4170　尾崎徳郎（14・7）
5157　望月計市（14・8）
6364　田邊恵造（14・10）
9456　佐藤孝夫
10951　西川信義

### 退会者

8912　糸賀忠彦（14・4）
14969　大庭俊二（15・2）

### 除籍者

13695　豊島宏始

# 公益社団法人　日本山岳会静岡支部組織と役割

| | 担当委員 | 業務範囲 |
|---|---|---|
| 役員会 | ◎**大島　康弘**<br>○有元　利通<br>永野　敏夫<br>諏訪部　豊<br>木村　勝利（記録）<br>増田　治郎<br>中村　博和 | ・委員会間の調整<br>・年間計画の策定<br>・会員講話の手配<br>・総会の議案作成<br>・重要事項の検討 |
| 公益事業委員会 | ◎**中村　博和**<br>○白鳥勝治<br>青島　秀夫<br>有元　利通<br>宮城島好史<br>曽根　芳樹<br>木ノ内　高嘉<br>長野　和義<br>米沢正信 | ・公益事業の策定と実施<br>・関係機関との連携<br>・登山教室の計画実施<br>・自然保護活動<br>・『山の日』行事の企画実施 |
| 会報編集委員会 | ◎**永野　敏夫**<br>○八木　功<br>望月　照夫<br>熊岡　達雄（渉外） | ・支部会報の編集出版<br>・出版物の送付<br>・記念誌等の出版<br>・支部会務の掲載<br>・執筆依頼<br>・他支部会報の管理 |
| 集会・山行委員会 | ◎**諏訪部　豊**（HP）<br>○小笠原　誠<br>長谷川　広司<br>榛葉　華子<br>廣澤和嘉<br>山口　康裕<br>岩崎允弘<br>青野　興喜<br>小川　正育<br>荻野　俊夫<br>池谷　和明<br>西村　しのぶ | ・集会・山行の計画実施<br>・山行の計画書本部送付<br>・山行・集会の案内通知<br>・他支部・本部行事の参加・取りまとめ |
| 会計 | ◎**増田　治郎**<br>**会計監査**<br>青野　興喜<br>登　三郎 | ・予算書の作成<br>・出費のコントロール<br>・決算報告<br>・経費の支払い<br>・公益・共益の仕分<br>・定例会の会場予約 |
| 事務局 | ◎**大島　康弘**<br>○木村　勝利 | ・関係部門の取次ぎ<br>・窓口業務<br>・定例会の司会と記録<br>・会員名簿管理 |

# 集会・会員山行予定表

| No. | 行事区分 | 題　名 | 期　日 | 内　　容 | 募集人数 | 定例会 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 集　　会 | 文殊山荘大掃除 | 2015/6/13～14<br>「あべごころ」<br>北東側駐車場に<br>13日9:00集合 | ・荻野恭一会員所有の文殊山荘（静岡市葵区牛妻2480にあるログハウス）を支部で借用・管理することになった。大掃除が必要なので支部会員で行うことにした<br>・マスク、軍手は準備済み。汚れても良い格好。風呂に入れない可能性があり、身体を拭く程度との認識。シュラフ、マット持参<br>・昼食は持参のこと。夕食は人数把握後買い出しする。費用は割り勘 | 特に制限なし。<br>多くの方にご参加頂きたい | |
| 2 | 会員山行 | 白峰三山縦走 | 2015/7/18～20<br>（海の日連休） | ・前夜（17日）発～奈良田にて仮眠<br>・北岳山荘にて幕営<br>・大門沢小屋にて幕営<br>・奈良田にて入浴<br>・参加者にはメールまたはＦＡＸで計画書を送付する | 最大15名<br>（テント４張程度） | ７月定例会<br>(7/8)<br>労政会館 |
| 3 | 集　　会 | 納涼懇親会 | 2015/8/19(水)<br>18:30開始 | ・静岡駅南口、ホテルセンチュリー静岡６Ｆパティオのビアガーデン（3,980円、飲み放題食べ放題） | | ９月定例会 (9/9)<br>労政会館 |
| 4 | 会員山行 | 黒部川、<br>下の廊下 | 2015/10/3～4 | ・前夜（2日）発～扇沢にて仮眠<br>・車は宇奈月に回送依頼<br>・阿曽原温泉小屋にて幕営<br>・欅平～宇奈月<br>・参加者にはメールまたはＦＡＸで計画書を送付する | 最大15名<br>（テント４張程度） | 10月定例会<br>(10/14)<br>労政会館 |
| 5 | 会員山行 | 南ア深南部、<br>黒法師岳・丸盆岳 | 2015/10/24～25 | ・有元副支部長計画 | | |
| 6 | 会員山行 | 懇親山行<br>幹事：池谷和明、<br>畠中智代、<br>小川正育 | 2015/11/14～15 | ・県立森林公園「森の家」、〒434-0016浜松市浜北区根堅2450-1、TEL053-583-0090<br>・20名（和室4、洋室2、最大25名程度）を仮予約済み<br>・現地集合16:00（チェックインは15:00）<br>・ディナータイム17:00 ～ 19:00<br>・交通機関利用者は遠鉄新浜松駅に乗るとき電話していただければ私（池谷）が迎えに行きます（車で10分程度）<br>・おすすめプランなのでタクシーチケットが遠鉄西鹿島駅から出る<br>・JR浜松駅⇒遠鉄新浜松駅（5分）⇒ 遠鉄西鹿島駅（32分）<br>・二日目、「森の家」8:30→コンビニで昼食購入→秋葉山表参道Ｐ9:40→富士見茶屋跡10:40→子安地蔵11:15→秋葉寺11:40→秋葉山（秋葉神社上社）12:00/12:40→秋葉寺13:00→表参道Ｐ14:20→遠州鉄道西鹿島駅15:00（解散） | | |
| 7 | 会員山行 | 沼津アルプス<br>（兼12月13日実施のハイキングセミナー下見） | 2015/11/29 | ・沼津駅南口8:30集合 | 最大20名 | 12月定例会<br>(12/10)<br>労政会館 |
| 8 | 集　　会 | 新年会 | 2016/1/10 | ・藤枝駅8:45集合の後、タクシーを乗り合わせて青島会員の青島酒造（喜久酔）見学と試飲（費用無料）<br>・12:00藤枝市内にて宴会（会場未定・会費6,000円程度）<br>・宴会のみ参加も可 | | ２月定例会<br>(2/10)<br>労政会館 |
| 9 | 会員山行 | 雪山・山スキー | 2016/2/20～21 | ・当日早朝発<br>・初日は三峰山（みつみねやま）または霧ヶ峰<br>・毒沢鉱泉「神の湯」泊<br>・２日目は入笠山<br>・スノーシュー、山スキーどちらでも可 | 最大15名<br>（15名で９月頃宿泊予約する） | ３月定例会<br>(3/9)<br>労政会館 |

会員山行

# 秋の懇親山行報告
## 山犬の段～蕎麦粒山

中村　博和

［２０１４年11月８日～９日］

東部・中部・西部持ち回りで毎年開催されている秋の懇親山行が今年は中部主催（幹事小笠原さん）にて11月８日（土）、９日（日）に行われました。無料でありながらトイレも別棟にあり、管理が行き届いている山犬の段小屋を会場に一泊二日の交流会となりました。

初日は15時半を目安に各地より乗り合いにて現地集合。大所帯の浜松北高山岳部が幕営準備でにぎわう山犬の段駐車場を抜け、小屋に入ると既にＪＡＣの旗が飾られて我々のスペースが確保されていました。

総勢16名の参加者が集い、榛葉さん・西村さんの手際良い包丁さばきであっという間にキムチ鍋、２鍋が完成。大島支部長のご発声にて乾杯、開宴となりました。照内さん・青島さんの差し入れの地酒一升瓶がずらり並び、青野さんのワイン、買出しビール等豊富なお酒に加え、長谷川さんのそら豆、青島さんのサーモン、榛葉さんの柿（一人一個づつ皮が剥かれ食べるだけにして持参くださいました）の差し入れなど美味しく頂きました。ローソクやランタンの焔をながめつつの歓談も一味ありました。飲み食いが一息つくと諏訪部さん編集の歌集が配られ、「第二回　山の歌を歌う会」を開催。自作の照明付き楽譜台を駆使した諏訪部さんのギター名演奏に合わせて皆で山の歌を歌い宴は最高潮（同宿の部外者２名には無理やり拍手をいただき恐縮）楽しい宴も20時にはお開きとなりました。皆寝袋にもぐりこみ明日に備えました。

翌日は早朝幹事の小笠原さんが用事で下山し、15名にて蕎麦粒山に登りました。大島支部長のリードにてラジオ体操で身体をほぐし、当初の計画にはありませんでしたが支部長ご指名にて若輩ながら中村が先導リーダーを務め出発。既に木々の葉の落ちて見通しの好くなった晩秋の尾根コースを休憩１回をはさみ、小１時間歩いて山頂到着。当初の計画では高塚山まで足を延ばす予定でしたが、雨の心配もあり山頂にて皆の意見はここにて下山で一致。山座同定の後、みかんやお菓子を食べて小休止した後、帰路も同じ道を戻りました。小屋の手前で雨がパラパラと降り出しましたが、小雨にて大勢に影響はなく小屋に戻って清掃後、解散となりました。

会員山行

# 込岳と二王山

大島　康弘

［２０１４年12月21日］

静岡駅７時集合。２台の車に分乗し、上落合より仙俣川に沿って細い道を奥仙俣に向かう。空は晴れ、朝のきりりと締った冷気が心地よい。登山口で泉脇さんが合流した。

輪になって自己紹介と今日のリーダー廣澤さんから簡単なコース説明の後８時30分出発。林道脇の急勾配の支稜線のかすかな踏み跡をたどる。２番手の熊岡さんが廣澤さんのペースに必死でついてい

くが、離される。リーダーのペースは落ちない。

標高１１７０ｍあたりで左から合流する尾根に乗ると踏み跡もはっきりして、間もなく込岳山頂に10時15分到着。標高差６２０ｍを１・５時間で登頂。登路は杉桧林で全く展望はない。

一息入れて二王山に繋がる稜線の下りにかかる。岩屑だらけの急勾配を転げ落ちそうになりながら下り切ると左側は大きなガレが現れる。浸食は登山道にまで及んでいる。八木さんが膝を痛め、遅れ気味だ。コブを越え、急坂を登りきると落ち葉を敷き詰めた台地になり、二王山（１２０８ｍ）の三角点に達した。南西側の切り開きで日向ぼっこをしながら昼食。

辺りは山頂がどこか判らないほどだだっ広い。ガスに巻かれたら磁石なしでは歩けない。電波塔の印のある高みに渡り、湯の森に下山する道を別けて稜線を南下する。途中に安倍川側が大きくガレた箇所を通過し、標高１００３ｍのコブで栗の木山への道を別け、モノレールに沿って下り、小さな沢の飛び石を踏んで舗装道路に出ると奥仙俣の部落である。15時着。

参加者10名（廣澤、大島、有元、小笠原、中村、八木、熊岡、実川、後藤、泉脇）

会員山行

## 一月の山伏

篠原　豊

［２０１５年１月31日（土）］

今回の会員山行は実施直前になって不参加者が何人かあり、その都度連絡があるもの、それに沿った準備に戸惑った。最後は必要と思われるものは全部ザックに詰め込んだ。編成の都合で私の車も出動の羽目になった。

早朝、待ち合わせ場所には既に後藤さんが待っていた。全員の集合場所・静岡駅北口には、予定時刻にメンバーが揃った。

今日の行動予定を確認した後、有元車と篠原車の２台に分乗して７時40分に駅を後にする。安部川河岸に出ると、前方に雪を頂いた尾根が目に入る。道沿いの「コンヤ梅園」でトイレタイム。標高６００ｍのこの地でもオオイヌノフグリやホトケノザなどが春を待ち切れずに咲き始めていた。

梅ヶ島新田との分岐を左に曲がり、大谷崩の分岐まで入ると路面が凍結していた。昨日、下見に入ったというリーダーの有元さんが予告した通りだ。大谷川沿いを詰めて蓬沢の分岐地点に篠原車を駐車して、有元車は西日陰沢の登山口に駐車した。

軽いストレッチ後、９時30分登山を開始し。薄暗いヒノキの植林地やワサビ田を通り抜けて、木橋２ヶ所を渡りきると視界も開けて汗が滲んできた。私は昨晩準備した荷物を全部背負ったので、冬山のボッカトレーニングのようだ。ペースを守って後についた。皆の体調もよく、「大岩」まで頑張りで小休止。あたりを見回すとコナラ、ブナ、カエデなどに混じってサワグルミ等の喬木が程良く林立していた。２度目の休憩で蓬峠に出ると、ぱっと開けた「峠」の展望に思わず息をのむ。心地よい休憩、ここで昼食、朝からの空腹を満たす。着衣を１枚脱いで後

半の登りに備え峠の景観を満喫し腰を上げる。少しずつ積雪も増し傾斜も急になって来る。高度が上るにつれ積雪も40センチを超えるようになった。そろそろラッセルが負担になり始めたところで次の休憩とした。後藤さん久しぶりのボッカで少し遅れる、私が彼と行動を共にして皆には先行してもらうことにした。

スローペースでも高度は順調に上がり、葉を落とした木立の間から富士山を望むことができた。14時、気温も下がって来たので衣類の調整をする。早朝に出て登頂したという人とすれ違う、私達の先行メンバーも順調に登っているようだと云う。なんとか山伏小屋への分岐点に着いて肩に食い込んだ荷を下ろし一息入れる。地図で現在地の確認をしてメモをとる。（15時45分で標高は１９５０ｍ。積雪１・２ｍ）

ここからは山伏小屋に向かってしばらく下りになる。深雪を踏みぬくと股下まで埋まる。慎重に歩を進めて小屋を目指す。しばらく下っていくとサブリーダーの大島さんが迎えにきてくれた。やがて小屋で手を振る３人の姿が見えた、互いにコールを交わす。先着隊は、入口の除雪をしてから中に入ったとのこと。炊事用の雪を確保して夕飯の準備に掛ってくれていた。篠原と後藤も荷を解いてこれに加わった。ガスカートリッジを間違えて夏用を持ってきてしまったので余熱に手間がかかってしまった。それでも山の夕暮れギリギリで17時の夕食には間に合った。皆の健闘をねぎらい乾杯をしあった。ローソクとカンテラの明かりは眠気を誘うが芯が寒い。テントと違って気温はマイナス８℃からマイナス12℃と時間とともに下っていった。小屋は私達の独占とはいかず、後から地元の登山者が１人「小屋泊り」に加わった。

食後のミーティングで、明日は全員で山伏を登頂をした後、昨日の登山コースを下ることになった。

19時30分就寝。　山の静かな夜を迎えたが、冷え込みが厳しい。用足しで外に出て身を縮めながら空を見上げると、満天の星空だ。思わず「はっ」と息をのむ。満月に近い月が峰々を照らしていた。しばらく見入ってしまった。「おおっ寒い」…。ザックからもう一枚引っ張り出して着込んでからシュラフに潜り込んだ。

**［先行グループのタイム記録］**

山伏小屋分岐
（14時24分～14時30分）。
ここから３名（有元、中村、勝又）は空身で山伏山頂往復。１名（大島）は山伏小屋へ先行。

山頂往復の３名は15時32分、山伏分岐へ戻る。

途中で大島と合流し16時　山伏小屋着

山伏頂上にて

［2月1日（日）］

起床　5時45分　朝食　6時30分。山伏小屋発　8時25分（マイナス8℃）。昨日のトレースを踏み外すことなく山伏山頂には9時20分に到着した。山頂周辺は深雪で覆われ、ピッケルを突き刺す音がきしむ。見渡せば、胸のすくような青空の向こうに富士山が、振り向けば南アルプスの峰々が整列して並び、冬ならではの展望に、それぞれが我を忘れてシャッター切る。記念の写真を撮って山頂を後にする。

会員山行

## 平成27年度　第一回　竜爪山

勝又　千華

２０１５年４月19日

ハイキングセミナーを翌週に控えた４月19日、朝のバス停には既に20人近くの登山者が集まっていた。人混みの中ひときわ背の高い有元さんの姿を見付け安心する。集合はここ…？日にち間違えていない…？という不安は払拭された。どうやら竜爪山は、身近さ故なのか人気があるらしい。空は薄い曇に覆われているが、肌をすべるひんやりとした風が心地よく、浮かれ気味な心を静めてくれる。山へ行く朝はいつも、気分が高揚しすぎてどうにかなりそうになる。

バスを降りてから登山口までの道のりは長かったが、道路わきの草花の名前や、ヤマブキには一重と八重があることや、昔は菜の花の種と油を交換してもらっていたことなど、興味深い話に耳を傾けながら歩いた。途中、送電線監視路の様子を確認すると完全に崩壊していた。崩れた道の先に目印があったが、とてもそこへは行けそうになかった。

登山口からすぐに急登が続く。前日より同行の友人宅に泊まっていた私は、汗と共に我が身にへばりつく荷物と、それを準備した自分を呪った。久しぶりの友人と会うのに着替えの洋服や化粧品など山に必要のないものまで持参していたのだ。しかも結局それらをたいして使わなかっただけに、呪いは疲労とともに増幅する。〝東尾根直登コース（初心者向け）〟との記載があったため、多少重くてもいいやと安易な気持ちでいたが、日本山岳会の「初心者」はレベルが違った。もっとも、事前に地形図をよく確認していればきつい道かもしれないことは把握できたので、自分の準備不足を反省した。

鞍部を過ぎた頃、それまでよりも多くのミツマタの花が見かけられた。その昔、和紙の原料になるミツマタが藩の財政を潤すために植えられたそうだ。他にトウゴクミツバツツジ、スミレ、クロモジがあった。スミレは色も形も違うものが数種類あったが、見る花見る花全部がスミレなので、ちょこんと咲いている花はた

いていスミレであるような気さえする。タチツボスミレしか覚えられなかった。

開けた山頂に着くと大勢の人が昼食をとっていた。さながら大人の遠足だ。すかさず有元さんの保冷バッグから出された8本のチビ缶ビールがテーブルに並べられる。乾杯と自己紹介をしつつ、先輩たちが輝かしい経歴を誇るクライマーだったことや篠原さんの壮絶なアラスカ遭難体験を聞き、かれこれ1時間以上山頂にいたと思う。

下りは東海自然歩道を行く。登りではヘビイチゴ・キイチゴを見かけたが、下りではフユイチゴなるものがあった。冬に実が熟すらしいが、どんな実がなるのだろう。

休憩時に篠原さんからチョコレートとバナナを頂いた。飴を舐めながら雪を食べるとカキ氷になるという漫画のワンシーンを思い出し、チョコとバナナを同時に食べればチョコバナナになるのでは、と思ったが、1人分に切り分けられたバナナを受け取ったときには既にチョコレートは口の中で溶けてしまっていた。

途中、友人が脚の異常を訴えた。最悪の場合はおぶって下山かと思われたが、篠原さんお手製の即席杖と、ザックは中村さんに担いで頂き無事に下ることができた。

牛妻に出ると新芽を一斉に吹き出した茶畑が広がっていた。そういえばここは静岡だった、と不思議な気持ちになる。ひとたび山へ足を踏み入れると〝何県の何市〟という認識が消え、代わりに〝どこの山〟という認識にすり替わるようだ。

有元さんが「昔はこういうので友達の腕や首をなぞって驚かせて遊んだんだよ」と、引っこ抜いた植物を私にくれた。根の先端は猛禽類の爪を思わせるようなカーブを描いている。なるほど、これでいきなりなぞられたらさぞ驚くだろう。今度是非誰かにやってみよう。

静岡駅構内の飲食店にて二度目の乾杯をした。飲みながらも来週同じコースを辿るセミナー当日の話し合いが進められた。最初の急登で棄権者が出るかもしれない。大人数での休憩はどのようにとるか。細部の課題や予想される問題に気づくためには、実際に現場を見て本番同様動いてみるに限る。人が集まればそのぶん様々な意見も出る。

その甲斐あってか、26日は1人の棄権者もなく無事に終えたとのこと。今回の山行が非常に有意義なものであったことを証明し、またそこに未熟ながら私も参加させて頂けたことを心から嬉しく思う。

## ハイキングセミナー

### 平成26年度 第三回ハイキングセミナー　報告
### 大谷崩ノ頭（大谷嶺）

有元　利通

平成二十六年度第三回ハイキングセミナーを10月26日に実施した。今回も実技のみで、登山対象は安倍奥の第二峰、大谷崩ノ頭（大谷嶺、一九九九・七㍍）。案内をダイレクトメールで送ったリピーターの人の申込が早かった。また、その人達が誘った人も入れて20人で募集人員の20名程度を満たしてしまった。その後の九月二十三日に地元紙に掲載されたの

で申込が来た。10名を受け入れたが10名ほどお断りした。計30名となった。その間にもキャンセル待ちがあり、キャンセルが有り入れ替えがあった。

自分達の車で現地集合、現地解散で参加できるかという問い合わせがありＯＫしていたのでその同じ会社の人、７名は別車で、しかし27名の定員のマイクロバスには全員乗れないのと遠隔地から来る会員等の為に会員の車を三台出した。

岩崎会員が運転するマイクロバスは静岡駅南口を七時ちょうどに出発した。班分け、班別リボン配布等は大島支部長、篠原、小笠原、増田会員がやってくれていた。梅ヶ島・コンヤの里梅園の公衆トイレで休憩した。ここで諏訪部、中村、有元乗った救援カーと合流した。

梅ヶ島新田のバス停の手前から左へ分けて登山口へ向かった。大谷崩れの砂防工事の現場、扇の要下の駐車場に40分遅れの８時40分に着いた。人数が多いので簡単な挨拶、注意の後、小笠原会員の指導でストレッチをして班ごと点呼を取った後Ａ、Ｂ、Ｃ班の順で出発した。樹間のルートを上っていく。大谷崩れの現在の末端に出る。この辺りでフジアザミが顔を出す。フジアザミ、富士山だと御殿場口の二・八合から下に多く見られる他南アルプスの各地の林道脇の砂礫地に多く見られる。崩れの末端を左岸から右岸に渡り、本谷の堰堤に出る。登山道は堰堤を巻いて堰堤の中に入り本谷に沿って登っていく。

しばらく行くと水場に出る。ここで一本目の休憩を取った。

休憩の後、有元率いるＡ班が早いので支部長率いるＣ班が先に出た。この辺りから大谷崩れの脇の岩、砂のルートを登っていく、少しずつ傾斜を増してくる。Ａ班の一人の参加者の調子が良くないと訴えてきた。自分で下りて待っているという。誰かをつけようかと思ったが大丈夫だというので車のキーを渡して車内で待っていてもらうことにした。更に少し登ったところで70歳代後半の初参加のご夫婦が、特に79歳の夫君の方がついて行けないということで下ることになる。これには、会員で用事があるから早く帰るということで自家用車で来ていた木村会員が付き添って下った。（車で待っていてもらうことになった）登るにつれて上の稜線はガスって見えなくなってきた。新窪乗越は大体見えていた。フジアザミの他、ミヤマナデシコ（シナノナデシコ）やリンドウ、野菊が予定通り見られた。しんどそうなので乗越へ出る前に一本休憩を取った。休憩地の辺りでカップルが一組下ってきた。狭い登山道で交わすのも大変であった。水場の休憩から約１時間、10時47分に乗越に出た。ガスの中で風もあるので風よけを１枚着てもらう。約10分の休憩中に大谷嶺の方から大学生10数名が下ってきて縦走する山伏の方へ向かっていった。

乗越を出ると尾根沿いに進む。崩れを避けて北側、山梨側の斜面を巻くように行くところが多い。時折上からガスで溜まった滴が木からぱらぱらと落ちてきた。疲れてきた人が増えたのか登りのペースが落ちた。40分のところが55分を要して漸く大谷嶺の山頂に出た。スタートが20分遅れで到着が25分遅れだったから、まずまずであった。到着順に班ごとに写真を撮ったがＢ班の殿（しんがり）が着いたのは更に５～10分後だった。

しかし、リタイアの3名を除いて全員登頂できて良かった。ガスが南、崩れの方からどんどん上がってくるので昼食を急いで取って下ることにした。

35分で山頂を後にした。下りはそれでも早い。40分の所を35分で乗越に下った。ちょうど1時。

ひと息入れて乗越から下りにかかる。崩れの南斜面に入れば寒くはない。3分の1も下った頃、ガスで見えなかった下方が見えて紅葉がガスの間にきれいに浮かんだ。もう傾斜も緩くなってきてやがて水場について休憩した。休憩の後最後の緩やかなルートを下っていった。朝会った静岡市岳連のパトロールに来ていると言っていた片山さん達の一行がまだ最後の道標整備などを行っていた。2時25分、扇の要の下の駐車スペースに着いた。最後の点呼をしていると雨がざっと降ってきたので挨拶もそこそこに車に乗って市営の「黄金の湯」に向かった。団体割引で700円のところを500円で入湯でき幸いであった。あとは温まった体を車に乗せて静岡駅前に帰った。

## ハイキングセミナー

### 平成27年度 第一回ハイキングセミナー 報告
### 竜爪山

小笠原　誠

2015年4月26日

今年度の第1回ハイキングセミナーは竜爪山・文殊岳へと登った。静岡駅北口のバス乗り場に集合した方々は計27名、会員6名を含め総勢33名であった。7時20分の則沢行きのバスに乗り平山で下車歩いて鳥居の所まで行きそこでストレッチ、注意事項等を話し9時35分登山開始。

今回は文殊岳の東面直登コースを篠原会員のリードで歩いた。最初から急登が続き、一般参加者の方々からは「もう二度と参加はすまい」と言った言葉も聞かれたが、スミレの花の可憐さにひかれ？なんとか初めの急登を無事登りきった。

第二鉄塔の所に着く途中ではスミレの花の説明があり、身体も慣れて来たのか会話も和やかになってきた。道は一旦下りになり最後の直登に掛かる。マメ桜の花が最期を告げるかのように、その花びらを登山道に敷き詰めて我々を歓迎してくれた。トウゴクミツバツツジ等の花に励ませれて何とか12時35分文殊岳迄登りきった。ここ迄一人の脱落者も出さず頂上に立ててホッとした。早速昼食。これから薬師岳を経て高山の方へ行くと言う登山者に会う。

記念撮影をして13時15分下りにかかる。初めての人には、かなり長く感じる下りだが休憩を取りながら降りる。

途中中電の工事現場、俵峰からくる林道を横切り、荻野会員の文殊山荘（現在は無人）で休憩をし、後はアスファルトの道を牛妻の道の駅「安倍ごころ」迄降りる。16時30分全員無事に歩き通した。結果的に篠原会員のペース配分が良かったと思う。

ここで参加者に感想を述べて貰った。初参加の方から「またこういう企画があったら参加したい」との意見が複数有り気を良くした。

さて今回のセミナー参加者は当初の33名から27名となった、今後キャンセル者

が出ない様、皆で工夫して行きたいと思う。

また今回Ｇパン姿の初参加が数名おられた。そういう人達にもウエアの大切さを事前に指導出来たらと思う。そしてセミナーのファンに成って下さればと思う。

最後に会員の皆様にはお疲れ様でした。有難う御座いました。

参加者　有元利通　岩崎充弘　諏訪部豊　篠原豊　中村博和　小笠原誠

# 『高山植物の悲鳴』

編集委員　望月　照夫

南アルプスの雷鳥は全滅か！

山の魅力に彩を添えるのが、可憐で気高い高山植物や可愛い雷鳥です。でも南アルプスの高山植物は種類が少なくお花畑は貧弱です。お花畑は雷鳥の食卓です。高山植物や雷鳥はもともと氷河時代の遺物ですから、北アや北海道に劣るのは仕方ありません。南アはハイマツや雷鳥の世界南限地なのです。

しかし、私が学生の頃の南アのお花畑はそれでも見応えがありました。それが増加した入山者の踏み倒しや山野草ブームに乗った盗掘に加え、十数年前からは日本鹿による食害が始まって、それこそ深刻な事態に陥っています。山によっては絶滅寸前です。最近では北アにも鹿が進出し出しました。

なぜ鹿が高山植物を食害するようになったのか、その原因は地球温暖化です。日本鹿はカモシカと違い深い雪や厳しい寒さは得意ではありません。しかし、気温が上がり山の積雪量が減ったことで高山に生息域を広げたのです。そして高山植物のおいしさを知ったのです。加えて狐も登って雷鳥等を捕食します。ハイマツの枯死も雷鳥の避難先を減じて事態を深刻化しています。イザルガ岳の雷鳥は全滅したと思われます。千枚岳でも狐が目撃されます。北岳はまだですが進出は時間の問題でしょう。南アの雷鳥は絶滅です。

地球温暖化は温室効果ガス$CO_2$の増大に起因します。全地球的な問題です。

６月９日の報道によりますと、Ｇ７サミットで$CO_2$の排出を２０５０年までに40％から70％削減する方向で合意したとありました。記事になりませんでしたが、世界的には脱炭素化なのに、日本ではその流れに踏み込んでいない。国の舵取りに疑問を感じます。

地球温暖化は様々な影響をもたらしています。氷河の後退、ツバル諸島の水没、異常な気候変動、巨大台風、ゲリラ豪雨などです。しかし、いずれも局所的な現象で人類の生存を脅かすものではない、として関心が高まらないのも歯がゆい限り。対策の先送りは手遅れとなるのに議論が高まらないのが悲しい。

人類にとっては時間的余裕が若干あるでしょうが、山の生物、特に南アの高山植物や雷鳥などには待ったがありませ

ん。既に彼らの悲鳴が届いています。このままでは幾年も経ずして特定の種は絶滅します。

ある学者によりますと、気温１度の上昇は山が１５０メートル低くなったことと同じと言いますから、仮に2度上昇すると北岳は２９００メートルに低まったことになり、固有種のキタダケソウほかチョウノスケソウは生育できないでしょう。そして、やがて北アや北海道の山も同じ運命をたどることになるでしょう。温暖化は我が国の高山植物や雷鳥の存在を認めないのです。そして、日本鹿による高山植物の食害は、温暖化に伴う諸問題の序章にすぎないとも言われます。

ＪＡＣの会員はただの山好きの集まりではないはずです。多様な生態系を織りなす山岳環境を保全して後世に残すため、声をあげることのできない高山植物他に代わって、地球温暖化対策推進に向けて、より世論を高める行動を取る時と思います。また、リニア新幹線のトンネル工事も非常に懸念されます、排出される掘削土の処理と工事に伴う地下水脈切断に関してです。

工事予定地周辺では貴重な山野草の発見も報告されています。無視することは許されません。工事を認可した国及び施工者であるＪＲ東日本は、工事に当たり周辺環境の破壊なきことはもちろんのこと、生息生育する動植物に負荷をかけないよう細心の配慮を心掛けてほしいと思います。これは県民、国民の願いです。

「シナノキンバイ」声をあげることのできない彼らは、迫りくる地響きにただ耐えるだけ！

## 会員動向

### 個人活動

◎講演会・会員　實川欣伸
テーマ
会　場　御殿場高原「時の栖」
日　時　7月23日（水）18時より
無料

◎写真展・会員　有元利通
『富士山を中心とした山の写真展』
会　場　富嶽温泉花の湯１Ｆ
日　時　7月3日～7月31日
富士宮市ひばりが丘８０５
☎　０５４４-２８-１１２６
無料

◎出版・会員　廣澤和嘉・児平隆一　共著
書名『しずおか低山ウォーク20』
出版社　静岡新聞社

◎近刊予告・会員　永野敏夫
書名『静岡県の山１７０コース』
出版社　羽衣出版社
8月下旬発刊

## 編集後記

ネパールの大地震、チリーのカルプコ大噴火と世界的に見ても火山性地震が活発化しています。日本では昨年９月の御嶽山、先の口永良部島新山噴火、箱根、霧島、蔵王、浅間山も噴火の危険性を高めています。御岳山噴火では60人、ネパール地震ではエベレストベースキャンプに雪崩が発生し20人、今回のスマトラ・キナバル山で20人ほどの登山者が犠牲になっています。自然の脅威を改めて見せ付けられました。

犠牲者は、今後も増えると予想されます。ご冥福をお祈りいたします。また、被災された方々には心からお見舞い申し上げます。

今世紀に入り火山噴火や地震が地球規模で活性化しているとの指摘もあります。地震、噴火が登山の危険を大きくクローズアップしてきたといえます。言うまでも無く登山は自然を対象にしています。謙虚に向き合い、備えなくてはなりません。

大島支部長二期目の会報編集委員長をおおせつかりました。意に適うか自身疑問に感じていますが幸いスタッフが全面的に支えてくれるとの確約、何とか全うしていければと思っています。以前にもまして活発な原稿投稿をお願いいたします。登山はスポーツ的要素が強い趣味ですが反面文化的要素も持っています。

支部会員であった故西郷さんの「理念の山、情念の山」が心に残っています。行った、登っただけではどうにも物足りません。動植物、地理地形、民俗、風俗、歴史や山への思い入れなど会報が幅広い原稿で彩られればと願っています。

（永野）

**次号の編集方針と予定記事について**

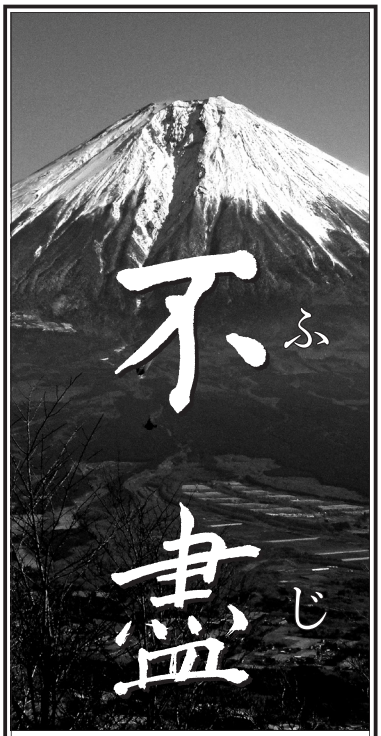
77号の発行が遅れたことをお詫び申し上げます。大石氏・望月氏・諏訪部氏・中村氏には、編集委員から急なお願いにもかかわらず、それぞれ特異な原稿を頂きました。

次号78号は11月発行予定です。凡そ、左記の内容で進めたいと考えています。ご協力の程宜しくお願い致します。

☆テーマ別シリーズ
・『恐怖の体験』
・『山への想い』
☆論　考
・『創造的登山の勧め』
・『南アルプス山岳史』
・『プロガイドからひと言』
☆報　告
・『ネパール現地報告』
集会山行・『文殊山荘報告』
委員会・『故・山内氏の想い出』
・『山荘建設の想い出』
公益事業・『「山の日」について』
☆70周年記念号に向けて
・『静岡岳人列伝』

次回をお楽しみに！（編集委員会）

発行責任者　大島康弘
及び事務局　島田市東町一五八四
☎054-7036-3059
編集委員長　永野敏夫
印刷所　株式会社三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031




題字・牧野衛　背景・永野敏夫

日本山岳会
静岡支部会報
2015（平成27）年秋季
第78号

## 巻頭言

# 『井川を南アルプスの登山基地に』

静岡支部長　大島康弘

この夏、井川から南アルプスに三度入山する機会があった。

一度目は沼平に車を置き、畑薙の大吊橋を渡って茶臼方面へ。二度目は畑薙第一ダムの4kmほど手前の河川敷に駐車して東海フォレストの送迎バスで椹島へ。

三度目は通行許可車で二軒小屋に直行した。その帰り道、河川敷の大駐車場は満車で、溢れた車が延々と道路脇に並んでいるのに、改めて登山人気を実感した。

それと同時に、一般登山者の入山の不便さを思わないではいられなかった。

河川敷の駐車場にはトイレも売店もない。聖沢登山口までは井川観光協会が運営するマイクロバスで（無料）、椹島より奥は東海フォレスト運営の宿泊者専用送迎マイクロバスが唯一の交通手段だ。バスは宿泊施設利用者の送迎専用だから、テント泊の登山者や日帰りの観光客は乗せて貰えない。

公共交通機関は、1日1便の静岡駅発の静鉄バスが唯一の入山手段である。大井川鉄道を利用しても、終点の井川湖駅からバスの接続便がないので全く不便である。

## 目次

★巻頭言　静岡支部長　大島康弘　1
☆「山の日」に寄せて　白鳥勝治　3
☆南ア山岳史編纂の提言　望月照夫　3
☆「創造的登山の勧め」　永野敏夫　5
☆「プロガイド」として　小川正育　7
★文珠山荘　報告　諏訪部豊　9
☆『山荘建設の頃』　小柳清人　9
☆「兄を思う」　池上雅子　11
★報告・エッセイ　11
◆ネパール地震報告　實川欣伸　11
◆山内真行さんの思い出　榛葉華子　13
◆シリーズ『恐怖の体験』　大島康弘　14
★会務報告　事務局　15
★会員山行　15
☆『白峰三山縦走』　荻野俊夫　15
☆『大光山』　有元利通　17
★新会員の自己紹介　泉脇修司　17
☆　三ツ井孝　西川卯一　18
☆　寺田忠史　高野啓一　18
★会員動向　19
☆「富士山600登」　有元利通　19
★編集後記　永野敏夫　20

このように大井川水系からの南アルプス入山は不便で、宿泊とセットになっている登山バスは登山者にとっては戸惑うことが多いに違いない。

試みに他の地域を見ると、北アルプスの場合は沢渡及び平湯に大駐車場が用意され、そこからはシャトルバス、タクシーでほとんど待たずに上高地、新穂高に行くことができる。

尾瀬の場合も戸倉のターミナルから大清水、鳩待峠に向けてバスやタクシーが次々に発着している。南アルプス北部への入山も芦安及び戸台からのマイクロバスやタクシーが完備して不便はない。それに比べると井川方面からの入山は交通手段はもとより施設や、登山者受け入れの仕組みも未整備でお粗末といわざるを得ない。

この状況を改善するために、かって検討されたであろう『南アルプス南部井川登山ターミナル』を改めて提唱したい。私が描く構想のイメージは次のようなものである。

♪井川地区に有料の登山者用大駐車場を作り、売店、トイレ、観光宿泊案内所、休憩仮眠所なども用意する。登山者はこのターミナルでバス、タクシーに乗り換え、登山口を目指す。

♪大井川鉄道終点の井川駅と登山ターミナルをバスで結ぶ。これによりＪＲ金谷駅からの鉄道利用者の便も良くなる。

♪将来井川駅終点から登山ターミナルまで軌道を延長することも夢ではない。

天然林に覆われた大井川上流の四季は美しい。特に紅葉に染まる大井川の本流の渓谷の美しさはその規模においても華やかさにおいても比類ない。登山ターミナルの賑わいは、季節を問わず新緑から秋の紅葉まで期待できるのではないだろうか。

また、登山ターミナルは登山者への便宜供与に留まらず、井川の集落に雇用と賑わいを取り戻すことにもつながるだろう。

昨年6月には南アルプスがユネスコのエコパークの認定を受け、また来年からは8月11日が『山の日』として国民の休日となる。この時期に、南アルプスの恩恵を享受してきた静岡県の山岳関係者が主体となって井川に登山ターミナルの設立を行政や企業に働きかけることは大きな意義があると思われる。

山岳団体が登山振興の為に関係機関に働きかけてこそ、その実現はぐっと現実味を増すのではないだろうか。公益法人としてのＪＡＣが取り組むに相応しいやりがいのある課題だと私は思っている。

自然保護の観点からリニア問題が進行中なのに、次は『南アルプス南部井川登山ターミナル』構想か?と、ご批判の向きもあると思いますが、是非議論を興して戴きたいと思います。

赤石岳山頂にて・気になる三角点

# 『山の日』のイベントについて

白鳥　勝治

2月11日の支部例会に於いて「山の日」のイベント『大倉祭』について提案したものを、編集出版委員会の求めで、ここに掲載します。

「山の日」は、諸山岳団体の尽力もあって、来年8月11日から、16番目の国民の祝日として制定され実施する事になった。

日本山岳会の月報「山」1月号において「山の日」事業委員会の荻原氏は、山の日の意義を『山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する』と述べられている。そして日本山岳会は、明治草創期の設立の趣旨にも添うものとして「山の日」に何をなすべきか?と問い掛けている。

そして三つの行動指針を示された。

1、登山活動　2、文化活動

3、環境保全活動

全国の支部が、それぞれのイベントを企画し開催することを提案されている。

その問い掛けに応じて『大倉祭』を提案した次第である。

大倉喜八郎はご自身も90才近くになって赤石岳に登頂し《**天物を暴てん**（荒らす、滅ぼす）**するな**》の名言を残し、南アルプスの開発の一面、また、自然を現在の容姿に残した恩人でもある。翁を称えて、麓にある椹島で、《山の祭り》の開催を提案した所以である。

また、昨年南アルプスは、国立公園指定50年を迎え、この6月にはユネスコ・エコパークの登録を取得した。そのユネスコの理念《人間社会と自然の共生を持続的に管理する計画》の実現モデルとしたい、という思いからでもある。また、登録は10年ごとの再審査が課されているという。この提案が実現し長く、継続されることを、願うものである。

おりしも、南アルプスの中心部を東西に横断する、リニア新幹線工事に対し、自然破壊に繋がることを危惧する運動が起きている。

また、南アルプス南部からの入山の利便を図るために『井川を登山基地』にという提案がなされている。

こうした二つの運動にも呼応するものとして、この「山の日のイベント」の私見を述べて、各界の賛同を期待するものである。

# 南ア山岳史編纂の提言

編集出版委員　望月　照夫

JAC静岡支部は昭和25年（1950）に設立されましたので、来る平成32年（2020）東京オリンピックの年に設立70周年を迎えることになります。記念

すべき年に、会として後世に残る事業を実施したいと考えます。

まだ機関決定されていない段階ですが、今後会員皆様方のご賛同を得て構想が具体化していくかと思います。

基本的な考え方としては、新公益法人に移行しましたので、会の自己満足事業ではなく、広く世間一般の方々に利用していただける社会貢献的な内容が望ましいと考えます。

そういう考えにより編集出版委員会では、「仮題・南アルプス登山のパイオニア」といった登山史の作成を構想しています。素案の段階ではありますが、次のような内容を考えていますので、会員皆様のご意見をお寄せ願えればと思います。

編纂対象とする年代は、情報収集ができるか未確定なものの、近代登山幕開けの明治時代から大正時代まではどうかと考えます。

計画実行にあたっての最大の懸案は情報収集です。百数十年前からの記録をどのように発掘するかです。情報があると断言できませんが、しかし知られていないだけで埋もれている情報はあると考えられます。とはいえ、編集委員会だけでは限度がありますので、人脈があって知識と登山経験豊富な会員諸兄のご協力が不可欠です。

若い頃から南アルプスを縦横に駆け巡ってこられた会員諸兄が、先輩等からお聞になった話、所属された山岳会の記録、あるいは学校の登山記録など記憶したり保有したりする山岳諸情報を是非ご提供いただきたいのです。もちろん、編集委員会としてもＪＡＣ機関紙「山」の検索や地元郷土史の点検など思いつくあらゆるツールを駆使して情報収集いたします。

なお、対象とする山域を南アルプスに限った理由ですが、静岡地元の山であると同時に、この南アルプスに関しては、北アルプスのように登山史としてまとめられたものがないことが大きな理由です。

なぜ南アルプスになくて北アルプスにあるのか、それは幕末から明治にかけて来日し、我が国にスポーツとしての近代登山を紹介した山好きの外国人に関係します。彼らが日本で主としてトレースした山が北アルプスなのです。

外国人とは、明治政府や企業が欧米等から招聘したいわゆるお雇い外国人のことです。彼らの中には、出身国の山岳会員である筋金入りのアルピニストもいました。そして、彼らの多くは登山記録を残しました。

ＪＡＣは明治38年に設立されましたが、設立に深く関与したウエストンもそうした一人ですし、日本アルプスの命名者と言われるガウラントもしかりです。ガウラントは明治11年に槍ヶ岳に、13年に前穂高岳の両山に外国人初の登頂を成しています。

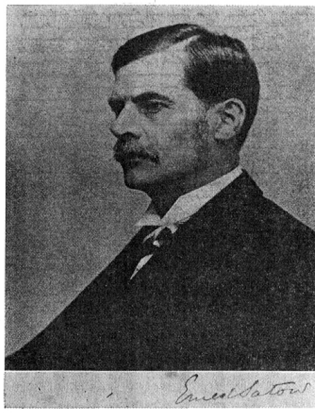
北アルプスには、その他多数の外国人が入っています。麓から比較的近いし、特に立山山系には、立山信仰の信徒を導く仲語といわれた案内兼ポーター組織もあって登りやすかったのです。　登山する外国人に刺激されて明治後年には学生や若者たちも登るようになり目指す山も広がりました。

一方、南アルプスは山岳信仰信徒が入っていた甲斐駒ケ岳を除けば、アプローチが長く、案内人の確保が難しい等の理由で外国人にとっても登りにくく、入山した外国人は極めて少なかったのです。

南アルプスに外国人として最初に踏跡を残したのは、英国外交官のアーネストサトウです。明治14年に農鳥岳と間ノ岳に登頂しています。奈良田からのアプローチでした。この時、サトウは奈良田で雇った案内人3人には失望したと書いています。北アルプスの案内人とは違っていたのです。

また明治25年にはウエストンが大鹿村小渋川から赤石岳に登頂しています。外国人初の登頂です。この時の案内人は警察の紹介で雇っています。この小渋川ルートは、明治37年に小島烏水らも赤石岳を目指しました。また小島は明治41年に白根三山から悪沢・赤石岳を縦走して小渋川に下山しています。

アーネストサトウ



Barr, Pat. *The coming of the barbarians; a story of Western settlement in Japan 1853-1870*, 1967. に掲げられているサトウの肖像（横浜開港資料館蔵）と自筆のサイン

外国人が先鞭をつけた南アルプスですが、後を追って日本人が次々と足跡を印し、大正になるとアーネストサトウの次男の武田久吉や小暮理太郎が荒川岳・仙丈ヶ岳・北岳に登り、更に西堀栄三郎、桑原武夫が間ノ岳・北岳の積雪期初登頂を行っています。

そして大正も後半になると加藤文太郎や韮崎出身の平賀文男らが核心部に次々とトレースを残します。

大正になってからの記録はある程度残されていますが、しかし、静岡近辺出身者の記録や静岡ルートの入山記録は少ないのです。従って、今回の構想にはこうした郷土の記録を多く盛り込めればと考えます。

会員諸兄には、実施することが決定しましたら是非情報のご提供や編集助言等のご協力をお願いしたいのです。

なお、蛇足ですが、寛政10年（1798）に成された遠山奇談という山地紀行文には、南アルプス深南部の状況が記されていますが、実際に見聞したのか疑わしい箇所が多々あり、民俗学者柳田国男をして「嫌な本」と言わしめた内容で参考にはならないとされています。

## 創造的登山
### ＝わが足跡を振り返りながら＝

永野　敏夫

創造的登山について何か書きませんかと提案を受けた。魅力的なテーマであるがおいそれと引き受けられる内容ではない。躊躇したが、長年山登りをしてきた自身の足跡の整理も付くだろうかと引き受けた。

登山家としてジャーナリストとて知られる論客の本多勝一氏の『山を考える』の項「創造的登山とは何か」「山は死んだ」が論理的である。氏によると人類のパイオニア・ワークとしての登山はエヴェレストの初登頂をもって終焉、後は個人としてのパイオニア・ワークだけであり、残された八千メートルといえども人類的なパイオニア・ワークには値しないと断言している。未知、未開への究極的な冒険ということからして当然の結論と言える。残るは処女峰の初登頂かマンメリーの提唱したバリエーションルートと言うことになるが、これらも落穂拾い的な惰

性の挑戦にしか過ぎない。「山は死んだ」では生物の種は生成から繁栄、絶滅という過程があり最終段階には奇形を生み特殊化、分散化する。最近の登山がそんな状況にあるという。そしてアメリカの社会学者リースマンの性格分類論を引用して、内部指向型をパイオニア・ワーク型、他人指向型を正反対のみんなが登るからタイプ、伝統指向型を根強く残る信仰登山とに分けている。

次いでだが支部会員であった故千坂正郎氏は雑誌「岳人」誌上で『情念の山・理念の山』という題名で長く連載していた。氏は、宗教的登山を情念の山、近代登山を理念の山と分類し、其々の立場から日本の登山論を具体的に取り上げていた。

内部指向型に属する登山はシッポが残り、ごく一部の先鋭的なクライマーによるアルパインスタイルに引き継がれているといえる。

一方他人指向型は既成の登山者を巻き込み、深田百名山に後押しされ一大ブームを巻き起こし、ツアーなどによるアリの行列現象を生み出し、一点集中化の弊害が深刻な状況を来たし、日本人の没個性的な登山を改めて考えさせられる。山は星の数ほどあり花、樹木、渓流、野鳥、渓流、展望…探せば自分の肌に感じる山、居場所はいくらでも見つかるだろう。

かくて近代的アルピニズムは死滅、本多氏の予測した冒険、創造的登山に無縁のルールによるスポーツ、トレランやフリークライムに変転し、フリークライムは次々回のオリンピックの競技種目に取り上げられるまでに至っている。

さてここでパイオニア・ワークの残照のなかで登り続けてきた一個人の足跡を記してみたい。

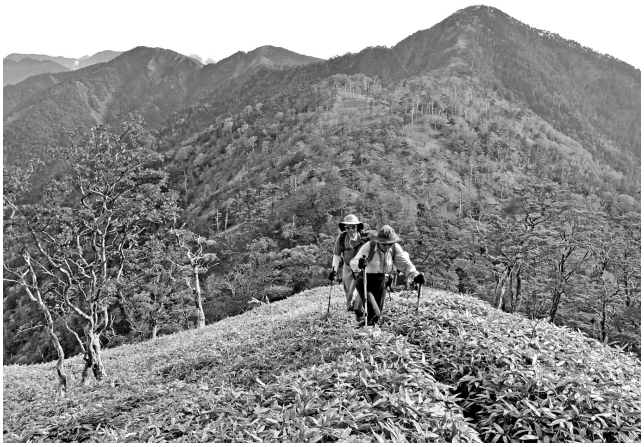
町の山岳会を脱会して岩登り静岡登攀クラブを創立したのが１９６５年24歳の時であった。新旧会員の保守革新の対立が直接の原因であった。

この年三大北壁の一つマッターホルン北壁が吉野満彦と渡部恒明によって登られ、ヨーロッパ・アルプス岩壁登攀の幕が開けた。その前年には８０００ｍ峰最後のシシャパンマが初登され、８０００ｍ峰黄金時代は終焉、７０００ｍ峰シルバー時代、バリエーション、鉄の時代に入っていた。

クラブ創立以降、文字通り岩壁登攀に集中し厳冬期連続登攀、厳冬期岩壁開拓など、来るべきヒマラヤにヨーロッパ・アルプスに向かって実績を積み上げ、県内のクライマーを集め「ヒマラヤ・ソサイテークラブ」を創設。

１９７１年ヒンズークシューのサラグラール（７３００ｍ）の西壁を目標に挙げた。情報は４年前に南峰を初登頂した一橋大の報告書のみ。アイガーの倍の岩壁、今世紀での登攀は不可能と記されていた。７０００ｍの高度でのボルト打ちは可能か、フィックスザイルの数量、岩壁上での天幕のスペースは、高所シェルパ無しの自力の荷揚げ等難題は解けぬまま、ぶっつけ本番の登山であった。３８００ｍにベースキャンプを設営し、15日間岩壁にへばりつきルートを延ばし、苦闘の末岩壁を突破、南西峰に初登頂した。アルピニズムに燃えた時代であった。

その後ファミリー登山を挟んで故郷の南アルプスに回帰。雄々しき原始性の濃い山域に魅せられた。一切の生物を拒否した無彩色の岩壁から生命溢れる緑豊潤な原生林へ、道なき道を巡り登った。ここには神秘が残り沈黙が潜む。未知未開の世界にささやかだがパイオニア・スピリッツの声が聞こえた。



深南部・丸盆岳への登り

思えばガイドブックも地形図にコースも入っていない、人影もない、安倍奥の山を戦々恐々として登った15歳の初登山が新鮮に蘇る。

今、半生業として山岳ガイドをしている。紀行ガイド本を出版した。背反行為の声も聞こえる。自己弁護に過ぎないだろうが、様々な山があり、様々な登り方があることを知っていただくだけでもと思う。そして自らが山を探し、自らが登る、個性と自立、創造的山登りの快楽を少しでも味わっていただければと思うのだが……

## 『プロからの一言』

（JMGA山岳ガイド）小川　正育

8月26日夜、静岡岳人のみならず〝深南部〟では全国岳人から畏敬の念の対象・永野先輩から電話《プロの一言》という題目で寄稿してほしい。名誉なことであるだけに断る由も無いが、会員番号も若く若輩域にある小生など…と一瞬たじろいた、しかし、綴らせていただく厚顔を、まずお詫びしたい。

私は2000年に山岳ガイド資格を拝受した。止むに止まれぬ人生の選択であった。当時の境遇にまず感謝したい。

そのとき浜松に来て20年、当初より親しくさせていただいた岳友F氏《私も馬力型であったが、彼のリードで池口南沢～リンチョウ沢へ踏み入ったときに（こんなお化けもいたのか）と正直脱帽した。その彼が「小川、日本山岳会にも入っておいたほうがいいよ」とアドバイスを呉れ今日に至っている。（彼にはガイド資格取得を促し県西部で第2号となる）それから以降、含蓄に富んだJAC先輩諸氏との交流には改めて感謝したい。

さて「プロの一言」といっても趣くところは多岐に亘る。ひとつに山岳行動（登山記録）か？また培った登山観・思考等（登山観）か？しかし、百戦練磨の先輩諸兄には学ぶことのみでおこがましい限りである、ならば何を！

現在の山岳ガイド業をしての〝プロ〟を感じる時は如何なるときか！を述べてみたい。

2000年に山岳ガイド業を始動した。即ち対価をいただいて登山をするのだ。当初は個人山行の延長でどんな状況（超荒天を除き）でも歩を進めた。

〝これも山です〟という粗野な示唆の基に当方とすれば悪条件下の登山を経験するのはプラス足らん、と信じて止まなかった。また小屋では飲酒、帰りのバス（当初E鉄道の登山ツアーを監修させていただいた。好評で6年も続いた）は狭い視野の山岳知見とウイットに富んだ会話で〝寝かせないガイド（お客様評）として評判だったとか！？

そんな中2つの出来事が私にパンチを

食らわしてくれた。

ひとつは記念すべきE鉄道ツアー初回２００１年10月の妙高山、やっとの思いで黒沢池ヒュッテへ、40名のお客様６名のサポートガイド（岳友）と共に、コースタイムの倍近くをかけ、やっとで到着した。早速宴会場の２階から男性のお客様が『ガイドが騒いでどうするだ！』と一括を呉れた。

それから３年後槍ヶ岳を新穂高から入る。南沢増水で引き返し、これもお客様から『代案は決めておくべきだ！』ガツーン…みな正論である。救いは当時小川の耳そして心に受け入れて反省する素地があったということだ。プロのプの字もわかっていなかったころのお話です。でも正直それからも成長は鈍いのが現実です、お恥ずかしい…

それから幾年、現在日本山岳ガイド協会・山岳ガイドとして15年が過ぎんとしている。

手掛けた山行は１０００回余、山行レポートは１１００号を数える。大きな事故も無くの歩みだ。これはひとえに私たちの安全登山鉄則遵守もあろうが、地域密着ガイドとして幣塾（屋号を山晴塾といいます）支えてくれるお客（仲間と呼ばさせていただいています）の皆様が安全登山を励行して下さった結果だ。改めて心から感謝したい。

さて核心部、私がプロを意識するのは次のくだりである、即ち対価をいただく時だ。対価は何に対してか！即安全登山＝安全下山への保証料なのだ、だから絶対事故は起こさない、起こせない。

起こさないための鉄則、顧客を過大評価しない。少しでも危険な箇所では声を出し注意を促す、安全具を施す、そんな中、もう１００回も共に歩いて下さっている顧客だから、と遠慮が生じればおしまいだ。集中！これだけだ。勿論最初から最後まで緊張という意味ではない。むしろ結果として楽しかった、素晴らしかった思いを提供するのが使命だから…。

ある事例をひとつ『10年も前の６月下旬利尻岳９合目で引き返した。』（好天ならば山頂まで10数分）一方強行したA旅行社、避難小屋で下山待機中降りてきた５人顔面血だらけだった。（強風で飛ばされ石ころ上の岩盤を滑る）お金を戴いている以上無事下山が大前提なのだ。また先行き行動に不安を与えることはプロとして許されない。そしてそれは誰に律するべきか、間違いなく引率ガイド自身に言い聞かせる事柄なのだ。その意味に於いて人の目にどう映っているか（よく見られたい）の深層心理、その煩悩を脱皮できたとき！はじめてプロガイドの入口に立てたと言えるだろうと回想する。

技術的に卓越したものを持つ、修羅場において動じることのない心を持つ、これもプロの最低必須の条件として上げるならば、…小川に代入してみよう。技術は最新が遠くなり、駆使する体力も減退気味なるも、補足して有り余る修羅場に動じない精神！これは若年時から如何に修羅場をくぐってきたかに尽きるだろう。痛い目を伴ってこの心身への記憶は歳を重ねても消されることもない。

数々の墜落転落の果ての今がそう訴えている。

対価を戴いてのプロガイド業も先が見えている。今後店を閉じても山岳に対する安全マニュアルは普遍のものと信じたい。われわれジイジは『用心過ぎるに越したことはない』を声高に謳いながらこれからも仲間と共に、また時には一人で山に向かいたい。

# 《文珠山荘》報告

## 静岡支部への管理委託について

『文珠山荘』については、前号77号に支部長が書いているので参照されたい。

静岡の市街地から北に二つのこぶがあります。それは薬師岳（1051m）と文珠岳（1041m）で、合わせて竜爪山と呼び、市民に親しまれています。特に文珠岳は一等三角点の山として市民のみならず県民にも広く知られています。

文珠山荘はその文殊岳の南西麓に位置しています。

今回当支部がこの山荘を引き継ぐに当たり、この山荘を苦労して建てた荻野恭一翁のその熱意に触れ、山荘を引き継ぐことの意義を充分に認識したいと思います。

今後この立派な山荘を当支部で有意義に活用して行こうではありませんか。

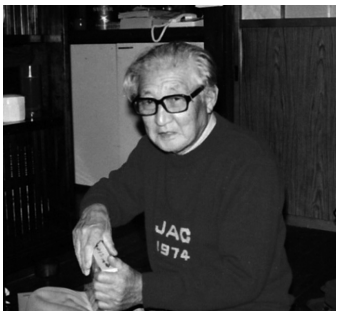
お2人の方に投稿を戴きました。建設中の（遅々として進まない）山小屋を時に声をかけて語り合い、現場を観察し続けていた小柳清人氏と、父の手元で9年間、黙々と作業を手伝い続ける兄の姿を見続けていた池上雅子さんです。

文珠山荘運営委員会・諏訪部記

# 《山荘建設の頃》

## 大先輩　荻野老との出会い

小柳　清人



荻野恭一翁　102歳

私は家が油山にあり、目の前にある山が竜爪山なので、トレーニングに自宅から登るのですが、ルートは西側だけでも、いろいろあって、その一つが中平からになります。

茶畑の舗装道路を400mまで登ると、この文珠山荘になり、急ぎの場合は、ここまで車で来て、山頂を往復しますが、ここが東海道自然歩道になります。

今から20年程前に、伐採の済んだ空地に、ログハウスを造り始めた人が、毎日木の皮を剥し、仮組場所で四角に組んでは一段出来るとばらして下の一段を本建築の基礎の上に移動するという、丁寧

で、気の遠くなるような作業を始めました。それを竜爪登山の途中に眺めては一服させて貰いました。

月に1～2度登るのですが。この間一段程度の進行で、5年経っても家の形にはならず、実に辛抱強い人だと登山の帰りに立ち寄り、ついつい山の話をするようになりました。

道具は鋸とグラインダー位で、丸太の下面に雨が入らないように刻みを作り、太さが違う丸太を交互にして、水平を保てる様に気を使うので、二段出来るとばらして下の一段を本建築に移動する。

この人が誰あろう荻野恭一さんでした。丸太を本建築に移動する時は、二人で運ぶので、ご長男の士郎さんが手伝い、平日は恭一老が一人コツコツと仮組場所で刻んでいました。

『何百年も持つ家を作るのだ』と言うのが口癖でした。材料の桧は彼が学生の時植えた思い出の林で、南アルプスが見える地（当時は周りの樹が小さくて）に、長らく観察して水の枯れない沢を見つけ、延々とホースで水を引き、『水は文珠の水、山荘は文珠山荘』と決めて、話は遠大な話でした。でも…何分にもご老体、完成までの健康は?との心配ももの皮、9年をかけて完成し、それから現在まで一人で山荘に居住し、愛犬太郎と富士桜に囲まれ、悠々自適の生活をされ、どう見ても『仙人』の如き風情でした。

完成後には、自慢の暖炉に火を入れ、若き日の自宅からすべて歩いた赤石岳の山行の話や、日本山岳会の古い友人の話など聞かせて貰い、彼のお勧めで、私は女房と二人、夫婦会員として入会が叶い、一緒に東京まで晩餐会に行ったり、安倍奥の八紘嶺に登山したり、沢山の思い出があります。

この度この山荘が、日本山岳会に任され、皆さんの憩いの場になる様ですが、その直前に、ご長男の士郎さんが、急逝され、建設の片腕を失って、荻野老も、落胆されないか心配です。どうかこれからも皆様が集まったら、荻野仙人の話がそこで聞けるように、願ってやみません。

以上

# 兄を思う

―兄はとても几帳面な人でした―

池上　雅子

父はそれが許せなかったようだった。ログハウス作りでも、正にその通りだったのです。

早く作りたい父。しかし兄は、水平儀で測り、納得するまで木を刻み、仕事を進める全くのマイペース。

そこで父が私に「士郎はどうしてあんなに仕事が丁寧なのだ。もっと早くできないか…」と言うのです。

そこで私が兄の所へ行き、「お父さんが急ぐように言っているよ。お父さんが急ぐ気持ちも理解できるよね」兄は「でもな…」と笑っている。その繰り返しでした。

その兄の丁寧な仕事のお陰で、どんな大きな台風が来てもびくともしない、気密性に富んだログハウスが出来上がりました。

今回、そのログハウスを日本山岳会静岡支部の皆さんに使っていただける、ことになりました。

兄は、母親にそれは大切に育てられたのだと思います。今年に入ってから兄は私に、母親のことを懐かしそうに話すようになっていました。その時私は兄の心の中を推し測ることはできずにいたけれど、多分兄の心の中は、母親のことで満たされていたのだと思うのです。

そんな兄を、今思えば母親が「士郎、もうお母さんの傍へおいで…」と、呼んでいたのではないかとさえ思えるのです。

母親は最初の男の子である兄を、それは慈しみ育てたのだとおもいます。微笑ましい母と子の姿が目に浮かびます。

兄は、多くの想い出を胸に、自分の思いを込めて作ったログハウスを残し、母親のもとへ旅立ちました。

ご子息の士郎さんは今年7月に病没されました。文珠山荘を静岡支部が引き継ぐことを見届け、安堵したかのようなご逝去でした。

ご冥福をこころよりお祈りいたします。

文殊山荘運営委員一同

## 報告・エッセイ

# 《ネパール地震報告》

實川　欣伸

エベレスト遠征に際し高所順応のロブチェイーストに登頂、5月23日BCに到着。2日目の25日、60度の皮膚炎の女性がヘリでカトマンズの病院へ搬送されるのを見送りテントで昼食を待っていた。眩暈なのか台地が大きく揺れている。3度目位にドンと爆弾の様な音がして雪崩だと思いカメラを手に外を見ると爆風が勢いよく迫ってくる。やられると思いテントの中で爆風側に尻を向け四つん這いになり、埋もれても何時間か生き延びられるよう空気層確保、瞬時に風圧が尻を何度か叩き付け静かになる。外に出ると晴れていた空が一瞬で曇天になり、登山の安全を祈願する多くのプジャの飾りつ

けの旗やテントが潰れパイプが突き出て無残な状態で見渡す限りBCは壊滅状態だ。高所靴、シュラフ、食糧、衣服などあらゆる登山装備品が50m前後飛散している。仲間の女性が飛ばされ腰を痛め。シェルパが手と足を怪我した。我々の後ろの隊が日本人1人を含む18人が犠牲になった。

ＢＣキャンプの雪崩現場

現地の情報は入らず、衛星電話で日本からの情報に頼る。二千人以上が亡くなり、川や街には死体が散乱し混乱状態だ。

今年のBCは雪が多く寒く体調を崩す者も多く3日目に100m程下のゴラクシェフの山小屋に移動、更に3日滞在してルクラに下山開始、倒壊した建物はなかったが屋根や壁が崩れ落ちエベレスト街道も落石で崩れている箇所の何か所かあり100m以上登山道が消えていたが迂回路が出来ていた。

ルクラの街は被害がないようだった。空港も無事で大きな混乱もなく、カトマンズに着く、ホテル迄の街の様子も人や車の流れも平静だ。我々は翌日、帰国の為、シェルパと食事会をしに焼肉店に向かい裏通りに入ると、3階のビルが跡形もなく片付けられ、多くの犠牲者に慰霊の火が灯されている。街のいたる辻にも多くの人が祈りを捧げている。災害の為か昨年とは打って変わり街全体が薄暗い。路地裏では酒に酔った男が大きな声で泣き叫んでいた。被害の苦しみに耐えられないのだろう。

翌日、ツアー会社の大津さんのところへ行くと、2年続けて残念だな…しかし無事でよかった。近隣の街の救援活動は出来ていない。外国のヘリが救援活動に来ているが空港の有る地域でないと活動地域の把握が出来ない。陸路の土砂崩れで道路が寸断されている。ランタン村も壊滅状態だとその他多くの村が消えたと近隣の村の死者、200名程の名簿を見せてくれた。

こういう情報が日を追うごとに多くなると、いま被害者が一番困るのは水源が損壊して飲料水が不足していること、支援を行うなら水源の復旧を最初にやるべきこと、又支援金は間違いなく被害者に渡る確かな団体に渡さなければならず、一番難しい問題だと言うことが分る。そこに見えたジャイカの職員にも、日本が遣らなければならない事は水源の復旧と支援金を渡す確実な機関の選択だね…と伝える。

その彼らから、私の帰り際に、エベレスト登頂祝いに取って置いたと吟醸酒『富士山』を頂き、サーダーの自宅で私の遠征がネパールの支援になればと再会を誓って　乾杯！

# 山内真行さんの思い出

榛葉　華子

6月14日文珠山荘で有元さんから、平成19年秋の「支部懇親山行、富幕山」の懐かしい写真を戴きました。その時の幹事が山内さんでした。その折、古刹「奥山半僧坊方広寺」に宿泊、早朝座禅を体験したことが先ず思い出されました。

解散後、同行した会友の山崎郁郎さんを、山内さんと浜松駅にお送りする際に、山崎さんのお住まいに遊びに来るよう、お誘いを戴きました。思いがけない北軽井沢の別荘へのお誘いに、是非お尋ねしたいとご返事したまま、山内さんは翌年の平成20年7月6日に61歳で旅立たれてしまいました。

山内さんとの初めての山行は、平成3年龍山村（現、浜松市）の白倉山、橿山でした。山行の後、大阪の宇都木慎一さん（山内さんの友人であり、私のJAC入会紹介者）の三人で秋葉山に寄り、山内さんの別の一面を知ったのも懐かしい思い出となりました。

また、山内さんはJAC百周年記念の中央分水嶺調査で大弛峠から甲武信岳の支部責任者として参加されました。当日は大変暑い日で、暑さに弱い私はへとへとでしたが、山内さんは本部の方たちと、甲武信岳から大弛峠へ元気に戻って行かれました。

甲武信小屋に残った私たちは、昨日とは打って変わった雨の中を、照内さんの先導で大弛小屋に向いました。大弛小屋では山内さんが暖かいお素麺を作って、私たちを迎えてくれました。冷えた体に暖かいお素麺は何よりの嬉しいご馳走でした。山内さんの優しい心遣いが懐かしく思い出されます。

一番の思い出は、平成17年4月山内さんのお誘いを受けて七面山へ登ったことです。私には38年前に七面山から八紘嶺まで縦走して以来の懐かしい山です。其の時は、お彼岸で太鼓を叩きながら登ってくる白装束の信者の方で賑やかでしたが、今回は平日とあって敬慎院の宿泊者は信者の方が3名と山内さんと私の5名だけでした。

若いお坊様の勧めもあって本堂でのお勤めに参加しました。百畳以上の広い本堂に私達5名がポツンと坐り、壇上にはお坊様が5名と大太鼓を打つ寺男さんが2名、大太鼓にリズミカルに響き合う日蓮宗の読経を間近に聴くという、貴重な体験を致しました。

翌朝は随身門前から美しい富士山とご来光を拝むことが出来ました。朝のお勤めも体験し7時に七面山に向かい、8時雪が膝下まで有る七面山山頂に着きました。快晴の素晴しい大展望でした。

白銀に輝く北岳、間の岳、農鳥岳、銀嶺の山々が美しく連なり感動の大展望を楽しみました。持参したワインを美味しそうに飲んでいた山内さんの姿が今も目に浮かびます。

山内さんが旅立たれて早や7年を迎えます。懐かしい山歩きに山内さんを偲び、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

シリーズ「恐怖の体験」―第13話―

# 山小屋での失火

大島　康弘

この歳になると恐怖の体験はかなりの数に上る。自分では気づかず危険に遭遇していたケースまで入れると、今こうして生きながらえていること自体が不思議なほど、幸運に恵まれたと思えて来る。私は生来、慎重に事を運ぶには少し集中力が足りないので、失敗は数知れない。これから披露する失敗談は失笑を買うばかりなので、今まで人に話したことはなかった。

さて、前置きはこれくらいにして本題に入ります。

今から41年前の１９７４年９月29歳の時の出来事である。連休を利用して会社の友人を誘って北アルプス、裏銀座から表銀座を縦走した。初日、蔦温泉から歩き始めた。当時は高瀬川にロックフィルダム建設の真っただ中で、濁小屋辺りは巨大なダンプが数十台、荒涼とした谷の中を行きつ戻りつしている様はさながら別世界に入り込んだ気分であった。濁沢を遡り、雨の中を昼過ぎ烏帽子小屋に入った。当時は無人小屋だったような気がする。夕食を済ませ天気も落ち着いていたので烏帽子岳を往復し、小屋に一泊した。

その翌朝のことである。コッフェルの残りご飯に水を加え、２つ目のコッフェルに味噌汁用の水を注ぎホエーブスに火をつけた。直ぐに湯気が上がり、ずいぶん早く沸騰するなと思った瞬間、コッフェルが火を噴き炎は天井に達し、暗い部屋が真昼のように明るくなった。一瞬、何が起きたのか理解できなかったが、とっさに小屋を火事にするより手のやけどの方がましだと判断し、燃え上がるコッフェルの縁を素手で掴み表に飛び出し、空き地にぶちまけた。一瞬、空き地は火の海になったが火が消えてほっとする間もなく、今度はご飯の入ったコッフェルが火を噴いた。同じように燃え盛るコッフェルの縁を掴み外へ、２つ目も地面にぶちまけたかどうかは記憶にないが、事が済んだとき、膝の震えが止まらなかった。水とガソリンを間違えたのだ。私たちの他には誰もいなかったので咎められることはなかったが、惨めな失態にいたたまれない思いで逃げるように小屋を後にした。

燃え盛る鍋を素手で持ったにも拘わらず、手指のやけどは大したことはなく、その後の行動に支障は全くなかった。

どうしてこんな間違いをしでかしたのか？

前の晩、白ガソリンのポリタンクと同じサイズのポリタンクの水筒を壁際に並べて置いた。翌朝はその秋一番の冷え込みとなり、登山道の脇には今まで見たこともない巨大な霜柱が立つほどであった。まだ覚めやらぬ頭と寒さでマヒした嗅覚のせいで、水とガソリンを識別できなかったのだ。

あの出来事は今でも思い出す度に身が縮む。もし、天井に火が移っていたら…。もし、コッフェルを持つことができなかったら…。29歳の若者に焼けた小屋の再建は一生かかっても無理だろう。

あの時、私は紙一重で幸運にも危機を脱した。思えば、そんなことの繰り返しで、たまたま今日がある。生きて来たのではない。まさにご縁を戴いて今まで生かされてきたのだと、歳を重ねたこの頃、心底思うようになった。

## ＊連載『恐怖の体験』と『山への想い』の再開について

『恐怖の体験』は『不盡』52号（２００２年秋）から62号（２００７年春）に亘って12回連載しました。その後、会員個人の山人生を綴る『山への想い』と題した随想を67号（２０１０年夏）から72号（２０１２年秋）にかけて10人の方に語って戴きました。

連載が中断したのは一重に当時編集係を担当していた私の怠慢によるもので、連載を楽しみにされていた方には改めてお詫びします。

今年から新たに会報編集委員会が発足し、再度、『恐怖の体験』と『山への想い』連載再開する運びとなりました。支部会員の山への想いや恐怖の体験は山との向き合い方を考える上で参考になるだろうし、読み物としても面白いのではないかと思います。

将来、この連載を一冊にまとめて出版したいと会報編集委員会では考えています。皆さんの活発な投稿をお願いします。

## 会務報告

5月24日　大光山　下見　会員5名
5月25日　会報編集会議　チロル
5月31日　第二回ハイキングセミナー　大光山　受講者13名　会員4名
6月10日　二水会（定例会）労政会館
6月14日～15日　文珠山荘清掃　山の日実行委員会　県山岳4団体
6月23日　於「来てこ」公益事業委員会　会報編集会議　於　チロル
6月26日　会報編集会議
6月29日　『不盡』78号の編集方針
7月8日　二水会　労政会館
7月18日～19日会員山行　白根三山　6名
8月19日　納涼懇親会　センチュリー静岡　出席26名
8月24日　会報編集会議　チロル
9月1日　支部役員会　於「とんき」
9月9日　二水会　労政会館
9月24日　公益事業委員会　労政会館
9月26日～27日　支部合同会議　大島・木村
9月3日　山の日実行委員会　県山岳4団体
10月3～4日　会員山行　蝶・常念岳　4名
10月14日　二水会　労政会館
10月24～25日　会員山行黒法師岳　6名
10月26日　会報編集会議　チロル
10月28日　山の日実行委員会　県山岳4団体
10月31日～11月1日　文珠山荘清掃　映画会（劔岳点の記）

## 会員山行

### 2015年7月18～19日　雨と風の白峰三山縦走

荻野　俊夫

私の山登りも晩年期に入りつつあり、2～3年前から古い記憶を辿りよせるように思い出のコースや、過去に歩いたのだが全く憶えていないようなコースを歩く山行が多くなった。白峰三山縦走もそんなコースの一つで、今期の山行委員会の計画に挙げられていたので参加の申し込みをした。

期日近くなり山行計画書が送られてきた。参加者は6名。入会以来、会合や会山行に参加していないので知らない人ばかり。しかも自分を除く平均年齢は45歳と若い。会の構成から60歳くらいを想定していたが見事外れた。「大丈夫かなぁ」という一抹の不安。もう一つの気がかりは台風11号で、このところぐずつき気味の天気が続いているということだ。

1日目、広河原6時30分発～二俣9時着～肩ノ小屋12時5分着

前夜は身延の道の駅で仮眠。翌朝奈良田から始発バスで広河原へ。連休初日の

広河原は北沢峠に向う人もありごった返していた。そんななか準備をして出発。これから向かう北岳山頂は深いガスを纏っていた。

大樺沢沿いの山道に列をなして登山者が続く。崩壊地回避ルートの途中から雨が降り始めた。「サンディー毎日」の我が身にとって雨の山行は避けていたので雨具を着るのは久しぶりだ。この先の橋では少し渋滞気味だったが二俣に近づくにつれ各パーティーそれぞれが休みを取るのか疎らになってきた。二俣で我々はお花畑を目指して右俣に入る。山道は急になる。ゆっくりとしたペースで進んだ。

一登りするとお花畑。シカの食害除けの柵があり、キンポウゲの黄色が目立つ。諏訪部Lの花の説明も雨が降り続いているのでゆっくりとはできない。稜線に出ると予想通りの強い風。ガスで視界が利かない中肩ノ小屋に着いた。テント泊の予定を条件が悪いので小屋素泊まりにする。自炊の夕食は豪勢な本格的こだわりのソースかつ丼に舌鼓。

2日目、肩ノ小屋4時30分発～北岳5時15分着～間ノ岳9時着～農鳥岳12時10分着～大門沢小屋16時20分着

予定では3時半に出発し、頂上でご来光というものだったが、雨とガスでとてもとてもという状況。1時間遅らせて出発。雨とガスは相変わらずだが、もうヘッドランプは不要だった。北岳山頂は残念ながら雨とガス。それでも何人かの登山者がいた。早々に山頂を後に北岳山荘に向う。山荘の裏で雨風をしのいで一息ついた後、いよいよ縦走。中白根に向うあたりから明るくなる兆し。富士山も一瞬顔を出した。見慣れているとは言えやっぱり富士山には注目。中白根山頂では周りの山が見渡せるほどの天気になったが間ノ岳では再び雨と風とガス。下るにつれ再び視界が広がり、山稜の先に農鳥小屋が見下ろせるようになった。

小屋で少し長い休みをとる。旧知の小屋のオヤジは健在だ。このオヤジの悪い予想が当たって、しばらく登ると再び雨が降り始めた。急な登りが終わり、稜線を回り込むようになると風が強くなる。雨は降っているのだが下から吹き上げる風で地面は濡れていない。

農鳥岳に着けば風を避けられるので途中あまり休まず歩き続けた。農鳥岳からの下りは山稜の東側を歩くようになるので風は少し穏やかになる。この辺りは広々感もあり、高山植物は北岳周辺とは違う種類も多く、諏訪部Lや中村SLの説明に聞き耳を立てる余裕が出てくる。

大門沢下降点から膝の痛みで1名が遅れはじめ、パーティーは分断気味となった。そのあとのガタガタ下りで差はさらに広がり、前の3名とは差が広がる一方だ。河原に降り立った先で集結。3名はテントを持って先行。ゆっくり組は20分くらい遅れて大門沢小屋着。大門沢幕営地は狭いこともあり満杯だった。

夕食は2日目もこだわりの讃岐うどんでトッピング多種。今夜も本格派だ。夜は山の歌。昔と変わらないスタイルでの打ち上げだ。

3日目　小屋5時発～奈良田9時45分着

明け方テントから出てみると谷間の狭い空は明るかった。台風は中国地方から日本海に抜けたようだ。暑い夏の日が戻ってきた。チョット気を使って渡った壊れた木橋や飛び石の渡渉はあったものの最終日の気楽さからのんびりと下った。奈良田では、温泉で汗を流した後、山岳写真館と民俗資料館に寄る。そして身延往還、赤沢宿のそばを食して帰路に

着いた。

天候には恵まれなかったが久しぶりのパーティー山行。年齢差もあまり感じなく楽しい山行であった。

L諏訪部、SL中村、勝又、荻野、会員外2名

## 第二回　会員山行報告

有元　利通

5月24日（日）大光山

第二回ハイキングセミナーの下見を兼ねて安倍奥の大光山へ行った。静岡駅北口と新静岡IC入口のローソンを集合場所にしたが静岡駅北口には誰も来ず参加者は全員新静岡のローソンの方だった。事前に把握しておく必要があった。

ローソン前を出発してほぼ予定の8時半に草木の登山口に着いた。途中の造林小屋辺りまでは予想通り蛭のお出ましで靴に付く蛭を落としながら登った。

朝曇り空であったが稜線に出る頃晴れてきた。11時半頃、大光山三角点ピークに着いた。時間が早いので奥大光山まで行くことにした。12時前に奥大光山について昼食とした。勝又千華さんが作ったロールケーキを全員御馳走になった。1時前に山頂を後にして下った途中稜線から南アの主脈が一部見えた。3時過ぎ登山口へ下山した。市営「新田温泉黄金の湯へ移動して入湯してさっぱりしてから帰途についた。

参加者　諏訪部豊、小笠原誠、中村博和、勝又千華、有元利通

## 新入会員の自己紹介

泉脇　修司（15483）

私は、主に富士登山ばかりですが、その経緯をお話ししたいと思います。

ありがちな話だと思いますが、小学生の頃、両親と一緒に登った金時山から見えた、富士山に憧れを抱く様になり、いつか登りたいと思いました。しかし機会が無く、時間が過ぎました。

30歳目前になり、職場の同僚と富士山に登る事になり、それが初登頂となりました。以後登山の楽しさを覚え、翌年の富士吉田の一合目からの登山で歴史や信仰の奥深さを知り、富士山の虜になりました。

登る事は勿論ですが、古地図や書物を収集したりする等、現在に至っています。もっと視野を広めたいと思い入会しました。

技術や経験ともに、乏しいですが、皆様ご指導のほど、宜しくお願いします。

三ツ井　孝（15495）

私の先輩から日本山岳会静岡支部の入会を誘われました。

今までは、どちらかと言うと個人山行が主体で登山を楽しんでいましたが、これからは個人での山行が家族、周りの人達に迷惑と心配を掛けることになると考えると、是非この機会に入会をと考えました。

会員構成も同年輩の方達も多くおり、月例の定例会等が開催されているとの事で、色々な情報も静岡支部のみでなく全国組織も魅力がありました。

今回新人として入会出来ましたのも緒先輩のお蔭です。今後は、支部等の山行計画に都合の付く限り参加させてもらい、健康で動ける限り、安全に登山を楽しみたいと思っています。又、月例会や懇親会にも参加して緒先輩との交流も楽しみです。

最後に、毎年高齢者の遭難事故が多発しているのがとても残念でなりません。

西川　卯一（15613）

富士山表口登山ガイド組合に参加し、日本山岳会へお誘いをいただき入会いたしました。2007年に富士山専門店を麓の富士市吉原に開業、富士山表口村山口登山道と富士山村山修験道の復興を支援しながら登山ガイドをしております。本山修験宗聖護院准先達として葛城修行・大峰修行・富士山峯入り修行などに参加しておりしますが、一般的な登山知識に欠けているため山岳会の活動を通して山の常識を学んでいきたいです。

今年の修行では大峰奥駈け道を5日間で250km、続けて富士山を海から3日間で50kmの山行となり、修験の行場を巡りながら大変良い経験をさせていただきました。今後ともよろしくお願い致します。

寺田　忠史（15661）

1955年生、男性です。幼少より自然が大好きで、磐田南高山岳部、金沢大学医学部山岳部、金沢大学十全山岳会に在籍していましたが、今は日本山岳会のみです。

南アルプス、北アルプスの縦走、剣岳の各ルート、冬季八ヶ岳、冬季白山などが主な山行です。

好きな山は剣岳・甲斐駒ケ岳。印象に残る山行は、冬季白山、冬季剣岳小窓尾根・本峰・早月尾根です。大学卒業後仕事で忙しく、山には全くいけませんでしたが、この2、3年還暦を前に山恋ができました。体が動かないのですが、海外のトレッキング希望で、是非チョクトイ氷河、チャラクサ谷、トランゴ周辺、K2北面、ルース氷河、パタゴニアに行ってみたいです。

趣味はオペラ鑑賞、医学研究、海外山岳文献渉猟です。宜しくお願いします。

高野　啓一（15605）

小生は山登を始めて四年目の若輩者です。定年後に再就職した会社の契約延長の誘いを断り、健康のためにと準備を進めていた山登のために完全リタイアした。

ところが一年経ったとき初期の前立腺がんが見つかった。病気のことより計画していた山行を中止するのが悔しいこと、この病気の経験をした元気な仲間達の心強いアドバイスもあり、一年の手術の執行猶予をもらい今年三月に全摘出の手術を受ける。治癒に半年位と云われた手術の後遺症も殆どなく、術後一か月目から山登りを開始した。術後現在までに

四十五日も山に行ってこられたのは、また山のお蔭であったと思う。
強い気力と健康な身体を保持し、多くの仲間と共に山登を続けて行きたいものである。

## 富士山６００登

有元　利通

昨年、２０１４年７月12日に５００登を達成して10月29日に５５０登まで行っていた。今年50登で６００登になる予定だった。
今年は雪が少なくて５月に稼げた。因みに昨年は５月は25日と31日の２登のみだった。
今年は17日の登頂から29日まで７だった。内、28日は１日２登だった。それと、今年は４月の総会で事務局を降りたのも大きかったかも知れない。
６月は２日から30日までに17登。７月は２日から30日まで18登で10日は２登だった。10日から15日まで６日間で７登やったがこれが良くなかった。一昨年のチョモランマＢＣトレックの時罹患した肺水腫の後遺症だ。あのとき、帰国して10日間入院した後、退院するときドクターから「これからは２５００ｍ以上の高度には登らない方が良ですよ。」と言われていたのを、それから富士山だけで１４７登していた。
前年ガイド登山で９合に泊まったときなど結構咳が出て.ちっと胸が苦しい感じがしていたのだが、それが毎日の連続をやっているうちに９合くらいで咳が出ていたのが８合、元祖７合辺りでも出、更にもっと下でも出るようになり、足も大分むくむようになったので心配になった。それでちょっと富士山は休んで近所の内科医にかかったりした。心電図、血液検査などの検査をしても問題は無かった。６日間休んだ。
22日から再開して登りだした。肺水腫で入院していた市立病院呼吸器内科にその後も３ヶ月毎定期的にかかっていてちょうどその頃、３ヶ月目が来てかかって事情を話してレントゲンを撮ると１年前の写真より心臓の影が少し拡大しているように見える。循環器の方の検査をしてみましょうということになって１ヶ月後に循環器の検査と呼吸器内科の診察が入った。７月休んだ後、連続は止めて７回登った。５９２登になっていた。本当は７月に６００登のつもりであったが無理であった。
８月は１日から登っていて、９日（日）に６００登にして、ガイドの話が３、４度あったが体のことと６００登の日程を理由に断った。
９日は今年１３００登を達成した佐々木さんが一緒に登ってくれて、山頂では地元の臼井健太君が待っていてくれた。二人に横断幕の内に入ってもらって奥宮前で写真を撮り、剣ヶ峰に移動して二人に横断幕を持ってもらって撮影した。有り難かった。新６合の宝永山荘に下りると前支部長の久保田さんの松栄堂薬局、はなまる薬局の恒例の富士登山日と重なって一緒に生ビールで祝杯を挙げて祝ってもらった。岐阜支部の佐藤さんも一緒だった。
その後は11回、９月も11回、10月は30日まで18回登って10月30日現在６４０登まで来た。今年は年間最多登頂記録を更新中で現在90登、ひょっとすると

１００登行くかも知れません。まあ、来年７００登達成にはなるでしょう。

今年は、田子の浦の海岸０ｍからの「ゆっくり村山古道」（村山古道発掘の）畠堀さんと支部の西川君の主催するツアーに参加した。３月29日（日）に田子の浦から村山浅間神社まで歩いて、第二回の村山浅間から２合高鉢下、スカイライン横道までを６月21日に歩いた。第３回は８月３日（月）にスカイライン横道から新６合（旧４合）宝永山荘まで歩いて宝永山荘泊まりで翌日４日（月）に登頂して御殿場口へ下って宝永火口から宝永山荘に戻って新５合からバスで富士宮駅へ帰るものでした。

４日には参加の皆さんが登頂して御殿場口へ降りてくる間に時間があるので一度登頂して新５合に下り２登して、下りの御殿場口から宝永火口に入ったところで皆さんを抜いて先に宝永山荘に戻りました。

お陰で村山古道０ｍからも完歩できて幸いでした。

## 会員異動

（２０１５年11月１日現在）

**入会者**

勝又千華１５７０５
米沢正信１５７５５
橋本耕一１５８０８

## 編集後記

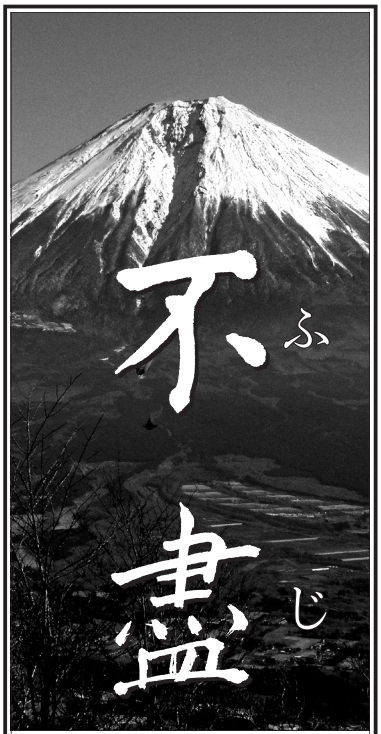
伊豆半島は首都圏から比較的近いが、交通機関のつながりが悪いせいか天城主峰群など一部の人気の山を除けば、静かな山登りが楽しめる。猿山は原始色の濃い山。今まで幾度となく登っているが、人っ子一人会ったことがない。先月久しぶりに訪ねてみた。七滝温泉から猿山―小僧山―旧天城峠を周回するコースは展望こそないがブナ林の美しさでは半島有数の山域である。人影もなく、聞こえるは梢を渡る風の音、野鳥の囀り、それに同行者の落ち葉を踏む音だけ、ブナの葉梢に降りそそぐ日の煌きがピアノ鍵盤を打つごとくに舞っていた。

山は静かがいい。静かであって欲しい。山が年々騒々しくなっていると思うのは私だけだろうか。熊どけ、熊どけ…と打ち鳴らす鈴の音に堪り兼ねて逆に熊に吠えられるかも知れぬ。

本号では「南アルプス登山史」「井川を南アルプスの登山基地に」が提案されている。前者は静岡県人のパイオニアの足跡を纏めるという貴重な山岳史編纂で支部の大仕事になるだろう。大いに期待したい。後者は県内のみならず県外の登山愛好家から交通機関の便の悪さが常々問題視されている。関係機関に提言するのも公益法人の役目であろう。井川地区の活性化や自然を学び楽しむエリアの拡充への道に繋がるものであろう。

永野　敏夫

発行責任者　大島　康弘
及び事務局　島田市東町一五八四
☎０５４-７０３６-３０５９
編集委員長　永野　敏夫
印刷所　株式会社　三創
静岡市駿河区中村町一六六－一
☎０５４-２８２-４０３１




題字・牧野衛　背景・永野敏夫

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2016（平成28）年春季
第79号

## 巻頭言

# 「南アルプス山岳史の編纂」に期待する

静岡支部長　大島康弘

先の支部会報『不盡』78号に会報編集委員、望月照夫さんが『南ア山岳史編纂の提言』と題して、南アルプス登山の先鞭をつけたお雇い外国人と、その後に続く日本のパイオニアたちの足跡を俯瞰し、何故、彼らの関心が北アルプスに偏ったのかを解説しています。そして、南アルプスについてはいまだに登山史もまとめられていない現状を憂えて、静岡支部で近代登山が始まる黎明期の南アルプス山岳史を編纂しようと呼びかけられました。折りしも、東京オリンピックが開催される２０２０年は、我が静岡支部が創立70周年を迎える年でもあります。それに合わせて編纂事業を完成することができれば、何よりの記念になります。

この編纂事業は会報編集委員会が是非、実現しようと2水会（月例会）の席で提案されました。南アルプスの登山史を編む―、果たして支部で可能だろうか。私自身はこの方面に疎いので大した手伝いはできませんが、望月さんのような志を持った方々が中心になれば静岡支部にはその力はあると確信しています。

## 目次

★巻頭言　静岡支部長　大島康弘　1
☆「南ア山岳史考」その1　望月照夫　2
☆「南アの開拓者」　小田直美　4
☆「自然観察紀行」　白鳥勝治　6
☆「遠州低山の魅力」　山口千恵子　8
★シリーズ
◆『山への想い』　聲高一枝　9
◆『恐怖の体験』　諏訪部豊　10
★会務報告　事務局　11～13
☆各事業部報告　☆会計報告
☆２０１６年度山行・集会一覧表
★会員山行
◆「雨のハンシーパン」　曽根芳樹　14
◆「黒法師岳」　湯山直文　15
◆「雪山・山スキー」　仙石智子　16
★新会員の自己紹介　長野和義　18
勝又千華　18
米沢正信　19
★トピックス　19
★会員異動　20
★編集後記　永野敏夫　20

当面は会報編集委員会に編集方針の確認や編纂委員の取りまとめをお願いすることになりますが、支部としてこの記念事業を成功に導くべく、皆様のご支援をどうぞ宜しくお願いします。

今から10年前のことですが、田中喜左衛門（１８７７～１９４３）肉筆の山行記録『寸又川』を長田義則会員が入手し、『不盡』59号に発表しています。

田中喜左衛門（1877～1943）
不盡59号より

喜左衛門は立山の案内人、宇治長次郎と地元の榎田雄作等を伴って、昭和３年の夏、11日かけて千頭から寸又川を遡り、光岳山頂を踏み、信濃俣河内を下り、大日峠を越えて帰洛の途に就きました。

実はこの話はエピソードⅡで、長田さんはこれに先立つ６年前に、支部発足50周年（２０００年）記念誌『不盡』に『寸又川遡行の田中喜左衛門』の一文を寄せています。この時はまだ喜左衛門自筆の『寸又川』の原稿の存在は知られていなかったのです。喜左衛門も南ア開拓者の一人かもしれません。

さて、喜左衛門の『寸又川』紀行のその３年後、我が支部の長老荻野恭一さん（１０２歳）が17歳の夏休み、友人２人と連れだって静岡市牛妻の自宅から徒歩で赤石岳、荒川岳を目指します。大日峠→椹島→赤石岳→荒川岳→椹島→所の沢乗越→雨畑→安倍峠→牛妻の長大コースをわずか７日で踏破しています。この時、小屋番がいる荒川小屋に一泊されています。南ア開拓者たちの入山から間もない昭和初期には、既に登山者受け入れ態勢が整っていることに驚きます。しかし、一方では喜左衛門は南アルプス南部の踏査に立山の案内人を連れて行かねばならぬほど、南アルプスでは案内人が育たなかった。

このあたりの事情も「南ア山岳史」が明らかにしてくれるでしょう。

## 「南ア山岳史考」その１
## 南アに踏跡を残した人たち

編集委員　望月　照夫

### 日本アルプスの命名者

日本アルプス（南アルプス等）の命名者は、いわゆるお雇い外国人のウィリアムガウラント（ゴーラント）とされます。ガウラントは明治政府が大阪造幣局に化学兼冶金技師としてイギリスから招いた技術屋さんです。我が国には16年間滞在し、１８８８年（明治21年）に帰国しました。優れた技術者であると同時に登山家としての功績のほか、古墳研究の先駆者としても有名で日本考古学の父とも称される人です。

それでは日本アルプスと命名される前はというと、南アルプスは赤石山脈、北アルプスは飛騨山脈と呼ばれていました。しかしこの呼称もさほど古くからではないようです。

平安時代前期に編纂された古今和歌集に、

「かひがねをさやにも見しが
けけれなく横ほりふせるさやの中山」

と詠まれた東歌があります。その「かひがね」が南アルプスなのです。京都ではそのように呼ばれていました。

歌の意味は、東海道筋から甲斐が根（峰）をしっかり見たいと思ったが（遠州）小夜の中山が心なくも横たわっているので良く見えなかったということです。

甲斐が根（峰）は、甲斐国の白峰という意味です。白峰は北岳のことを指すことが多いですが、この時見えた山は、北岳ではなく塩見岳と思われます。

また、甲斐国の白峰は、特定の山を指すのではなく雪をまとった山の総称とされることもあります。すると聖岳あたりの山だったかも知れません。

なお、鎌倉時代に編纂された新古今和歌集には

「君すまば甲斐の白嶺のおくなりと
　雪ふみわけてゆかざらめやは」

と詠まれていますが、この白嶺は雪をいだいた北岳、間ノ岳、農鳥岳あたり一帯の山を指しているとされます。

## 甲斐駒ケ岳信仰と北岳

それは差し置き、北岳の最初の登頂者は誰でルートはどこだったのでしょう。資料によれば、芦安村の修験者・名取直衛のようです。広河原から白根御池を経由したようです。明治４年のことです。

明治８年には、マサモリベンキチが北岳への登山道を開いたとされます。甲斐駒ケ岳信仰に関連しての登山道だったとも言われますが定かではありません。

甲斐駒ケ岳信仰は、甲府盆地から望める甲斐駒ケ岳を信仰の対象として根付きました。黒戸尾根の取り付き点である白州町（現北杜市）の横手集落と竹宇集落にはそれぞれ駒ケ岳神社があり登山口があります。二つの道は笹平で合流し以降は一本道となります。この両神社は前宮（里宮）に位置付けられ、山頂には奥宮（本宮）の祠があります。

神社境内の由緒書きによると、甲斐駒ケ岳は文化13年（１８１６年）、信州の人・弘幡行者（後の延命行者）の小尾権三郎が開山したとされます。信仰は江戸末期から明治時代にかけて盛んで、黒戸尾根登山道には多くの石碑や石仏が今も残ります。

甲斐駒ケ岳山頂からは指呼の間に北岳が望めます。そんなことからマサモリベンキチは更に信仰の道を北岳まで伸ばしたのでしょうか。ルートはどう取ったのでしょうか。広河原から大樺沢の遡行だったのか池山吊尾根ルートだったかは分かりませんが山岳信仰に基づく登山だったようです。

## アーネストサトウの登山

近代登山の先駆けはお雇い外国人や外交官でした。南アルプスに最初に足跡を残した外国人は、幕末から明治にかけてイギリスから外交官として赴任していたアーネストサトウです。サトウは来日してから日本全国各地を歩き、人々の暮らしや行事・風習などさまざまな民俗事象をこと細かに記録し写真も残しました。その業績は極めて貴重な資料となっています。

そのサトウが南アルプス登山を実行する前に、明治14年春、下見を兼ねて飯田から青崩れ峠を越えて水窪に入り、秋葉神社宿坊に一泊して気田に降り、遠州山地を横断して千頭に抜けて井川まで足を延ばし、大日峠を越え安倍川を下って静岡に出ています。

井川から静岡に出る際、七ツ峰隣の天狗石を超えるのが最短と聞いたものの、

難路だと知って大日峠越えを選んだと記しています。そして住民の生活を記録し、井川には１７８世帯が、小河内には１３１世帯が住み、主たる生業は干し椎茸や刳木の生産のほか銅等の鉱物の採掘などとしています。更には、井川の住民が日本語を上手に話すのに驚いたと報告しています。

サトウは山奥に住む人はアイヌ人と思っていたのでしょうか。それは違います。アイヌ人については正しい認識を持っていました。ではなぜかですが、友人のマーシャルとダイバースが明治12年に北ア・薬師岳麓の隔絶集落である有峰村を訪れた時、住民の言葉は方言となまりが強くて普通の日本語とはずいぶん違うと感想をもらしたのを思い出したからだと思われます。井川は有峰村以上に孤立した山また奥の村と思っていたのでしょう。

サトウはこの下見登山の後、つまり明治14年夏に南アルプス登山として芦安から奈良田に入り、農鳥岳、間ノ岳に登りました。この時、途中まで同行したチェンバレンは芦安から引き返しています。しかし、サトウはこの登山で北岳には登っていません。

サトウは奈良田で雇ったサダスケ、ヤスタロウ、クラキチの３人の案内人には失望したと記録するとともに、前年の明治13年に八ヶ岳赤岳を目指した時も案内人の確保に苦労し、海の口でようやく高見沢しめ松という者を雇ったものの、山に不慣れで県界尾根の案内に失敗し、結局赤岳登頂は断念したと述懐しています。北アルプスの案内人とは大きな差があったようです。

南アルプスと八ヶ岳では事情が異なりますが、北アルプスのように案内人が育つほどの登山者がなかったことが理由でしょう。

この項　次号へ続く

## 『南アの開拓者平賀文男』
### リニアと―赤石渓谷―の変貌

小田　直美

リニアの工事で、南アルプスが騒々しくなりそうである。その前に静かな大井川を味わっておこうと、昨年は、９月と10月に続けて東俣を遡行した。１回目は途中から池ノ沢へ入り、蝙蝠尾根を下った。２回目は、そのまま詰め上げて三峰岳へ至り、仙塩尾根からまた蝙蝠尾根へ入り、二軒小屋へ下った。

リニアの工事が終わる頃には、もう歩ける歳ではなくなっているかもしれない。そう言ったところ、何人かが同調してきてくれた。皆高齢者ばかりである。

幸い、２回とも天候に恵まれた。１回目は天を焦がす焚き火にイワナの塩焼きを堪能し、２回目は素晴らしく見事な紅葉に酔いしれた山旅となった。昨秋は、どこも紅葉が不作だと言われていたので、これは嬉しい誤算であった。

どちらのコースも曽遊の地ではある。しかし、沢筋は最後に歩いてから大分経っているので、その変わりようには、やはり驚いた。

学生時代からの愛読書に、平賀文男の『赤石渓谷』がある。平賀は山梨県の人、大正から昭和の初めにかけて、主に南アルプスで活躍した登山家で、数冊の山書を残している。『赤石渓谷』もその一つで、赤石沢や聖沢など、沢旅の記録が十数編収録されている。時代を考えると、これらは記録として貴重なものだが、それ以上

に紀行文として優れていて、読者を飽きさせない。淡々とした語り口の中に、奥深い南アルプスの静けさと美しさがみずみずしく甦ってくるような文章なのである。

『赤石渓谷』の平賀は、「間ノ岳の石室」に泊まり、5月上旬に大井川東俣を下っている。

『アイゼンの歯は硬結した雪面に食い込んでザクッザクッと音をたて、ピッケルの先端から破砕された雪は火花のように散る。（中略）30分の後には、三国沢の雪渓と合し、白峰沢となって、なおしばらく下れば遂にこの雪渓は切断して、その大きな雪塊の断口から清冽な冷たい雪解けの水は一時にどっと奔下していた。』

平賀の活躍した時代は、日本の登山史における、いわゆる「探検時代」より少し後である。しかし、大井川源流地帯のこうした谷筋などの記録は、まだまだ珍しかった時代である。平賀の記録にも、他の登山者との出会いなどはほとんど描かれていない。もちろん道などはなく、流れを渡り、森の木々を分け開き、焚火で炊事をしながら、人気のない谷や尾根を辿って行ったのであろう。山が本当に山らしかった時代の南アルプスの魅力をこの本は伝えてくれている。

学生時代の私は、『赤石渓谷』に触発され、その思いを追体験しようと、南の谷と尾根に足繁く通っていた。東俣に初めて入ったのもその頃のことである。

三峰岳から東俣の源流へ下降、水が出始めたあたりで泊まって、翌日二軒小屋へ下った。秋のことで今回同様、紅葉が素晴らしく鮮やかだったのを覚えている。

それはそれで素晴らしい山旅だった。しかし、池ノ沢出合あたりまで来ると、広い河原には、材木を積んだトラックが行き来し、東俣の下半分はそのトラックをよけながらの林道歩きになっていた。伐採作業が盛んな時代で、平賀の記した奥深く静けさに包まれた東俣とは、既に異質な世界となっていた。

以来40年余りが経った。伐採作業も終了して久しい。昨秋訪れた東俣では、嘗てトラックに追われたその林道は、草に埋もれ、灌木が生い茂り、道型そのものも既に崩れ去った所が多かった。

細々とした踏み跡がその中に続いている。見下ろす渓谷は、適度な険しさの中に豊かな青い水を流していて美しく、長い道のりも飽きなかった。時折風が吹くと、木々の梢から紅葉が舞い散った。その紅葉を浮かべてゆったりと水が流れる風景は、古典和歌の世界であった。登山者の気配も希薄で、山々はむしろ平賀の時代に戻りつつあるようにさえ感じられた。

ときどき、藪の中に道路標識が立っていたりする。そうした点は醜悪とも言えるが、静けさという意味では、むしろ好ましい変化のようにさえ感じたのである。

今後、大井川はリニアの影響でどう変わっていくのだろう。

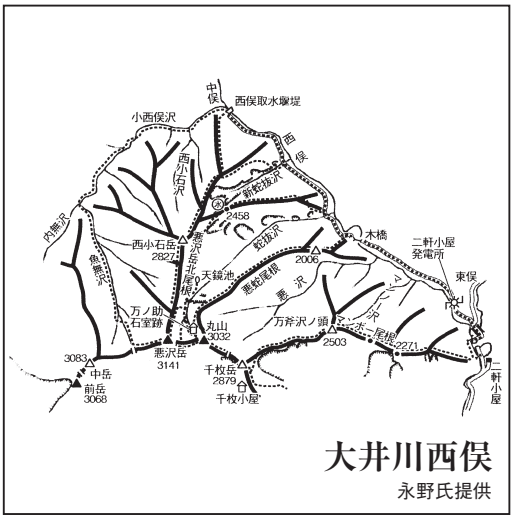
南アルプスは地元の山である。しかし、私には、リニアの問題も含め、その将来像やあるべき姿など、あまり考えてこなかったという後ろめたさがあった。考えたところで、我々にできることなど大してなかろうが、地元の岳人として、それはやはり我々の務めだろうと、そんなことを話しながら、懐かしい東俣の夜を過ごしたのである。

# 『自然観察紀行』

## 大井川源流域―西俣～小西俣渓谷

自然保護委員　白鳥　勝治

昨年９月、自然保護委員の立場で、静岡県岳連会長滝田博之氏、本会支部長の大島康弘氏に同行を依頼し、リニア新幹線のトンネル工事による自然環境破壊が懸念される大井川源流域の西俣と、その支流の小西俣渓谷を訪ねた。




大井川西俣

永野氏提供

９月19日　昼過ぎ清水を発ち、静岡で滝田氏と落ち合い富士見峠を越え井川を経て畑薙ダムへ向かう。沼平の東俣林道ゲート前駐車場で大島氏と合流する。登山届を出して二軒小屋まで通行許可を戴いた自家用車で入り、特種東海フォレスト社の二軒小屋事務所へ入山と駐車の許可を得て幕営する。

９月20日　６時発、本当に久し振りで西俣へ向かう。田代ダム横のゲートを通り、東俣との出合の鉄橋を渡り西俣左岸の車道を辿り発電所まで行く。車道は発電所で終わり、裏側に廻って左岸の踏み跡を辿る。西俣本流の岸に沿って車道の跡が見られ、途中には立派なコンクリートの橋が架かっていたが、道路は各所で崩れ落ちて通れる状態ではなかった。昼頃、西俣と小西俣の分岐点で発電所の取水堰がある出合についた。

公表されているリニア新幹線工事計画によると、二軒小屋からこの出合までの間にトンネル工事用の掘削口が出来る事になっている。昭和30年頃、この出合には東海パルプの小西俣事務所があり、慣合の小屋場と呼ばれ、伐採人夫用の平屋の小屋が幾棟か並んでいた。しかし、現在の出合は当時の面影はなく、取水堰の上流側には僅かな水溜りがあるだけで辺りは石ころばかりの河原になっていた。

軽く昼食をとり、沢歩きの身支度をして小西俣へ入る。流れの幅が狭くなり流量が多く見える。井川の人達がヤマトイワナが棲息していると言う小西俣には登山路はないが、ところどころ岸辺に釣り人が歩いたと思われる踏み跡があり、それを辿って遡行した。15時頃、左岸に小河内岳と前小河内岳の間を東に向かって流れ落ちている岳沢の出合へ着いた。リニア新幹線の計画によると、この辺りの地下深く通るトンネルは、転付峠の北側を静岡県と山梨県の県境を越え、西に向かって東俣と西俣を横切り、小西俣に沿って岳沢の出合辺りまで来て、岳沢に沿って西に向かい小河内岳の下で県境を越え、長野県側の小河内沢を辿って大鹿村の釜沢へ抜けている。（全長22㎞）小河内岳の県境付近におけるトンネルの標高は１２１５ｍと発表されている。因みに西俣と小西俣の出合（慣合）の標高は１７１２ｍである。

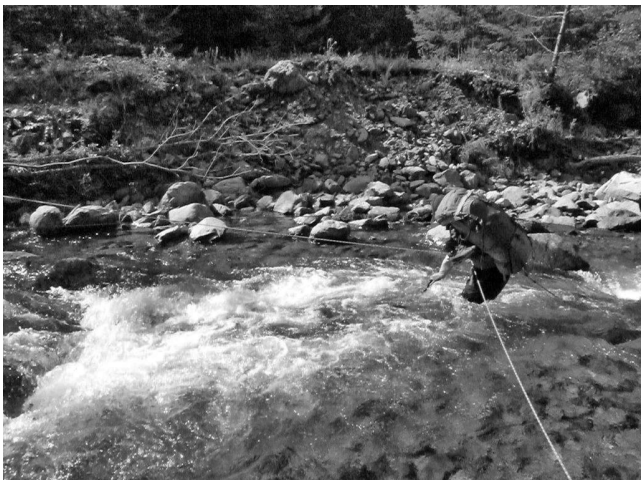
17時前、魚無沢の出合へ着き、左岸の林間にある台地で幕営する。

今回の山行目的は、リニア新幹線のトンネルが通過し、それによって流量が減

少し沢枯れが懸念される周辺の沢や渓谷の観察であり、小西俣は岳沢の出合までがその対象地域になっている。

９月21日　６時発、小西俣を渉って魚無沢の遡行をはじめる。魚無沢の入り口は沢幅が狭く急傾斜で水量も多く、小西俣本流筋の内無沢に劣らぬ程である。渡渉を繰り返し登り標高２０５０ｍ辺りまで進むと沢幅が広がり傾斜も緩やかになる。沢を更に登ると標高２１００ｍ付近で二俣に分かれている。右俣を辿って登って行くと、やがて水の流れが細くなった。

沢は標高２５００ｍ付近で再び二俣に分かれている。左俣を仰ぐと沢は悪沢岳と荒川中岳のコルへ延びていた。ここで昼食にする。眺望が広がって塩見岳をはじめ目前に小河内岳、大日影山、板屋岳など小西俣源流域の山々が眺められた。沢の勾配は更にきつくなり、浮き石が多くなってきたのでルートを尾根筋に変えて、藪漕ぎを避けハイマツ帯の縁に沿って登った16時過ぎ、避難小屋近くの縦走路へ出た。小屋は満員であったが、何とか泊めていただいた。


小西俣を渉る滝田氏

９月22日　７時発、馴染み深い縦走路をゆっくり悪沢岳へ向かう。稜線路から北側の小西俣を覗くと、晴れた空の下に、昨日、汗を流して登ってきた魚無沢の全容を望むことが出来た。魚無沢は、近年学術調査の結果、古い氷河遺跡と解明されその広がりは氷河を彷彿させるに充分な光景であった。悪沢岳の頂は晴れあがった秋空の下で赤石岳を始め素晴らしい眺望を楽しむ多くの登山者で賑わっていた。ナナカマドが色づき始めた千枚岳の下から、万斧沢の頭を通って急坂を下り、14時半、二軒小屋へ戻って今回の計画を無事に終えた。

今回、はじめて訪れた小西俣は思った通り美しい渓谷であった。水量が豊富な小西俣には顕著な滝はないが、西小石岳より小西俣へ落ちている沢には見事な滝の姿が望めた。

ＪＲ東海はリニア新幹線計画にあたって、この地域をエコパークの区分で示す「移行区域」で問題はないと説明している。ユネスコでは「移行地域」を「人々が居住し生活を営んでおり、自然環境と調和した持続可能な地域社会の発展のためのモデル地域であること」としている。しかし、今回この地域を歩いた自分の感じでは「移行地域」より上位の「多くの動植物の生育が可能で、法的にも厳しく保護され長期的に保存されること」と定義づけられている「核心地域」に該当するのではないかと強く思った。

山の自然は、時に厳しく時に優しく訪れる人の心を豊にしてくれる。私達はこの自然を、ありのままの姿で次ぎの世代に引き継ぐ責任があるのではないだろうか、と改めて感じた山行であった。

# 『遠州低山の魅力』

山口　千枝子

県西部の浜名湖周辺や天竜浜名湖鉄道沿線などには、気軽に歩ける低山が多い。信州・三河を結ぶ信仰や暮らしのための古道が残り、合戦の場にもなったため山城跡も多く見られる。折々の花々に出会い、そんな歴史にも触れながら、遠州灘から南アルプスまで穏やかに広がる展望を楽しんで里山を歩く。

## その１　エコパから小笠山を周遊

大井川が隆起してできたという小笠山は、尾根の北東側は深い崖、反対側はゆるやかな斜面のケスタ地形が見られ、今も崩壊が進んでいる。豊かな自然が残り、ウバメガシ・ソヨゴ・コナラなど雑木の森を、春はサクラ・ツツジ・フジなど木の花々がいろどる。

ＪＲ愛野駅から小笠山総合運動公園へ向かう。エコパスタジアム奥のビオトープ右端にある案内板の横が、法多山へ行く道だ。階段を登り平坦地へ出たら左の踏み跡に入る。ここから腹摺峠まで道標はほとんど無い。

送電線鉄塔№14に出て尾根を行く。ケスタ地形が続き、左側が切れ落ちたガケ縁を歩くので充分注意したい。

分岐から20分ほどで右に入るとお堂があって、法多山尊永寺の本堂がすぐ下に見える。

戻って主尾根を進む。エコパの注意書きのある坂を登ると、右に入った林の中に三角点「三峯山」がある。ルートは急斜面を下って続く。

放置茶畑からモノラックのレール沿いに下れば古道の通る腹摺峠だ。ここからは道標があり道も良くなる。

シダを分けて登り、タイミンタチバナなど照葉樹繁る森を行く。しばらく歩き左に入ると北東が開けた休憩適地がある。

切り立った断崖の上を歩き、おだやかなまき道を進む。板沢分岐から少し登れば、三角点「小笠山」のある山頂だ。

少し下ると四辻で、アカガシの大木が多い。左の小さな鳥居をくぐり多聞神社前を通って小笠神社へ向かう。ここには戦国時代高天神六砦のひとつ、小笠山砦があった。今も空堀など遺構が残る。明るい神社の境内からは、高天神方面や小笠山丘陵の豊かな森が見渡せる。鳥居のある四辻へ戻り直進、その先で山頂から西に伸びる尾根に乗り、いったん県道におりて横切る。ウバメガシ林が続く。送電線鉄塔№19に出たら巡視路を下り、茶畑から県道へ出る。左に進み三叉路を右にとれば法多山だ。

## その２　山城跡残る三岳山へ

来年のＮＨＫ大河ドラマは「おんな城主直虎」に決まった。舞台は戦国時代、三岳山山麓の井伊谷である。それより前の南北朝争乱時代には南朝方の遠江の拠点となり、山頂部には山城があった。今も遺構がよく残り国指定史跡となっている。

浜松駅前から渋川行きのバス、滝清水で下車。井伊谷川の橋を渡って右に堤防を歩き、民家の前から農道を登っていく。この辺り早春にはアオモジの淡黄色の花が咲き美しい。棚田のある谷を登りつめると民家の点在する兎荷の集落で、浜名湖や愛知県境の山々が見渡せる。

六所神社の奥にある寺の裏手から畑を回り込んで林に入る。すぐ先で鋭角に右折、まき道から右に上がれば分岐に出る。

山腹を直進する踏み跡は地形図の破線道で帰路に使う。

左の坂をひと登りすると宮標石があり、穏やかな雑木の尾根が続く。いくつも段状の急坂が現れる。石積みが見られ、これは土塁で帯曲輪の遺構とわかる。

山頂の草地からは浜名湖など遠州全域の眺めが素晴らしい。南アルプスや富士山も望める。眼下に新東名が伸び、すぐ近くに風力発電のプロペラが見える。ここは三岳城本曲輪跡で、東に下れば一の曲輪など遺構がある。

来た道を戻り宮標石から分岐へ下ってここで左折。アオキ繁る植林帯の踏み跡をたどると農道に出る。この周辺は生け花用花木や枝物の栽培が盛んで、南斜面の畑にはサンシユ・モモ・アオモジ等々が植えてある。放置畑も多いが、春にはいろいろな花が咲き絶好のお花見場所だ。

畑を下って行くと兎荷からの道に出る。左手の作業小屋前を通ってさらに下ると農道が途切れるが、先へ山道を進み下の農道に下りる。

荒れた道が舗装路に変わると一面のみかん畑だ。両側に白線のあるメイン農道を下り、丁字路を右にとると北岡大塚古墳、続いて円墳がある。引佐総合公園の下から工場のフェンス沿いに西へ歩いて国道２５７号に出る。左に行けば井伊谷バス停がある。

歴史ある引佐周辺には、龍潭寺・井伊谷宮など見所が多い。神宮寺川沿いの渭伊神社裏手の小高い森には天白磐座遺跡がある。我国屈指の古墳時代の巨石祭祀遺跡だという。幽玄な雰囲気漂うこの遺跡も訪ねてみたい。

シリーズ「山への想い」―第11話―

# 人生が分岐する瞬間

聲高　一枝

この春、私はヒマラヤへ行く機会に恵まれてエベレスト街道をルクラの街からエベレストＢＣまでトレッキングしてきた。これまでの私といえば「死なない山にユルく」がモットーで、山頂で何を食べるか、何を食べたら面白いか、そればかりを考えていたようなもので、海外の山、それもネパールのヒマラヤ山脈なんてものはテレビや本で観るもので私には無関係の場所だと思っていたのだが、そんな無関係な山が肉眼に映り自分の周りを取り囲んだ瞬間、一瞬でヒマラヤの虜となってしまった。

道中は見たことの無い山々の連続。私の旅のことはいつもアマダブラムが見守ってくれていた。この方角のアマダブラム、あの方向からのアマダブラム、その場所からのアマダブラム。その向こうにアイランドピークにローツェがいて、そして時折エベレストがちょこちょこ顔を出していた。

アイゼンもピッケルも使えない私が当然それらの山へ登られる訳も無いのだが、ロブチェイーストのＣ１までなら連れて行ってくれるとのことで、最後自分にとっては少し怖い岩場もあったがなんとか標高５３００ｍのＣ１まで辿り着き言葉にもならぬ程の絶景に出会うことができた。

凄い、高所凄い。空を見上げると端が紺色混じりの空色で地球からの宇宙の端を見たような気がした。目の前には今までで一番美しい顔をしたアマダブラムがこちらを見ていた。私ももっと高く、もっと高く山頂まで登れるようになりたい、この時心の底からそう思った。宇宙の端

をもっと近くで見てみたいのだ。

ただ息をすること、身体を保つことが大変な世界で広大な運河、満天の星空、月明かりに浮かび上がるヒマラヤの山々、エベレストのアイスフォール、凍り付く空気、様々な翼端な絶景を見させられ温かい人々とも沢山出会い、大きな悲しい事件もあり、この旅はあまりに極端で私の人生観は完全に変わってしまった。

人は一年程度のスパンでは振り返ってみても大きな変化はそれほど感じることができないが五年スパンくらいで考えてみると予想もつかぬ方向に自分が変化してしまっているものだ。

雪山はやる気無し、雪の無い晴天に近くの山は気持ちよく仲間達と行けばそれでいい、そうとしか思っていなかった私がまずは６０００ｍ峰からやってみようとガラリと山に対する考えが変わり、もっと年数を遡れば山登りなんて大嫌いだった私がいま日本山岳会に所属しているのだから、人生はとても面白い。

そんなわけでヒマラヤからの帰国後はというと、山に真面目に取り組んでみるかと色々と模索してみている。これまた私には無関係だと思っていた岩登り講習にも出かけてみた。

世界は広い。どんどん出かけてみよう。いろんなことをしてみよう。また五年後、自分がどこに到達しているのかを楽しみにして。

シリーズ「恐怖の体験」―第14話―

# 愛鷹神社境内での一夜

諏訪部　豊

40年ほど前21才の12月末のことだった。愛鷹連峰を北端の越前岳から南端の愛鷹山まで前夜発日帰りで縦走しようと計画し、会の集会で同行者を募ったが、応募者はなかった。仕方ないので単独で決行することになった。しかしそれが恐怖の体験になるとは知る由もなかった。

前日夕刻裾野駅から須山行きのバスに乗ったのは私ともう一人土地の人だけだった。終点の須山バス停からは私一人となり、十里木街道を登山口まで歩き、そこから先は林道を愛鷹神社まで歩いた。周囲は既に暗闇の世界だった。ゴーゴーという冬の風が吹いていた。

この日は途中にある無人の愛鷹山荘に泊まる予定だった。しかし愛鷹神社脇の登山道から枯れた沢に入った辺りで道を見失ってしまった。神社から大した距離を歩いたわけではなかった。しかし暗いヘッドランプの灯りと乏しい記憶だけでこの先へ進むのは危険だと思った。

「山荘まで行かなくても明日その分余計に歩くだけだ。神社前のヒノキ林でツェルトを張って泊まろう」そう軽く考えて引き返した。

神社の境内まで戻った。祠の前は広いがさすがに気味が悪く、そこから少し離れた林の中に立木を利用してツェルトを張った。既に夜は更けていた。外に出なくて済むようにトイレを済ませてからツェルトに入り、ストーブを出して遅い夕飯を食べた。話す相手もいないのでシュラフにくるまって寝ることにした。しかし風にあおられてバタつくツェルトの音に眠れぬ夜を迎えた。それが恐怖の幕開けであった。

ビュービューと唸るような寒風が吹きすさぶ神社の夜の境内。霊気に包まれた身震いする寒さ。クマザサのざわつく音。ヒノキの幹同士がこすれる「ギーイ」という不気味な音。そして祠の扉が風に煽

られて「バタン」と閉まる音が時折大きく響いた。一人だけで夜の神社の境内にいるという心細さにただならぬ恐怖におそわれる。

気のせいだろうか？いや気のせいだけではない。確かにそのあたりに何かがいる気配がする。漆黒の闇の中に化け物たちが集まっているのだろうか？それとも夜行性の動物か？いや愛鷹連峰で遭難した登山者の霊なのか？ツェルトの周りにそれらがうろついているようなザワザワした気配がする。そして今にもツェルトのチャックが開き、何かがヌーと顔を突っ込んで来そうな、そんな境地に完全に引きずり込まれていた。

待ち遠しい朝が来るまで結局一睡もできなかった。急いで撤収し、まだ暗い中を出発した。昨夜道を失った愛鷹山荘への道を諦め、林道が延びている割石峠を目指し、鋸岳、そして、位牌岳、愛鷹山へと縦走し、平沼に下った。単独行で、寒さと風、神社の境内という雰囲気から来る恐ろしさは遥か昔のことであるが今でも忘れられない体験であった。

## 総会報告

去る4月13日、18時半より静岡労政会館にて総会員151名中48名の出席と76名の委任状提出で総会が開催されました。討議の概要をまとめて報告します。

### Ⅰ　静岡支部の活動

#### 一　組織の改編

支部活動の事務局一極集中を避け、できるだけ多くの会員の活動参加を目指して、2015年5月、公益事業、集会山行、会報編集の三つの委員会を立ち上げた。重要事項は各委員会の正副委員長と事務局長で構成する役員会で協議決定することとした。活動はまだ、一部の者に留まっているきらいはあるが、全員参加型のクラブ組織に移行しつつある。

#### 二　公益事業委員会

㋑ハイキングセミナーを三回実施。（4月26日、竜爪山　受講生34名、会員7名。　5月31日、大光山、受講生13名、会員4名。12月13日、沼津アルプス、受講生8名、会員7名）

㋺山の日記念行事の実行委員会の立ち

上げ　８月11日に静岡市で記念講演会と山岳写真展の開催、10月16日に東部、中部、西部三か所で一般対象の記念ハイクを実施することを決定した。

**三　集会山行委員会**

㋑支部会員集会（８月19日、納涼会、26名。11月14・15日、秋の懇親山行、17名参加。１月10日、新年会、39名参加）

㋺会員山行（４月19日、竜爪山、８名参加。５月24日、大光山、五名参加。７月18～20日、白根三山縦走、６名参加。10月３～４日、蝶が岳・常念岳、４名。10月25日、黒法師岳　５名。11月29日、沼津アルプス、24名。）

**四　会報編集委員会**

㋑支部会報『不盡』77・78号発行。

㋺南アルプス山岳史の編纂（支部創立70周年記念事業として実施決定）

**五　山荘の贈与**

荻野恭一永年会員（５４６６）より、静岡市郊外の竜爪山の牛妻登山コース沿いにある氏所有の山荘（文珠山荘、敷地・約２８００㎡）を日本山岳会に寄付の申し出があり、贈与の手続きが完了した。

**六　南アルプス井川登山基地構想**

南アルプス南部への大井川沿いの入山コースは未だに未整備で入山し難いのが現状である。２０１５年より、井川地区の振興をも視野に入れた井川登山基地構想を具体化するべく、有志会員が活動を始めている。

**Ⅱ　会計**

**予算・決算（詳細は総会資料で）**

２０１５年度　予算７４３，７１６円
決算３８８，２８８円

２０１６年度　予算７８８，２２６円

登山教室の講師はボランティアとし、支出を抑えた結果、赤字は解消し、支部費を追加徴収することなしに運営できる目途が立った。

**Ⅲ　役員の改選**

２０１６年度途中より文珠山荘運営委員会が発足し委員長に諏訪部豊氏、副委員長に西澤祥陽氏が推挙された。

空席となった集会山行委員長に副支部長の有元利通氏が推挙された。

事務局長は支部長兼任から木村勝利氏(正)西村しのぶ氏(副)が担うことになった。

**Ⅳ　二〇一六年の活動**

今年から新たに文珠山荘運営委員会が発足し、文珠山荘を会場にしたイベントが新たに加わった。

新会員挨拶
左から小西　晃さん、米沢正信さん、
勝又千華さん、大島わかなさん

活動内容は『**２０１６年度行事計画**』を参照されたい。

（報告　大島康弘）

# 2016年度集会・会員山行計画書

| No. | 行事区分 | 担当部門 | | | | 題　名 | 期　日 | 内　容 | 担当者 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 事務局 | 公益事業委 | 集会山行委 | 文珠山荘運営委 | | | | |
| 1 | 全国支部懇 | ○ | | | | 全国支部懇談会 | 4/9～10　越後支部 | | |
| 2 | 文珠山荘 | | | | ○ | 文珠山荘で花見と野趣の会 | 4/16～17「あべごころ」<br>北東側駐車場に9:00集合 | ・午前中掃除とタラの芽採り、午後宴会<br>・16:00頃から映画会<br>・昼食は持参のこと。夕食は人数把握後買い出しする。<br>費用は割り勘 | 担当　諏訪部豊 |
| 3 | 会員山行 | | | ○ | | 竜爪山 | 5/8 | 桜峠～文珠岳～薬師岳～文珠山荘～牛妻ＢＳ | 担当　有元利通 |
| 4 | ハイキング<br>セミナー | | ○ | | | 竜爪山 | 5/15 | 同上 | 担当　中村博和 |
| 5 | 会員山行 | | | ○ | | 富士見岳 | 6/5 | 秋のハイキングセミナーの下見を兼ねる | 担当　有元利通 |
| 6 | ハイキング<br>セミナー | | ○ | | | 二王山 | 6/12 | 湯の森コース | 担当　中村博和 |
| 7 | 文珠山荘 | | | | ○ | 文珠山荘で掃除と<br>山の歌を歌う会 | 6/25～26 | ・午前中掃除<br>・16:00頃から映画会<br>・夜宴会 | 担当　諏訪部豊 |
| 8 | 会員山行 | | | ○ | | 南ア・上河内岳及び茶臼岳 | 7/16～18<br>（海の日連休） | ・初日（16日）発～沼平～畑薙大吊り橋～横窪沢小屋<br>（木村会員管理小屋、２食付き泊）<br>・２日目に上河内岳及び茶臼岳ピストン（横窪沢小屋泊）<br>・三日目に沼平に下山 | 担当　有元利通 |
| 9 | 山の日 | | ○ | | | 山の日記念行事 | 8/11（木）（山の日） | ・静岡市内にて講演会 | 担当　中村博和 |
| 10 | 集会 | | | ○ | | 納涼懇親会 | 8月17日（水） | ・静岡市内 | 担当　有元利通 |
| 11 | 文珠山荘 | | | | ○ | 文珠山荘で掃除と納涼祭 | 9/10～11 | ・午前中掃除<br>・16:00頃から映画会<br>・夜宴会 | 諏訪部豊 |
| 12 | 会員山行 | | | ○ | | 黒部川・下の廊下 | 9/24～25 | ・前夜発　・計画者；諏訪部 | 有元利通 |
| 13 | ４支部集会 | ○ | | | | 御岳山８合目まで | 10/1～2 | 信濃支部主催 | 木村勝利 |
| 14 | 山の日 | | ○ | | | 山の日記念山行 | 10/16 | ・東部；富士山須山登山口（県岳連担当）<br>・中部；大日峠越え（市岳連担当）<br>・西部；湖西連峰・大知波峠（労山担当） | 中村博和 |
| 15 | 文珠山荘 | | | | ○ | 文珠山荘でハロウィーン | 10/29～30 | ・午前中掃除　・16:00頃から映画会　・夜宴会 | 諏訪部豊 |
| 16 | 会員山行 | | | ○ | | 南ア深南部・不動岳 | 11/5～6 | | 有元利通 |
| 17 | 懇親山行 | | | ○ | | 幹事；東部の会員 | 11/12～13 | ・県立富士山麓山の村泊　・翌日村山古道散策 | |
| 18 | ハイキング<br>セミナー | | ○ | | | 富士見岳 | 11/27 | | 中村博和 |
| 19 | 文珠山荘 | | | | ○ | 文珠山荘で忘年会 | 12/10～11 | | 諏訪部豊 |
| 20 | 集会 | | | ○ | | 新年会 | 2017/1/15 | 静岡市内。会費6000円 | 有元利通 |
| 21 | 会員山行 | | | ○ | | 雪山・山スキー | 2017/2/18～19 | ・湯ノ丸山、高峯山、東篭ノ戸山など。<br>高峰温泉泊（２食付き14,000円程度）<br>・計画者；諏訪部 | 有元利通 |
| 22 | 文珠山荘 | | | | ○ | 文珠山荘をベースに<br>文珠岳に登る会 | 2017/3/11～12 | ・初日9:00集合～文珠岳登山<br>・16:00頃から映画会　・夜宴会 | |

会員山行

# 『雨のハンシーパン』
## インドシナ半島の最高峰

曽根　芳樹

２００３年の日本山岳会入会者で立ち上げた「麗山会」の10周年の記念行事として行われたファンシーパン山行。

この名も無い山を決定した経緯は幾つかの制約の中で、先ず予算20万円程度、日数は10日以内とする。この条件でアルパインツアー社に相談するとファンシーパンを紹介される。

ファンシーパンは標高３，１４３ｍでベトナム北部に位置し、中国雲南省に接し、インドシナ半島の最高峰である。

時期としては乾期である11月２日から９日までの７泊８日のスケジュールで成田空港からの出発でメンバーは麗山会会員10名とアルパインツアー社の添乗員１名の構成と成る。

成田発ヴェトナム航空でハノイへ、時差は２時間で現地時間14時ハノイ着。

夜行列車の出発時間までの間は仏院、ホーチミン廟等の観光後夕食、そして中国との国境の町ラオカイまでの寝台列車の旅。スピードも遅く、揺れも大きく決して快適な乗り心地とは言えないが１両貸し切りと云う豪華さと酒を飲みながらの旅で早朝、国境の町ラオカイへ到着。その後山岳少数民族の住む、登山口の町、サパへ。

午前中は足慣らしのハイキングを美しい棚田の風景とハナモン族、クロモン族の住む部落を歩く、と少数民族の人々が自作の手芸品を持って売り込みが激しく、特に子供連れの人達は最初から村を去るまで付いて歩き、振り切るのに苦労する場面もあった。

昼食後はサパの町周辺を散策。サパは田舎町と思っていたが、なんとヨーロッパの雰囲気を持った素晴らしい街に一同驚いた。その筈ハノイ周辺は過ってフランスの植民地で、当時の建造物等も多く残されていてヨーロッパムードが漂っているのも頷ける。しかし、街中は至る所に少数民族の女性達がやはり手芸品を通行人に執拗に売り込み、うんざりする一幕もあった。

３日目、今日からの３日間ファンシーパンへの登山、今日も天候悪い、ベトナムへ入国して２日間は曇りで芳しく無く、町から見える筈のファンシーパンも視認出来ず不安な所に来て、今日は朝から雨。朝食後送迎車にて１時間で登山口のチャムトン峠に到着。既に現地ガイドと４名のポーターは待機しており、雨中の出発と成る。直ぐ起伏の多い樹林帯と浅い渓の渡渉の繰り返し、登るより横移動の多い雨中の歩行、ペース上らず。

午後一時半ベース到着（２，２５０ｍ）

ブルーシートの簡素なキャンプで簡単な昼食。持参の食料を足しにして済ます。

藪漕ぎとガレた急な岩場、ハシゴの連続、雨、依然降り続き苦戦。

17：30　Ｃ２　到着（2，８００ｍ）竹林の中此処でもブルーシートの中でテント泊、設備不足で満足な食事出来ず、持参したアルコールで翌日の晴天願って酒盛りで夜を過ごす。

翌日、願いも虚しく朝から雨、霧、ベトナムに着いて４日目に成るが一度も太陽を見る事が出来ず、乾季の晴天を期待してきたのに残念でならない。

登山２日目、７：20　Ｃ２出発、いきなり竹藪の急登、ハシゴが連続、頂上近くに成ると今度は黒土の泥道、原因は来年度に完成予定のロープウェイの工事の残土に因るものと判明、ファンシーパンはインドシナ半島で唯一積雪が見られる山で観光施設の工事中であった。

山頂へのアタックは藪を掻き分け登り詰め、竹林の中を回り込むと小さな岩峰と三角錐のモニュメントが山頂で有る。晴れて居れば雲南省周辺の山々も見えた筈なのに残念。

10：40登頂。

眺望全く無い山頂にて集合写真を取り、即下山と成る。下山路は泥で滑り易く、特に梯子の下山には注意を要した。

17：20　Ｃ１に下山泊。

登山３日目　Ｃ１発　８：00、今日もまた雨の中の下山、緩やかな樹林帯の中、時折の渡渉で汚れを落としながら10：40チャムトン峠に無事下山。

12：00宿泊ホテルに帰着。

午後からはサパの町の観光、買い物などを楽しみ、遠く雲に覆われたファンシーパンの山並みを眺めた。それにしても丸３日降り続けた雨、全く運に見放されたツアー、その晩は恨みのパーティーに成ってしまった。

翌朝、８：00サパを出発、車輛にて約１時間でラオカイへ、ラオカイからは寝台車の１両が貸切り、昼間で景色を見ながら長い列車の旅で21：00ハノイ到着しホテルへ。

翌日は昼食を兼ねた、世界遺産の快適なハロン湾クルーズ、小さな島が数百点在し美しい景色と海鮮料理を堪能して雨の山旅も快適なハロン湾クルーズに因って溜飲が下がる思いであった。また夜は伝統芸能の水上人形劇の鑑賞も興味深く楽しみ、終了後深夜の便にて帰国。

８日間一度も太陽を見る事が出来なかった、ベトナム遠征の山旅であった。

その１

## 黒法師岳

**湯山　直文（自称百笑）**

南ア深南部・黒法師岳に参加した

「安心して下さい×ではありません登りましたよ」　―湯山（百笑）

黒法師岳に敬意を表して鉄芯入りスパイク地下たび、ニッカーズボンで足周りを固めました。「千華たび」ではありませんよ。シャレ①（千華は同行の勝又女史の名）

「秋を愛する人は　心深き人　愛を語るハイネの様な僕の恋人」　―四季の歌

秋の南ア深南部10月24日～25日で入りました。

秋を愛する参加者は

有元利通（L）、諏訪部豊（山の歌）、中村博和、勝又千華、湯山直文（記録・百笑）、石間宏美

10月24日　諏訪部さんの車に中村、勝又、湯山が乗り、途中で酒を仕入れて有元宅へ。有元さんの車に乗り換え、新東名を浜松浜北ＩＣからＲ１５２号に入り、花桃の里で石間さんと合流。山住神社から野鳥の森公園。そこの野鳥観察小屋泊

「霜降りの　月光暖か　野鳥の森」　―百笑

ビール、日本酒、ワインを飲み、温かい有元風大和煮と諏訪部豊編の「山の歌」コンサート。暦の上の霜降りの日であったが暖かく料理も『温かいんだからーとってもおいしゅうございました』三ツ星の観察小屋はまるで「小屋ホテル」でした。

10月25日　（フランスパンの朝食。懐中電灯点けて４：20出発。野鳥の森ウグイスの門～麻布山～戸中山（とちゅうやま）～前黒法師岳

「麻布は都会。麻布山は作業小屋廃屋と麻布神社奥宮跡等がある原生林の中でとても静か」―百笑は昔々麻布にいたことがあった。麻布ですよ、麻布山ではありません。シャレ②

「秋の夕日（朝日）に　照る山もみじ
赤や黄色の　色さまざまに」―もみじ
「奥山に　紅葉ふみ分け　なく鹿の
聲きく時ぞ　秋は悲しき」―百人一首

途中は紅葉真っ盛りでしたが鹿しか参加なく静かでした。途中で単独の人、三人に会いました。戸中ではありません。シャレ③

打越峠～バラ谷ノ頭

「富士の眺め　深南部一バラ谷ノ頭」　―百笑

深南部の展望地、遠くに富士山が見えました。日本で最南端の２０００ｍの山でそこから黒法師岳へは直線距離で２キロ弱ですが、ガレの淵を下り、登りで深南部のきつい試練を受けました。上西平沢ノ頭～黒法師岳（２０６７ｍ）昼食

「急登で　笹平泳ぎ　黒法師岳」　―百笑

山頂三角点の印はご存じ×でしたが目標の12時前に登り切り、心は○それも◎×ではありません。シャレ④

ピストンなので精神的に楽で、前黒法師山～麻布山１～野鳥の森ウグイスの門17：30に着きました。うす暗くなる時間でギリギリセーフ。皆で試練を受けた足をストレッチして車へ。天竜スーパー林道では多数の鹿の見送りを受けました。満足感一杯で帰路につきました。

その２

## 『雪山・山スキー』

仙石　智子

２月20日（土）曇り～小雪～みぞれ

Ｒ52沿いの道の駅「とみざわ」駐車場に７時集合。簡単に自己紹介をすませ有元車、畠中車に分乗し、八島湿原に向かった。駐車場で山梨支部会員の静岡支部会友でもある大澤夫妻と合流。空模様が怪しいのでコロボックル小屋より車山をピストンすることになり移動した。

小屋の駐車場から車山の頂上へ。２月とは思えないような雪景色、いつもであれば一面真っ白なんだろうなと思い描く

が、笹の緑と部分的な雪の白さのコントラストも悪くないものだった。頂上の神社にお参りし、風の来ない場所を探してランチタイムになった。その時、大澤さんよりホットワインの提供があり、皆の顔が一瞬にしてニコニコ顔に変わった。

私はホットワインなるものを初めて口にしたが、ほんのり甘みがあり身体も暖まり、何と美味しいこと。ウイスキーに少し砂糖を入れてのお湯割を寒いテントの中では飲んでいたが、ワインの方が口当たりも柔らかくて優しい味かもと思った。ワインに元気をもらって下った。

車に戻ると雪が降ってきた。諏訪に向かって下って行くと、雪混じりのみぞれに変わった。

今日の一番目の観光は諏訪大社の春宮。皆傘をさして歩く。今年は七年に一度の御柱祭とのこと。前回の御柱が４本社殿の四隅に祀ってあった。上社と下社合わせての大木が、その都度山から切り出されるそうだ。

春宮の近くにある「万治の石仏」にもお参りする。願掛けの石仏とかで、呪文をとなえ時計回りに三回歩きながら願い事をしてきた。せっかく来たからと、秋宮に近い塩羊羹の店に入りお買い物タイム。次には宿にも近い御柱の来落とし坂を見学に行った。坂の上から見下ろすと短く感じるが、45度の急坂を木にまたがって下る勇気と根性に脱帽。

今宵の宿は毒沢鉱泉「神の湯」、日本秘湯を守る会の宿でもあった。少し早めに着いたので風呂に入る前に一部屋に集合して、飲みながら改めて自己紹介となった。その中に会員外の男性が一人、エリック・オートリップ。ミネソタ生まれの36歳。来日４年という好青年で勝又さんが色々補足してくれた。ここでも大澤さん手作りのチーズとハムの薫製を美味しく頂いた。

２月21日（日）　晴

７時に朝食を済ませ、９時前に集合して宿の玄関前で写真。予報通り雨は上がり青空が広がっていた。旧和田峠に向かうが周囲の山の雪も少ない。それでもトンネルを抜けると雪道になった。三峰山に向かう道路は除雪していないので入口近くに駐車した。スノーシューやスキーを用意して車道をしばらく歩き、黒曜石採掘禁止の看板の所で沢側に入り、巻き路になっている車道をショートカットした。スノーシュー組６人は、ツボ足が沈むようになった辺りで装着。稜線に行き易いと思われる所まで車道を歩き、斜面に取り付く手前で休憩して各々何かしら口に入れ腹ごしらえをした。稜線に出ると思ったより風は無く、風に弱い私はホットした。三峰山に向かう登山道を見ると、だいぶ手前から地面が黒く出ていた。雪原も部分的で茶色の山が広がっていた。雪が無くなった所でスノーシューを外し、デポして山頂へ向かった。

三角点の先の看板と石碑が建っている場所で休憩する。３６０度の大展望である。八ヶ岳と浅間山は、前日より白かった。北アルプスは手前に白雲が棚引き稜線を隠していたが、少しずつ見えるようになった眼下に諏訪湖、左に富士山も眺められ、万治の石仏に願った甲斐があったかも。13時前、三角点の所にスキーを担いだ人影が現れた。諏訪部さんだった。我々は「オッ、カメラが来た」と喜び、彼の疲れを無視してスノーシュー組を撮って頂いた。後のスキー組も続いて登ってきた。

歩きの我々は一足先に下る。デポした

所でスノーシューを装着し、駐車場まで外すことなく歩く。雪の斜面の下りはウソのように快適だった。予定通り2時頃到着、片づけをしているとスキー組も戻ってきた。一段落してミーティングあり。ここで大澤さん夫妻と別れ、道の駅「とみざわ」で解散となった。

（この直後、私に思わぬことが起こるとは神のみぞ知る?だった。
「今回の山行の原稿をお願いします」と突然に有元さんの御言葉。えっ?何?何故?去年の10月に会員番号を頂いたばかりの自分には「ビックリポンや！」という訳で、うろ覚えのコースタイムや拙い文章にお許しを。でも氷雨降る中での観光もオツなもの、三峰山の眺望も良し、お酒も美味しく頂き「よろずおさまりました」ことに感謝、感謝だった。）

スキー組：L諏訪部、有元、大澤夫妻、（会員外）石間、エリック

スノーシュー組：L白鳥、中村、畠中、勝又、仙石

## 新入会員の自己紹介

### 長野　和義（15666）

1939年12月長崎県佐世保市生まれ
現在、妻と2人、島田市船木在住

【趣味】

① 登山と海外トレッキング

登山は横浜に単身赴任中に神奈川の丹沢で洗礼（1997年、58歳）を受ける。
2000年6月サラリーマン卒業、
2000年9月地元山岳同好会に入会し国内の山々を精力的に登る。

一方、NHKのBS放送で見た海外トレッキングに魅せられて、2001年より毎年ネパール、パキスタン、ヨーロッパ・アルプス、などの登山、トレッキングを行っている。

② 音楽鑑賞・囲碁

### 勝又　千華（15705）

天城猿山にて

《お金はかかるがそれ以上に得るものがある》の一言で入会の意志は固まった。

平成26年5月、四支部交流会が行われた天城の夜のことである。

このとき私が感じたことは2つ。興味深く楽しい人ばかりということ。そして後継者不足なのでは…ということ。

―伝統も文化も、知恵も経験も、語り継がねばなくなってしまう。それどころかこのままでいたら、いずれ支部そのものが、なくなることになる―と、まぁこれはさすがに大げさだが、それほどの危機感を感じたのが正直なところだ。

日本で最も歴史の長い由緒ある日本山岳会に、まさか自分が入ることになるとは思っていなかったが、一員となったからには会のために尽力したい。とはいえ古き良きものを守りながら流れる時代に沿って繁栄していくためには、アイディアと根気と協力者と知恵と…とにかくいろいろ必要だ。私ができることを、私の得意な何かが静岡支部発展の足しになれるよう頑張るだけ。

勝又千華はいつも気配りや気遣いが足りず反省ばかりですが、どうか今後もよろしくお願いします。

**米沢　正信**（１５７５５）

少年時代に心臓に若干のハンディがあり…

スポーツと縁のなかった私が、高校生の富士登山を機に山や自然との係わりが始まりました。不安はありましたが、健康への自信のようなものが芽生えた時代でした。

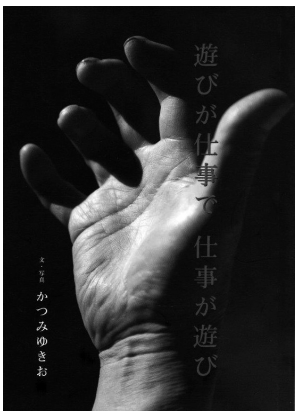
それが、１９７８年カラコルムバインターブラック遠征隊のメンバーとして参加し、帰国後は、特種東海フォレスト（旧東海フォレスト）に勤務し37年が経過しました。

現在は、南アルプス国立公園を舞台に、自然の美しさや、豊かさ、魅力を伝えるため森林インストラクターとして自然塾の開催や山岳案内をしております。

## トピックス

**★勝見幸雄会員が「自伝」を出版**

**『遊びが仕事で、仕事が遊び』**




生い立ちの記
★注文は直接筆者に
090-7438-0880

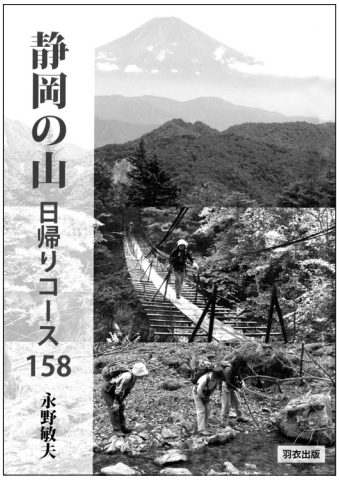
生まれ落ちた日から山に没頭した青年時代、木の仕事に取り組んだ後半生を豊富な写真と軽妙な文体で綴った勝見幸雄氏の人生の集大成。

価格　2，３００円

出版社　有限会社テラ　京都市

## ★永野会員がガイドブックを出版

### 静岡の山　日帰りコース１５８




定価　２，３００円（＋消費税）
発行　羽衣出版社

静岡県の12時間で登れるファミリーから熟達者までのコースを網羅した案内書

## 会員異動

**物故者**

霜田嘉一（９４８３）
平成28年３月２９日ご逝去

**退会者**

後藤　尚（１４８２６）
山賀一男（１５８６９）

**新入会員**

吉本恵子（１５８８９）
丹羽忠明（１５９０２）
小西　晃（１５９１１）
大島わかな（１５９２１）

## 編集後記

支部の行事も年々多くなっている。会員山行、公共事業のハイクセミナー、それに文珠山荘の行事が加わった。担当者のご苦労に感謝したい。巻頭言の支部長の「南アルプス山岳史」の意欲がうかがえる。支部に相応しい企画であり、内容を精査して早いうちに編纂委員が決まり軌道に乗ることを期待したい。

会報作りも限られた予算の中、内容あるものをと頭をひねっているが、いかに原稿を集められるかに掛かる。積極的な投稿をお願いします。

原稿の要望

- 送り先は　編集部永野敏夫
- TEL０５４-２４６-７０２２
- パソコン（ワード）で打ちメール
  転送　tirolgo@chabashira.co.jp
- 募集内容　連載「恐怖の体験」「山への想い」そして「山の生物」
  詩歌　随筆　貴重な山行記録など

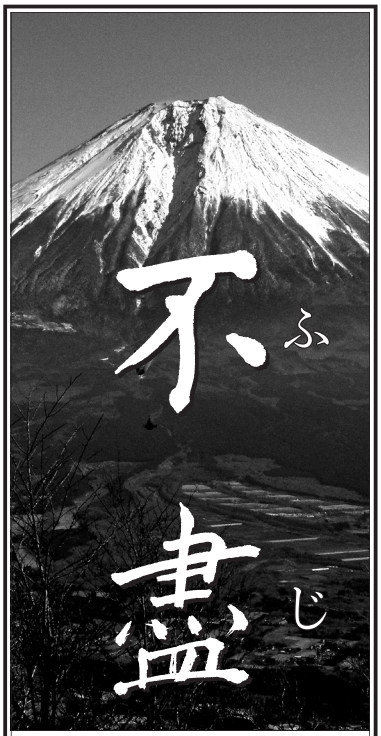
生命の危険や妖怪などの幻覚、熊など野生動物に出会った恐怖、また登山中珍しい野生動物や鳥類、珍しい野草、高山花などに出会った感動などまた詩歌、短歌、随筆なども取り入れ色合い豊かな会報が出来ればと考えております。

尚、山行、行事等の報告が長くなりがちですが要領よくまとめて頂ければ幸いです。

本場アルプスのオーストリアではハイキングコースの総距離が市町村の文化の高さの尺度にされ競って整備、拡張している。休日には老いも若きもファミリーもハイキングを楽しんでいる。日本は高齢化社会、それに児童が自然に接する機会が極端に少なくなっている。手近で安全に登れるコースを作ることは高齢者の健康や幼児の自然教育に役立つであろう。登山の先進国に学びたい。

永野　敏夫

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
大島　康弘
事務局　〒４２０-０９４８
静岡市葵区秋山町８-１３　木村勝利
編集責任者　永野　敏夫
印刷所　株式会社　三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎０５４-２８２-４０３１




題字・牧野衛　背景・永野敏夫

日本山岳会
静岡支部会報
2016（平成28）年秋季
第80号

## 巻頭言

## 《井川登山・観光基地構想主旨書について》

静岡支部長　大島康弘

一年前の「不盡」巻頭言で『井川を南アの登山基地に』と題して井川が登山基地として機能すれば、井川に賑わいを取り戻せるのではないか。その実現のために登山愛好者にできることがあるのではないかと提案いたしました。

以来、登山基地構想について関係者に意見を伺って来ましたが、構想実現を危ぶみながらも、構想自体に異を唱える声は聞かれませんでした。8月初旬、構想の主旨書を会員有志と共に井川在住の長島会員と検討する機会を得、基地構想に同意を戴きました。次頁にその全文を掲載します。

井川ビジターセンター
（食堂・売店がある情報の発信基地）

## 目次

★巻頭言　大島康弘　1
☆「井川登山基地・観光基地構想趣旨書」
★シリーズ―山への想い―第12話―
◆『松濤明さんを想う』　照内　豊　3
★シリーズ―恐怖の体験―第15話―
◆『避難小屋での恐怖体験』　中村博和　4
★エッセイ・論考
☆記念ハイキング「大日古道」　白鳥勝治　5
☆「山で出会った生き物」　永野敏夫　7
☆「文珠山荘」報告　諏訪部豊　10
☆「古い日本山岳会の表札」　山本良三　11
★会務報告　事務局　13
◆懇親会・報告　有元利通　14
★会員山行
◆「上河内岳～茶臼岳」　勝又千華　14
◆「富士見岳」　西澤祥陽　15
◆セミナー山行『二王山』　有元利通　15
◆「竜爪山」　西村しのぶ　16
★トピックス
◆「富士山は低くなった！」　有元利通　16
◆「ブルーポピーを求めて」　長野和義　17
★新会員の自己紹介
丹羽忠明・小西　晃・山賀一男
大島わかな・橋本耕一　18
★編集後記　永野敏夫　20

## 井川登山・観光基地構想
## 主旨書

本構想は南アルプス南部への入山基地を井川地区に建設し、登山者・観光客の便宜を図ると共に、井川地区の活性化を目的とする構想であります。

現在、登山シーズン中は白樺荘と聖岳登山口を結ぶ、１日２便の無料シャトルバスを井川観光協会が運行し、更に奥地の椹島、二軒小屋に向けて、特種東海フォレストが畑薙第一ダム付近の河川敷駐車場より、宿泊客専用の送迎バスを運行しています。日帰りの行楽客、テント泊の登山者は宿泊施設を利用しないのでこのバスには乗車することはできません。

車を使わない登山者にとっては夏山シーズンに静岡鉄道が１日１便、JR静岡駅と畑薙第一ダム間を運行するバスが唯一の入山手段です。JR金谷駅と井川を結ぶ大井川鉄道は終点の井川湖駅から奥地への移動手段がないため、残念ながら登山には利用できません。

荒川、赤石、聖、光など、雄大な南アルプス南部の山々。紅葉の比類なき美しさを誇る大井川渓谷。登山者や観光客を惹きつけて止まない美しい自然景観がアクセスの不便さ故に、注目されることなく、他の南ア入山口に客を奪われているのが現状です。

本来なら、大井川の最奥の集落である井川は登山や観光の基地としての役割を担うべきであるにも拘わらず、衰退の一途を辿りつつあるのが残念でなりません。

私たちは、井川に繁栄を取り戻すには、井川地区に大駐車場を有する登山・観光基地を構築することが最善と考えています。そしてこの構想は地元、登山者、企業、行政がスクラムを組んで知恵を出し合えば、必ず実現できると信じています。

『平和で豊かな井川の里再生』を合言葉に、私たちはここに井川登山・観光基地構想を提唱し、その実現を願う人々と共に、構想実現の努力を重ねる所存であります。

平成28年（2016年）7月

井川登山・観光基地構想実現を図る有志一同

### 井川登山基地構想の概略

**大　駐　車　場**：井川地区（例えば西山平）に有料の大駐車場を設け、登山・観光の車はすべてここに駐車し、上流の駐車場は閉鎖する。

**井川の街並み保存**：昭和30～40年代の山村風景を文化遺産として保存を図る。

### 実現に向けての課題

1）井川地区の関係者の主体的関与とリーダーシップ
2）東俣林道のバス、タクシー乗り入れ
3）関係する企業の理解と協力
4）大駐車場の用地確保
5）行政の支援と決断

言うまでもなく、この構想の実現の主役は地元です。私たち登山者にできることは利用者の側からこの構想の実現を関係機関に働きかけて、機運を盛り上げていくことだと考えます。

井川が輝きを取り戻すための第一歩は一般登山者が容易に入山できるシステムを構築し、入山者の増加を図ることです。

その基礎が築かれれば、井川は奥大井の観光基地として発展も視野に入ってくるでしょう。井川登山観光基地構想の主旨書を共通の認識基盤として、その実現のために各自が持つネットワークを駆使して地元や行政への働きかけが始まろうとしています。

入山の困難さが自然を保つ、という意見もありますが、井川を一般登山者が容易に入山できないまま放置することは『公益社団法人』の冠を戴いた日本山岳会の姿勢であってはならないと思います。

多くの支部会員がこの構想実現のために積極的に関与し、各自ができることを実行し、大きなうねりを作りたいと切に願っています。

シリーズ「山への想い」―第12話―

# 松涛明さんを憶う

照内　豊（5027）

85歳の誕生日を迎えた照内氏

松涛明さんは、北鎌尾根から槍穂高を経て、焼岳への厳冬期縦走を企て、入山早々から未曽有の悪天候に遭遇し、進退窮まって僚友有元克己さんと共に千丈沢四ノ沢出合にその生涯を閉じた。

大正11年3月父の任地仙台市に生まれ、小学5年生の時山登りを始めた。中学3年生で年間山行回数30余回に及ぶ。

東京近郊の山や夏の日本アルプス縦走などでは飽き足らず、谷川岳一ノ倉沢や本格的な冬山の単独行へと、猛烈な勢いでアルピニズムの世界に入っていった。中学5年生の夏、先鋭的登山活動を行っている徒歩渓流会に入会し、山行は益々果敢なものになっていった。

希望する高校に入れず、山行に専らの日々を送っていたが、当時、学籍が無いと兵役にとられる恐れがあった。昭和16年農大予科に入学、徒歩渓流会会員のまま、山岳部に入部した。

入部して数回は部活動に参加するも、学校山岳部のありかたに疑問をもち、部の山行より渓流会会員としての山行を続けた。やがて戦争は激化、学徒動員で昭和18年入営、南方戦線を転戦し終戦の翌年夏に復員復学した。復学後の山岳部ではOB扱いのようだった。

復学と登山活動の再開には随分と悩まれたようだが、山への思慕抑えがたく、物資不足と不安定な世情にもかかわらず、徒歩渓流会の指導的立場になって、以前にも増した山行を続けた。

『遭難は如何なる場合も起こしてはならない。遭難防止には万全を期すべきである。しかし、遭難を恐れての登山はあり得ない』これが松涛さんの登山に対する信念だったという。準備万端整え昭和23年暮れ、高瀬川の奥深く重荷を負って分け入ったのであった。遭難の顛末は、発見された壮絶な手記（遺書）により明

らかになった。

山は自分個人の力で登るもの、との強い思いと、より高きを目指すための考えから、山小屋の使用はもちろんサポートの利用は全く計画になかった。注目されるのは、入山直後の豪雨で凍った天幕で重い苦しみをするより、ツエルトと雪洞によって全行程を突破しようと、計画を大きく変更したことである。連日の風雪、特に悪いのは気温が比較的高く湿った雪のため、体が濡れたことである。1月2日、北鎌沢のコルで天候不良とコンロの故障で『登るか下るか岐路に立つ』と手記にあり、『夜、星空となる。ラジウスも応急修理で何とか燃え出したので明日は登高とする』とあるあたり、運命というものが痛切に感じられる。晴れ間はほんの一時で風雪続き、『雪洞は小さく、夜中入口を風に浚われ、全身雪で濡れる』。5日、最悪の状態に立ち至ったことを知り、生きるべくあらゆる荷を放棄して、最後の努力をもってなお槍を越えんとしたのでしょう。『手もアイゼンバンドも凍ってアイゼンツケラレズ、ステップカットデヤリマデユカントセシモ』。アイゼン無しであの氷雪の岩尾根がどうして登れる？　万策尽きて千丈沢に下ったものと思われる。

夕刻、四の沢出合について雪洞を掘り、一夜を過ごしているが、風雪は依然として止まず、『空身でもラッセル胸まで』到底湯俣迄下れる望みはなく、『サイゴマデ　タタカフモイノチ、友ノ辺ニ　スツルモイノチ』と、凍傷による不自由な手で手記を綴り、従容として死の座に就いたのである。

仲間と共に（前列中央）昭和16年頃の松濤氏
「農大山岳部報告3号より」

松涛さんはこの時26歳と10か月

輪廻転生の理まで書き残し、予期しない死に直面しての冷静沈着な振る舞いは我々後輩に多くの教訓を残してくれた。

**《我々ガ死ンデ　死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入リ、魚ヲ肥ヤシ、又人　ノ身体を作ル　個人ハカリノ姿　グルグルマワル　松ナミ》**

私が新人だった時、松涛さんは学部3生でしたが、部の山行を共にする機会はありませんでした。しかし、氏の人に接する優しさ、山に対する厳しい真摯な態度は私の山に向かう指針でした。

捜索時は、（第4次捜索）徒歩渓流会、農大合同隊に参加しました。

氏への思慕抑えがたく、拙い一文を書かせていただきました。

シリーズ「恐怖の体験」―第15話―

## 避難小屋での恐怖体験

中村　博和（15262）

20数年前のこと、那須岳の紅葉を楽しみに1泊登山に出掛けた。貧乏学生の身で三斗小屋温泉に泊まる贅沢は出来ず、那須（茶臼岳）に登った後、峠を下った窪地にある土間と板の間の簡素な避難小屋に宿泊した。

普段から風の通り道になっている峠で、その日も強風に難儀した。夜半から

雨も降りだし寒さも増して、熟睡できずに明日の行動を思案していた。

夜も更けたころ、嵐の中を「ボコッ、ボコッ」と革の重登山靴を履いた登山者が小屋に近づいて来た。

土間と板の間の簡素な避難小屋

歩みが大層ゆっくりである。峠から来たとしたら日中でさえ凄まじい強風だったのだ、夜中にあの峠を越えてきたのではさぞ疲労困憊しているのだろう！　今にも小屋の中に倒れ込んでくるのではと身構えた。

足音は小屋の出入り口の前で一旦止まった。やがて重い扉を開くと思いきや、そのまま小屋の外をグルグル回り始めたのである。入口を探しているのか？いや、確かに扉の前で一度立ち止まった。

「ボコッ、ボコッ、ボコッ、…」

やがて足音は消え、人の気配はなくなった、が、もしやこの世のものではないのではと、恐怖と寒さで寝袋の中で身を縮めてほとんど眠れぬ夜を過ごした。

翌朝小屋から出ると青空が広がっていた。ひんやりと澄んだ空気に満ち那須岳は初冠雪、周囲は錦秋に彩られそれは見事な光景であった。

学生時代の忘れえぬ山旅である。

## エッセイ・論考

# 「山の日」記念ハイキング「大日古道」に参加して

### 〝在りし日の井川村に想いを馳せて〟

白鳥　勝治

新しい祝日「山の日」を記念して、10月16日に、西部地区（湖西連峰）、中部地区（大日古道）東部地区（宝永山）、の三地区で記念ハイキングが実施されました。

中部地区（市山岳連盟担当）の「大日古道」は、静岡市の口坂本から、安倍川との分水嶺にあたる大日峠（1160m）を越え、旧安倍郡井川村の本村までの約9kmの山道の名称である。

昭和30年の春、県スポーツ祭の登山部門で、県山岳連盟が主催した大日峠越えに参加した。リーダーは、第三代支部長の山本朋三郎氏らであった。上落合から隊列を整えて歩き初め口坂本の吊り橋を渡って峠道へ取り付く、踏み固められた道は歩きやすかった。また、頭上高く通っていた索道に、樽や袋などが吊り下げられて運ばれていく有り様に目を見張った。途中に、杉の大木の根元から水が湧き出ている所に隣接する水呑茶屋では大福餅やお菓子を売っていた。

展望の良い峠に出ると、山本朋三郎氏から南アルプスの山々の説明を受けた。峠を下って大井川の長い吊り橋を渡り本村に着くと、中学校のグランドで、青年団による井川音頭や井川小唄の踊りの歓迎を受けた。

その後、昭和32年の第12回国体や、昭和39年の国立公園記念登山などの折にこ

の大日峠を何回か越えた。

古い日記を繰りながら数十年振りに「大日古道」コースに参加しました。

今は往き来する人も少なく、杉檜のうす暗い人工林の中に、元禄年間に一丁目ごとにおかれていた33体の観音像は既に、一体も無く番号札だけが寂しげに立てられていた。しかし、土台だけが残る水呑茶屋跡や杉の太木の下から湧き出す泉が、昔の姿をとどめていた。

峠にはピクニック広場があり、家康に献上するお茶を貯蔵したお茶蔵（八十八夜のお茶を熟成させて秋に茶壷に詰めで駿府まで運んだ）が再建されており、昔を偲ぶことが出来た。

当日は天候に恵まれ、峠の広場からは眼前に大無間山をはじめ、赤石岳や聖岳など南アルプスの雄姿を眺めることが出来た。峠からダムへの下りは大正時代におかれた33体の観音像に代わって、新しい石造りの観音像が奉納者の名前入りで新たにおかれていた。

湖畔からは依頼すると市営（無料）の渡し船が迎えに来てくれる。10分ほどの渡し船だが、小春日和に湖面を渡る柔らかな風に、しばし憩う。

井川湖上を往来する無料の渡し舟
正面に大無間山を望む

今回の参加者は一般の人を含め45名であった。船着き場からは二組に分かれ、A班とC班は井川「発電所見学」へ、B班は中野の観音堂拝観に向かう。

メンバーは15名、市岳連から2名、JACから木村氏と私が案内役を勤めた。歩いて30分程で中野の観音堂に着いた。

お堂に奉られている十一面千手観音像は、行基の作と伝えられているが定かではない。しかし、平成17年県の有形文化財に指定され、他の四体の仏像と共に近年修復されている。拝観者は事前の連絡が必要である。

この仏像は中司卿家の守護佛で、長禄5年（1461年）に仏門入りした「宝泉禅門」の墓石があり、堂守りであったとされている。その後は近くに住む農家の田畑さんのお宅が代々堂守りを務めている。

田畑さんからは丁寧な説明を戴いた後、年一度のご開帳の折、お籠りで干し柿と共に食べたという、小さな里芋を竹櫛に3個刺した田楽焼きと、自家製のお茶を入れて参加者全員に振舞ってくれた。

旧井川村の歴史は古く、縄文時代の田代の割田原遺跡が物語っている。古くから金が採掘され、笹山金山は室町時代の享禄4年頃から、江戸時代の慶長年間の家康の時代まで続き「今川小判」や「慶長大判」等に使われたとの記録がある。

また、木材の産地としても、慶長19年（1614年）頃、家康は井川七ケ村の支配を委ねていた井川の郷士、海野弥兵衛元定らに駿府城本丸の御用木として、檜、柏など約2万5千本を搬出させている。

近代では、明治28年に大倉喜八郎が奥山2千6百町歩を買い取って以来、大正時代を経て昭和に至るまで盛んに伐採が

行われた。

このような時代を経て、大日峠越えの道は、井川村を訪れる多くの人々の往来に利用されてきた、明治14年8月、外国人旅行者としてイギリス公使館の書記官アーネスト・サトウがはじめて訪れている。登山者としての記録は、明治44年と翌45年に大日峠を越え、南アルプスを目指した日本山岳会員の中村清太郎の記録が「山岳」に記載されている。その後、昭和初期に冠松次郎などが、ここを越え、南アルプスに入山している。

今回、貴重な歴史資料を頂いた久保田三郎氏と、「大日古道」のハイキングに、近代文明の歴史を開示する井川ダム「発電所見学」や、古代の歴史を残す「中野の観音堂拝観」を加えるなど卓越した企画をされた静岡市山岳連盟のみな様に深く感謝申し上げます。

**「山に楽しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する日」**という「山の日」の趣旨を胸に、水没前の井川村に想いを馳せ、再び文化の香り高いユネスコエコパークの町として発展する井川の姿を思い浮かべながら、大日峠越えの旅を終えた。

# 山で出会った生き物――山の主　ツキノワグマ

永野　敏夫

## クマに初めて出会う

目覚まし時計が鳴らず1時間ばかり遅れて天幕を出発した。10月中旬月影が未だ中空に高く四辺の山を黒く浮き立たせ、森からは闇を裂く鹿の声が聞こえる。長い尾根を登りつめ麻布山に着いた頃、空もようようと明けはじめていた。遅れを取り戻そうと休みもそこそこに黒木の茂る下りに掛った。広葉樹林に入り笹薮が出始め鞍部に近づいた時であった。突然目先に黒い物体が尾根を駆け抜け笹薮の中に潜った。クマだ！　咄嗟に木の影に隠れ動悸を押さえカメラを構えた。クワゥ　クワゥ　クワゥ…小熊だ。5分、7分一向に姿を見せない。二足歩行の動物と初めて出くわしたのか恐怖に慄のき親に必死に助けを求めている声のように思えた。この時期冬眠を控え食には貪欲な頃だ。近くには母親が居るはずだ。長居は危険、抜き足差し足忍び足でその場を抜け先に向かった。鳴き声はしばらくの間続いていた。バラ谷ノ頭から黒法師岳を一人で縦走したときのことであった。以降ツキノワグマに12回ほど遭遇している。

## 木から飛び降りたクマ

赤石、白峰山脈を縦断する世に言う伊奈街道が明治19年に開通した。そもそも駿河の魚を食べたいとの発想から生まれた遠大な計画であったが、魚が運ばれたのも一回だけだったと言われ数年後には廃道になった。その20年後荻野音松が踏査し、その記録が残されている。この幻の道の一部でも辿ってみたいと早川湯島から白峰南嶺別当代山に向かった。滑河内の右岸尾根は予想どおりの藪尾根、鹿声も賑やかであった。4時間も登ると唐松林の広い段に着いた。記録による六万平らしい。広く平な草場、水場も近く野営にはこの上ない場所だ。まだ陽は高いが野営を決め込む。焚き火を囲っての晩餐、闇夜を照らす月光が原始の雰囲気を盛り上げてくれた。翌日早暁のうちに発つ。当時の道形はほとんど判明できず、別当代山の南面にかすかに道らしきもの

が認められる程度。山頂を踏んで稜線に上がる。街道は西のジャガ沢を巻きながら大井川西沢出合に下りているはずだ。稜線を北行しオシャリ沢山に出て東尾根に入った。獣道が断続する藪尾根だ。

1，800m辺りまで下ると黒木林は明るい広葉樹林に変わりしばらくするとまるで暴風雨にでもやられた跡のような異様な光景が目に入った。熊の仕業だ、こんな風景は過去に何回か見ている。ミズナラの小枝やドングリを食べた殻が散乱し、クマ棚があり木に登った爪痕があちこちに見られ、糞がある。近くに居る、静かに下れば遇えるぞ、仲間に伝える。三角点のある尾根の分岐を湯島方向に採る。道形のないかなり急な尾根で足元に目線を集中して下っている矢先ドサッ、異様な音が聞こえたと同時に「クマだ！」妻が叫ぶ。私のすぐ後の木から飛び降りたのだ。何処だ、谷側に逃げた、ガレ縁に出ると今まさに急涯を土石を巻き上げながら駆け下っている。そのうち足が回らなくなってごろごろと転げ落ち挙句の果て大岩に激突して動かなくなった。しばらく様子を見届けたが立ち上がる気配はない。即死か、私たちの存在を報せていればと後悔と罪意識が残った。合掌をして鎮痛な想いでその場を立ち去った。

クマヘギ…甘皮を食べた痕

## 山の何処にもクマはいる

木登りの熊は池口岳の西尾根でも5mも離れぬ所で出会った。これはウダイカンバの木で、若葉を食べていたのだろう。ズルズルと滑るように下りると谷に向かって一目散に逃去った。寸又川源流の千頭山では親子熊に出会い、親熊は幹に隠れてウオー　ウオーと恐ろしい声で吼え、子熊が遠ざかった所を見計らって去った。木陰に隠れて吼えること自体すでに逃げ腰の証拠、これは恐れるに足らず、吼える熊は白峰南嶺小河内岳西尾根でも出会った。谷をうろつくクマには数回、雪の斜面を駆け下る熊にも出会った。最近では寸又峡温泉の兎辻近くの道路でのっさのっさと歩いているクマに会った。観光地という場所が場所だけに温泉街のみやげ物店の主人にこっそりと告げておいた。云々言わずにいきなりズドーンとクマがやられかねないからだ。

親子熊の対角線上に入る危険が言われる。友人がこれを体験した。結果は親は尾根に逃げ、子は木に登ったという。又別の友人の夫婦からは、背後に立ちあがったクマに出会い、やられると思った瞬間踝を返し藪の中に逃げ去ったという。奥山で襲われたという話は山の先輩からも、友人からもいまだ聞いたことがない。私自身の経験からイノシシの方がよほど怖いと思っている。

## 奥山ではクマが先に逃げる

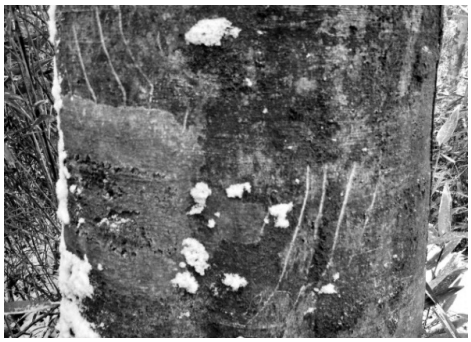
クマの痕跡はいたるところで発見できる。土や雪面に残された足跡、クマハギ、大きな糞、クマ棚、枯れ木をかじって虫を食べた痕、大きな石をひっくり返してアリを食べた痕、夜露しのぎに笹や枝木をよじり編み上げたエチコ、ドングリを

噛み砕き実だけを食べ殻だけを残した痕等々。　これらの生々しい痕を発見すれば近くにクマが居るはずだ。クマも性格の違いが有り、中には気が強いものや乱暴ものもいるだろうが、体験からして出会った瞬間慌てて逃げるのは決まってクマの方であった。逃げ場は幾らでもありあえて決闘する訳もない、〝逃げるが勝ち〟の戦法であろう。対面して逃げなかったらどうするか。断定できるものはないが、動転するだろうがまずは慌てぬことだ。目を逸らさず争う意思のないことを知らしめたり、ゆっくり後ずさりして距離が開いたところで逃げるのもいいだろう。大声を上げたり、背を向けて逃げるのは却って攻撃される危険性があるだろう。

## 例年にない出没の数と死傷者数

今年はクマの出没数や死傷者数が例年にない数にのぼった。そのほとんどがいわゆる中山間地であり山菜採り、茸狩り、タケノコ狩りの最中であったとされる。

山村人口が激減し廃屋が増え、又ドングリなど餌になる自然林がなくなってきた。いわゆる中山間地の環境の変化が大きな原因であろう。これはクマに限らず野生動物一般にいえることである。茸、タケノコ、山菜はクマのみならず野生動物たちの好物であり彼らにしてみれば貴重な天然の畑である。縄張りの意識も芽生えているかも知れぬ。人間には他にもうまい食べ物がワンサとある。この位は譲り渡す配慮があってもいいではないかと思う。



クマが木に登った爪の痕
（ブナの実を食べるため）

## クマが一番怖いか

今年クマによる死者は4人、被害のたびにその怖さを誇張したようなマスコミの報じ方には疑問に思えてならない。クマによる統計的な死者は年2人未満。因みにスズメバチが20人、毒蛇が10人ほどである。最近はマダニによる死者も毎年出ている。これらの方がよほど怖いのではないだろうか。この世の中１００％安全な場所や空間があるだろうか。海、川しかり、市街、道路しかり、死に至る事故は山だけではなく至る所に潜在している。

クマが日本列島に住み着いたのはヨーロピア大陸と陸続きの氷河時代30万年～50万年前、人類が住み着いたのがせいぜい2～4万年前。クマは遥かな先住者であり見方を変えれば大地主に当る。登山の際お伺いを立てて入山してもおかしくはない。そこのけそこのけと鈴を鳴らして登るのは失礼千万とは言えないか。それにせっかくの野生動物や鳥たちとの出会いのチャンスを失い、下界の騒音から開放される静寂な空間を台無しにさせてしまう。それほど怖ければ山に入らぬことだ。山での遭難死者は毎年２００人を超えている。道迷い、滑落、転落、雪崩、落石、そのほうに注意を払い、技術を磨き体力を鍛える方が

よほど死から身を守ることにはならないか。

## 居場所を奪われゆく生物たち

クマは山の王者、クマ有ってこそ自然豊かな日本の山だ。ツキノワグマの生息数は15，000～25，000頭と言われ、そのうち2，000～3，000頭が毎年殺害されている。九州は絶滅、四国や西中国、紀伊半島は危機的状況、伊豆半島はすでに明治時代に絶滅、富士山周辺も怪しくなって来ている。列島からいつ消えても不思議ではない状況に来ているのではないか。明治末期には日本オオカミが、昭和中期にカワウソが絶滅、せめて我々が生きていた平成時代にクマが…にならないよう願ってやまない。

地球は万物の生物が織り成す織物、今ぼろぼろにほころびてしまっている。その要因のほとんどが人類の行為から来ている。口を開けば自然との共生、共存と言うが、真逆のことが平然と行われている。南アルプスのどてっ腹にリニアカーのトンネルを掘り、沖縄県では辺野古軍用飛行基地やヤンバルの森近郊に米軍のヘリパットを作ろうとしている。どれも掛け替えのない豊かな自然が残された海や山や山麓である。南アルプスには地球の南限とする雷鳥やハイマツなど、辺野古にはジュゴン、島の希少な原生林ヤンバルにはノグチゲラ、ヤンバルクイナなどそこだけにしか生存しない生物が居る。人類だけの成長戦略がいかに他の生物の生存権を脅かし、犠牲の上に展開しているか。このあたりで山の主クマの声を聞いてもよかろう。

## 《文珠山荘》報告

文珠山荘運営委員長　諏訪部　豊

文珠山荘は荻野恭一会員が息子の士郎さん（故人）と共に8年2ヶ月を掛けて建てたログハウスです。これを支部で引き継ぐべく昨年6月に大掃除を行い、利用を始めました。1年余りが過ぎた現状の報告をします。

荻野さんはここで一人住まいをしていました。

それを多人数で利用することになったので必要な物が異なりました。

そこで不要な物は下におろし、必要なものはなるべく金を掛けないように寄付という形で持ち寄りました。今では20人程度までならば鍋料理ができるようになりました。もちろん材料は持参です。電気は来ていて冷蔵庫はあるのでビールは冷やせます。

最大の懸案事項は水です。水源地は文珠岳への登山道を山荘から15分ほど登った先の左側の沢です。ここから山荘までホースで引き込んでいます。これまで何度も水源地まで行きましたが降雨直後はともかく、普段はチョロチョロとしか流れておらず傾斜も緩いこともあって取水には抜本的な対策が必要だと考えています。ゴミの混入を防ぐ簡単な小屋掛けも必要でしょう。さらに水が一旦途絶えると敷地内にある500L貯水タンクの水が腐り、総入れ替えをしなければなりません。いっそのこと水源地は放棄して毎回水を持って上がる方式にしたらとも思います。が、そうすると炊事は持参の水で何とかしても水洗トイレが使えず、ウォシュレットもだめ、もちろんシャワーもだめ、といった不便さを享受しなくてはなりません。各自が10L、20Lと

持ち寄れば良いかも知れませんがそうすると今度は車でなくては山荘に行けません。水に関しては悩みが尽きません。

次は畑の扱いです。荻野さんの張り巡らせたネットはそのままです。その畑で野菜を作ろうと試みた近くに住む小柳会員夫妻も有元さんもイノシシの被害に遭いました。

ところで山荘の駐車スペースは割と狭く、道路に車を停めることによる苦情が2回寄せられました。ということであの畑を更地にして駐車場にする案が有力になりつつあります。しかしどのように実現するかが問題です。重機が必要です。元が畑だったので土が柔らかく、砂利も大量に必要です。その費用はどう工面すれば良いのでしょうか？クリアしなければならないことが多い状況です。

支部会員には個人的利用も含めてあの山荘を気軽に利用して頂きたいところではありますが水の問題がまだ解決しておらず自信を持って「使って下さい」と言えない状況です。

しかし年6回計画している山荘行事は参加人数が多いので毎回水源地に上がって水を確保する余裕があります。

まずはそれに参加して下さい。そして良いアイデアをお寄せ頂ければ幸いです。

## 古い日本山岳会の表札

山本　良三（5768）

それは日本登山史の大家であった山崎安治氏（早大山岳部、JAC常務理事、評議員など歴任）から直接頂いた楢板の表札です。が、よくよく見ると達筆で社団法人　日本山岳会と読める。

会報「山」によると、社団法人の認可は昭和16年（1941）1月で、会長は小暮理太郎であった。認可には旧制静高山岳部（現静岡大学山岳部）の前身旅行部に在籍した加藤誠平（東大教授、東大スキー山岳部長歴20有余年、東大バルトロカンリ遠征隊長）の力があったと記されている。

虎ノ門事務所（ルーム）は昭和4年（1929）虎ノ門琴平町の不二家ビルに集会室兼図書室を開設昭和8年（1933）事務所を図書室に移転した。それが昭和20年（1945）5月25日の空襲で焼失してしまった

私はこれまでずっと、昭和16年以降虎ノ門ルームの入口に掛かっていた表札だと思っていた。すると今年66周年目ということになる。

確か山崎さんからそのようにお聞きしたような気がするが、大概一緒に酒席を共にしていての話なので、私の聞き間違いかもしれない。もしそれが事実なら、戦火の中から誰が表札を持ち出したのか。該当しそうな人は時の常務理事塚本繁松氏か折井健一氏（早大山岳部、JAC常務理事、評議員歴任）以外に考えようがない。

それを後日、山崎さんが譲り受けて、自分の書斎に保管していたものだと、私は長年にわたりそのように理解し、そうに違いないと思っていた。だが、確証はありません。

昭和21年（1946）JACは事務所を御茶ノ水にあった岸体育館内に置き、昭和24年（1949）岸体育館敷地内に木造ルームを建設していた。が、昭和39年（1964）東京オリンピック開催、岸体育館の移転に伴い渋谷区原宿の「外苑コーポ」へ、更に神田錦町「向井ビル」、文京区湯島「さくらビル」へと幾度か移

転を余儀なくされた。

今となっては、どこのルームの入口に掛かっていた表札なのか定かではないが、ルームが変わる度ごとに表札を取り変えたのかもしれない。表札を大切にしない風習はよくない。

今般、静岡に引っ越してきて、長年書斎に保管していた表札の使い道が見つかりました。それは支部で荻野さんから譲り受けた文珠山荘の玄関に掛かることです。

昭和52年（1977）4月の総会（今西錦司会長）で自前のルーム購入が承認され、待望のルーム購入が本格化した。当時若手の理事ら（橋本清、大倉昌身、神崎忠男、山本良三）が果敢に動き物件探しから、契約、内装設計を手掛け、昭和53年（1978）に現在の四番町「サンビューハイツ四番町」に移転した。

振り返ってみると御茶ノ水ルームを離れてから更に3回の引越しを経て、ようやく自前のルームにたどり着いたことになる。

万冊を越す図書の移動が大変であった。私は御茶ノ水時代から図書室に出入りしていたことから、引っ越しのつど担当理事から依頼されて、毎回の図書移動に関与してきた。

そのような経緯から、図書委員長の山崎さんと親しくなり、亡くなるまでの15年間、家族付き合いをさせていただき、JACで最も大きな影響を受けました。

一時期、山崎さんと私を早大山岳部の先輩後輩だと勘違いした会員もいました。

山崎さんが亡くなる前夜、元静岡支部会員であった河村榮二先生が主治医の北里病院を深夜に訪ねました。患者は苦しそうでしたが意思の疎通は問題なく、私が帰り際に〝山崎さんあの世で待っていてください、いずれ私もお側に参りますから〟というと、コックリと頷いて、手を振って別れました。翌早朝、山崎さんは誰に見守られることもなく、黄泉の国へ旅立たれました。

あの世で山崎さんは私が来るのを待っています。

ここで少し長年静岡を離れていた挨拶代わりに、自己紹介をさせてください。

私は静岡大学山岳部を出て、東京の中外製薬に入社しました。

以後一度も東京を離れることなく、後半20年は国際事業担当として世界を飛び回りました。JACへの入会は1964年8月、入会紹介者は山本朋三郎氏・牧野　衛氏。会員番号は本多勝一氏と2番違いです。理事、常務理事、委員長、評議員を歴任しました。

30代そこそこで理事となりましたが、当時は理事とは小間使役、小使でした。今の理事会は保守的な官僚組織のようで、全くパイオニア精神が感じられません。

また65歳以上の会員数が80％余を占めている会なのに、役員の定年が70歳までとは、理解に苦しむ。

来年の総会では、70歳定年の規約を外さないと、会長に人がいない。若手若手と言ってユースクラブの振興に旗を振りましたが、入会者よりも退会者の方が多いという皮肉な結果、本当に若手を集めたいなら、紹介者2名廃止、入会金廃止など、どうぞお入りくださいという姿勢を示さないと、若手は振り向きもしないだろう。

（2016．8）

## 事務局　会務報告

★は別途報告が記載されています。

### 平成28年

| | |
|---|---|
| ４月９日㈯～10日㈰ | 事務局「第32回全国支部懇談会」15名参加（担当・越後支部） |
| ４月13日㈬ | 事務局「平成28年度・静岡支部通常総会」 |
| ４月16日㈯～17日㈰ | 文珠山荘「花見と野趣の会」 |
| ★５月８日㈰ | 会員山行・セミナー下見「竜爪山」18名参加 |
| ５月11日㈬ | 定例会　17名出席 |
| ５月15日㈰ | 公益事業・セミナー「竜爪山」会員6名 セミナー生3名参加 |
| ★６月５日㈰ | 会員山行・秋の下見「富士見岳」8名参加 |
| ６月８日㈬ | 定例会16名出席 |
| ★６月12日㈰ | 公益事業・セミナー「二王山」会員8名 セミナー生7名参加 |
| ６月15日㈬ | 役委員会 |
| ６月25日㈯～26日㈰ | 文珠山荘「掃除と山の歌、歌う会」会員6名 その他4名参加 |
| ６月29日㈬ | 森林組合で森竹史郎氏に会見「井川登山基地構想」について<br>大島、大石、山本、白鳥、木村 |
| ７月13日㈬ | 定例会16名出席 |
| ★７月16日㈯～18日㈪ | 会員山行「南ア、上河内岳・茶臼岳登山」14名参加 |
| ８月11日㈭ | 公益事業・山の日記念行事「講演会・写真展」 |
| ★８月17日㈬ | 集会「納涼懇親会」24名参加 |
| ９月７日㈬ | 役委員会 |
| ９月10日㈯～11日㈰ | 文珠山荘「掃除と納涼祭」会員15名 その他4名参加 |
| ９月10日㈯～11日㈰ | 「平成28年度支部合同会議」大島、木村、出席 |
| ９月14日㈬ | 定例会 17名出席 |
| ９月24日㈯～25日㈰ | 会員山行「黒部川・下の廊下」10名参加 |
| ９月27日㈫ | 大井川鉄道社長、前田忍氏に会見「井川登山基地構想」について<br>森氏（島田市議）、大島、八木、木村、参加 |
| 10月１日㈯～２日㈰ | 「中部4支部交流会」「御嶽山慰霊登山」13名参加（担当信濃支部） |
| 10月12日㈬ | 定例会 15名出席 |
| ★10月16日㈰ | 公益事業「山の日記念ハイキング」東部「宝永山」（静岡県山岳連盟）<br>中部「大日古道」（静岡市山岳連盟）・西部「湖西連峰」（静岡県勤労者山岳連盟） |
| 10月29日㈯～30日㈰ | 「文珠山荘でハロウィン」 |
| 11月５日㈯～６日㈰ | 会員山行「南ア深南部・不動岳」11名参加 |
| 11月12日㈯～13日㈰ | 会員山行（懇親山行）「富士山表口村山口登山道」20名参加 |
| 11月19日㈯～20日㈰ | 事務局「神奈川支部との交流会」「箱根、金時山」18名参加 |
| 11月27日㈰ | 公益事業・セミナー「富士見岳」会員9名参加予定 |
| 12月３日㈯～４日㈰ | 「年次晩餐会」東京・京王プラザ |
| 12月14日㈬ | 定例会 |
| 12月10日㈯～11日㈰ | 「文珠山荘で忘年会」14名参加予定 |

### 平成29年

| | |
|---|---|
| １月15日㈰ | 集会「静岡支部新年会」会場「東静岡、天然温泉・柚木の郷」13：00～予定 |
| ２月18日㈯～19日㈰ | 会員山行「雪山・山スキー」12名参加予定 |
| ３月11日㈯～12日㈰ | 「文珠山荘から文珠岳登山」14名参加予定 |
| ４月12日㈬ | 事務局「平成29年度・静岡支部通常総会」 |

## 懇親会報告

有元　利通

8月17日、支部恒例の懇親会が「小田急センチュリーホテル静岡」中庭で18時半より開催された。

乾杯の後、静岡支部へ転籍された山本良三さんの紹介、入会希望の山崎洋君の紹介などがあった。

その後、照内豊会員の八十五歳の誕生日ケーキがプレゼントされ、皆でお祝いしました。ビール、ワイン、日本酒など飲み放題、バイキング形式で食べ放題であったので忙しく、且つ、楽しい一時間半を過ごしました。

（出席者）照内、大石、八木、杉本、長谷川、大島康弘、有元、白鳥、高須、青野、杉本、諏訪部、熊岡、篠原、小笠原、増田、中村、西澤、長野、橋本、仙石大島わかな、山崎、

## 会員山行

## 上河内岳・茶臼岳
### ―横窪沢小屋を訪ねて―

勝又　千華

帰路の畑薙大吊り橋に揺られながら振り返る。慌ただしくも充実し、貴重な体験もできた3日間だった。

20歳から84歳までの14名が目指すのは、木村勝利氏管理の横窪沢小屋だ。平坦なトラバース道が多いウソッコ沢小屋までは一同足並みを揃え、そこから先は前後二手に別れた。横窪峠までは急登が続く。息を切らして峠につくと、開けた木々の間から小屋の赤い屋根が見える。そこへちょうど木村氏が出迎えてくれたものだから喜びもひとしおだ。小屋に着いてまもなくすると後方チームも到着し、しばしビールで火照りを癒す。

2日目は上河内岳・茶臼岳を目指す。長い樹林帯を抜けると高山の花々がお目見えだ。ウサギギク、オトギリソウ、ハクサンフウロが多く、茶臼小屋周辺は多種の花が咲き乱れていた。朝は晴れていたが、上河内岳に着く頃にはガスに覆われ眺望は皆無。しかしながら茶臼岳の頂上ではタカネバラを見ることができた。

その日の夜は湯山直文氏が釣ったイワナを骨酒にして皆で飲んだ。骨酒という飲み方を生まれて初めて知った。日本山岳会の面白いところの一つに、なかなかできない経験を思いがけずするところにある。湯山氏の釣りをするという発想がなければ、また木村氏の管理する小屋でなければできなかったことだ。どんぶりに口を近づけると、熱い日本酒と魚の香ばしさ混じる湯気が鼻孔をくすぐる。あのときの骨酒は、今回の山行の思い出の味として記憶に残るだろう。

横窪沢小屋前で木村氏と（前列一番左）

さて、今回私は木村氏から夕食準備のサポートを仰せつかっていた。要領悪くお邪魔だったとも思うが、猫の手よりはマシなはずの私の手が、少なからずお役に立てたのではと前向きに考える。食卓に並ぶ品数が多いと準備も大変だ。

冷めないうちに人数分を用意するには、段取りを考え、手を動かし、タイミ

ングを見計らうことを同時にやらねばならない。準備から盛り付けまで、木村氏のこだわりが随所に光る。細かいところまで手を抜かないのは、小屋を訪れた一人一人を慮る気持ちが根底にあるからだろう。

それを裏付けるように、差入れのお酒の数々や小屋に立ち寄って挨拶していく人など、木村氏の細やかな心遣いが多くの人に伝わっていると感じた。裏方の仕事を手伝わせていただいたことで、『一期一会』の本来の意味とその言葉に込めた木村氏の信念に触れたと思う。

## 会員山行

### 第2回　富士見岳　6月5日(日)

西澤　祥陽

今回は、11月に行われる、ハイキングセミナーの下見を兼ねた山行です。参加者は、小川会員と奥様プラス会員6名の計8名の参加となりました。

東海地方も梅雨入りしたということで、1日中、雨がパラつく生憎の天候となりました。

静岡駅前を7時3分発のバスに乗り、1時間弱で俵沢バス停に着きます。ここで、小川さんご夫婦と合流し、軽いストレッチ、準備をして、出発です。

小学校の真横を通り、集落の中を抜けて行きます。車道を歩き、やがて段々畑の茶畑を抜け、林を抜けて、わさび田を横に見ながら登って行くと、俵峰の集落が見えて来ます。やがて、竜爪山へと通じる東海自然歩道の標識が見えてきます。

山の上のこぢんまりとした集落で、どこか懐かしい風情があるところです。

集落を通り抜け、やっと登山口の交差点に出ました。ルート図の標識があり、この先で富士見岳と真富士山のルートに分かれているようです。今回のこのコースは、なかなかアプローチが長く、ハイキングセミナーの時は、行き、帰りのこの行程がちょっと大変かも知れません。

分岐から杉林の中へと入って行きます。30分程行くと、引落峠に出ます。その名の通り、気を緩めると谷側に引き落とされそうな急斜面です。道も崩れている所がかなりあります。その先、大滝の手前の丸木橋に出ますが、大分、朽ちていて、ロープに捕まり、1人ずつ慎重に渡ります。大滝で休憩、水の確保もできます。間も無く一本杉の分岐を右に折れ、やがて富士見岳山頂に到着です。

富士見岳山頂にて昼食、天候が回復しないので、早々に下山。午後2時過ぎには、全員無事に下山しました。

危険箇所は、引落峠と大滝の手前の丸木橋です十分に気を付けたいところです。

富士見岳に登るのは、初めてでしたが、大変楽しく登ることができました。

## ハイキングセミナー

### 第2回　二王山

有元　利通

6月12日(日)、静岡駅北口6時50分集合で集まった参加者はほぼ全員竜爪山（桜峠入口から登る）に参加した人たちでした。一般参加者7名に支部会員7名であった。7時3分発梅ヶ島温泉行きのバスで出発。途中で会員1名が乗車して15名がそろった。天候は青空が見えて降る心配はなさそうだった。梅ヶ島の入り口、湯の森で下車。

挨拶、自己紹介の後、注意事項を伝えストレッチをして登山届をポストに投函して出発。4月に下見をしたときに少し咲きかけていたイワカガミは終わり下の

方につつじの残りがほんの少しで中腹から上で目立ったのはギンリョウソウくらいのものだった。

今回は一般コースなので前回会員山行で歩いた込岳経由のような急登もなく、それゆえ落伍者もなく11時過ぎには二王山の頂上に着いた。一般参加者、会員も含めて第一回の竜爪山の方がよほど大変だったと感想を漏らしていた。東の頂上から西側の切り開きがある三角点ピークに移動して昼食となった。ウイスキーのお湯割りもちょっと出て和やかに昼食タイムを過ごした。食後、平井会員からセミナーだから自分は普段の山行からこんなものを持っていますと言って自分のザックのものを取り出して見せ、説明をしてもらった。食後は、スムーズに湯の森に下った。早いので予定していた静岡市営梅ヶ島温泉「黄金の湯」にバスで向かった。早く帰る平井会員と温泉に行かない参加者は平井会員の車で下って行った。一行は3時前に入湯。バスで静岡駅前に戻って解散、希望者のみ反省会となった。

参加会員　八木、有元、小笠原、平井、中村、西澤、勝又、橋本

## 竜爪山

西村しのぶ

バスで、桜峠入口で下車する。新東名の側道を行き桜峠に8時着。有元さんから挨拶、軽くストレッチして出発する。

文珠岳へのルートは新東名で寸断され、高架下をくぐり、新東名北側階段下へ着く。山の法面に付けられた急な階段に一汗も二汗もかき、開かれた茶畑や鉄塔下を通過して633.2mの三角点で小休止する。樹林の登山道を整備しながら登ってゆく。若山分岐で東海自然歩道と合流し、明るく開けた文珠岳に11時50分着。さすが人気の山、山頂は老若男女で賑わっている。ゆっくりランチタイムを楽しんで12時50分山頂を後にする。

若山分岐まで戻り展望のない若山を通過し牛妻へと下る。途中、雑木林の中にカンアオイの群落があり暗紫色の花をつけていた。帰途、文殊山荘に立ち寄り先発隊が用意してくれたお茶をごちそうになる。茶畑の広がる農道を一気に下り、牛妻坂下バス停から17時03分のバスに乗車し、静岡駅に着く。

なかなか、タフな山行でした。

参加者　有元　大島康弘　木村　八木　諏訪部　荻野　篠原　西澤　中村　橋本　榛葉　大島わかな　西村

## トピックス

## 富士山は低くなった！

### 標高の改定

有元　利通

支部の定例会では何回か報告して来ましたが2011年の3月11日の東日本大震災の後の国土地理院のGPS測量の結果を私が入手している二万五千分の一の地形図（カラー版、平成26年8月1日発行以降のもの）では、それまでのものと随分標高が変わって改訂されています。

静岡近辺の標高の変化では次のようなことが傾向として挙げられます。

① 安倍東山稜から東の地域は概ね沈下している。例えば、富士山・剣ヶ峰や白山岳、箱根山・金時山

② 安倍東山稜では北は隆起し、南は沈下している。例えば、第二真富士山から北では隆起しているところが多

③

いが竜爪山・文珠岳では沈下。安倍東山稜から西では隆起の傾向が見られるが全てではない。例えば、安倍奥・最高峰山伏は沈下し、大谷崩ノ頭（大谷嶺）、間ノ岳は隆起

※間ノ岳、金時山については２０１３年の主な山の標高の改定で、すでに公表されている。

※富士山の標高については、御殿場口頂上に大正13年８月、「富士山高さ３７７８ｍ」と刻んだ石碑がある。

剣ヶ峰の二等三角点のわきには黒御影石に従来の標高３７７５・６と刻まれた碑がある。そして新二万五千図には３７７５・５ｍの標高がある。これを見ると富士山の標高は下がり続けているようである。

一つは測量の精度が上がったことがあると思う。そして、測量法が三角測量から全地球測位システム（ＧＰＳ）変わったことがあり、さらに付け加えるなら先の東日本大震災で大方、安倍東山稜から東側がフォッサマグナに向かって潜り込んで沈降していることがあると思う。

因みに、剣ヶ峰の北側に立つＧＰＳでの高度は３７７４・９ｍである。

# 幻の花、ブルーポピーを求めて

長野　和義

今夏家内と六回目のネパールに行ってきた。目的はブルーポピーを見る為だ。この花は七～八月、標高四〇〇〇メートル以上の高地に咲く。

ヒマラヤ山脈、4000m以上の高地に咲く幻の花「ブルーポピー」

ネパールではランタンとゴーキョ地方に咲いている。

ランタンは昨年の大地震で道路が崩壊してしまった。そこで今回はエベレスト街道から分岐してゴーキョ方面に向かった。

七月二十日、一日遅れてルクラに入りして歩き始めた。我々一行は、家内とガイド、ポーターを入れた四名のパーティである。モンスーンのこの時期はトレッカーの姿は非常に少ない。のんびりと街道筋に乱れ咲く花達の写真を撮りながら歩く。ところどころに地震の爪痕は残るが建物は修復されている。オープンしているロッジは少ないが自由に選べる。高山病にならない様に身体を馴らしながら標高を上げていく。七日目にゴーキョのファーストレイクの手前で初めてブルーポピーを見た時は胸の高まりを抑えるのに大変だった。岩陰に密かに咲く二〇センチ位のその花は、単輪もあれば、数輪の花をつけたものもある。ソフトな刺を持つ茎の先の花の花弁は四～六弁で、その厚さは一ミリ位で空に空かせば向こう側が透けて見える。色は薄い青から濃い目の青まであり、まるでガラス細工みたいだ。道から外れた斜面に咲いているブルーポピーを撮るのには苦労した。標高四八〇〇メールの高地ゆえ空気が薄く斜面を登り、しかもシャッターを切る時は息を止めるので立ち上がる時は注意しないと失神しそうになる。ガイドとポーターが別のブルーポピーを探して手招きをするが、その斜面の場所まで到達するのもビスタリー（のろのろ歩き）しかできない。普通ネパールのトレッキングは

モンスーンを外して、ヒマラヤ高峰の景観を楽しむのが一般的で、ただ一つの花を見る為に出かけて行く人は少ない。計画から実現まで約一年をかけたが、この感動を妻と共有できた今回のトレッキングは思い出深いものになった。

## 新入会員の自己紹介

### 丹羽　忠明（15902）

我が家のベランダから天城山の万二郎岳・万三郎岳を望むことが出来ます。

朝に夕に、日々変わる山並みを眺めるひと時はまさに至福の時です。

特に前日の雪がやみ、朝日に照らされ光輝く天城山を見ると、いてもたってもいられずすぐに飛び出し山へ向かいます。雨が凍って木々の枝がシャンデリアのように耀いてこの世のことと思えぬような世界が広がっています。

山口さんから入会のお誘いを受け、もうこの年での山行は無理があると思い躊躇しましたが、日本山岳会会員という憧れは予てから持ち続けていました。届いた会報に目を通していると、高校山岳部から続いている山への想いが沸々と湧き上がってくるのを感じます。数年前に百名山を終え、現在二百名山に挑戦中ですが、その中には困難な山が含まれているので、対象を三百名山まで広げてその中の二百を目標にしています。

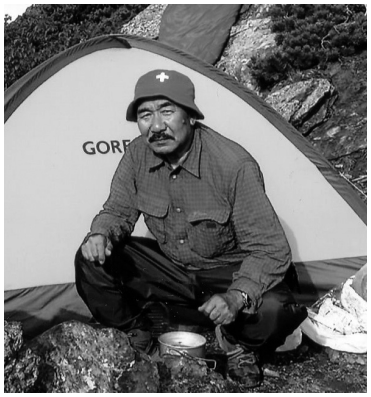
### 小西　晃（15911）

1953年3月　東京都中野区生まれ、現在、妻と2人丹沢の端の仏果山がある神奈川県愛甲郡在住です。私の登山のきっかけは3年前の9月富士山ツアーに参加したことです。

当日は、生憎の風雨の天候で8合目山小屋に着いた時には、荒れ模様で翌日の山頂行きは断念した初富士でしたそれからは、富士山に登りたい一心で富士山周辺の山々に出向き翌シーズンに、やっと頂上剣が峰に立つことが出来て感激したことを思い出します。山歴は北から利尻山、八甲田山、八幡平、谷川岳、甲武信岳、瑞牆山、富士山、仙丈ヶ岳、木曽駒ヶ岳と富士山周辺の山々に出掛けています。還暦の夏から踏み入れた登山ですが、日本山岳会静岡支部の一員として、会の発展のため尽力させて頂く所存ですのでどうぞ宜しくお願い申し上げます

### 山賀　一男（15869）

横浜市金沢区在住



長田義則様と中学校の先輩實川欣伸様に勧められ今年10月に入会しました。古希の年齢、いまさらと思いましたが好意に甘え入会させて頂きました。

山との関わりは50年前に丹沢の沢登りを始めて度々に高い山へと思い、22才11月3日学生時代の友人と冬の富士山に登頂しました。以降富士山に魅せられ、富士山の見える山に登り撮影してきましたが、土、日の休日では思うような写真が写せないので1年間だけ自由な時間に富士山を撮るために52才で会社を退職しました。（家族はブーイングです）

撮影チャンスはその年によりますが富士山の見える山へ登り八ヶ岳、北岳、間ノ岳、鳳凰三山、金峰山、小河内岳、又は槍ヶ岳、蝶ヶ岳等

山を楽しみながら写真を撮り何とか思うようなチャンスと出会うことができ、NHK静岡、御殿場市、大月市等のコンテストに入選出来評価されました。

山行は必ず2人で行き約20kgの荷物（食料、カメラ機材、テント等）を背負わねばならず、行く前は20kgの石を背負い階段でのトレーニングを行って行くようにして安全第一を心がけております。

## 大島わかな（15921）

私が山を好きになったのは約一年前、去年の7月に登った富士山がキッカケでした。人生で初めて標高の高い山に登りました。歩いた登山道、眺めた景色は私にとって別世界でした。全てが新鮮で綺麗で、もっと山の事を知りたいと思いました。昨年12月、日本山岳会のハイキングセミナーに参加し入会を決意しました。実は、この時期に他の山岳会のセミナーにも申し込んでいましたが、体調不良や雨天中止で結局全て参加出来ませんでした。

日本山岳会に入会した事は運命だったかもしれません。入会から10カ月ですが、お蔭さまで山の素晴らしさを沢山知りました。最近行った下ノ廊下は、ずっと行きたかった憧れの場所でした。こんなに早く行くことが出来たのも、山岳会の皆さんのお蔭です。山の世界は魅力的で、夢で溢れています。私をワクワクさせ、素晴らしい出会いを引き寄せてくれます。これからももっと深く知っていきたいです。よろしくお願いします。

憧れの下の廊下にて

## 橋本　耕一（15808）

新聞で、ハイキングセミナーを知り参加して、良かったと思いました。皆さんと楽しく山に登り、登山を長く続けたいと思っています。

私の山登りの切掛けは、元々野鳥観察が好きなこともあって、友人からいきなり3000m級の聖岳、赤石岳に誘われ、縦走路でライチョウを見たことからでした。

私は山頂のみを目指す登り方ではなく、登る過程を味わうことが好きです。

北穂高岳頂上にて

## 会員異動

**退会者**　有元久住（14892）
名倉健兒（14207）

**新入会員**　山崎　洋（16069）

## 編集後記

前号の編集後記で「南ア山岳史の編纂」の意欲に期待したが、今回は原稿を戴けなかった。一日も早い編纂委員の選考が待たれる。

時宜を得て「山で出会った生き物」を書かせていただいた。シリーズとして継続する。奮っての応募を期待したい。

山本良三氏からは興味ある原稿を戴きました。一方、掲載できなかった原稿もあったことを許されたい。

さて、今回巻頭言で支部長が井川登山基地について問題提起している。

井川は県有数の景勝地、ここに山岳リゾートのユートピアを語ってみる。

井川は本場アルプスに似て山岳リゾート地としての要素が集約されている。大日山稜が好適地。南アルプス、富士山の展望、原生林を入れた自然林、金鉱採掘跡、古道、湖の渡船、渓流、草原など見所寄り所は多彩である。先ずは交通を改善。富士見峠越えの難路に変え、横沢から井川湖堰堤下流にトンネルを堀り、かつ口坂本までの県道を拡幅、整備し静岡駅から公共バスを走らせる。次に井川の西山平に路線バス、観光バス、乗用車用の最終大駐車場を造る。ここから奥地赤石温泉白樺荘、南アルプスの栖島までの各登山口へはシャトルバスを走らせ、登山者と観光客、温泉客の便を図る。

駐車場からは中腹（現静岡市少年の家辺り）にケーブルカーを架ける。ここから大日峠、笹山、山伏、小河内山への登山道を再整備し、新たにマンテンバイクコースを造り、既存のリバウエル井川スキー場へはシャトルバスで結ぶ。山域内にはキャンプ場、山小屋、休憩所、ビジタセンター、自然学習センター、茶店、レストランを設ける。これら多彩な設備、コースを造ることにより老いも若きも身体障害者も気軽に安全に山岳自然を享受、学習することがきるであろう。山域内の林道は山小屋、茶店、レストラン、ビジタセンターなどの専用道とし、乗用車の通行は一切禁止、車は電気自動車に統一。周辺の卯山、大曽利山、大無間山、毛無山などの山道を整備、新設する。

重要なことは保護地域と緩衝地域の区分を明確にすること。南アルプスは自然の宝庫、未来に残すべき貴重な財産であり、ここには新たな手を一切加えないことが鉄則である。

県内各市町の近郊の低山にもこれに準じた安全で気軽に楽しめる山岳レクレイションの場を作りたい。高齢化社会への健康管理や幼・少年者の自然学習に貢献できると信じる。

登山コースの選定、登山道の新設整備などは山岳会が主体的に取り組める仕事であろう。

永野　敏夫

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
大島　康弘
事務局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町8-13　木村勝利
編集責任者　永野　敏夫
印刷所　株式会社　三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031

題字・牧野衛　背景・長野和義

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報

2017（平成29）年春季

第81号

# 平成二十九年度（２０１７年）静岡支部・通常総会に於いて有元利通氏の第九代静岡支部長就任が、承認されました。

（日時・４月13日　場所・労政会館）

挨拶する有元利通支部長

## 目次

★巻頭言　有元利通　1
「第九代静岡支部長就任にあたって」
★論説・エッセイ
◆「井川の登山・観光基地構想」の一つの提言　永野敏夫　4
★シリーズ
◆山への想い―第13話―　竹淵　繭　5
◆恐怖の体験―第16話―　赤石秀之　6
◆「山で出会った生物」　竹端節次　7
★会務報告
◆平成29年度通常総会報告　木村勝利　8
◆「山荘だより」　諏訪部豊　12
★会員山行
◆「不動岳」　湯山直文　12
◆「高峰高原」　長野和義　14
◆「文珠岳・森谷沢コース」　赤堀栄子　15
◆「三河・日本ケ塚山」　中野雅章　16
★ハイキングセミナー
「富士見岳」　橋本耕一　16
★新会員の自己紹介　17
山崎　洋・赤堀栄子・照内明良
中野雅章・鈴木信弘・吉本惠子
★会員動向　20
新入会員・退会者・物故者
★編集後記　長野和義　20

# 支部長就任にあたって

静岡支部長　有元　利通

まず第一に基本に帰るということです。すなわち、一九〇五（明治三九）年の日本山岳会設立の主旨書、その後段に山岳会の、山岳会員のなすべきことが記されております。これを本部とともに為し、更に公益法人としての活動を、そして静岡としての、静岡支部としての活動をやって行けば良いかと考えます。当たり前の話ですが静岡支部の皆さん有っての静岡支部です。そして皆さんの活動有っての静岡支部です。したがって、支部長はじめ支部の役員のやるべきことは支部の皆さんの活動がスムーズにいくようにバックアップする、応援することだと思います。支部長の役割は、当然支部活動の応援です。提言・提案は時に応じて行いたいと思いますがそれにこだわるものではありません。ただ、役員を含めて支部全体で考えていかないといけない課題はいくつかあると思います。まず一つは、支部財政の問題です。本部から支部に入る活動費は従来の一人当たり二千五百円から二千三百円になっており近々二千円になるということですから従来のようなお金の使い方はできないのではないかということです。対応としては、支出を減らすという方法、もう一つは収入を増やすという方法です。さらには、両方です。プロジェクトチームを作って検討していただければ良いと思います。二つ目には、四年後の静岡支部七〇周年記念に記念行事をやるかやらないかということ。やるなら、何をやるか。六〇周年の記念行事では静岡市民ギャラリーを借りての展示会を皮切りに、「あざれあ」での現在の京大総長の山際寿一氏を招いての講演会、記念式典、祝賀会、記念山行としての賎機山縦走等があったと思います。やるならば少しずつ検討していった方が良いと思います。勿論、何かやれば経費が掛かります。これも当たり前です。五〇周年の時の記念誌発刊の際は広告を載せて広告代を集めたりもしました。五〇周年の時からの海外山行があり、七〇周年記念海外山行ということも考えられます。三つ目は、公益法人化した時に作った現在の支部規約に載っていないこと、入れておいた方が良いことがあるなどと何人もの方から言われておりますから次の総会までに支部規約改正案を検討していきたいと思います。少しずつ、役員会、定例会で検討してゆけば良いかと思います。四つ目には、前大島支部長の時から動き始めたことの一つ、リニア中央新幹線工事による南アルプスの自然破壊の問題です。引き続き関心をもって、手は限られるとは思いますが必要なら必要に応じて他の山岳団体とともに申し入れ、要望なども出していきたいと思います。もう一つは、井川登山基地構想ですが何をやるべきか、何ができるか支部として具体的な構想を持ち他の山岳団体と共有化することを考え、その成案をもって県、市などの関係機関に申し入れ等を行っていくべきではないかと考えています。

その他、静岡県にかかわるところの「南アルプス登山史」についても引き続き支部の関係者にお願いし七〇周年記念事業として発刊というところまでもっていくことができるならそう願いたいと思います。それから、もう一つ大事なことがありました。静岡支部は会員数が少しずつ増えているところですがこれからますま

す高齢化が進むことを考えれば会員を増やすということはとても重要なことです。東部、中部地区ではハイキングセミナー参加者からの入会があります。特に東部では若い会員の入会が続いており大変喜ばしいことです。一方、西部地区では近年ほとんど新入会員を得ておりません。そういうわけで西部地区での会員増加がとりわけ急務です。是非とも西部地区での入会者を増やすべく努力を支部を挙げていたしましょう。そんなことを考えておりますのでよろしくお願いいたします。

## 公益社団法人日本山岳会静岡支部として

二〇一二年四月に日本山岳会は社団法人から公益社団法人になりました。それまでも公益事業をやっていましたが公益法人化に向けて新たに取り組んだ事業もあります。若者を山岳人として育てるユースクラブの活動もありますし、従前から行っていた活動もありました。本部ばかりではありません。各支部も同じです。山のパトロール、登山教室、講演会、森づくり等。当支部でも公益化以前の座学のみの登山教室や真富士山の登山道整備、実技中心のハイキングセミナー、また支部六十周年時や全国支部懇談会の際の講演会を一般参加も呼び掛けて開催したりもしました。

本会が、公益法人になる頃から公益法人化とともに言われていたのは会員数の減少と収入の減少です。そこで新たな会員獲得が大きなテーマになっていました。今も変わりません。本部総会に出ていれば分かります。総会報告を「山」で読んでいても分かります。その一助として「準会員」制度が先年できました。このことは、当支部でも同じです。そして、近年ハイキングセミナーに参加した人からの入会者が出てきており会員増加につながっています。公益法人化する以前の入会者のように一定の登山技術・経験レベルを持った人のみが入会しているわけではありません。そこでは、そういう新入会者は本会でも登山を期待しているのです。昨年の年次晩餐会の席で新入会員代表で大島わかな会員が「先輩の山に対する情熱と技を引き継いでいきたい」と挨拶したとおりです。一部には日本山岳会（静岡支部）は山行はやらない会だと思っているとか、山行は自分の所属する会でやれば良いので日本山岳会（当支部）でやらなくて良いのだと言われる方があります。旧来の社団法人日本山岳会の頃は、あるいは会員数が六千人ほどあった頃はそれで良かったかも知れません。サロンで良かったかも知れません。今は違います。公益法人となったのです。会員数も五千人弱になっているのです。支部も同じです。目的と会計と人事は本部と一体になっているのです。公益事業をやることになっているのです。当支部も高齢化しています。中高年もそうですが若い人に入会してもらうことはとても大切なことです。また、町の山岳会に入会している人はそこで学んだり技術を習得したり経験を積むことができますがそうでない人は、所属しているのはＪＡＣ静岡支部しかない人には入会して何もしない、山行もないでは駄目だと考えます。経験の少ない新入会者の期待に応えて山行や机上学習などを計画しましょう。ＪＡＣは変わったのです。サロンを全否定するわけではありません。サロンもあって良いのです。でも、ＪＡＣは変わったのです。静岡支部も変わったのです。昔を回顧しても良いです。しかし、新しい方向は決まっているのです。先輩の皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。

# 井川の登山・観光基地構想の一つの提言

永野　敏夫

井川の登山・観光基地構想が提案されている。これはかねてからの課題である。南アルプスは当県と山梨県、長野県の三県に跨るわが国有数の山脈であり、ご承知のように4年前にユネスコエコパークに指定され、将来は世界自然遺産の登録を目指している。

井川はその懐に抱えられた自然豊な山村であり、大井川側から南アルプスに踏み入る登山口に立地している。ところがアクセスの悪さから敬遠されがちで入山者数は長野、山梨両県に大きく差をつけられている。数が必ずしも問題ではないが、登山愛好家憧れの山ともなれば、この現実を無視することはできない。井川は他の中山間地にたがわず人口減少がつづいており、この交通機関の改善が歯止めへの一翼になり、生活基盤を再構築する上に必要不可欠な課題であるだろう。

## アプローチの改善、整備

先ずはアプローチの整備、改善であるがこれが難題かつ核心部分の一つである。県都静岡市側からの安全にして時間の短縮を図ること。県都静岡市から富士見峠越えの難路に代えトンネルでつなげる。かつ口坂本温泉への道路も拡幅整備し、ともに路線バスを運行させ、峠越え登山者や温泉客への交通の便を図る。

工事に当って地質や自然環境に留意することは言うまでもないが、行政からの予算にかかわる問題が大きい。次に井川の西山平に一般車や観光バスも収容できる最終地の大きな駐車場を作る。この先椹島までシャトルバスを走らせる。登山者、観光者はすべてこれを利用する。

## ヨーロッパ・アルプスでの見聞と体験

井川に愛着をもつ私の個人的な意見とあえて断って以下を語らせて頂く。

ここ20年ばかりヨーロッパ・アルプスに出かけ山登りを楽しませて頂いている。スイス、イタリア、オーストリア、ドイツ、フランス等アルプスにかかる国々であるが、オーストリアのチロル州とイタリアの南チロルに多く足を運んでいる。オーストリア、スイス、イタリアでは郵便と人を合わせて乗せる合理的なポストバスが運行され、人の住んでいる限りの奥地まで入り、住民の足となってインフラの基盤を守っている。その途中途中にはスキー場があり、ケーブルやリフトが架けられ一年を通じて最も賑わう冬季スポーツの場を提供している。登山の季節になればこれを登山者が利用することになる。これに乗り一気に森林限界のうえに出る。そこはもう草原が広がり高山植物が咲き、氷河や湖や岩や雪の山々のすばらしい景観が展開する。程よいところに山小屋や茶店があり、ここで景観をながめながらゆっくりと飲食を楽しむ。

因みに日本のような弁当持参の習慣はない。山小屋や茶店は物資荷揚げ専用のケーブルや林道が施され、そのお陰で下界と変わらぬ価格で提供されている。

ハイクと登山コースは明確に区別され標識の色で示されている。ハイクコースの危険箇所にはワイヤーや鎖が施され、老若男女安全に気軽に楽しむことができる。登山、ハイキングコースの長さが各市町村の文化の高低の尺度とされ、コースの延長や整備に余念がない。山中には林道が開けているが一般車の通行は一切禁止されている。山間のリゾート地は既存の住民が主役で大手企業の進出は制限

されている。民家やホテルは花を飾ったベランダ、木組と白壁の昔ながらの佇まい。その背後には岩と雪の頂が見え、花を散りばめた草原が広がり、草を食む牧牛のカウベルの音や教会の鐘の音が聞こえ、それらが一体となって壮大なアルプスの風景をかもし出し、訪れる者に深い感銘と郷愁を誘っている。

## 井川を日本のチロルに

こんなチロル・アルプスの山村に思いを寄せ、井川を日本のチロルにとユートピアを語らせて頂く。

シュトゥーバイ谷（チロル州）

井川はチロルに似ている。高峻な山々や穏やかな草原の山に囲まれ、渓谷を抱き、穏やかな山村が佇み、歴史が息づき、山岳リゾート地としての要素が集約されている。この風光明媚な山村を世にださぬ方法はないであろう。

対象になる山域は大日山稜が好適地。南アルプス、富士山の展望、原生林を入れた自然林、金鉱採掘跡、石仏が残る古道、湖、渓流、草原など見所も多くスキー場も完備されている。駐車場もしくはダム湖を渡った対岸から中腹（現静岡市少年の家辺り）にかけてケーブルカーを架ける。

湖畔からの大日峠、笹山、山伏、小河内山への登山道を新設、整備し、新たにマウンテンバイクコース、トレランコースを造る。既存勘行峰のスキー場へはチェアリフトで結ぶ。既存のキャンプ場、山小屋、ビジタセンターに加え茶店、レストランを設ける。これら多彩な施設、各種コースを造ることにより老いも若きも身体障害者も安全に気軽に自然に親しみ学習することがきるであろう。山域内の林道使用は一般車は一切禁止、施設の管理車に限定、山域内に走る車は電気自動車にする。

加えて卯山、大曽利山、毛無山など近郊の低山、中山に山道を新設すれば南アルプスを目指す者のみならず、選択肢も広がりより広範囲の登山者をあつめることができるのではないだろうか。村内には宿舎、地元物産販売店、食堂などができるであろう。大切なことは外来の資本に頼らず、住民の住民による住民のための経営であること。自然景観にマッチした木造建物にすること、屋根の色を統一するのも一興であろう。

重要なことは保護地域には手をつけないこと。南アルプスは自然の宝庫、未来に残すべき貴重な財産であり、ここも当然新たな手を加えないことが鉄則である。きっと日本のチロルにふさわしい穏やかな山岳リゾートができるでしょう。

幼少年が自然に触れる機会が失われ、高齢者が自然から遠ざけられることにならないよう、市内近郊の里山にも安全で気軽に楽しめるハイキングコースが整備されることを願いたい。しいて言えばこれが健康維持増進に役立ち、少なからず医療費削減に役立つと信じる。

登山コースの選定、登山道の新設整備などは山岳会が主体的に取り組める仕事であろう。

シリーズ「山への想い」―第13話―

# 山旅・歩き旅

竹淵　繭（14996）

最近の2年間、私は歩くこと自体に重点を置いて活動してきました。山を歩くことよりも、登山口に続く林道や市街地の道路、土手、海岸線などを歩いてきました。

山以外に重点を置いて歩くようになったきっかけは、登山口までの約50㎞の林道を行く交通手段が徒歩以外に見つからなかったことでした。丸一日かけて登山口へ行き、そこから3泊の登山をした時、普段の3泊程度の山行を終えた時よりもはるかに大きな達成感を得ることができました。山岳会の先輩方からは、林道が整備されるよりも前は、現在の登山口のある場所まで数日かけて歩き、そこから本格的な登山をしていたということをよく耳にします。その方々からすると、普通のことなのかもしれませんが、私にはとても新鮮な感覚でした。一番印象に残っている歩行は、稚内から札幌まで徒歩でつなげようとした時のことです。JRの宗谷本線と函館本線に沿って約400㎞を、危険個所を除いて、歩きました。地方の国道や農道を歩くことが多い旅でした。北海道では一日で40㎞ほど歩いても一軒も店がないということもしばしばあります。幕営地は無料で利用できるキャンプ場が多く、そこにはバイクや自転車で泊まっている人も多くいます。

宗谷線がサロベツ湿原を迂回するとき、私は、湿原の真ん中を通る未舗装の道を進みました。その道は見える限りまっすぐで、車もなく人もなく、電線や電柱もなく、人工の建物も一切見つからない、そんな場所でした。そこを十数キロ歩いていくことは、あと10㎞で何もないこの空間から抜け出せるとわかっていても、永遠に続いていく、おわりの来ない場所にも思えました。そこを歩く間、頭の中で、時には口に出して、将来のこと、自分の夢などいろいろなことを考えることができました。普段の生活ではその日その日のやらなければならないことに追われ、ゆっくりと考えることもできずにいました。歩きながら思いを巡らせる、この時間はとても大切なものとなりました。

山以外を歩くことは増えましたが、山にも定期的に登っています。山に登ると歩行中に考えなければならないことがたくさんあります。道路を歩いていても、歩くことに集中しなければ多くの危険があります。しかし、山では足の置き場からルートや日程、メンバーの体調など、少しでも考えることを休めば、ケガで済まないことになるかもしれません。頭を動かして体を使う山行と、体を動かして思いを巡らせる歩く旅。どちらもつらく、楽しく、日頃の生活と離れ、自分自身を解放できていると感じています。

これからも考えを巡らせ、体を疲れさせて心を癒す。そんな活動を続けていきたいと思います。

シリーズ「恐怖の体験」―第16話―

# 私の山登りで怖かったこと

赤石　秀之

3年前の5月下旬、2泊3日で山岳会のメンバー3人で白山へスキー登山に行った。白山の北にある清浄ケ原の大斜面を滑ろうとの計画だった。北側から白山スーパー林道にはいり途中のゲートでふさがれている新岩間温泉への舗装道路

に入る。ゲートから温泉までは台車を持って行ってこれにザックとスキーをくくりつけて細引きで引いて歩いた。道路が終わり「らくらく新道」からザックにスキーをつけて背負う。前年同じコースに来たリーダーの小田さんが今年は雪が１ｍ位は少なようだと言っていた。１６００ｍ位で雪が出てきたところにテントを張った。

翌日、樹林の中をスキーを背負って登り、途中からシール登行にした。薬師山を超える頃から雪の斜面になり小桜平の避難小屋からは雪が多くなったが、それでもハイマツに苦労した。やがてハイマツ帯に阻まれて、時間もきたので清浄ケ原の滑りはあきらめて引き返した。

下山の日、兼用靴をはいてスキーをつけたザックを背負い６時前に降り始めた。木の枝にスキーが引っかかって降りも面倒だった。降り始めてから１時間位のところで僕は少し大きな石を越えて右足で地面についた。そのときザックにつけた右側のスキーのテールがこの石にひっかかった。「あっ！」と思った時に前に転び体が左側にひっくり返って仰向けになった。その場所が小さい鞍部になっていてザックを下にしたまま左下の窪んだところへ滑り出した。すぐ止まるだろうと思ったがなかなか止まらない。あそこの少し平らなところで止まるだろうと思ったが止まらない。両手を広げたが捕まるものがなかった。先に見える木に引っかかるかなと思っていたら、斜面が緩くなって止まった。「やれやれ、止まった」。

上を見たら15ｍ程滑り落ちていた。尾根の二人に声をかけて無事を伝えた。小田さんがロープを持って降りてきてくれた。僕は自力で登り返せると思ったがロープで確保してくれた。ロープをつけてから６～７ｍほど歩いて下を見たら、そこからは１００ｍ以上切れ落ちていた。「良かった」。

帰って病院に行ったら肋骨が１本折れていただけですんだ。助かったという思いがじわじわとわいてきた。

学生の頃、冬の剱岳へ登ろうと計画し部員と二人で11月に小窓尾根から本峰を目指した。樹林の中だったが先を歩いていたK君が大きな石に両足で乗った。石ごと落ちた。左側の西千人谷へ薄く積もった雪の上をザックを下にしてあおむけに滑っていって視界から消えた。ロープを使って消えたあたりまで降りたがそこからはるか下まで切れ落ちていた。墜落死だった。この遭難は忘れられない。このときの光景と今回の自分の滑落が二重写しになって山での怖さが迫った。

事故、遭難が何時どこで起きるかもしれない。この怖さはいつも離れない。山に行く計画をしている時は楽しいが、出発の日が近づくにつれて怖くなってくる。やめようかと思ったりもする。登山口について一歩歩き出すと、不安は消える。山頂を目指す。繰り返しである。

シリーズ「山で出会った生物」―第２話―

## 大花の延齢草

竹端　節次

２００７年７月アポイ岳に登ったおり、様似にある駅前旅館の女主人が景色の良い近くの丘を案内してくれた。そこで「このあたりには５月連休頃大きな白いエンレイソウが咲く」と話した。

エンレイソウはユリ科で本州では春の山を歩くと少し大きな葉が三枚の中心に薄紫色の花（花弁ではなくがく）を見つ

けることが出来る。その高山種は白花でアルプスなどに分布し、シロバナエンレイソウまたの名をミヤマエンレイソウと呼ぶ。この花が冨士山にもあるのを知ったのは、６月、まぼろしの滝を見に須走口５合目に行った時であった。

延齢草と書くこの仲間は実から開花するまで10年、開花後30年以上咲き続ける固体もあるという。長寿命だからこう書くのだろうか。

話を元にもどして北海道の大きなエンレイソウの花、これをオオバナノエンレイソウという。

写真は私が芽室岳で撮ったものです

２０１０年頃わが家に宿泊した北海道からの旅人は花の好きな日高在住の女性であったが、近くの丘陵にこれが咲くと言い、写真をいただいた。

そしてとうとうその花に出会うことになる。

２０１３年６月25日、日高山脈の芽室岳（１７５４ｍ）に登った時だった。芽室川上流の登山口から長い尾根を登り終え、山頂に続く稜線に出たあたりで大きな白い花を発見した。これぞあこがれの花オオバナノエンレイソウ。登っていくと、あちらこちらにたくさん咲いている。うれしかった。

その日は出発して４時間30分の登りの末、13時10分、這松の中に一等三角点標石のある山頂に立ち、残雪光る日高の山々を眺め無事下山した。この北海道旅行の最終日、帯広空港を飛び立つ前に中札内町の六花の森にある坂本直行美術館を訪ねた。そのひろい庭に植えられたエンレイソウは大きな実をつけていた。

札幌近郊やニセコあたりにもこの花は咲くという。もう一度逢いたい。思い出の様似の丘にも行ってみたい。

今、私の手元に六花の森で買い求めた本間秀夫著「純白の貴婦人オオバナのエンレイソウ」という写真集がある。

# 会務報告

## 平成29年度通常総会報告

４月13日㈬16時半より静岡労政会館に於いて会員総数１５２名の内、出席者49名委任状69名で通常総会が開催

## 第１号議案　平成28年度事業報告

事務局―定例会、公益事業―ハイキングセミナー、山の日記念ハイキング

集会山行委員会―懇親山行、納涼懇親会及び、文珠山荘委員会は会報80号13頁会務報告を参照

**自然保護全国集会**

７月16日㈯～17日㈰高知市で開催、白鳥勝治参加

**山の日記念講演会・写真展**

８月11日㈭静岡県山岳４団体（日本山岳会、県岳連、市岳連、労山）主催で開催　講師・野口いずみ氏「山岳医療について」・松島信幸氏「南アルプスの地質について」来場者２００余名

**会報編集委員会**

５月「不盡」春季79号発行、11月「不盡」秋季80号発行、１月「不盡」合冊（第二巻51号～75号）発行

## 第２号議案　平成28年度会計報告

収入の部

| 科目 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|
| 運営交付金 | 137,000 | |
| 事業補助金 | 178,100 | 登山振興・環境 |
| 寄付金・募金 | 27,363 | |
| 助成補助金 | 32,000 | |
| 参加費徴収 | 32,000 | セミナー山行 |
| 雑収入 | 8,415 | |
| 繰越金 | 355,428 | |
| 収入合計 | 770,006 | |

支出の部

| 科目 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|
| 旅費交通費 | 14,390 | |
| 通信・運搬費 | 76,092 | |
| 会議費用 | 46,966 | 会場借用書 |
| 消耗品費 | 21,268 | コピー代 |
| 印刷消耗品費 | 413,721 | 会報製本費 |
| 慶弔費・土産 | 12,195 | |
| 雑費 | 9,477 | ＨＳ保険 |
| 山荘維持費 | 35,904 | |
| 支出合計 | 630,043 | |

＊別途積立金525,000　差引残高140,263

## 第３号議案

支部長の任期満了に伴い、選考委員会で選任された新支部長（有元利通）の承認及び新組織案が承認

**平成29年度静岡支部組織**

**総括責任者**　支部長　有元利通
副支部長　近藤浩之

**事務局**

◎木村勝利○西村しのぶ
総会、定例会の準備進行　本部、他支部行事の参加取りまとめ、本部報告事務、各事業委員会の取りまとめ

**公益事業委員会**

◎小川正育、○中村博和（セミナー担当）
岩崎充弘、平井隆一、勝又千華、中野雅章
公益事業の策定実施、自然保護活動参加、山の日のイベントの実行、登山教室実施
○白鳥勝治（自然保護委員、山の日行事）

**集会山行委員会**

◎廣澤和嘉（山行担当）、○仙石智子
会員山行、懇親山行、納涼懇親会の実施、山行計画等の本部連絡
○諏訪部豊（スキー等担当）
○西澤祥陽（集会担当）、熊岡達雄、長谷川広司、湯山直文、古田徹司、小川正育、池谷和明、荻野俊夫、福田廣志、大島わかな

**会報編集委員会**

◎長野和義、山崎　洋、
会報の編集出版と送付、記念誌等の執筆依頼と出版

**文珠山荘運営委員会**

◎諏訪部 豊、小柳奈津子、白鳥勝治、橋本耕一、赤堀栄子、勝又千華
山荘管理全般（清掃、電気ガス、水源確保）　山荘利用促進の広報活動

**会計**

◎増田治郎
予算書、決算書の作成
公益、共益の仕訳経費の支払い、調整

**会計監査**

◎青野興喜、登　三郎
予算書、決算書、会計に関する監査

**役員会**

支部長、副支部長、事務局、各委員会正副委員長、会計とする

## 第４号議案　平成29年度静岡支部事業計画書

**平成29年**

| | |
|---|---|
| ４月12日㈬ | 平成29年度静岡支部通常総会 |
| ★４月15日㈯～16日㈰ | 文珠山荘「野菜天ぷらの会」 |
| ４月23日㈰ | 公益事業・第１回ハイキングセミナー「竜爪山」1041m |
| ５月６日㈯ | 会員山行「三河・日本ヶ塚山」1107m |
| ５月20日㈯～21日㈰ | 中部４支部交流会 |
| ５月28日㈰ | 会員山行「青笹山」1550m |
| ６月４日㈰ | 公益事業・第２回ハイキングセミナー「見月山」1046m |
| ６月10日㈯～11日㈰ | 会員山行「青薙山2406m・稲又山2405m池ノ平テント泊10名」 |
| ★６月17日㈯～18日㈰ | 文珠山荘「山荘に舞うヒメ蛍見る会」 |
| ７月９日㈰～10日㈪ | 2017年自然保護全国集会―岐阜市で開催 |
| ７月15日㈯～17日㈪ | 会員山行「茶臼岳、上河内岳登山」横窪沢小屋泊 |
| ８月16日㈬ | 納涼懇親会、場所未定 |
| ★９月９日㈯～10日㈰ | 文珠山荘「納涼祭」 |
| 10月13日㈮～14日㈯ | 第33回全国支部懇談会 |
| ★10月28日㈯～29日㈰ | 文珠山荘「ハローウイン」 |
| 11月11日㈯～12日㈰ | 会員山行「秋の懇親山行」、場所未定 |
| 12月２日㈯ | 日本山岳会、年次晩餐会 |
| ★12月９日㈯～10日㈰ | 文珠山荘「忘年会」 |

**平成30年**

| | |
|---|---|
| １月14日㈰ | 支部新年会　場所未定 |
| ２月11日㈰ | 公益事業・第3回ハイキングセミナー<br>冬山入門、「富士山・二子山」 |
| ２月17日㈯～18日㈰ | 会員山行、山とスキー「菅平、根子岳」 |
| ★３月10日㈯～11日㈰ | 文珠山荘「山荘ベースに山に登る」場所未定 |
| ４月11日㈬ | 平成30年度静岡支部通常総会 |

**編集委員会**

○会報「不盡」81号（春季）、82号（秋季）の発行

○南アルプス登山史編纂及び支部創立70周年誌発刊に向けて体制作りに着手
（編纂委員の選任、内容の具体化）

○井川の登山基地構想
　井川地域の活性化に向けて推進役となり、交通の利便性、整備等を関係山岳団体、地元、行政、企業に働きかける

（★は文珠山荘行事）

## 第５号議案　平成29年度予算

収入の部

| 摘　要 | 支部活動 | 登山振興 | 環境保全 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|
| 運営交付金 | | 117,000 | 20,000 | 137,000 |
| 事業補助金 | 137,000 | | | 137,000 |
| 入会奨励金 | 32,000 | | | 32,000 |
| 会員からの寄付金 | 10,000 | | | 10,000 |
| セミナー山行 | | 50,000 | | 50,000 |
| 山荘利用料 | 20,000 | 20,000 | | 40,000 |
| 雑収入 | 10,000 | | | 10,000 |
| 前年度繰越金 | 140,263 | | | 140,263 |
| 収入合計 | 349,263 | 187,000 | 20,000 | 556,263 |

支出の部

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 旅費交通費 | | | 20,000 | 20,000 |
| 通信・運搬費 | 60,000 | 30,000 | | 90,000 |
| 会場借用費 | 40,000 | 10,000 | | 50,000 |
| 消耗品費 | 30,000 | 10,000 | | 40,000 |
| 印刷製本費 | 150,000 | | | 150,000 |
| 支払手数料 | 5,000 | | | 5,000 |
| 山荘電気ガス | 20,000 | 20,000 | | 40,000 |
| セミナー経費 | | 10,000 | | 10,000 |
| 雑費 | 30,000 | | | 30,000 |
| 予備費 | 121,263 | | | 121,263 |
| 支出合計 | 456,263 | 80,000 | 20,000 | 556,263 |

## 新年会報告

平成29年1月15日(日)「柚木の郷」にて13時より開催

**参加者**

照内豊、青島秀夫、安間荘、大石惇、山崎郁郎（会友）、八木功、杉本宣明、加田勝利、長谷川廣司、河合俊男、大島康弘、永野敏夫、有元利通、白鳥勝治、山口康裕、高須五郎、平野雅俊、岩崎充弘、小澤桂子、赤石秀之、青野興喜、杉本孝夫、増田孝治、曽根芳樹、諏訪部豊、木村勝利、熊岡達雄、福田廣志、實川欣伸、畠中智代、池谷和明、厚見ゆり子、小笠原誠、土屋勇、西村しのぶ、平井隆一、増田治郎、中村博和、泉脇修司、西澤祥陽、西川卯一、長野和義、橋本耕一、小西晃、大島わかな、山崎洋、赤堀栄子、照内明良、中野雅章、鈴木信弘、

以上50名、例年になく大勢の参加をいただき、新年に向けての交流を深めることが出来ました。有難うございました。

木村勝利

# 文珠山荘だより

諏訪部　豊

文珠山荘行事は年に6回開催しています。近隣はお茶畑が多いので地元の方に配慮して5月は行事なし。4・6・9・10・12・3月の土日に行っています。毎回昼食を挟んで山荘の掃除と周辺整備を行い16時からは山の映画会です。これまで「劔岳点の記」から始まって前回の「K2～白き氷河の果てに」まで9本を上映しました。フルハイビジョン100インチスクリーンで5.1CHサラウンドですので映画館で見るのと遜色ありません。映画の後は宴会です。非会員の同行もOKですのでぜひ多くの方に参加して頂きたいと思います。

文珠山荘

## 会員山行①

# 不動岳

百笑　湯山　直文

11月5日(土)～6日(日)

日本山岳会年次晩餐会で大島わかなさんが新入会員代表として挨拶をされた。『南アルプス深南部の不動岳に行った。日本にこんな所があったのかと感動した。ヤブこぎを強いられた。道なき道を歩いて自然を楽しんでいる。日本山岳会に入って、この9ヶ月は我が人生最良のときだった。先輩の山に対する情熱と技を引き継いでいきたい』

その不動岳山行の事を記してみた。

◎記憶と記録が少ないので諏訪部さんのDVDを見て思い出しながら書きました。

◎変な対策

リーダー有元さんの計画書の注意事項→湯山ダジャレ対策？出発前までに各種言語、教養で準備（含下世話）

◎出発ストレッチ体操、大層上手なサブリーダーの小川さん。

◎林道歩きリンリンリンドウは濃紫、こむらがえり発病しました。

オーイ中村君チョイと待ちたまえ→12名参加平均年齢68才？のチームで2番目に若い中村君の速いこと速いこと。1番若い大島わかいさん20才。1番の年鳥(年長)は白鳥さん79才。

終点で休み沢の水飲む→サトウ㊌→会員№9456富士市の板金業佐藤隆男君との山行を思い出しました。ポリタンにサトウ㊌と書いてあり貰って飲んだ水は甘露でした。

◎登り→御上りさん→田舎の人掛声は「ＪＡ」「ＡＣ」でした。

◎（68）服用→こむらがえりに著効する芍薬甘草湯（68）の急性効果は全漢方薬中トップクラスだ。〔略〕５～10分以内に手品のように効果を発揮し、（略）どの西洋薬より優れている。「山」29漢方薬は登山にも役立つ→大野秀樹参照→効果不幸で利かなかった。

◎登高人→投降人となりました。

◎焚火を囲んで燃えろよ燃えろよ、火の粉をあげて、炎を巻き上げ、天まで焦がせ　星空→見上げてごらん夜の星を。

三酒混合ワクチン→酒、ビール、ワイン。バテドーシ病（疲労）に効果あり。

登高人を苦しめた荷物→一升瓶の酒、缶ビール３５０㎖×６，２ケース、ワイン３ℓを皆で成敗する→飲んで飲んで飲まれて飲んで酔いつぶれて寝るまで飲んで男は静かに寝てしまった。岳人→楽人となった。

◎副作用が強く出た何の歌を歌ったのか、何という星座をみたのか、記憶が飛び散ってしまったーとなった。

◎目覚ましの音はまだかと起きて待つ→逆　４時起床６時出発

◎鎌薙の頭ヌタ場の水溜まりに氷が張っていた→こんな山行は懲り懲りだ（コオリゴオリだ）

◎鹿の平　笹の中→さっさと歩けない

◎不動岳○深南部のヘソ→行きたい山が眺望されます。黒沢山、中ノ尾根山、鶏冠山、池口岳

○全て木の名はナンジャモンジャこの木何の木、気になる木、名前も知らない木ですから。

○全て鳥の名前は白色は白鳥勝治、黒は国鳥、年令からシジュウカラ、ゴジュウカラ、間違っていたらウソ、皆の意見を聞いてサンコウ鳥

○全て花の名前は高嶺白根草、道をキク、向こうのかどをマーガレット、やさしくせなかをナデシコ、ちょっとおしりをヒヤシンス、そらから雨がフリージア、ちいさなびんじゃアマリリス

◎下山すべりますよツルリンドウ下らない事言わないで→下り坂坂の男大雉（日本の国鳥）撃ってお尻拭く会長になる（快腸になる）―チョウキモチイイ→快調に下る。黄葉がすばらしい→又来うようと思いました→ゲート午後２時10分着

◎先輩の山に対する情熱と技を引き継いでいきたい。困っちゃうなー（山本リンダ調）引き継ぐもの何もねえ（北島康介調）→反面教師→これで行こう。

◎結論特に足と胃腸と臀に強い刺激を受けた山行でした。

◎思い出（重いで）重いザックを担いだ御爺さん→小父（痔）さんとなる→そんな訳で又痔回（次回）

言葉の説明→山ことば

「雉を撃つ」→女→「お花摘み」大雉→大便小腸・大腸で栄養分、水分を吸収された残りの固形物

小雉→小便尿道を通って排出される液体

空雉→屁、小腸で消化吸収されなかった内容が大腸内の細菌によって分解されて発生したガスの放出

屁→音が小さい空っ雉（からっけつ）意気地無し→こんな事ばかり書いていたら御仕舞いだー

会員山行②

# 雪山・山スキー高峰高原

長野　和義

２０１７年２月18日（土）午前６時、各地から道の駅「とみざわ」に集合した。11名の会員は小川車（小川、中村、長野、石間、勝又、赤堀）と畠中車（諏訪部、白鳥、畠中、山崎、大島わ）の２台に分乗して高峰温泉に向かった。道中には雪はなく、チェリーパークラインに入ってから少しずつ雪がついてきたが、特に問題なくアサマ２０００パークの駐車場に９時半に到着。ここで小西会員及び会友・大澤夫妻と合流して14名のパーティとなった。

初日の予定はスキー班と登山班（中村、小川、石間、勝又、赤堀、小西、長野）に分かれて行動した。登山班は車坂峠まで歩き、スノーシューを着装。小川さんを先頭に新雪を踏みながら黒斑山（くろふやま、２４０４ｍ）を目指して登山開始。天気は快晴、風も無く絶好のコンディションだ。やがて尾根道に取り付き、少しずつ標高を上げていく。小一時間で左前方に噴煙を上げる浅間山が見えてきた。

一旦下り上り返すとトーミの頭、眼前に白黒の縦縞模様の浅間山が迫ってくる。各々夢中になって写真を撮る。黒斑山の山頂までは更に15分ほど歩く。黒斑山頂で記念写真を撮ってトーミの頭まで戻り、急坂を慎重に下る。下山は樹林帯を歩く中コースをとった。スノーシューの醍醐味は誰も歩いていない新雪を踏みしめることだ。休憩中は大の字に雪上にひっくり返って人型を作り童心に帰って遊ぶ人もいる。

思い思いに雪を楽しんで、午後３時前には、スキー場駐車場に帰り着いた。ゲレンデでスキーを堪能したスキー班と合流。高峰温泉まではキャタピラーの付いた雪上車が送迎してくれる。10分ほどでランプの宿に着くと宿のスタッフが手際よく歓迎してくれた。部屋に案内され早速温泉入浴だが、館内に２か所と屋外に１か所の風呂がある。各人夫々が好みの場所に向かう。標高２０００ｍにある定員４人の雲上の野天風呂は人気があり、入れなかった人は翌日の楽しみとなった。温泉のあとは日本山岳会だけあって、一部屋に集まっての勉強会が待っていた。ビールを飲みながら小川さんの「アバランチレスキュー」の講義に聞き入った。ビーコンやゾンデを使った説明は迫

力、説得力があった。

アルコールが少し効いてきたところで自己紹介が始まる。話好きな人が多く全員が終われず、中断してレストランでの夕食になった。品数の多い料理に舌鼓を打ち満腹となった。再び大部屋に戻り３次会。再開された自己紹介も無事完了した。この後４次会がどこかであったようだ。

二日目も風は少しあるが雲一つない快晴。８時からの朝食を済ませ、９時にスノーシュー班が先導しスキー班が後に続く形で水ノ塔山（みずのとやま、２２０２ｍ）から東篭ノ塔山（ひがしかごのとやま、２２２７ｍ）への縦走に出発した。宿からの標高差は２００ｍであったがトレースは無く、昨日に続き今日も先頭を歩く小川さんは大変なアルバイトだった。水ノ塔山までは約１時間半、頂上からの展望は素晴らしく浅間山も望むことができた。水ノ塔山からはスキー班とは別行動をとり稜線をアップダウンしながら約１時間で東篭ノ塔山に着いた。ここからは快適な下りで林道に出た。池の平はパスして林道を宿まで戻ることにしたがこれがなかなか長い。中間点付近でスキー班が追い付いてきた。林道をたっぷり１時間歩き、２時前に全員宿に帰着した。温泉で汗を流し、スキー場駐車場で解散式を執り行い来年も同じころにこのような山行をやろうということを確認して帰途に就いた。

楽しいことはあっという間に過ぎてしまう。会員各位が協力して初めてこのような行事ができることを改めて感じた。

特別参加の山梨支部の大澤ご夫妻、手作りの差し入れまで頂き大変有難うございました。

参加者：諏訪部、白鳥、畠中、山崎、大島わ、中村、小川、勝又、赤堀、小西、長野（会員外）石間

## 竜爪山・文珠岳

### 登り行翁山コース・下り森谷沢直登コース

**赤堀　栄子**

行翁山登山口スタート　９時15分。

泣姫様墓石跡を横目に少々農道を歩き山に入ると道狭く崩れ掛けてる。左に転落しないよう注意しながら通り過ぎるとすぐに三界の滝を見る。沢に材木が流れ着いたままで散乱してるせいか滝の迫力今いち、沢を渡りほどなく行翁山（行翁堂）に到着、10時15分。行翁堂の前で一列に並び般若心経を唱える。

ここからが急登で桧林の中を有元さんが付けてくれたピンクテープを見ながら登る。その内、山雑学が始まり前後からにぎやかになる。鉄塔も見てテープも見失わない様にと忙しい。東海自然歩道に出た、11時34分。

休憩し鉄塔を後に文珠岳到着。12時27分。山頂には若者グループ20人程や中年の方々多勢で賑わってる。昼食タイムはのんびりと。

13時30分下山開始。森谷沢コースを急降下、杉の密林の間を行く、迷いやすいどこに道があるのかどこも同じように見える。ピンクテープを探しながら進む。やっと鉄塔まで来た。茅が多く滑る。その後は何となく里が近づいてきたと思われる道を降りる。椎茸が沢山出ていて皆で採る。それから、今日は３月11日、東北大震災があった14時46分、東北に向かって皆で黙祷…以前茶畑だった段々を過ぎ林道に出る直前にはびっくりする。

上半身裸のマネキンあり、又賑わう。こうして無事天神橋登山口到着、15時。

すごく楽しかった。

参加者：諏訪部、中村、大島わ、篠原、西澤、長野、仙石、山崎、池谷、中野、鈴木、小笠、照内明、有元、赤堀（会員外）榎田、後藤

## 会員山行④

## 三河・日本ケ塚山（1107m）
### ―桃源郷に魅せられて―

中野　雅章

ゴールデンウィークのこの時期に、愛知県奥三河の最奥部を訪れ、静かで落ち着きのある山旅をしながら、アカヤシオ、ミツバツツジ等の鑑賞を楽しんだ。

5月6日㈯午前7時会員6名が静岡駅北口に集合、有元さんの車に乗り約3時間かけてふもとの愛知県豊根村漆島バンガロー村に到着、軽くストレッチをして出発した。そして杉・檜の樹林帯の中をひたすら歩くこと約2時間、漸く稜線沿いの1065m地点に到着し小休止を入れた。

全員体調は良さそうである。しかしここから山頂までの間は山稜のコブが多くいずれも急斜面、随所にロープとハシゴが備えられており体力のいる歩行となった。それでも悪戦苦闘の末当初予定通り13時10分山頂に到着した。

この稜線から山頂付近にかけては、アカヤシオ、ミツバツツジ、シャクナゲ、イワカガミ等が一面に咲いており、秘境と言われるこの地（桃源郷）にも確かに春は訪れていた。心も和やかになる。桃源郷に魅せられての山旅のようであり、中国の田園詩人陶淵明の心境にも遠く思いを馳せた。下山はもと来た道をそのまま戻り予定より30分早い15時40分登山口に到着した。全員怪我なく無事戻ることができた。

時間に余裕ができたので近くにある湯の島温泉に立ち寄りリフレッシュして帰路についた。途中島田・藤枝で会員3名を下ろし静岡駅北口に20時到着した。

参加者：有元、長野、西村、中村、赤堀、中村、中野

## ハイキングセミナー

## 富士見岳（1078m）

橋本　耕一

このコースは6月5日、会員山行で下見済。支部会報80号15頁（西澤）

11月27日

天気予報は午後から雨、申込者5名の内参加したのは1名だけであった。会員7名の総勢8名で7時3分梅ヶ島温泉行きのバスで出発。

街道沿いに咲く皇帝ダリヤの花も思いなしか元気がなく、空も今にも泣き出しそうだ。それでもバスの中では、セミナー生として参加された、マラソンマンでもある青木さんを中心に賑やかだ。今日は楽しく成りそうです。

中村さんが「頂上からは、東に竜爪山や伊豆の山々が見られ、位置を変えれば赤石岳、悪沢岳、などが望まれる」と期待を持たせる。

バスが俵沢に到着　軽くストレッチ、さあ出発です。学校を左に見送り俵沢集落の茶畑を横切り（この茶畑は県の棚田10選に選ばれているそうです）集落を抜

けると、真富士山登山口、一本杉まで真富士山コースを登る。

天神山につながる分岐を北に回り込めば引落峠です。ここから荒れた急斜面を行く。

大滝の前の丸木橋で休憩、私は雨の前触れの天候ゆえ汗をかき体がだるく、下着を替える。やがて 一本杉分岐を右に折れて富士見岳山頂に到着、そこでまた下着を替えて昼食。

雨が降りそうになって来たので早々に下山する。下山途中雨が降り出し、体調も回復し水月院の分岐を目指して俵沢バス停まで車道を下る。

途中で見た皇帝ダリヤは元気を取り戻していた。

新しく入会した、中野さんが元気に写真を撮っている。一方若い大島わかなさんが思いなしか元気なく見えた。年末恒例の日本山岳会年次晩餐会で新入会員の代表として挨拶することになっていて、そちらに気を取られての山行だったと、後で知った。

参加者：セミナー生　青木和人

会員　有元、中村、西澤、勝又、大島わ、中野、橋本

## 新入会員の自己紹介

### 山﨑　洋（１６０６９）

沼津市在住の山﨑洋（やまざきひろし）です。現在35歳です。裾野市内の会社に勤めています。静岡支部の先輩会員から、「山小屋で山の映画を見て宴会する集まりがあるよ」と聞き、「何それ楽しそう！」と参加したのがきっかけです。

以来、金時山に登ったり、ハイキングセミナーの沼津アルプスに参加したりして、徐々に山の楽しさに目覚めてきました。中でも昨年９月に参加した黒部下ノ廊下では、最後の下りでギブアップし、長く危ない下り坂でおぶって頂いたり、個人山行で企画して頂いた年越し蝶ヶ岳山行では、徳沢テン場への下りで転倒した際に、先輩から借りたピッケルがザックから落ちたのに気づかない！（紛失）など、大失態がありましたが、最高の風景と、得難い経験にあずかることができました。

登山歴２年に満たない身ですが、どんどん健脚になり、いろんな山に挑戦してみたいと思います。趣味はブラックバス釣りで特技は英語（ＴＯＥＩＣ９５０点）です。

### 赤堀　栄子（１６０８９）

２０１６年10月入会しました赤堀栄子です。

日本山岳会セミナーに5年ほど前から参加、その間有元さんから何度か「日本山岳会入会だね」と誘われましたが、私など到底無理、夢の事と考えていました。

富士山セミナー時、宝永山荘で諏訪部さんの黒部下の廊下の話が気になり思い切って年賀状を出す、快く参加させていただきました。その後、諏訪部さん他皆様と穂高、北岳、白峰三山などにも同行させていただきました。雨に祟られても感激しました。

山行は楽しく達成感あり何故か安心して共有できた時間がとても大切に思えてきた。

昨年7月の茶臼、上河内岳は益々楽しい山行になりました。雨も苦にならず、皆さんともっと楽しい時間を共有したい想いが強くなり、準会員でもと入会を決断いたしました。早速大島支部長に連絡した所、どうせなら正会員の方が良いとの返事でした。

私は現在63才、山は初心者です。山行、山談義等で知識を得る嬉しさも味わい、一歩一歩前進し歩ける限り登りたいと常に望んでいます。宜しくお願いします。

## 照内　明良（16090）

入会のきっかけは祖父のリハビリでした。祖父のリハビリに行った時に叔父さんとたまたま山の話になり、照内豊（私の祖父の弟、静岡支部会員）さんが山岳部出身と聞かされ、私の中で豊さんは日本酒のおじさんから、山のおじさんに変わりました。山の話がしたいと私から連絡し、富士宮まで押しかけた際に豊さんに入会を勧められ、久保田保雄さんに紹介者になっていただき、10月に入会しました。私は埼玉在住で理学療法士として働いていますが、少しでも豊さんと一緒に活動ができればと思い静岡支部に入会しました。登山を好きになるきかっけを考えると、小4の時に豊さんに連れられて登った富士山登山になります。頂上には行けませんでしたが、大人になって登山を始めるきかっけとなりました。

昨年度に日本登山医学会にも入会しました。仕事と趣味を結びつけながら、ファーストエイドや運動生理も含め登山に関することについて少しづつレベルアップできればと思っています。よろしくお願いいたします。

## 中野　雅章（16105）

平成22年より静岡市葵区瀬名に住んでいる中野雅章です。

大学卒業後約40年間民間企業で働き最終的に静岡に戻りました。自由の身になると、かつて友人と登山を楽しんだ思い出が蘇り、また難所を走破した記憶も懐かしく登山を再開することに致しました。

当初は登山ガイド、静岡法人会等の企画による山旅でした。そして平成27年日本山岳会静岡支部主催の公開セミナー大光山に参加、感銘を受けました。その後２回のセミナー参加を経て平成28年11月日本山岳会の会員になることができました。

私のような未熟な登山経験しかない者にも入会の道を開いて下さった日本山岳会静岡支部の皆様には誠に有難く深く感謝申し上げます。

私は現在67歳です。この年齢になると登山が人生と一体となり切り離せないものになっています。かような楽しみを抱きながら、体力を整え、なるべく多くの行事に参加するつもりです。ご指導いただきたくよろしくお願い申し上げます。

## 鈴木　信弘（16109）

私は考え込んでしまう癖がある。

登山が好きになった大きな出来事は、夏の赤岳を登った時だと思う。

登山経験もなく、登山装備も持っていなかった為、靴は運動靴、服も平服だった。登山愛好家の指導の下、這い上がって山頂に到着。しかし、まだ帰れない。阿弥陀岳に向かった。無理だと思ったが、阿弥陀岳に着いた。綺麗な景色や達成感より、これで下山できる事が嬉しかった。下山の足取りはとても重く、何よりライトに引きつけられてきた虫が嫌だった。私は登山を二度としたくないと思った。

しかし、数日経つと急に達成感が生まれ、日常生活においても限界の１歩先を進めるようになった。悩み事も山頂の景色を思い浮かべると些細な事に感じた。登山中の無心になれる感覚、限界への挑戦、達成感を求めて、より難しい山を登りたいと思ってしまった。

私は山に登る度に二度と登りたくないと思うが、また登ってしまう。こんな私ですが、宜しくお願いします。

## 吉本　恵子（15889）

山との出会い、それは富士山でした。

６年ほど前、友人から富士山の山小屋でのアルバイトを紹介してもらい、もともと興味のある世界でしたのですぐに応募し夏のシーズン中 住み込みで働く事となりました。周りは何もなく あるのは目の前に広がる大パノラマの景色と果てしなく続く大空。待っていたのは天空での生活でした。

そこで出会った多くの方のキラキラとした表情に惹かれ「私も登りたい！」そう強く思ったのです。そこで毎日登って来られる方とご一緒させてもらい歩き

方、呼吸の仕方、山での心得などたくさんの事を教わりました。それからというもの時間をつくっては登るようになったのです。

富士山中腹にて

不思議な事に山にいるときは全身からエネルギーが満ち溢れとても気持ちがよく笑顔になっているのです。山の魔法にかかった私の登山人生は始まったばかりです。

これからどんな出会いや体験が待っているのかと思うとワクワクが止まりません！こんな私ですが どうぞよろしくお願い致します。

## 会員動向

**新入会員**　竹渕　陸（16190）
赤羽あずさ（16201）

**退会者**　片山　健（12632）

**物故者**　小田　直美（11887）

小田氏は４月30日午後２時５分ごろ、北アルプス・剣岳の源次郎尾根を下山中雪崩により死亡されました。ご冥福をお祈りいたします。

## 編集後記

永野委員長の後を継いで新しく編集委員長を仰せつかった長野和義です。

伝統ある日本山岳会に入会してまだ二年目で事情の良く分からないこともありますが、会員の皆様のご協力を得て少しでも親しめる支部会報作成に当たりたいと思いますので宜しくお願いします。

定年前に始めた私の登山歴はまだ二十年ですが、今では私の生活の一部となっています。私は「島田しらびそ山の会」に所属しているので、会山行に参加したいのですが、現状は自分自身が企画するポレポレ山行（のんびりやまあるき）の比率が高くなっています。

山の会会員や友人などに呼びかけ、１０００ｍ～２０００ｍの標高の山を歩行は最大７時間、日帰り中心で歩いています。景色の良いところや美しい花を見つけると立ち止まり写真に収めます。そして日帰り温泉で汗を流して帰宅、その日の山行を思い出しながら晩酌を楽しむとき至福を感じます。

ＪＡＣの山行には今年度より積極的に参加しています。所属する山の会より年齢的に似通った仲間が多く、少し頑張ればあまり足を引っ張ることがありません。また他支部の会員たちとも山登りができます。私にとっては山に登れれば良いのです。健康で山に登れることに感謝しています。

長野和義　記

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
有元　利　通
事務局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町8-13　木村勝利
編集責任者　長野　和　義
印刷所　株式会社　三　創
静岡市駿河区中村町一六六－一
☎054-282-4031

題字・牧野衛　背景・長野和義

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2017（平成29）年秋季
第82号

# 2020年2月26日 静岡支部は創立七十周年を迎えます

## 支部七十周年記念行事について

支部長　有元　利通

私の一期二年の任期の後ですが、2020年2月26日に静岡支部創立七十周年を迎えます。五十周年、六十周年記念行事を行ったのですから七十周年記念行事も行うべきと考えています。

以前定例会で周年記念行事を行うとして七十五周年が良いか七十周年が良いかという話が出たことがあります。その時、大方の意見が七十周年だったと思います。中部四支部で交流している越後支部さんが過日七十周年記念行事を行っておられますし、静岡支部と同じころ七十周年を迎えられる山陰支部さんも七十周年で記念行事を行われると思います。

静岡だけ七十周年をやらないで七十五周年をやるというのはないのではないかと思います。七十周年記念行事を行うとすれば当然準備がいるわけですし、その前に何を行うのか決めなければなりません。私の考えとしては五十周年、六十周年記念で行ったようなものでよいのではないかと思っています。

## 目次

★巻頭言
「支部七十周年記念行事について」　静岡支部支部長　有元利通　1
★紀行文
◆「中央分水嶺の山旅」　大島康弘　3
★シリーズ
◆「私のお勧めの本」第1話　八木　功　5
◆「山への想い」第14話　滝田博之　7
◆「文珠山荘だより」　諏訪部　豊　9
★個人山行
◆「初秋の表銀座と大キレット越え」　勝又千華　10
★こぼれ話「大山鳴動鼠一匹」　木村勝利　12
★会員山行
◆「青薙山から稲又山へ」　大島わかな　12
◆「光岳ピストン隊」　諏訪部　豊　14
★ハイキングセミナー「見月山」　山崎　洋　15
★会務報告　事務局長　木村勝利　17
★新会員の自己紹介　海野俊久　18
★小田さんの思い出　白鳥勝治　18
★会員動向　新入会員・退会者・物故者　20
★編集後記　長野和義　20

**一、記念講演会**

講師は支部長経験者で五十周年、六十周年記念や全国支部懇談会の時に講師を務められなかった方が考えられます。

または、六十周年の時（今の京都大学総長の山際寿一氏）のように外部から人を呼ぶという方法もあります。その場合は本部の会長、副会長経験者などが相応しいでしょう。

**二、展示会**

六十周年の時は静岡市民ギャラリーの一番大きい部屋を借りて、登山用具、写真、絵画など様々な品を会員が出品して展示しましたが、これも会場費はかかります。行う時期によっては冷暖房費もかかります。私としては省いても良いかと思います。

**三、記念式典・祝賀会**

記念式典・祝賀会会場は二年前か、遅くとも一年前に確保しておく必要があります。

**四、記念山行**

六十周年の時には静岡駅から歩いて賤機山の縦走でした。私の腹案では竜爪山の集中登山、一部は交差登山でと考えています。

**五、記念海外登山**

五十周年の時は、第一弾は当初の予定が玉山でしたが、少し前に地震で登山道が崩壊したために変更し台湾の第二峰の雪山（セツザン）、翌年の第二弾が韓国の第三峰雪岳山（ソラクサン）、さらに翌々年はモンゴルの山、アストラルハイルーハーンと続いていきましたが、どこか一つです。　未踏峰の中国の（仮称）チャウカラガイムスターグに行ったこともありますが、未踏峰を攻める力量があるかどうか。それよりは皆が登れるアジアの近場の山、韓国、中国、ベトナム、台湾、マレーシアあるいはハワイ等で千メートルから四千メートルくらいの山が良いのではと考えます。

私が海外登山候補として考えているのは曽根芳樹会員が少し前に登られたファンシーパン（ベトナム）や玉山、大覇尖山、南湖大山、北大武山（台湾）、智異山（韓国）、マウナ・ロア（ハワイ）、キナバル山（マレーシア）、イリアンジャヤのジャヤ山群、（インドネシア）、ウィルヘルム山（パプアニューギニア）等です。

**六、記念誌発行**

記念誌は発行した方が良いと思いますが、既に案が出されている「南アルプス山岳史（誌）静岡県編」を記念誌として間に合わせるなら、しっかり体制を作って準備しないといけません。

**具体化は実行委員会で**

以上私が提起したことの具体化は、今後役員会や定例会などで検討し、皆さんにお諮りしますが、いくつかのプロジェクトチームを編成して推進していきますので皆さんのご協力をお願いします。

# 「中央分水嶺の山旅」
## 竜飛崎から巻機山まで

大島　康弘

幼い頃、分水嶺という言葉を知り、隣り合う川の流域を分ける山稜を赤鉛筆でなぞったことを覚えている。長じて、登山に親しむにつれて、いつしか日本海と太平洋を分ける本州の大分水嶺（中央分水嶺）を歩いてみたいと思うようになった。

私が若かった頃は、山を生活の場とする人々が沢山いて営林署の管理歩道、山仕事の作業道や杣道、町村境界の切り開きなど、山中を縦横に道が巡っている時代であったから、大分水嶺の縦走は、当時はずっと易しかったはずだ。

時を経て、薪炭の需要は激減し、建材も輸入材に席巻され、森林産業は衰退の一途を辿り、営林署はその存立基盤を失って、業務の軸足を伐採から森林の保護へと転換した。慣れ親しんだ名称も森林事務所に改められ、管理歩道は放置され消滅した。杣道も通う人がいなくなり、山道は主要な登山道を除いてそのほとんどが薮に没してしまった。国土地理院の地形図に印されている山道の多くはわずかにその痕跡を留めるだけで、安易に入り込むと酷い目に遭う。

私が大分水嶺に分け入ったのは退職して一年経った２００２年のこと。津軽半島最北端、竜飛崎は『階段国道３３９号線』の起点から南下を始めたが、地図に記された稜線歩道はチシマザサに埋め尽くされ、２００ｍ進むのに１時間もかかる有様で、大分水嶺縦走が如何に困難かを思い知らされ、２日目に支援を頂いた森林事務所に津軽山地縦走断念を報告した。

はるばる静岡からやって来たドンキホーテを気の毒に思ったのだろう、所員の一人が、折角だからと吉田松陰が越えたという算用師峠に案内してくれた。それがきっかけで、峠から北上して、縦走を断念した地点に到達することができた。私の分水嶺の山旅は森林事務所の一職員の厚意が縁で始まったのである。

この辺の事情は『不盡』57号（２００５年春号）合本94ページ、『本州大幹縦走　竜飛崎から十和田湖へ』でも触れているので参照されたい。

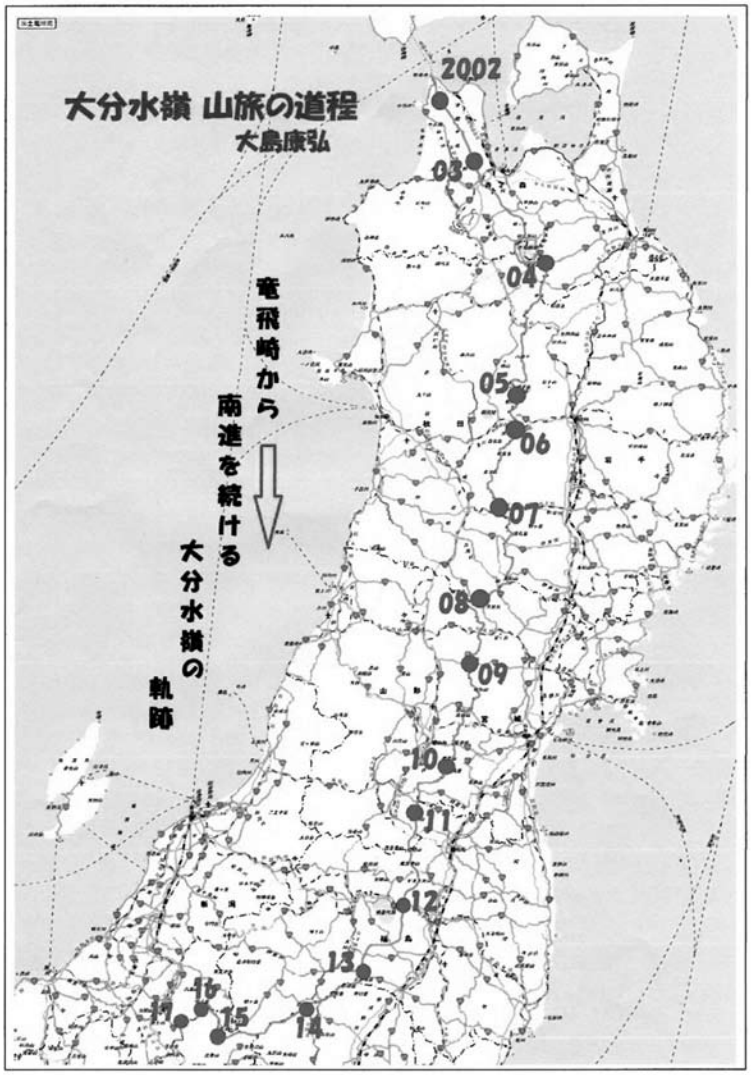
以来、37回の山旅を重ねて２０１７年６月初旬、ようやく９５６キロメートルを踏破して日本１００名山の一つ、巻機山に辿り着いた。あの日から既に15年の歳月が流れている。

分水嶺踏破を思い立った頃、私は大分水嶺が海に没する山口県防府まで５年ほどで着きたいと思っていた。歩き始めて私の見積もりが如何に杜撰で楽観的であったか、嫌というほどに知らされた。

稜線には大量の積雪で上に延びることができず、放射状に地を這うように枝を広げたブナや、１ｍ先が見えないほどに密生した背丈を越えるチシマザサが行く手を阻んでいるとは、予想だにしなかったのである。

『大分水嶺縦走』は山好きなら容易に思いつきそうなテーマだから、かなりの数の登山家が既に踏破しているのではないかと思っていた。しかし、実際に取り掛かってみると、これはライフワークとして取り組む外はない、大変な時間と労力そして綿密な準備と、単独行の場合にはそれなりの覚悟が必要だ。

竜飛崎から歩き繋いで、大分水嶺が玄界灘に没する地点まで、２７００㎞に及




ぶ壮大な山旅を実行に移したのはひょっとすると私が最初ではないかと思い始めた矢先、日本山岳会創立100周年記念行事の一環として、2004年、全国の支部が一斉に大分水嶺の踏査を始めると聞いた時はモチベーションが低下したことは言うまでもない。

その後、細川舜司氏（2008年）、執行一利氏（2014年）、町田有恒氏（2016年）らが次々に本州大分水嶺踏破の偉業を達成した現在では、3氏の踏破の仕方と異なって私の場合は本州の北端から歩き繋いでいるので、そこに先駆的な意義と楽しみを見出している。また、孤独なはずのこの山旅で、図らずも私は多くの人の共感、知遇を得ることができた。その人達との交流が私の山人生を豊かなものにしてくれたことを感謝している。

分水嶺の山旅にこだわっているうちに、山登りに以前ほど興味を覚えなくなったことを白状しなければならない。道のない分水嶺の山稜を行く不安と緊張は登山の比ではない。そして、山を下った時の達成感と充足感は、悟りの境地もかくやと思われるほど清冽である。通常の登山に以前のように情熱を傾けられなくなったのは、分水嶺縦走の自然な帰結と感じている。

分水嶺縦走は新しいジャンルの山歩きであると思う。いわゆる登山は登山道、山の情報、宿泊地などの存在を前提に成立している。登山道を外れないことが登山の鉄則であり、計画した時間通りの行動が求められる。

一方、分水嶺縦走は定まっているのはルートだけで道もなければ、情報も無い。地形図だけを頼りに未知の世界を行く。予測は判断を誤る恐れがあるから極力避け、目前の事象をありのままに受け入れて状況に柔軟に対応しなければならない。給水計画は死命を分ける最重要事

項で失敗は許されない。

分水嶺縦走は「未知の世界を行く」のに対して、通常の登山は「人のつけた印を辿る」と言っていいだろう。どちらがワクワクするか言うまでもない。

雨の稜線　上越国境丹後山にて

今年（２０１７年）の６月初旬、上越国境の本谷山に登り、４泊５日で巻機山まで縦走した。この区間の縦走は３度目の挑戦であった。

１度目は昨年の５月、食料不足で中途下山。２度目は今年の５月中半、逆巻く激流と残雪の垂直の崖に阻まれ、丹後山経由にルート変更したものの、天候不順と装備不備で縦走を断念。３度目は腰の不調と弱気の虫との葛藤の果て、３日目にようやく縦走を決断し退路を断った。

藪を漕ぎ、雪田を拾いながら、エスケープルートのない山稜を行く一人旅は緊張の連続であったが、巻機山山頂で雨脚を伴うクラゲ状の雨雲の来襲をタッチの差でかわして巻機山避難小屋に転がり込んだ時には、思わず天に感謝した。無事、里に下ったときの達成感は15年前、初回の縦走成功の喜びを津軽の海を眺めながらしみじみと味わったあの深い感動を彷彿するものであった。

次回は巻機山から谷川岳へ。

脊梁稜線をのんびりのどかな気分で歩き、疲れたらそこで泊る・・・。私が夢想する大分水嶺の山旅の形である。しかし、実際は一刻も早く安全圏に到達したい一心で、ひたすら前に進むことに専心するばかりで、サバイバルゲームみたいな旅の連続であった。次回こそは上越国境のなだらかな山並みを愛でながら、のんびり歩きたい。

シリーズ「私のお勧めの本」―第1話―

## サロン的読書について

八木　功

標題のタイトルをシリーズに追加したいという、新編集長の意気に感じて先陣を引き受けてしまった。決断を促したのは、編集長を中心に若い委員二人の頑張る姿であった。

私は77号から80号まで編集に係わった。原稿を拝見して日本山岳会が「サロン」であることの意味を実感した。「山の名著」を紹介する本は何十冊とあるが、先ず会員の山に向かう姿勢や著作を紹介したい。後人の参考になればうれしい。

今後抱えるだろう幾つかの問題。

①　静岡支部の在り方について

77号、大島支部長は二期目を迎えて会の進むべき方向を意欲的に述べられている。ことに78号の『井川を南アルプスの登山基地に』また、望月氏の『南ア山岳史編纂の提言』は静岡支部の事業として定着させてほしい。

②　サロンか？山岳会か？

会員の心構えとして大石先生（元静大教授）は『山に対する尊敬と畏敬の念と憧れを忘れない品格』をと語る。その幅広い見識は著書『**折々の想い**』（静岡新聞社）にうかがえる。

一方諏訪部氏（日経にピッケルの収集家とし紹介された）は『新入会員を増やすには、お高くとまるのではなく会員山行の活性化こそ大切』と語る。著書『**嶺雲のかなたに**』では岳友との深い交友が読み取れる。それが若い会員への優しさにつながっているのでしょう。

山岳会が直面する問題（理念と行動）として考えさせられる。

切り口は違うが、78号で元編集長の永野氏が『独創的な登山の勧め』と題して、本多勝一著『**山を考える**』と故千坂正郎の『**情念の山・理念の山**』を取り上げ、パイオニア・スピリットを求めてプロのガイドとして独自の道を歩まれている。同じページ、小川氏の『プロガイドとして』の最後に『・・・時には一人で山に向かいたい』とある。プロ登山家の心境をサロンでの話として伺いたい。

この4月30日、支部会員である小田直美氏が剣岳源次郎尾根を下降中雪崩で亡くなられた。所属する静岡山岳会の会報第52号に『・・・加齢による能力の衰えの認識と攻めの姿勢とのバランスを崩さないようにしたい』と書かれている。私には氏の後輩への遺言のように読めた。

一般山岳会に属さない若い新入会員のことを思うと、たとえ、個人山行であれ技術指導の必要性を考えざるを得ない。プロの見解を知りたいと思う。

文珠山荘について

「文珠山荘」建設に係わるエピソードとして、小柳氏の『山荘建設の頃』と池上さんの、『兄を思う』の二編が心に残る。

編集・制作静岡新聞社

池上さんには『**父と山**』と『**清水に嫁いで**』の著書がある。殊に『**父と山**』は、父荻野恭一氏へのオマージュとしての第一章「赤石岳への挑戦」は貴重な山行記録になっている。昭和5年、青年3人（旧制中学5年）が一週間かけて歩いたコースは若い人に挑戦を促す。

10月文珠山荘が『公益社団法人日本山岳会の所有』である石碑が建てられた。資産勘定は何処に載るのだろか？原価償却費は計上されるのだろうか？やがて必ず起きる、建物や設備及び外構の維持管理費用の問題が心配される。（注、登記されていないので名目上は1円の由）

文珠山荘の本棚に会員の故千坂正郎（本名西郷正郎）氏の労作『**北八ヶ岳の黒い森から**』が十数冊、ある。

『山のロマンチズムの無いアルピニズムは、索漠とした砂漠のような世界である。』とあとがきにある。

荻野父子の山荘建設へのロマンティシズムに思いを致しては、と読書家の安間氏が持ち込まれたのでしょう。

安間氏については、島田巽著『**山稜の読書家**』（茗渓堂）に紹介されている。

厳冬期のダウラギリに挑んだ折『**遥かなりエヴェレストーマロリー追想**』を持参し読まれている。まさに山稜の読書家だ。

③　その他会員による著作

長田氏の責任編集による『**もみじ会（30回記念）山と人**』と故山本朋三郎氏の『**―山の歴史―南アルプス**』（長田氏校正）この二冊は支部の歴史を知るうえで重要な資料だと思う。

79号、白鳥氏の「自然観察紀行」はリニア新幹線による自然破壊を懸念して持論を熱く述べている。小田氏の大井川東俣に対して西俣（小西俣渓谷）の遡行報告になっている。

勝見氏の自伝『**遊びが仕事で、仕事が遊び**』（有限会社テラ）は氏の独特な語り口で、人を惹きつけるものがある。氏の文体は佐伯邦夫著『**ぶどう原に雪ふり積む**』（北国出版社）を思い出させる。その序文には新田次郎の『**山男の本物と贋物**』の一文を載せている。佐伯氏ならではのユーモア?は痛快だ。

80号、照内氏の『松濤明さんを想う』が心に残る。松濤明は照内さんのような人だったかもしれないと想像した。

遺書『**風雪のビバーク**』は常に遭難文学の筆頭に挙げられている。

白鳥氏の『大日古道』は昭和30年代の県山岳連盟の活動や井川の歴史に触れ、読み応えがある報告になっている。紹介されている久保田三郎氏の資料に加えて森竹敬浩著『**安倍奥の雄、安倍家代々と金山衆**』（静岡新聞社）を勧めたい。

④　最後に後進に贈る言葉

『山の本を読まなくとも人間として立派な人は多くいる。』

『本をちゃんと読むと「ことば」を越えて人の心が読める』

『登山で一番不道徳なことはバテルことである。』

『「**本心**」で、きれいごとなど書く人は遭難しやすい』

7月、横窪沢小屋に『人の心を読める』長生きしそうな、20代から80代が集った。まさに「サロン」的雰囲気であった。

サロンが消える時、私も静かに会を去ろう！（「**本心**」か?だって・・・）、

他にも会員の著作は多くあると思う。次回担当される方に期待して、先陣を切らせていただきました。

シリーズ「山への想い」―第14話―

# アンナプルナの思い出

**滝田　博之**

県岳連創立三十周年記念事業として、ヒマラヤに登山隊を派遣することが、常任委員会で決定した。当時海外登山委員長だった私は、ヒマラヤに行きたいという思いから、担当を引き受けたことを覚えている。

ヒマラヤに対する情熱は人並みにあると思っていたので、海外登山委員会の再編成から始め、準備を進めていった。役人で長期休暇の取得が難しい私は、全県的な登山隊を派遣するという会長の言葉に期待し、登攀隊長を引き受けることにした。

アンナプルナ1峰に登山隊を派遣することと、全隊員について常任理事会の承認が得られたころ、隊長から県岳連で登山隊を派遣するので、多少の犠牲を払っても登頂したいという話があり、その晩はあれやこれやと思いめぐらし、一睡もできなかったことを思い出す。

この遠征は、長い準備期間と多額の個人負担、多くの協力者によって行われる

ものである。精一杯やったんだと、自分たちも周りの人たちにも納得してもらえる山行しようと、隊員たちと話し合った。

77年が県岳連創立三十年に当たるので、78年のポストにはアンナプルナ1峰に登頂したかったが、ネパール政府に登山許可申請をして1ヶ月目、他の登山隊に許可済みなので許可できない旨の電報があり、仕方なく79年のプレに申請をし直した。

隊員は、真剣に準備に取り掛からなければならないと思っていたが、出発まで1年半もあることなどから、準備に身が入らなかった。77年の11月に正式許可の通知をもらい、やっと本格的に準備が進められた。

隊員は、県岳連が派遣する登山隊ということで、資金面での期待は大きかった。しかし、準備が進むにつれて、予算がアップし、寄付金もあまり期待できないことから、個人負担が100万円になってしまった。隊員にとっては参加、不参加の根本問題に発展したが、何とか全員参加でまとまった。

私の休暇の許可が出ないことから、県岳連は、登山隊を派遣することを新聞発表することが出来なかった。そのため物資の調達や資金カンパ等の活動が出来なかった。結果は資金面の不安と梱包作業の時間が不足し、荷物を船積みするまで夜遅くまで作業が続いた。

短期間で装備をキャンプごとにパッキングしたり、食料をローテイションに合わせてパッキングしたり、隊員は集中力を発揮した。こうした準備を通して、隊員はアンナプルナ1峰を目指して一丸となった。

キャラバンで必要なポーターは、ポカラで雇用した。トロブギン峠（4200m）に雪があることを予想し、靴・ソックス・手袋を用意したが、ポーターは4分の1ほどになり、ベースキャンプ入りは1週間ほど遅れてしまった。しかし、キャンプは順調にのばすことが出来た。

第1次の頂上アタックメンバーは、1つ1つキャンプを登り第5キャンプに入りアタックに備えた。しかし、高山病になるものが出て、アタックは1回になったが好天に恵まれ、日本人として初めて8000m峰に無酸素で登頂することが出来た。

初めての遠征で皆が戸惑い、必死に乗り越えたこと、そして日本人として初めて山頂に立ったことなどが、今でも楽しく思い出される。

登頂三十五周年を祝う会でネパールへ行こうということになり、昨年メンバー4人と友人と共に、アンナプルナ北面やベースキャンプを見ることが出来た。涙を浮かべている者もおり、あの時のことが鮮明に思い出された。

アンナプルナ１峰北面

ベースキャンプにて

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 文珠山荘だより

諏訪部　豊

文珠山荘の敷地入口に石碑を建てました。石碑に刻まれた碑文は、この敷地と建物が日本山岳会の所有するものであり、荻野恭一会員から寄贈を受けたものであることを記してあります。またこの山荘が荻野恭一会員と長男の士郎氏とで8年2カ月の歳月を掛けて建てたものであることを記してあります。

去る10月28日に秋の山荘行事を兼ねてこの石碑の除幕式が行われました。残念ながら当日は荻野恭一会員の参加は叶いませんでしたが出席者全員でこの立派な石碑の完成を祝いました。これからもこの山荘を有効利用して次代に引き継いで行きたいと思います。

尚、この石碑建立は荻野恭一会員の強い希望によって実現したものであり、費用は荻野恭一会員自らが拠出しました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

個人山行

## 初秋の表銀座と大キレット越え

（2015年9月20～23日）

勝又　千華

早朝の中房温泉は大勢の人でごった返していた。初日はまず燕山荘を目指す。最初の大休止。合戦小屋では「お疲れさまでーす」と黄色い声が響き渡り、声の主達が名物のスイカを売りさばいている。これが買わずにいられるか。かぶりつくと内臓から火照った体にひんやり甘いスイカが染み渡る。先はまだまだ長い。稜線に近づくにつれナナカマドの朱色が日差しを浴びて真っ青な空に映える。燕山荘手前の急登を登り詰めると、北アルプス裏銀座が視界の端から端まで広がっていた。何という景色！

燕岳までピストンし、和やかな雰囲気の燕山荘を後にする。歩きながらクロマメノキの実を頬張る。ぷっくりと張りのある美味しそうな実よりも、ショボショボに熟した実のほうが程よい甘酸っぱさで皮も薄く美味しかった。

大天井のテント場は混雑していたが、槍ヶ岳を望める特等席に幕営。テント内で作ったソースかつ丼を諏訪部さんと中村さんが大いに食べ残した。さては景色で満腹になってしまったのか。ならば仕方ない。「少し手伝いますよ」と言ってしまった私が全て食べる羽目に。

翌朝大天井岳へ登った後、テントを畳んで喜作新道を槍ヶ岳に向かって進む。開拓者小林喜作の本業は猟師だが、金儲けのために道を作ったとか。きっかけはともかく、おかげさまでこうして気軽に槍ヶ岳を目指して行けるわけだ。

稜線を行くと槍ヶ岳が徐々に近付いてくる。この時の私は右前方に見える槍の穂先を眺めては「いい道だなぁこれが表銀座かぁ」と、それしか考えていなかったようで他の記憶がほとんどない。唯一ウラシマツツジの草紅葉が稜線をこぼれるように染めていたことは覚えている。

ヒュッテ西岳の外ベンチに座ると、この先の東鎌尾根がよく見える。かなり下ってから再び登る道にゾッとするが進まねば着かない。とても長い梯子（しかも着地点があやふやな妙な梯子だった）を降りたかと思えば、今度はいくつか連続してかけられた梯子を登る。登るにつれ変化していく景色をたびたび見返り、一句ひねってみようと試みる。渾身の一句を披露したが反応がイマイチだったので心のゴミ箱に封印した。

ヒュッテ大槍に着く頃には俳句を考える余裕はなくなっていた。諏訪部さんが奢ってくれた５００ｃｃのジュースを３口で飲み干す。ここで計画の変更が告げられた。時間と疲労を考えて２泊目の予定地だった南岳小屋をやめ、その手前の肩の小屋に幕営ということになった。

肩の小屋まであと少しのところで穂先を見上げると、とんでもない光景が。一番下から頂上まで、まるでルート図を描くように人が連なっている。そして案の定テント場も既に満杯で、小屋に素泊まりするより他なかった。

宿泊申し込み後、我々も穂先への行列に加わり、少し登っては待つ、また登っては待つ、を繰り返す。待ち時間に隣の下り専用ルートを観察する。ツアーの団体様、お子様方、岩場初体験かそれに近しい方々が見受けられた。驚いたのは我が子を知らないおじさんに任せて、ちょっと下の方から子供の様子を伺いながらも声もかけずに自分は先に下ってしまう母親がいたことだ。傍から見れば父親が小学生の息子に手や足の置き場を一つずつ教えて下って行く光景だったが、その子は恐怖心で完全に腰が引けていて「お父さん、その子を槍に連れて来るのはまだ早いのでは」と思う人もいただろう。その二人の後方にいた若者が「このおっさんは赤の他人らしい」と実情を話していた。母親は自分がこの急斜面を下ることに精いっぱいで我が子の面倒まで見ることができなかったのだろう。この子が山を嫌いにならないことを願うばかりだった。

穂先のてっぺんまで結局２時間半かかった。時刻は16時半。風は穏やかで雲海に浮かぶ笠ヶ岳や白山が見えた。また一つ極楽に来てしまった気がした。北鎌尾根から上がってくる人を見るとムラムラと興味が湧いてくる。未だ減らない行

列を見るとあまり長居はできない。目に神経を集中させて景色を焼き付ける。写真も撮る。下りは20分程度だった。十二分に槍ヶ岳を満喫した。

小屋に戻って早速夕食宴会。なんと斎藤さんがお酒を全てご馳走してくださった。最初は控えめにワインのハーフボトルを飲んでいたが、最後はフルボトルを空けてしまった。小屋主でJAC信濃支部の穂刈康治さんに(酔っていたけど・・)挨拶をする。

翌朝、斎藤さん（会員外で諏訪部さんの友人）が腰の不調を訴え、単独で槍沢を下ることに。こう決心することはきっと容易でない。今回一番のメインはその先の大キレットだ。斎藤さんと無事に再会できることを願って先に小屋を出る。

キレットにさしかかる頃には、早朝の強風が嘘のように穏やかになっていた。天候良好の大キレット日和。「下を見ないほうがいい」と言われるが、下を見ずに進むのは難しい。恐ろしいのはこの痩せ細った岩の道そのものよりも、気持ちが負けて前に進めなくなることだ。それでも怖いもの見たさに高揚してくる。

しばらくは自分たちのペースで進んでいたが徐々に前との距離が縮まっていき、ついには長谷川ピークで岩にしがみつきながら待機することに。北穂から南岳に向かって来る逆コースの人も多い。互いに声を掛け合い、すれ違いを交わしながらA沢のコルまでたどり着く。いつの間にか立ち込めたガスのおかげで全く怖さを感じなかったが、やはり下を覗いてみたいとも思った。私としてはここまでの行程よりも、その先の岩壁の方が恐ろしく感じた。なぜなら落石を告げる叫び声とカラカラと石ころが落ちてゆく音を、ここに来るまでに何度も聞いていたからだ。絶対に岩を落としてはならないという気持ちが強烈にのしかかる。最後まで気を抜けず、よじ登るのと気を張り詰めるのと、両方に疲れ果ててしまった。

途中、滝谷を登るクライマーを観察。人が蟻のように小さく岩にくっついているように見える。小屋から10mほど下まで来ると美味しそうな香りがほのかに漂う。諏訪部さんの「小屋についたらカレーを食べよう」の一言で、どこに残っていたのか元気がモリモリ湧いてくるから不思議だ。ザックの重さに振られながらも、無事にキレットを越えられた。

北穂小屋の美味しいカレーを食べ、南稜を涸沢まで急いで下る。なにせ紅葉よりも鮮やかな色とりどりのテントが涸沢を埋め尽くしつつあるからだ。到着してすぐに場所を探す。候補地にザックを置いていないと他を探す間に見知らぬザックが置かれてしまうほどの混雑だ。幕営し終えると今度は涸沢ヒュッテのテラスに急ぐ。タイミング良く斜面を見下ろす席を確保し、涸沢名物のおでんで乾杯する。見回すと紅葉はまだ3～4割。去年

の秋は最盛期にやや遅れ、今年は早く来てしまった。諏訪部さんの言葉をお借りするなら「赤と黄と緑の絵具を垂らしたような」涸沢の紅葉をいつか見てみたい。

翌日、無事に斎藤さんと明神で合流し、嘉門次小屋にてイワナ定食を食べた。梓川右岸をたどり、岳沢湿原と山研を経由し帰路につく。意外にもこの日は、山研宿泊者はいないとのこと。もう一泊したい気持ちが今も上高地に置き去りのままである。

編集委員からの追記

「赤と黄と緑の絵具を垂らしたような涸沢の紅葉をいつか見てみたい」とありますが、今秋にそれを実現したとのことです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

こぼれ話

## 大山鳴動鼠一匹

木村　勝利

私が山小屋の仕事を始めてから、14年が過ぎました。はじめの2年間は聖平小屋でお手伝いをさせて頂きました。仕事は夏（7月～9月中旬）の間ですが、様々なお客様が小屋を利用されます。

ある日、井川観光協会からＮＨＫテレビ「小さな旅・聖岳」の撮影でスタッフ5名が、2週間滞在するとの連絡が入りました。聖平小屋は宿泊者が多い小屋です。一般登山客の2連泊はあるがそれ以上の連泊はありません。2週間の食事をどの様に準備して出すのか、従業員みんなで悩みました。

スタッフ到着後、撮影スケジュール等は小屋番の原田さんが打ち合わせをし、食事については私が話をして、従業員用の食材も使用しながら頑張ってやるからとスタッフの理解を求めました。スタッフの皆さんも小屋の迷惑にならないように、何でも良いと言って頂き気持ちが楽になりました。撮影は小屋の日常生活、登山者の食事の様子、周りの風景などの色々な場面で進んでいきました。スタッフのなかには地元の静岡の人もいて、だんだんと気心が知れてきました。天気の悪い日もあって大変でしたが、なんとか撮影も終了してスタッフの下山の日がきました。2週間も生活を共にすると別れるのが寂しく思いました。

我々はテレビ放送を観るのを楽しみに下山しました。しかし30分放送の中で静岡側の分は、ほとんど映っておらず、大変がっかりしました。遠山側の話が主な「小さな旅」でした。後日、ＮＨＫからお詫びの連絡がありました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

①

## 青薙山から稲又山へ

（2017年6月10～11日）

大島　わかな

一泊二日で南アルプス白峰南嶺の青薙山・稲又山に登りました。初日は池ノ平まで。翌日は青薙山・稲又山までのピストンです。

青薙山登山口より、11時50分登山開始です。初日の楽しみは何と言っても池ノ平での宴会。

登山口から約2時間で到着する池ノ平は平坦で広く、水の湧き出る池もあります。池は一見すると水たまりのようにも見え、どこから水が湧き出しているのか

不思議です。到着してすぐに、担ぎ上げた酒を冷やします。枝を集め焚き火の準備も整いました。

15時宴会開始。火を囲って山の歌を歌い楽しいひと時を過ごしました。19時には3つのテントに別れ就寝

池の平にて宴会

翌日は鳥というよりは、鹿の鳴き声で起床。5時30分、青薙山・稲又山を目指して出発です。広く緩やかな場所を登っていきます。一面に生えたカニコウモリ。知らぬ間にシャクトリムシがくっつきます。ほどなくして、大崩壊地「赤崩」の南側へ出ました。あまりの規模に思わず足が竦みます。古そうな、海底から隆起したと思われる地層が露出しています。掘って化石が出てきたら面白いです。赤崩の上部からは上河内岳や茶臼岳が見えました。

今回の目当てのキスミレの群落とも遭遇。小さな黄色の花びらが可愛らしいです。登山道の中心に堂々と咲いているのもありました。踏みつけてしまわないように細心の注意を払います。

キスミレ

8時10分、青薙山に到着。山頂付近は小広いスペースがあり、大休止です。

トレランの女性が一人でやってきました。それ以外は誰一人会うこともなく、静岡支部だけの静かな山歩きでした。

青薙山からは稜線を歩きます。アップダウンが多く体力を消耗しました。ところどころに現れるイワカガミに励まされながら歩きます。途中、立ち枯れた木々の間を進んでいきます。ふと昨年歩いた不動岳を思い出します。

2時間程でついに稲又山に到着。樹林に囲まれた慎ましやかな山頂でした。稲又山の奥には道標があり、登山道が続いていました。所ノ沢越。突き詰めれば北岳へ行けることを知り、興味が湧きました。残念ですが今回は、ここで折り返しです。元来た道を引き返し、14時に池の平まで戻ります。

テントを撤収し、30分後、青薙山登山口へ向けて出発です。崩落した斜面をいくつかトラバースします。危険なところでは荻野さんが補助ロープを張ってくださり、安心して通行することができました。15時50分、無事に下山。

あっという間に過ぎ去った二日間でした。小さな花たちにも出会い、大迫力の「赤崩」、池の平での大宴会、楽しさ満載の山行となりました。

参加者：有元、大島ぁ、長野、中村、仙石、岩﨑、諏訪部、荻野、勝又、赤堀、大島

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（注）横窪沢小屋をベースとした、今夏の集中登山は大根沢山～光岳、光岳ピストン、上河内岳・茶臼岳の3パーティに分かれました。紙面の都合で、今号では光岳ピストンのみを掲載しましたが、次号には大根沢山～光岳のバリエーションルートを掲載します。

会員山行②

## 光岳ピストン隊
## （2017年7月14～17日）

諏訪部　豊

昨年は全員が横窪沢小屋に2泊して上河内岳と茶臼岳にピストンした。今年はそのコースに加えて光岳まで足を延ばす隊も編成した。光岳隊は長野さん、湯山さん、赤堀さん、それに私の4名だ。当初は茶臼小屋と光小屋でテント泊の予定だったが荷物を少なくして軽快に歩くべきと考え直し、2泊とも小屋に素泊まりすることにした。私は47年間細々とではあるが山歩きを続けて来た。しかし私にとって光岳は縁遠い山であり、これまで一度も行ったことがなかった。だからわくわくする思いで当日を迎えた。

前夜発で集合・出発したが田代の先のトンネルが夜間通行止めであることを出発当日知った。また梅雨が明けておらず雨降りだったので急遽文珠山荘泊りとした。翌日は前夜の遅れを取り戻すべく沼平まで快調に車を飛ばし、横窪沢小屋には昼頃着いた。木村さん達は小屋開け前の道こしらえをしていた。2日後の再会を約して上に向かう。梅雨空の高温高湿度の中、大汗をかいて午後4時前に茶臼小屋に着いた。ここでも小屋番の風岡さん達が小屋開け準備をしていた。同宿者は5名程度。営業前の冬季スペース使いなので宿泊料は無料だった。

2日目は快晴に明け、小屋前で日の出を迎えて出発した。茶臼岳から気分の良い稜線を進み、仁田岳を往復して易老岳を過ぎ、静高平に至る。この頃から登山者が急に多くなって来た。どうやら信州側の易老渡から来るらしい。これなら一日で光岳まで達することができる。主脈縦走にこだわらずに光岳のピークハント目的なら易老渡経由は便利だ。

イザルガ岳を往復した後、光小屋に荷物を置いてその日の内に光岳と光石を往復した。遂に登った光岳山頂は樹林で展望のない山だった。

光岳山頂にて

少し下ったところにある光石は石灰岩の巨岩で南側の展望が開けている。何かの本に静岡市内から見えるこの石が光るのが山名の由来と書いてあった。確かに昨年登った南ア深南部の不動岳からはこ

の石が確認できた。静岡の街中からは無理としても山中からは太陽の位置によって光って見えるのかも知れない。この岩の周辺だけは咲いている花が他と異なっていた。タカネバラやイワオウギがあり、ミヤマムラサキが岩の割れ目にたくさん咲いていた。

茶臼岳のタカネバラ

光小屋に戻って外のベンチで宴会とも夕食ともつかないダラダラ飲み食いをしていたら大根沢山から信濃俣を経由して来た中村パーティが到着した。４名ともクタクタだったが満足そうな顔をしていた。

木村さんからの事前連絡で、小屋では一番奥の場所をあてがってもらった。

翌朝は再度登ったイザルガ岳で日の出を迎えた。縦走路に戻り、昨日の道を戻る。風が強くなったが快調に進み、茶臼岳山頂で後発隊と合流した。長谷川さんと厚見さんはここから仁田岳までピストンするとのこと。上河内岳から下りて来た山崎君も仁田岳に向かった。

茶臼小屋で休憩していたら中村隊の４名も到着した。昨日できなかった光岳・光石ピストンをしてから北上して来たとのこと。昨年イワナを１匹釣り上げた湯山さんが横窪沢小屋に先行したが今年は釣果なしだった。

横窪沢小屋では今年も大宴会となった。来年は聖岳やもっと欲張って赤石岳から横窪沢小屋に来るプランも考えられる。ぜひ実現したいものだ。

## ハイキングセミナー

## 見月山（２０１７年６月４日㈰）

山﨑　洋

２０１７年度の第２回ハイキングセミナーは、安倍川右岸に位置する見月山（みつきやま）で行われた。標高は１０４７メートル。通常の語感から「月見山」と誤記してしまいがちである。かくいう私も、最初は間違って名前を覚えていた。登山者は多くなく、ルートをきちんと理解していないと遭難につながりやすい山、という事前情報があった。

この日は、朝７時前に静岡駅に集合し、７時少し過ぎのしずてつバス梅ヶ島温泉行きで移動。約１時間後、停留所「中平（なかひら）」で下車。余談だが、この路線は漢字１文字で「下」（しも）という名前の停留所があったり、「渡」（ど）という名前の集落を通ったりして興味深い。また停留所の付近には、ヤマメ料理が食べられる「見月茶屋」がある。

時刻は８時過ぎ。停留所から少し歩き、民家の横を通って少し広い場所に移動。天気は快晴で、全くの登山日和であった。本日の参加者は、セミナー生５名と、支部会員12名。会員の小川さんが音頭を取って準備体操。行きのバスの中でウトウトしていた私はまだ夢見心地だったが、強制的に酸素を取り込み登山モードに。自己紹介の後、早速歩行を開始。民家の間を縫うように登って行き、徐々に周囲の景色は茶畑、農道、農機具といっ

た佇まいになってきた。

歩行開始から30分程度で林道歩きは終わり、登山道に足を踏み入れる。この入口が覚えにくいため、中平方面からの登山を計画する人は注意が必要である。もう30分ほど歩いて、見通しの良い稜線に出る。ここから見た「オクシズ」や「安倍奥」と呼ばれるエリアの山々の景観は、なかなかのスケール感を誇っていた。真富士山や竜爪山、青笹山が近くによく見え、本日一番のパノラマが楽しめた。巨大な送電鉄塔のそばを歩き、青空のもとで小休止。ここで、会員の荻野さんによる読図講座があり、セミナー生は熱心に聞き入っていた。実際に山に登りながら経験豊富な登山家からアドバイスをもらえる機会は貴重である。

休憩後、再び歩行開始。次第に展望はなくなってしまったが、気温はそれほど高くなく歩きやすい。1時間半ほど歩いたところで山頂に到着。木々が茂り、どこも日陰になっていた。昼食の前に、会員の平井さんによるパッキング講座があった。最低限必要な装備、どんなものをどういう順番でパッキングすべきか、といった講義を聞き、参考になった。講義が終わるとちょうど正午過ぎであり、全員で座って昼食を取る。あちこちにギンリョウソウが咲いており、目でも楽しめた。

平井さんのパッキング

昼食後は、ひたすら樹林帯の中を進む。途中、イノシシのヌタ場があったり、道迷いしやすいルートを通ったりしつつ、904メートルの大篠山のピークを抜け、この日一番の難所、滑りやすい急こう配の下りへ。枯葉が多くその下がややぬかるんでおり、非常に滑りやすかった。かかとを使いながら慎重に下り、次第に高度を下げる。難所を抜けると、傾斜はややきつかったが、ぬかるみはなくなり先ほどよりは歩きやすくなった。

そのまま下降を続けると、やがて舗装路が現れ、終点が近づく。再び民家の中を通り、安倍川にかかる吊り橋を渡り、相渕バス停に到着したところでゴール。

ゴールにてセミナー生のひとこと

一人ずつ本日の山行を振り返り、16時前に全行程が終了した。今回のハイキングセミナーは、晴天に恵まれ、セミナー生2名の支部入会にもつながり、心地よい余韻とともに終わった。静岡駅界隈での反省会が盛り上がったことは言うに及ばない。

参加者
セミナー生：海野、荻原、服部、
林、村瀬　計5名
支部会員：有元、岩崎、小笠原、
小川、荻野、木村、諏訪部、
中野、長野、中村、平井、
山崎　計17名

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 会務報告

木村　勝利

4月12日(水)　平成29年度支部通常総会―静岡労政会館・出席者49名、委任状69名
4月14日(土)～15日(日)　文珠山荘「山菜天ぷらの会」会員12名、その他1名参加
4月23日(日)　公益事業・第1回ハイキングセミナー「竜爪山」受講生6名、会員7名参加
5月6日(土)　会員山行「愛知奥三河・日本ヶ塚、1107．3m」6名参加
5月10日(水)　定例会・19名出席
5月20日(土)～21日(日)　中部4支部交流会・担当山梨支部「西沢渓谷」14名参加
5月28日(日)　会員山行　「青笹山」16名参加
6月「会報・不盡」81号の発行
6月4日(日)　公益事業・第2回ハイキングセミナー「見月山、1047m」受講生5名、会員12名参加
6月10日(土)～11日(日)　会員山行「青薙山2406m・稲又山2405m」池ノ平テント泊、11名参加
6月14日(水)　定例会・17名出席
6月17日(土)～18日(日)　文珠山荘「山荘に舞うヒメ蛍鑑賞会」会員11名その他2名参加
7月12日(水)　定例会・22名出席
7月15日(土)～17日(月)　会員山行「南アルプス・光岳・茶臼岳・上河内岳登山」16名参加
8月16日(水)　「納涼懇親会」センチュリーホテル・27名参加
9月9日(土)～10日(日)　文珠山荘「納涼祭」12名参加
9月13日(水)　定例会・21名出席した
9月20日(水)　文珠山荘―荻野氏希望の石碑の設置7名参加
9月23日(土)～24日(日)　全国支部合同会議―東京四谷プラザエフ・有元、木村出席
10月11日(水)　定例会
10月13日(金)～14日(土)　第33回全国支部懇談会「茨城支部・筑波山」11名参加
10月28日(土)～29日(日)　山の日　記念事業「ふるさとの山を登ろう」梅ヶ島・山伏
10月28日(土)～29日(日)　文珠山荘　「ハロウィン」・石碑の除幕式開催

## 今後の予定

11月17日「会報・不盡」82号の発行
11月11日(土)～12日(日)　会員山行「秋の懇親山行」奥大井・天水
11月18日(土)～19日(日)　神奈川支部との交流会、富士山側火山他
12月2日(土)　年次晩餐会・新宿京王プラザホテル
12月9日(土)～10日(日)　文珠山荘「忘年会」
12月13日(水)　定例会

**2018（平成30）年**

1月14日(日)　新年会　静岡駅前・松坂屋8F「梅の花」　受付12時30分より
2月11日(日)　第3回ハイキングセミナー「冬山入門・富士山、二子山」
2月17日(土)～18日(日)　会員山行「山とスキー・菅平、根子岳」
3月10日(土)～11日(日)　文珠山荘「山荘をベースに山を登る」
3月14日(水)　定例会

4月11日㈬　2018（平成30）年度通常総会・懇親会

**会費滞納者の方へ**

3年間会費を滞納されると、定款に従い除籍になります。本人にも紹介者にも大変不名誉なことです。

早急に会費を納入して会員を続けて下さい。しかし、理由があって、納入が出来ない方は本部へ申し出て、退会の道を選んで下さい。

## 新入会員の自己紹介

**海野　俊久**（16233）

登山歴は20年になります。職場の同僚に誘われて甲斐駒ケ岳に登ったことから始まりました。苦しい登りから、山頂にたどり着き素晴らしい景色を見て達成感を味わいました。それ以降、山が好きになり県内、隣接県の山を登っています。

私が日本山岳会に入会するきっかけとなったのは、本年6月に開催された支部主催の見月山登山セミナーへの参加です。セミナーには、それまで2回参加していましたが、入会について考えたことはありませんでした。しかしこのセミナーでは、下山時の歩き方やストレッチの方法を丁寧に教えていただきました。そして下山後の反省会に誘っていただき、その席で静岡支部の活動等について詳しく聞かせてもらい、今までとは違うより登山の楽しさを感じました。

今までは山岳会について、厳しい会則や行事に拘束されるというマイナスイメージを持っていました。しかし日本山岳会の自由に山登りを楽しんでいる姿を知り、楽しくそして長く続けていけると確信しました。

私は63歳ですが、まだ仕事をしており、土曜日や日曜日の休日しか山へ行けません。しかし、これから体力をつけ、登山の知識を得て、南アルプスの山々を歩くことを目標としていきます。

どうぞよろしくお願いいたします。

## 追　悼

### 小田直美さんのこと

**白鳥　勝治**

小田さんの遭難を知ったのは、残雪の多い三伏峠を下った5月1日のことでした。友人からの携帯メールで、4月30日午後、平蔵谷で雪崩により死亡、とあった。あまりにも突然の事態の報に、「どうして！」とにわかには信じられなかった。小田さんとは、1週間前の4月23日、別の仲間と山スキーで立山へ行った折、

室堂の駅裏で偶然で会ったばかりであった。小田さんは独りで剣沢へ滑りに行くと満面の笑顔で話していた。なぜか、その時の顔が脳裏に焼きついてしばらく離れなかった。

小田さんは近年二度、山仲間を失う遭難を経験した為、私のような年寄りや女性同行者の安全には特に慎重でした。今年の春も、男女5人で行った南魚沼の阿寺山のスキー登山で、登頂して滑降に移った直後、同行した男性一人の調子を見て、全員にスキー板を担がせて歩いて下らせた。一方、個人では、かなり冒険的なスキー登山をやり、一昨年の春、剣岳の三の窓から池の谷を滑降するなど、私達が驚くようなスキー登山を楽しむ人でもありました。

小田さんと親しく付き合うようになったのは、3年前、勤めを辞めて再び始めたスキー登山で、嘗て挑戦し、高度障害で失敗したアルプスのオートルートを、喜寿を迎えて再度計画を立てた折、小田さんに頼んで同行して貰ってからである。丁度還暦を迎えた小田さんは快く引き受けてくれた。それにより私は大きな安心を得て計画に臨むことが出来た。それに支部会員の古希と還暦の二人が加わり、奇しくも賀寿の4人でオートルートへ出かけた。しかし、序盤の二日目、トリエン氷河上部の広い扇状カールを横断中、猛烈な地吹雪に遭遇し、古希の仲間が低体温症で倒れた。その時、小田さんは仲間のザックを担ぎ、ガイドと共にトリエン小屋の人達の助けを借りて、仲間の命を救った。数日後、再び三人で挑戦した途中のディス小屋で小田さんは風邪をこじらせ自身の判断で、私と共に下山した。幸いたいしたことも無く、シャモニの知人から借用した山荘で、ガイドと二人でツェルマットへ向かった、もう一人の還暦の仲間を待ちながら二人で過ごした時、小田さんは好きな山の歌を上手に唄った。その中に私の思い出が深い「北岳の歌」があった。その歌は昭和29年の冬、北岳合宿の帰途、夜叉神峠の小屋で静岡山の仲間山岳会の人達から、出来立てのホヤホヤだと言って教えて貰った経緯を話すと、小田さんは「それは僕が生まれた年です」と言われて二人で笑った。そして、一緒にロシヤ民謡のジグリーの曲の「北岳の歌」を唄った。それから僅か3年の付き合いだったが、雪の季節になるとスキー登山に誘ってくれて、必ず家まで送って戴いた。この頃山スキーに誘ってくれる人が少なくなった私には、長く付き合った後輩のように思える優しい人でした。

5月2日、岡部のお宅を弔問し、棺の中に横たわった小田さんの顔を見た時、悔しさなのか、悲しさなのか涙をこらえ切れず、奥様の前で見苦しくも泣いた。時を経て始めて訪れたお墓の前で「小田さん、やすらかにお眠り下さい」と改めて言った。（10月13日、岡部の朝比奈城址ふもとの墓参り後記す）

2014/04/25　ウィンパー像の前で

## 会員動向

**新入会員**　海野　俊久
**新入準会員**　荻原　睦
**退会者**　なし

## 編集後記

巻頭言には支部創立七十周年記念行事を取り上げました。支部長より盛り沢山の行事が提案されています。早めに実行委員会を編成してじっくり検討して取り組む必要があります。

新シリーズ「私のお勧めの本」がスタートしました。私がこのシリーズを提案したのは、小説家や登山家の著作を念頭に入れていました。しかし八木氏は最近の支部会報「不盡」(№77～80)をレビューする形で、我々の身近にいる会員たちの著書も含めてコメントをして頂きました。自分の心に響くものから読み進めたら如何でしょう。

従来のシリーズ「山への思い」に滝田さんが寄稿して頂いたので助かりました。私も興味をもって読んでいたコーナーだけに、今号にも続けて載せたい一心で、今まで書いて貰っていない人を名簿から拾って手紙で原稿の依頼をしました。結果は快諾の上、貴重な写真の提供もして頂きました。

「こぼれ話」も新しく取り入れてみました。このコーナーは、文珠山荘の酒の席での雑談の最中にふっと私の頭に浮かんだものです。会報を読み進めていく中で、一息ついて頂く時間を取って貰いたくて挿入しました。今回は木村会員の山小屋での出来事を収録しましたが、今後同じ山小屋の話を続けるか、または違った切り口から展開を図るか会員諸氏のご意見も頂きながら考えていきたいと思います。

会員のなかにはユニークな山行を黙々とされている方がいます。今回取り上げたのは中央分水嶺の山旅です。その後の孤独で困難な経験を知りたくて大島さんに書いて貰いました。来年予定の残雪期の巻機山～谷川岳の縦走を応援したいと思います。

山行記録に今回初めて個人山行を取り上げました。従来は会員山行のみでしたが、今後は個人山行も交えて掲載していきたいと思っています。若い会員の投稿が多いのは嬉しい限りです。

白鳥さんには、小田さんの思い出を記して頂きました。新しい会員にはその偉大さを知るすべもありませんが、もっと多くの方と、楽しい時間を共有して頂きたかったと残念でなりません。

編集委員長を拝命して、初めて原稿依頼をしましたが、いかに多くの方に執筆して頂くかで苦労しました。体裁については少しでも柔らかみを出そうとしましたが、却って軽薄な感じになってのではないかと危惧しています。皆様の忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

(編集委員長　長野　和義)

**「不盡」サロンでは原稿を募集しています**

会報「不盡」は皆さんの広場です。多くの方からの原稿をお待ちしております。

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
有元　利通
事務局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町8-13　木村勝利
編集責任者　長野　和義
印刷所　株式会社　三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031

題字・牧野衛　背景・長野和義

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2018（平成30）年春季
第83号

## 巻頭言

# 『今さら!?　今から！　南アルプスの自然保護』

支部長　有元　利通

南アルプスは、国立公園になる前から木材が大量に伐採されました。江戸中期から江戸の大火の後、江戸に木材を送るために「幕府のお林」である南アルプスの木は紀伊国屋文左衛門によって多く伐採されました。幕末から明治維新にかけて大倉喜八郎によって、その後も彼の作った会社、東海パルプ、特殊東海製紙に引き継がれて伐採され続けました。

大井川上流部は東京電力による電源開発でダムが作られ水は富士川に運ばれました。更に中部電力によって井川ダム、畑薙ダムなどが作られて大井川上流部の自然は破壊され改変されました。

しかし、それでも南アルプスは北海道の日高山脈と並んで人の手がそう無暗に入らない自然の宝庫です。そういう自然の良さが認識されて南アルプスエコパークとして認められました。

**【自然の宝庫が危ない】**

そして、中央新幹線（リニア新幹線）で南アの核心部が、今まで手を付けられたことのない地下が、県内区間だけで10・7㎞に及ぶトンネルで破壊されようとしています。トンネルから出る残土、残土置き場の問題、残土内の物質の危険

## 目次

★巻頭言
「今さら!?　今から！　南アルプスの自然保護」　支部長　有元利通　1
★シリーズ
◆「山への想い」第15話　南アルプスの思い出(1)　加田勝利　3
★第2回神奈川支部との交流会　支部長　有元利通　5
★こぼれ話「田部井さんの人柄を知る」　木村勝利　7
★個人山行
◆前穂高北尾根　大島わかな　8
★会員山行
◆板取山～天水(懇親山行)西村しのぶ　10
◆四阿山・根子岳　赤堀栄子　11
★本部ユース山行
大根沢山～光岳・茶臼岳周回　神奈川支部　廣岡正敏　11
★ハイキングセミナー
双子山　山崎　洋　13
★総会報告　15
★追悼文　文珠山荘の仙人　長田義則　18
★会員出版書籍紹介　19
★会員動向　新入会員・退会者・物故者　長野和義　19
★編集後記　20

性、景観の問題、減水による下流域の人々への影響の問題、そこに棲む動植物への影響の問題、減水による水を本流に戻すための導水路トンネル工事による影響の問題、問題は様々です。

江戸期からこれだけ破壊されたのだから何を今さらという声があるかもしれません。オゾン層破壊の問題、地球温暖化の問題、南アルプス等の高山での鹿による高山植物の食害の問題、色々問題はあります。これらは気づいた段階でストップをかけて見直しています。規制をかけるしかないのです。仮に遅きに失したにせよ今からでも立ち向かうしかないのです。過ちは正すに如かず。「過ちを改めざる、これを過ちという」。

オゾン層の破壊では原因物質をフロンガスと特定し規制してきました。そして、その後オゾンホールの拡大は見られなくなりました。地球温暖化のストップは京都議定書、パリ協定と進みました。先進国のみの規制では不可、途上国もとなりました。しかし、余り賢いとも思われないアメリカのトランプ大統領は科学者のデータ、温暖化のデータはでたらめだとしてパリ協定から離脱して化石燃料企業を支援しようとしています。しかし、にも拘らず心あるアメリカの企業や都市は独自にパリ協定を守る努力をすると表明しています。再生可能エネルギーに変えて地球温暖化をストップするべきだと考えます。

**【鹿の食害に対する取り組み】**

南アルプスの鹿の食害はどうでしょうか。当支部会員で県職員の鵜飼会員が現象に着目し、一般に呼びかけてその努力によって高山植物保護のネットワークが作られ、毎年、茶臼岳、聖平、三伏峠、塩見岳等で防鹿ネットが整備され、保守点検活動や裸地での植生の回復の努力が行われて成果も上がっています。これには静岡市山岳連盟（市岳連）の望月喜久治会長（二〇一七・一八年度）や、静岡県勤労者山岳連盟（県労山）の竹本幸造会長も登録し参加されています。私も登録し、作業に加わったこともあります。市岳連傘下の山岳会の会員の人達や本会会員でも登録し参加、活動している人もあります。こうした活動も気づいた人が気付いた時から始めるしかないのです。

**【自然保護を考え行動しよう】**

静岡県の南アルプスの自然保護は静岡県下の少ない稜線の自然保護だけで良いのでしょうか。エコパークの下部の部分の自然も大事です。大井川の流域部分も等しく大事です。

本会の目的、当支部の目的の一つには自然保護とその啓発活動が謳ってあります。本会には、自然保護委員会があります。毎年自然保護の全国集会もあります。当支部にも自然保護担当委員がいます。私も数年担当しました。こうしたことから、中央新幹線（リニア新幹線）工事には大いに注意し、自然破壊が起きぬように求めるものです。前任の大島支部長の時に県内山岳四団体（静岡県山岳連盟、市岳連、県労山、本会当支部）で県知事、静岡市長に要望を伝えてきました。二〇一七年度に入りＪＲ東海が工事内容等を公表することもなく本体工事や導水路トンネル工事の施工業者を決定したり、国費、税金三兆円が投資されるにも関わらず談合が行われている疑いが出てきたりしましたので、その都度必要に応じてＪＲ東海や県知事、静岡市長に申し入れたり、記者会見を行ってきました。本会当

支部がこれに関わるのは、自然保護、その啓発活動という一点においてです。今後とも、その姿勢で注意し、活動していきたいと考えています。一緒に南アルプスの自然保護に取り組みましょう。稜線の草花も大井川の流域もです。

タカネバラ（茶臼岳）

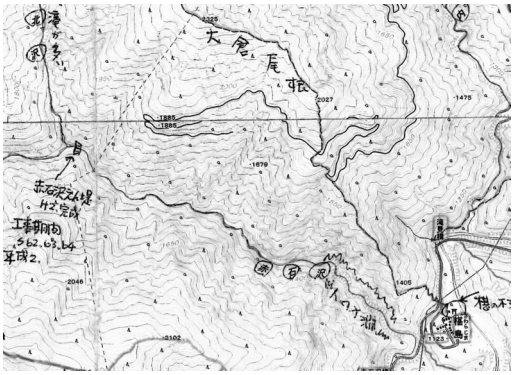
シリーズ「山への想い」―第15話―

# 南アルプスの思い出(1)

加田　勝利

19歳から山歩きを始め、知床半島の羅臼岳や屋久島の宮之浦岳、本州の主だった山々を歩いたが、中でも地元の南アルプスには数々の思い出がある。

## 【赤石沢遡行】



詳細メモ入り地図（一部）

赤石沢に入ったのは43年前の7月、4人で入ったのが初めてで33歳だった。当時は椹島までマイカーで自由に入れ、椹島の登山小屋に泊った。翌日赤石沢に入ったのは5時15分。北沢出合いでビバークと決め水量の多い沢を進んだ。最初から悪いイワナ淵のゴルジュ帯で、6時間後北沢の出合いに着いた。昼前だったがビバークの予定地だった。釣り道具も持参せず夜まで長い時間であった。

次の日は核心部を通って百間洞山の家泊りだが、遡行して行くと大きな滝群が行く手を阻んだ。僕以外の仲間はザイルを使用したことも無い若い仲間であった。核心部は右側の岩混じりの壁に取り付き、時間をかけ徐々に高度をかせいだ。滝の大きな音は聞こえるが見えなかった。2時間後アップザイレンを繰り返しやっと本流に下り立った。裏赤石沢出合い、奥赤石沢出合いを過ぎ百間洞山の家に着いた。

最終日は小屋を3時に出て赤石岳、富士見平から椹島に下り、畑薙ダムの下にあった古い白樺荘で風呂に入り、昼食を御馳走になり沼津には19時頃に着いた。核心部の通過は同じルートを3回登って、初めて左側の壁に高巻きルートが付いているのを知った。その後の遡行は核心部を30分足らずで抜けることが出来た。メンバーにもよったが椹島から百間洞山の家まで、一日でつめたことも二・三回あった。赤石沢ではめったに遡行者に会わなかったが、初めて会った人は2004年8月8日静岡支部の古田徹司氏であった。彼は単独行だった。

赤石沢の遡行は切りのいい15回で、2008年中旬で終りとした。この時は仲間4人で入った。釣竿を持参し百間洞沢で10匹釣り上げた。大きさはどれも一

尺程あり入れ食いで釣れた。百間洞山の家で刺身にして食べた思い出が忘れられない。南アルプスの魚はイワナではなく、養殖したヤマメを井川の長島建設の社長、吉治さんが若い頃ヘリコプターから放ったと言う話を聞いていた。２回確認した。

山歩きの好きな浩宮殿下が、南アルプスに入ると言う情報が千枚小屋の管理人から入っていたので、昭和61年８月11日は、赤石沢遡行後はいつも椹島に下るが、コースを変更し荒川三山へ向い、中岳と悪沢岳の中程で殿下とお会いでき、何を話したか記憶にないが話をすることが出来た。東海フォレストの社長、日本山岳会の人、警察官と7、8人のパーティで歩かれていた。時間は12時15分頃であった。こちらは山渓の編集長、渡辺カメラマンと6人だった。

赤石沢の堰堤工事は北沢の出合いに、昭和62年から始まり平成2年に完成した。工事現場は大型ダンプカーの往来もあり、多くの労働者が働いていた。椹島には当時２００人位の労働者が泊ることが出来る宿舎が何棟もあり、堰堤工事が完了後、東海フォレストが買い受けたと言う。

**【光岳～大無間山】**

平成2年8月初旬、元支部長の久保田保雄さん、岐阜支部の佐藤正雄さんと同い年の3人で、千頭営林署の知り合いに頼んで、車で送って貰い釜の島の営林署の古い建物に泊った。翌日はゆっくりの出発で柴沢の吊橋から光岳にのぼった。センジヶ原の古い光小屋に着いたのは昼ころで、持参した一升瓶をセンジヶ原の草原で空けた。

センジヶ原

3日目は光小屋から信濃俣、大根沢山、大無間山と長い尾根道を歩いて千頭ダムに下り、今日中に沼津へ戻る計画だった。零時に出発、百俣沢の頭へは昨日歩いたコースで下りぎみ、そこから分岐して信濃俣へは尾根上には、踏み跡や赤布が付いていた。大根沢山は広い山頂で目指す方向を確認してからひと休みとした。残すは一等三角点の大無間山だ。ここまで来るとルートは良くなり、広い山頂には大きなやぐらが立っていた。

静岡の冒険倶楽部の市境縦走隊が、2年前の平成元年8月8日に、大無間山頂を9時頃通過することを、事前に支部会員の八木功さんから聞いていたので、刺身を持参して大無間山頂で待った。5、6人の若い縦走隊と隊長が合流し、刺身を渡した思い出がある。皆大喜びだった。今から29年前のこと。

来た道を引き返し壊れかけた三隅池小屋を過ぎ尾根道を、三方窪を経て大樽沢に出る。寸又左岸林道をしばらく歩いて、千頭ダムを指す指導票からダムに出た。軌道跡を歩いて寸又峡温泉入口の駐車場にやっと着いた。沼津に着いたのは夜中を回っていた。

**【二軒小屋をベースに20時間山行】**

２０００年9月9日、二軒小屋登山小屋を2時45分出発で、20時間山行を8人

で試みた。メンバーは山渓の木村和也さん、カメラマンの瀧渡尚樹さんと僕らの仲間女性を含め６人。コースは二軒小屋を基点に西俣堰堤から、高山裏避難小屋に出て三伏峠まで北上し、三伏峠から三伏沢、中俣を下って西俣堰堤に戻る一周コースで歩いた。二軒小屋から15分ほど歩くと大井川は東俣と西俣に分かれる。左手の西俣は西俣堰堤を築く時に出来た林道で、大井川西俣分岐から堰堤にかけ緩やかな道で歩き易かった。堰堤を乗り越え小西俣に入ると傾斜の緩い沢で、渡渉を何度も繰り返しながら進む。

水量が細くなって北沢で、ヤマメ１匹を手づかみで捕まえた。大きさは30センチ位だったが、平凡な沢歩きで、ヤマメ捕りは面白かった。

沢の源流は冷たい水が湧き出ており、10分程で高山裏避難小屋に着いた。一息入れてから主脈尾根を板屋岳、大日影山、小河内岳、烏帽子岳人気の少ないピークを越えて三伏峠に着く。時間は４時間ほど費やす。林の中で指導標がなければ分からない。休憩するにはこの下の三伏小屋の残骸がある場所は、明るくて冷たい清水が湧き流れている。時間は16時を過ぎ、これからのコースは途中には休むところはなく、ゆっくり休むことにする。古い缶詰の缶などが散乱している中を沢に入り、しばらく下ると上空に暗くはなったが架線が見えた。中俣の水量は増えてくるが、左手の東池沢の大ガレが沢をふさぎ水ガレとなっていた。伏流水の上を歩いて下ると、間もなく水の流れが出てきて次第に多くなるが、以前ヤマメ釣りに来た沢であり、暗くなっても沢の様子は頭の中にあり、ゆっくり下るがカメラマンの瀧渡さんの荷は、カメラ類で重く慎重をきした。しかもメンバーの人数が多いこと。危険なところはないものの西俣堰堤まで時間が掛かり、21時前に着いた。ここからは林道歩きで気分は楽になった。２時間程かけ二軒小屋に着いた時間は22時45分で、今朝出発した時間が２時45分、正しく20時間山行であった。冷たいビール、ジュースを買い込んで、田代に着いたのは翌朝の１時30分だった。

２０１５年８月８日に悪沢岳から、北尾根を西小石に下り西俣堰堤に下降した時ここでビバーク。翌朝二軒小屋までの道路は荒廃が進み４時間程かかった。

（84号に続く）

## 第二回神奈川支部との交流会

支部長　有元　利通

この交流会は年度の途中に決まった行事であったので会員全員にお知らせすることができず、定例会などの会合や山行に参加している人やメールアドレスをお持ちの方にしかお知らせすることができなかったことをお詫びします。

さて、報告ですが11月18日(土)、19日(日)の二日間で主に富士山、富士宮地域で行いました。通常ＪＡＣの交流会、周年記

念行事等では、一日目は講演会か会議で二日目が山行というパターンなのですが今回はこれを変更しました。

その意図は、静岡県内には有名・無名合わせて千m以上の山が四百以上もあると認識していますから神奈川支部の皆さんにできるだけ多くの静岡の山に親しんで頂きたいということでした。

18日当日、旧料金所前の気温三度という寒い中、水ヶ塚公園駐車場に11時半に集合していただきました。新しい建物の売店の二階で各支部長挨拶、各事務局から参加者紹介、私からコース説明をしました。一日目は、余り歩かれていない富士山の側火山三座を歩きました。最初に公園駐車場のすぐ西隣の腰切塚（一四九六m）へ登って展望台へ上がるも正面に見えるはずの富士山は下の方に雪が積もっているのが少し見える程度で残念でした。噴火口へ移動して記念写真を撮ってお鉢を巡って駐車場へ下りました。

駐車場から車に分乗して次の浅黄塚（一五五七m）の登山口へ移動です。三日前に私が付けたピンクのテープと赤のビニールテープを確かめながら小雨の中、落ち葉を踏みしめながら登りました。途中、鹿四頭が眼前を通過していきました。静岡支部の会員もほとんど登ったことがない山頂で記念写真。下りは来たルートを、テープを確認しながら下山しました。二座とも登り20～30分でした。

車に戻って、三座目の西臼塚の登山口のある駐車場へ移動しました。そのころには、雨もほとんど上がり空も少し明るくなっていました。トイレ休憩の後、1時50分過ぎ、スタート。歩き易いハイキングコースをゆっくり歩いて30分程で西臼塚（一二九三m）山頂に到着。山の神を拝んで北側の切り開きに回ります。

ここからは正面に富士山が堂々と見えるところですがこの日は生憎でした。全員で火口底に下って地形や沢山生えている三極を眺めてから東側の火口縁に上がって下山開始。2時40分、駐車場に戻りました。ここで一日目のみ参加の金子誠一さんと二日とも日帰りの長谷川さんとお別れして交流会場の「富嶽温泉花の湯」へ移動しました。

入浴を済ませて6時に宴会場に集合。木村事務局長の進行で会は進みました。改めて支部長挨拶、各自の自己紹介の後、森前会長の音頭で乾杯をしました。宴たけなわの頃、山の歌の合唱となり諏訪部、山崎両氏のギターの伴奏で歌いました。照内御大の歌も飛び出し、やがてはフォークソングに、最後はカラオケまで、賑やかでした。

明けて、快晴の二日目。この日は田貫湖畔から長者ヶ岳（一三三五m）と天子ヶ岳（一三三〇m）に登ります。二日目のみ参加の小川正育さん、会員外で初参加の二人の女性、市川さん、原田さんの自己紹介の後小川さんの指導で準備体操をして8時過ぎに出発。

途中のベンチのところで休憩、綺麗な富士山が正面に見えて幸いでした。この頃、荻野俊夫会員が忽然と現れて一緒に登りました。三分の二ほど登ったところで年配者お1人がギブアップで木村事務局長が付き添って下りました。あとの皆さんは、順調に登って10時半過ぎ、長者ヶ岳登頂。正面に富士山、背後に南アの峰々がドーンと見えていました。荒川三山、赤石岳は雲で頭は見えなかったものの白根三山、塩見岳辺りは綺麗に見えていました。山頂にはほかのグループも二、三ありました。記念写真の後、八十代等の皆さんはここで下山開始でした。

長者ヶ岳山頂にて

他の皆さんは次の天子ヶ岳に向かいました。先頭の私が少しピッチを上げたこともあって皆さんの足並みがちょっと乱れました。それでも11時20分には天子ヶ岳の頂上に到達しました。明るい落ち葉の山頂広場で昼食をとって下山しました。２時半には全員下山して解散式をやって又の再会を約して帰路につきました。

（名前が出なかった参加者）
神奈川支部：石村実、砂田定夫、森静子、
石村日満子、大槻利行、
廣島孝子、廣岡正敏
静岡支部：岩崎充弘、青野興喜、
熊岡達雄、畠中智代、
中村博和、橋本耕一、
中野雅章、

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

こぼれ話

## 田部井さんの人柄を知る

木村　勝利

ある日、聖平小屋の台所で夕食の準備をしていると、小屋のスタッフが、「木村さん、いま受付をしている人は田部井さんじゃないか」と聞いてきました。

見ると確かに似ている。受付に行き記入された名簿を見ると、田部井と書いてある。間違いない、有名人が見えた。ご主人と友人の３人での山行でした。

他のスタッフは、若くて声を掛けにくいらしく、「木村さん、あとで写真を一緒にとお願いして欲しい」との事。仕方なく小屋前でお休みの所へ行き、緊張しながらも「小屋の者で木村と言いますが、後ほどご一緒に写真をお願いできますか？」と声を掛けた。

すると快く「良いですよ」と返事をいただき、無事小屋のスタッフ全員との写真撮影が出来ました。食事終了後、その友人の方と一杯やりながらの話で、「もし自分が（田部井）とわからなければ名乗らないで行こう」との事でした。

翌日、出発前に改めて「プライベートでお越しのところで写真のお願いをして済みませんでした」とお詫びをしました。その後、ご一行は光岳に向けて出発されました。

翌日、光小屋より田部井さんが眼鏡を忘れたと連絡があり、見ると他の忘れ物の中にありました。一足早く下山する私が眼鏡を自宅へ送り返したところ、後日ご本人の著書と切手が送られてきました。田部井さんの人柄を知る機会でした。

この小屋での忘れ物については、どこかのラジオ放送で触れられたようです。

個人山行

# 日本一の紅葉と前穂高岳北尾根

大島　わかな

登山期間：２０１７年10月６日～９日
メンバー：諏訪部豊、勝又千華、山崎洋、大島わかな

「涸沢の紅葉を見ずして穂高を語ることなかれ」涸沢ヒュッテの名言でもあるこの言葉。以前より諏訪部さんが「どうしても涸沢の紅葉を見せてあげたい」と私に言っていた。

そして10月の連休、日本一の紅葉を見に涸沢へ。私、山崎さん、千華さんの３人にとっては初の岩稜バリエーションである前穂高岳北尾根へ行くこととなった。

**10月６日(金)**

朝５時開門と同時に釜トンネルを通過。夜明け前の上高地を進んで行く。

私にとって４度目の上高地。今回めでたく春夏秋冬オールシーズンクリアした。

徳澤辺りから紅葉が見え始めた。涸沢へ続く登山道はまさに紅葉のトンネル。黄色く染まったダケカンバや真っ赤なナナカマドの下を歩いて行く。日本一というのも頷ける。目が肥えて、普通の紅葉では満足できなくなるのも困りものだと思った。混雑を覚悟していた涸沢カールは平日のせいかガラ空きだった。

**10月７日(土)**

翌日は残念なことに雨。本来は北穂の東稜を登るはずだったが、停滞。ヒュッテの裏で懸垂下降の練習。北尾根の登山口の下見、あとは食べて飲んで寝た。

**10月８日(日)**

いよいよ北尾根へ。日の出前より出発。ペンキ印は一切なし。暗くて分かりづらい。ところどころ作られたケルン。遊びではなくて目印だったのだと今回初めて知った。ケルンを見つけるたびに安心した。

次第に夜が明けていく。槍ヶ岳が見えた。今日は月が明るい。丸くて大きい月の下に、奥穂高が見えた。私たちの前に先行パーティーは２組、後方には２組、間隔は大きく開いている。時折ヘッドランプがちらついた。ちょうど日の出と同じくらいのタイミングで、Ⅴ・Ⅵのコルへ到着した。コルの向こうに広がっていたのは雲海、そして富士山、八ヶ岳連峰、南アルプスの山々だった。その真横に顔を出したばかりの太陽が赤く燃えている。振り返れば奥穂高のモルゲンロート。どこを見ても素晴らしい、非常に贅沢な時間だった。

さて、ここでヘルメットとハーネスを装着。いよいよ北尾根へ。後ろで槍様が見守ってくれている。涸沢のテント村は遥か下で点になっている。目前を見る。Ⅴ峰は台形のような形で、遠目からは緑の樹林が目立つ。さらに奥がⅣ峰。ひときわ目立つ大きなピーク。一般道と違うのは浮石が多いこと。足元の岩が軽くて脆い。下を行く人に落とさないよう細心の注意を払う。自分自身も常に上方に注意する。鎖もペンキも無いのでルートファインディングしながら登っていく。「本当にここを登るのか？」と目を疑う。けど、登らなくては先に進めない。

次は核心部のⅢ峰。先行パーティーがザイルを使用して登攀していた。我々４名もザイルを結んでⅢ・Ⅳのコルにてしばらく待機。１時間ほど。諏訪部さんがトップ。私はセカンドでビレイ。山崎さんがサードでザイルを伸ばし、千華さんがラストでカラビナとスリングの回収を

担当した。

諏訪部さんが登攀を開始した。姿が大岩の向こうに見えなくなった。でかい岩に阻まれて声がよく聞こえない。暫くしてザイルの動きが止まる。ついに諏訪部さんからＧＯサインが出た。「次、行きます！」と声を張り上げた。緊張のワンピッチが始まった。後ろで見守ってくれていた山崎さんと千華さんの姿は、すぐに見えなくなった。下を見ると吸い込まれそうな絶壁。とにかく集中、確実な一挙一動を意識する。じんわりと手汗が出る。ようやく諏訪部さんのところまで辿り着いた。ヒヤヒヤしたが、達成感は大きかった。その後2ピッチ、ザイルを使って登った。最後のピッチは有名なⅢ峰チムニーだった。

Ⅲ峰ピーク直下にちょっとした平地があり、座ってみた。西穂の稜線から、奥穂、槍ヶ岳、大天井、燕。その奥には白馬や鹿島槍。北アルプスの名だたる山々を見渡すことができた。こんな景色は見たことがない。こんなにでっかい景色を見られるのか。北尾根を歩いた人だけが見ることのできる特別な景色。出来ることなら、家族にもこの景色を見せたくなった。

Ⅱ峰を登りつめると、いよいよ目前に前穂高山頂が見えてきた。こちらを見ている人影が2つ。先行パーティーの人たちだった。大きく手を振ると向こうも振り返してくれた。あと少し、元気が湧いてきた。

Ⅱ峰ピークから懸垂下降を行なった。万が一間違えてしまうと大事故に繋がりかねない。声を出して指差し確認。するすると数メートルの絶壁を軽やかに下って行く。

そして最後の詰めはⅠ峰。つまりは前穂高岳山頂へ向かって登って行く。

「お疲れ様」諏訪部さんが私に向かって手を差し出してきた。握手をする。ついに前穂高岳の山頂に到着した。一気に人が増え、無事にバリエーションを突破したと思うと安心する。早々にハーネスやザイルを片付け、後ろを振り返る。「この道を歩いてきたんだ。」そう思うと感慨深い。山頂から見る景色はまさに絶景。最高の晴天、まるで北アルプスが頑張ったご褒美をくれているような気がした。その後は奥穂へ向かってザイテンより下山。テントに到着したのは17時30分。合計15時間という長丁場だった。

涸沢に到着すると緊張が一気に緩んだのかどっと疲れが出てきた。自然と口数が少なくなってしまう。夜ご飯は涸沢小屋のおでんと手作りチャーハンだ。疲れていても食欲はしっかりあった。昨日とはまるで違う晴空。長く、長く、今日の余韻に浸っていた。

**10月９日(月)**

４時30分に起床。徳澤園で楽しみのソフトクリームを食べて帰途につく。

今回、私の夢がまた一つ叶った。本当に感謝しかありません。不思議なことに、目標を達成するとまた新たな目標が

できてしまう。今回も眺めた景色や会話の中で新たな「憧れ」が出来上がってしまった。なんだかキリがないが、私はいつもそれを繰り返してしまう。そんな中にワクワクや楽しさを感じている。いつかはその夢も叶える予定だ。当分先のことだが、自分の足で行ってどんな景色が広がっているのか確かめに行きたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会員山行①

## 秋の懇親山行「板取山～天水」

西村　しのぶ

**平成29年11月11日(土)**

寸又峡温泉朝日山荘へ16時、参加者18名が集合する。前夜泊で朝日岳へ登山した中村さんと山崎さんの到着が遅いと心配したが夢の吊橋が渋滞したとのこと、紅葉の季節だからと納得する。

美女づくりの湯にゆったりと浸かり、つるつるすべすべのお肌になって18時から夕食となる。鹿刺しや鴨なべに舌鼓を打ち、美味しいお酒も入って和やかな楽しい宴会となった。その後、大部屋に集まり自己紹介のあと談笑の時を過ごす。照内さんと青野さん着用の、胸ポケットにJAC1991、JAC1993とある手編みの赤いセーターに注目が集まる。還暦祝の貴重な品とのこと。皆の前に立ってお互いに見せ合う姿はとても微笑ましかった。青野さんが十八番の宮沢賢治の「星巡りの歌」を披露して下さり今宵はお開きになった。

**11月12日(日)**

寸又峡温泉を7時10分、出発。大札山登山口で大札山に登る7名と別れ、山犬の段に向かう。天水迄の往復組と寸又峡温泉迄の縦走組11名は9時10分、山犬の段を出発する。

静大演習林宿舎を右に見てしばらく進むと巻き道と尾根道の分岐に出る。「帰りになると展望台には登れないから先に寄って行きましょう」の荻野さんの一声で右手の尾根道に入り、階段を登りきると明るく開けた八丁の段展開地に着く。南に広がる展望をしばし楽しみ八丁の頭を経て急坂を下り、巻き道と合流する。ホーキ薙のガレ場に沿って歩く。大きく崩れた斜面は大規模な治山工事が行われていた。ガレの縁から再び山道に入り、下ると広河原峠だ。ブナが群生する、ゆったりとした尾根を登って行くとブナの大木に出会う。葉を落とした枝が天に向かって大きく翼を広げ、堂々として立つブナは圧倒的な存在感があった。ほどなくして１５１３ｍの板取山に着く。小休止の後、天水を目指す。落葉の稜線を歩き11時10分、１５２１ｍの天水に到着する。

天水山頂にて

沢口山から寸又峡温泉へと縦走する４人組を見送り、ランチタイム！

天水は小さな頂だが、眺めがとても良い。正面に大きな前黒法師岳、左に丸盆岳、黒法師岳が連なり、雲間から朝日岳、大無間山を見渡す。あいにく富士山は見えなかったが深南部、奥大井の山々の眺望を楽しむことができた。30分程の山頂だったが体も冷え、寒くなってきた。11時40分、山犬の段に向けて下山を開始する。

忍者の如く疾走する荻野さんと大島さんを必死に追うが瞬く間に引き離されてしまった。広河原峠からひと登りしてホーキ薙に着く。あとは広い工事道をテクテク歩き13時10分、山犬の段に着いた。大札山登山組と合流し、有元支部長の挨拶の後、解散となった。

今回は稜線上の木々はすっかり葉を落とし晩秋の装いだったが所々、名残の紅葉が綺麗だった。ヤシオの花咲く頃、ブナの新緑の頃、再び訪れてみたい。懇親山行の名の通り会員の皆様と親交を深めた、楽しい山旅でした。

会員山行②

## 冬山山行に参加して
### （２０１８年２月17～18日）
### 四阿山・根子岳

赤堀　栄子

２月17日、早朝５時に総勢13名が道の駅「とみざわ」に集合。山スキー班とスノーシュー班に分かれ２台の車で菅平を目指した。スキー班は８時半ダボスに到着、若者グループは雪の降る中リフトが止まるまでと終日ゲレンデスキーを楽しむ。一方スノーシュー班は８時10分あずまや高原ホテルに到着、９時、雪の降る中歩き始める。樹林帯ではさほど寒さを感じなかったが、牧場に出た途端、風と寒さが襲ってきた。視界不良の中、四阿山を目指す。11時２１７０ｍ地点で昼食、大澤さんご夫妻提供のホットワインを頂き、心身ともにホッとするも寒さで20分と滞在できず、この地点で撤退する。

２月18日、８時スノーシュー班とスキー班は共に、ダボスタカシマヤを出発して根子岳をめざす。天気曇り。視界不良。前の人を見失わないように必死に付いていく。11時半根子岳頂上。やっと着いた。今回２回ほど此処で引き返そうと弱気になったが何とか歩くことが出来た。表に見えない何かに感謝した。

ダボスタカシマヤでの宴会は、食事もお酒も美味しく飲みすぎたかも知れないと反省しつつ、次回は夏に来てみたいと強く思った。

参加者：諏訪部、中村、有元、仙石、岩崎、畠中、大島わ、山崎（以下、支部会員外）石間、廣岡

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本部ユース山行

## 大根沢山から光岳・茶臼岳周回
### （２０１７年７月14～17日）
### 神奈川支部　廣岡　正敏

小雨の降る中、畑薙第一ダムを出発。ダム施設の間を半ば強引に尾根に取り付く。尾根上にはそれなりに踏みあとがあった。大根沢山山頂に到着。

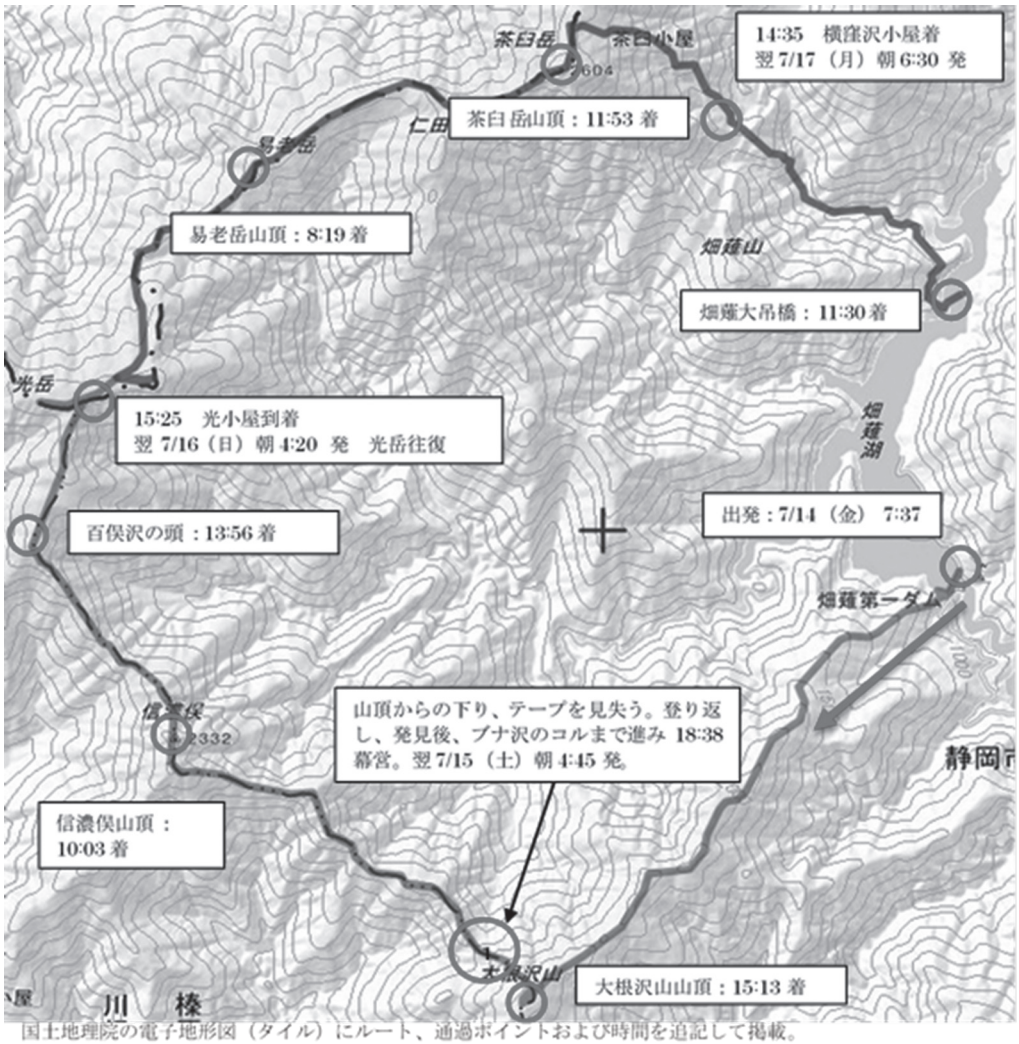
林の中に小さな看板が置いてあるのみで、知らないと通り過ぎてしまいそうである。今回の核心は大根沢山からの下

り。尾根がはっきりしておらず気をつけなければならないと思っていたが、途中でテープを見失う。日没も迫っており、ビバークを考え登り返し始めた時、『赤テープありましたよ。』の声。渡りに船だ。18時38分ブナ沢のコル着。ちょうどテント1張分のスペースに幕営。翌日も樹林帯。時折開けた箇所から深南部の山々が顔を出す。小ピークを繰り返すが、どれも急で休ませてくれない。信濃俣山頂は標識の文字すら消えていて、本当に信濃俣なのか分からない状態だった。

15時25分光小屋着。光岳隊と合流、踏破を祝って握手をする。光岳隊の諏訪部さんが我々のテント場を確保してくれていた。ありがとうございます。

大根沢山頂にて

翌朝、朝一で光岳、光岩へ行く。今日は一般登山道。快調に進める。茶臼岳山頂で別隊の方々と逢う。14時35分横窪沢小屋着。




国土地理院の電子地形図（タイル）にルート、通過ポイントおよび時間を追記して掲載。

## 【参加者のひと言】

**廣岡正敏（リーダー）**

この山域に来るのは初めてであったが、南アルプスは実に奥が深いと感じた。光岳くらいまでしか自分の頭の中に入っていなかったが、どこまでも続いている南アルプス南部の山並み、大無間山や蕎麦粒山等、南アルプス深南部の山を制覇してみたいと思った。単純に標高だけの問題なのか、光岳を境に山の様相が変わるのも興味深かった。大根沢山の下りに３時間以上要したのは反省点。静岡支部の皆様、大変お世話になりました。この山域にはまりそうですので次回も宜しくお願いします。

**中村博和**

静岡支部例会で光岳に通じる大根沢山・信濃俣ルートがあることを知り、これは面白いと皆を誘ったのが事の発端ですが艱難辛苦の末…夢が叶いました。大根沢山の下りで窮まり、急斜面でのビバークを覚悟。登り返し始めてしばらくして千華ちゃんの『赤テープありましたよ。』の救いが無ければ敗退していたであろう。最後はヘッデン歩行となった過酷な12時間行動もへっちゃらで、夕飯調理＆酒宴をしてしまう逞しいメンバーに感謝！信濃俣で大ペットボトルのコーラを出した廣岡リーダーのボッカ力にも敬服しました。我が山人生の中でも３指に入る思い出深い山となりました。

**勝又千華**

テープを見失う直前のことは鮮明に覚えている。重い荷物を背負って不明瞭なルートを、目を凝らし、気を張りながら歩き続けてきたけれど、あとはここを下るだけ。なんとか日没前にはテント場に着くだろうと安堵し休憩していた。このときの安堵が油断に繋がったことは言うまでもない。山の日没は驚くほど早い。もしもあと５分、ルートを違えたことに気付くのが遅れていたら、暗い山中再びテープを見つけることもできなかっただろう。運が良かった。やはり基本は、地形図と印と（拙いながら）経験に基づく勘。「山は好き、でもちょっと怖い」くらいがちょうど良い。

**大島わかな**

２０１７年７月時点、今までの山登りの中で最も大変な山登りでした。無事に光岳小屋に到着して、諏訪部さんたちの姿を見た時は思わずウルっときてしまいました。私にとって今回の深南部山行は「不動岳」に続く２つめです。今回、私に足りないこと、やるべきことが分かりました。もっとステップアップして、いつか再び深南部を歩けるよう頑張りたいです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 第3回 ハイキングセミナー

## 双子山（２０１７年２月11日(日)）

**山﨑　洋**

今年度最後のハイキングセミナーは、雪山登山入門という位置づけで行われた。山行のチーフリーダーは会員の小川正育さんである。事前に連絡された当日の持ち物の欄には、ピッケルやワカン、アイゼンなど、本格的な雪山登山を意識したアイテムが並ぶ。

朝８時30分に水ヶ塚公園駐車場に到着。この時期は同駐車場のほぼ全面が雪

に埋まっており、スタックしないよう、走行や駐車に注意が必要だ。東屋の下に集まり、簡単な挨拶の後、小川さんの声かけの下全員でストレッチを行う。冷たい空気の中、これから始まる山行に備えて入念に体をほぐす。メンバーは総勢20人ほど。３つの班に分かれ、班ごとに行動する。私は小川リーダーの班に所属することになった。

それぞれ装備を確認し、朝９時前に駐車場を出発。天気はおあつらえ向きの快晴だった。道路を渡って登山道に入る。歩行を開始するとすぐに体が温かくなり、快適に進むことができた。行程は全て雪と林の世界であり、夏山では味わえない清涼感、爽快感がある。ハイキングセミナーは例年、積雪のある山域では行われていなかったため、新鮮であった。メンバーの中には雪山登山が初めての人もいて、足運びのコツなどをリーダーから教わりながら歩行を続ける。

途中で短い休憩をはさみつつ歩いていたが、出発から40分ほど歩いたところで、ワカンを装着することになった。私はこれまでスノーシュー歩行の経験はあったが、ワカンを付けたことはなかったため、先輩会員から付け方を教わりながら行った。装着にだいぶ手間取ってしまい、練習の必要性を感じた。ワカンを付けたといっても、それほど深い新雪があったわけではなく、装着や歩行を体験することが目的であった。先頭を務めるメンバーを交代しながら、各自ラッセルの雰囲気を体感する。

少し歩みを進めると、小さな東屋がある場所に差し掛かり、休憩を取った。リーダーから受け取った地図で「南山休憩所」と記載されていた場所であろうか。他の会員から、雪山登山では、天気や風の有無、時間帯などで気温や体感温度が乱高下するため、こまめに着る物で調節した方が良いと教わった。休憩中は温かい上着を羽織り、出発時にはすぐに脱いでザックにしまえるようにしておくのが理想的だ。

さらに歩みを進めると、他の登山ルートと合流するポイントに到達した。ここからは、別ルートの登山者のトレースが付いており、歩きやすくなった。少し登れば、幕岩に寄り道できるポイントに着くとのことである。幕岩を前にして全員、アイゼンを装着する。アイスバーンになっていたわけではないが、幕岩までは少し傾斜の強い箇所があったため、確実に一歩を確かめながら進んでいく。幕岩では多くの参加者が写真を撮ったが、あまり長く滞在することなく、元のルートに戻った。

その後も少しずつ双子山方向に登っていくと、背の低い植物がまばらに生えているやや広い箇所に出たので、先着したメンバーで周辺を整地し、そこに荷物をデポして軽装で上双子山のピークを目指すことになった。同地点からの登りは、やや傾斜がきつくなり、各自ピッケルを持って山頂までの距離を詰めていく。結局、途中で下山時間を考慮し、山頂までは行かないこととなり、中腹で滑落停止訓練を行った後、下山することが決定された。各班のリーダーの指示のもと、滑落時の斜面へのピッケルの打ち込み方を練習し、12時40分頃に下山を開始する。その時点ではややガスがかかっており、あまり良い眺望とは言えなかった。先ほど荷物をデポした箇所まで戻り、各自、自宅で水筒に入れてきた温かい飲み物を飲むなどして下りの気力を蓄えるとともに、パンやおにぎりなどを口にした。

上双子山付近から見下ろす

下山は、我々が20人程度で付けたトレースの歩きやすさを実感しながら、特に困難な箇所もなく、会話が弾んだ行程であった。さきほど上双子山付近ではややガスがあって見えなかった富士山が、下山中、晴れ間がのぞいたタイミングで綺麗に見えたときには、参加者から歓声が上がった。是非、積雪期間中に、再度、上双子山、下双子山の登頂にチャレンジし、美しい冬の富士山を間近で望みたいものだ。

出発地点の水ヶ塚駐車場に15時過ぎに到着し、最後に何人かの参加者から感想を発表した。雪山初心者の私も、ワカンの装着に時間がかかったことの反省を述べた。15時30分頃にセミナーは終了。怪我もなく全員が無事に雪山を下山でき、非常に良い試みであったと思う。今回の経験を下敷きにし、少しずつ実力の範囲内で行ける雪山の数を増やしていきたい。

（受講生1名、会員14名、会員外1名参加）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 総会報告

去る4月11日、18時半より静岡労政会館にて総会員１５０名中43名の出席と71名の委任状提出で総会が開催されました。討議の概要をまとめて報告します。

**第1号議案　平成29年度事業報告**

事務局より定例会、役員会などに引き続き、各委員会の活動についても報告。

**第2号議案　平成29年度会計報告**

増田会計より、一般会計、その後諏訪部氏より文珠山荘会計報告。

### 平成29年度会計報告

収入の部

| 科目 | 金額 |
|---|---|
| 前年度　繰越金 | 140,263 |
| 本部から運営交付金 | 270,000 |
| 新入会助成金 | 20,000 |
| 寄付金 | 40,000 |
| 山荘利用料 | 40,000 |
| セミナー参加費 | 8,112 |
| 祝儀 | 10,000 |
| 雑収入 | 37,293 |
| 収入合計 | 565,668 |

支出の部

| 科目 | 金額 |
|---|---|
| 通信費 | 72,934 |
| 会議会場費 | 33,960 |
| 消耗品費/コピー代 | 62,474 |
| 「不盡」製本代 | 94,500 |
| 山荘運営費 | 52,909 |
| ハイキングセミナー | 4,533 |
| 備品費 | 3974 |
| 予備費 | 240,384 |
| 支出合計 | 565,668 |

**第3号議案　支部規約改正**

支部長より別紙改定案について経過説明の後、質疑応答に入った。

付帯意見を反映して一部修正することで承認された。

**第4号議案　役員補充及び変更**

★集会・山行委員会を集会と山行の二つの委員会とし、集会委員長に西澤

祥陽、山行委員長に有元利通が就任。
★編集委員の補充（大島わかな）
★会計交代（増田治郎⬇西澤祥陽）

## 第5号議案
### 70周年記念行事タイムテーブル

実行委員会
実行委員長　有元利通
副実行委員長　近藤浩之
事務局長　木村勝利
副事務局長　西村しのぶ

の組織下に、記念式典係、祝賀会係、宿泊係、記念誌係、記念山行係、海外登山係、会計係が設置され、担当が決まってきたが、出来るだけ多くの人に参画して貰いたい。総会資料に分担希望調べを綴じこんであるので事務局まで提出を!!

## 第6号議案　平成30年度事業計画

**【事務局】**
4月11日(水)　通常総会
　労政会館・18時30分～
5月9日(水)　定例会
　23日(水)　役員会
6月13日(水)　定例会
　23日(土)　本部総会
　東京四谷、プラザエフ
　27日(水)　役員会
7月11日(水)　定例会
　21日(土)～22日(日)
　全国支部懇談会
　北海道、層雲閣グランドホテル
　25日(水)　役員会
8月8日(水)　懇親会　センチュリーH
9月12日(水)　定例会
　26日(水)　役員会
　29日(土)～30日(日)
　支部合同会議・東京四谷、プラザエフ
10月10日(水)　定例会
　24日(水)　役員会
11月3日(土)～4日(日)
　中部4支部交流会・清水三保園ホテル
12月1日(土)　年次晩餐会
12月12日(水)　定例会
　26日(水)　役員会
平成31年
1月13日(日)　支部新年会
詳細は会報「不盡」84号にも掲載する
2月13日(水)　定例会
　27日(水)　役員会
3月13日(水)　定例会
　27日(水)　役員会
4月10日(水)　通常総会

**【公益事業委員会】**

**ハイキングセミナー**
1、多くの人が参加できるハイキング
2、静岡県の山で且つ登山口までのアクセスが困難でない所
3、会員の推奨山域及びルート
4、開催曜日及び回数：日曜日3回
以上を勘案して以下の通り計画する。
　第1回　5月27日(日)　越前岳
　第2回　10月21日(日)　大光山～安倍峠
平成31年
　第3回　2月17日(日)　竜ヶ岳

**山の日記念関連事業**
5月10日(木)　講演会開催
　静岡市清水区辻生涯学習センター
　講師・白鳥勝治・小川正育氏
　「南アルプスの山々」
8月18日(土)　親子登山教室
　富士山、宝永火口周辺
10月27日(土)～28日(日)
第12回しずおかスポーツフェスティバル
登山大会 京丸山・秋葉山
11月6日(火)～11日(日)

「南アルプス写真展」主催
県岳連、市岳連、労山、日本山岳会

**【山行委員会】**

第１回　４月21日(土)　大室山
第２回　５月２日(水)　竜爪山古道
第３回　５月13日（日）夕日峠
第４回　７月14日(土)～16日(月)
　　南アルプス 聖・茶臼
第５回　11月10日(土)～11日(日)
　　秋の懇親山行 信州・大川入山
第６回　11月23日(金)～24日(土)　池口岳
第７回　12月５日(水)　富士東臼塚
平成31年
第８回　２月２日(土)～３日(日)
　　雪山とスキー「白樺湖方面」

**【集会委員会】**

８月８日(水)「納涼懇親会」
平成31年
１月13日(日)「支部新年会」

**【会報編集委員会】**

**会報「不盡」83号**
４月、５月中旬、編集会議開催
６月初旬印刷、発行予定

**会報「不盡」84号**
10月、11月中旬、編集会議開催
11月末印刷、発行予定

**70周年記念誌**
６月、９月、12月、平成31年３月
編集会議
２０２０年４月印刷、発行予定

**第７号議案　平成30年度予算**

会計より提案説明。
第６及び７号議案、一括承認された。

## 平成30年度予算

収入の部

| 科　目 | 金　額 |
|---|---|
| 本部から運営交付金 | 120,000 |
| 本部から事業補助金 | 120,000 |
| 新入会員奨励金 | |
| 会員からの寄付金 | |
| ハイキングセミナー参加費 | 10,000 |
| 山荘利用料 | |
| 雑収入 | 10,000 |
| 前年度繰越金 | 240,384 |
| 収入合計 | 500,384 |

支出の部

| 科　目 | 金　額 |
|---|---|
| 支払報酬・謝礼金 | 10,000 |
| 旅費／交通費 | 30,000 |
| 通信費／運搬費 | 90,000 |
| 会議費・会場等借用費 | 50,000 |
| 消耗品費／コピー代 | 80,000 |
| 支部報他印刷製本費 | 100,000 |
| 山荘電気／ガス代 | 50,000 |
| ハイキングセミナー経費 | 10,000 |
| その他 | 10,000 |
| 雑費 | 10,000 |
| 予備費 | 60,384 |
| 支出合計 | 500,384 |

## 2018年度 文珠山荘行事

４月14日～15日
山菜てんぷらの会
映画「劔岳点の記」
６月16日～17日
山荘周辺に舞う
ヒメホタルを見る会
映画「MERU」（メルー）
９月８日～９日
文珠山荘納涼祭
映画「運命の山」
10月27日～28日
ハロウィーン
映画「氷壁の女」
12月８日～９日
文珠山荘忘年会
映画「運命を分けたザイル２」
音楽鑑賞
「ベートーヴェン第９交響曲」
２０１９年３月９日～10日
文珠山荘をベースに
　　山に登る会
映画「エヴェレスト～
　神々の山嶺」

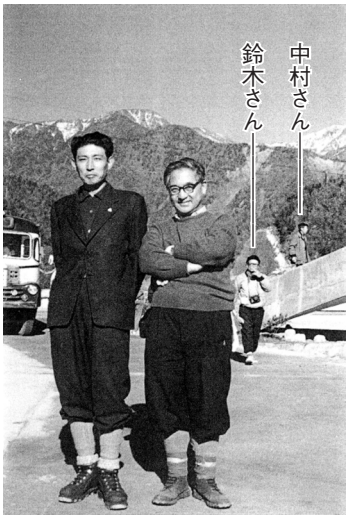
# 文珠山荘の仙人・荻野恭一さんの逝去

長田　義則

日本山岳会・永年会員の荻野恭一（1914～2018・会員番号546）さんが、平成30年3月27日に亡くなった。享年104歳は高齢化する支部会員の間で、誰しも到達不可能との驚きの声もあり、正に不老長寿を祝う人生でした。

5年前の5月、荻野さんから白寿の祝いとして「父と山」と題する小気味よい本が贈られてきた。その本は荻野さんの長女となる池上雅子（会員）さんが父親の口述内容を編集してできた本であり、荻野さんが旧制中学生活（駿府商業学校・現県立静岡商業高等学校）最後の夏休み（昭和6年7月）に、級友と牛妻の自宅を起点に7日間にわたる南アルプスは赤石岳～荒川三山を踏破した記録が柱になっている。この山行の特異なのは、縦走が成功して級友3人は達成感に浸りながら下山の途の身延側へ出たのだが、荻野さんは青春の身に余力あってか、再び高みへと踵を返し、安倍峠越えをして牛妻の自宅に戻って来たことである。何か鼻唄でも聞こえるような情景が浮かぶ…。荻野さんは家業の賤機郵便局に就き、55歳で局長を辞任された3年後には不運にも55歳と若い奥様を亡くされ、憔悴の苦しみを味わっている。

荻野さんと私の日本山岳会への入会は1962年の同期で、今では在籍50年を経た永年会員となっているが、2人の年齢差は29歳も離れた親子そのものでした。




日本山岳会入会後、松方三郎さん（右）と井川の畑薙にて

本の中からの転載写真を解説する。新入会員になって、支部恒例の行事の「もみじ会」に初参加した時の記録写真である。「もみじ会」とは昭和32年の静岡国体の翌年から11月の第2土曜日と決めて、支部行事として実施された。今では知る人も少ないが、登山部門の開催は危ぶまれて難渋の末の実施だった。当時の国体の役員関係者には多くの日本山岳会員が担っていて無事成功裏に終わることもでき、支部はその人たちへの感謝の意を込めた「鹿肉を喰う会」（5回目から名称はもみじ会）と銘打って現地集会を持った。私たちの初参加はすでに5回目を数えていて、荻野さんの写真は井川の畑薙ダムでのもの。爽やかに写る荻野さんは48歳。さすがと思うのは傍らの人…。国際的に知られたアルピニストの顔を持つ著名人・松方三郎（1899～1973・会員番号547）とのツーショットは羨ましい程のシーンである。松方会長の余りにも多種にわたる役職と名声を、荻野さんは入会前から知っていたし、郵政郵便のこと、国立公園や自然保護活動のことでは松方さんとオーバーラップして親しみをもった。晩年になって荻野さんが牛妻の家に戻った頃、私は2度伺っている。その時の荻野さんの回想話しに「松方さんの葬儀に参列した時、刎頸の交わりをしていた槙有恒（1894～1989・会員番号341）さんの葬送の詞は、すごく感銘した…」とその余韻をもらされた。…写真の説明

を続けると…荻野さんの背景に写る２人は、首にカメラを下げてこちらに歩く人は鈴木正平（静岡山岳会長）さん。その後方、右向きに歩く人は、明治時代に学生であった頃から南アルプスの登山に輝かしい足跡を遺した、画家の中村清太郎（１８８８～１９６７・会員番号１５３）さん。山岳会が創立から連綿と続いて１１３年になる今、この一枚の写真はその草創期のメンバーとの交わりを記録した、もはや時世の移り変わりは否めないもの。バスは県からチャーターされ、当時は県観光課の職員も何人か参加したのは、国体で実行委員長を担当した山本朋三郎元支部長（１９２０～２００７・会員番号３７１３）の凄腕の交渉力が功を奏したもの。

30回続いた「もみじ会」に荻野さんは実に16回の参加を数え、先人たちと交わって多くの知己を得た。支部の例会には帰りの終バスを気にしながらも出席され、ある日の例会で「山小屋を作ろうと思っている…」と披露された。支部長の朋さんも「皆で手伝いましょうか…」と声を掛けたものの、マイペースで作ることを理由に辞退された。長男の士郎（故人）さんとの２人が知恵と力を出し合い、数年がかりで完成したログハウスは自ら文珠山荘と名付けられ、１９９７年の正月には、そこで生活する荻野さんから年賀状を戴いた。畑に野菜を作り自給自足の充実した人生を送られた。

本家に戻られた荻野さんを訪ねた時、帰り際にもう履くこともないからと、愛用していた登山靴をくれた。話されることに不自由はなかったが、耳は難聴になって可成り大きな声で伝えもし、ある時は筆談の用意をして会話をしたこともあった。思い出すように荻野さんは、戦時中の話もされ、友人の戦死を悔やみつつ自分が召集されなかった事に済まない胸中を吐露するのも聞いた。實川欣伸支部会員が、富士山登頂１０００回を達成した時の記念にと、私の思い付きで荻野さんに昔支部で作った日本山岳会の半纏を貰えないかと手紙で伝えると、二つ返事でプレゼントしてくれた。貰った實川会員は今、富士山登頂２０００回に挑戦して秒読みの恩返し目前である。

平成28年になると、荻野さんは完成から19年間使用した山小屋の「文珠山荘」を、支部を通して（公）日本山岳会に土地と共に寄贈することを決断した。「文珠山荘」は支部の管理の元に繁く活用されている事を黄泉の国に先立たれた士郎さん、荻野さんに報告して、幾久しく合掌する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 支部会員二人が新刊を発行

**加田勝利氏【会員番号８８１６】**

書籍名　「静岡県の山」
発行年月日：２０１７年12月１日
発行所　㈱山と渓谷社

**山本良三氏【会員番号５７６８】**

書籍名　「南アルプスからヒマラヤへ」
発行年月日：２０１８年１月26日
発行所　㈱山と渓谷社

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 会員動向

**新入会員**　池上雅子
**準会員**　市川啓子、原田裕子
**退会者**　関口淑子、榛葉華子、松永義夫、高野啓一
**物故者**　荻野恭一

## 編集後記

会報記事の構成については、悩みがある。山行記の類は比較的原稿も集まりやすいが、サロン的なものはそうはいかない。私はその比重を一対一くらいにできればと思う。しかし如何にしてそういう原稿を書いて貰うか??

加田さんには、昨年9月原稿執筆依頼の手紙を送付した。「今年の春号にならば」との条件でＯＫを貰った。３月中旬、約束通り原稿が郵送されてきた。原稿用紙に手書きのものであった。デジタルの世の中で、アナログのものを手にした時は感動があった。ワードを使って原稿を書く時は、かなを入力をすると、漢字の候補が出てくる。その中から選択をするだけで良いが、手書きの場合は、念のため辞書を引いて確認されたことも多々あったと思う。原稿は1週間の間に、山行毎に数回に亘って郵送されてきた。それぞれの原稿には細かくメモが書かれた、２万５千分の1地図が私の読解を助けるために同封されていた。もし紙面が許せば、これらの地図も掲載したかったが、ごく一部の紹介しかできなかった。提出された写真はリバーサルフィルムであった。カメラショップを通じてメーカーにプリントして貰い本文に挿入した。手書きの原稿は私がワードで打ち直して執筆者にチェックして貰った。編集の過程には、執筆者との楽しいやり取りもある。

本誌にはもう一つ、原稿用紙に手書きの原稿を戴いた。長田さんの荻野さんに対する追悼文である。荻野さんの人柄を浮き彫りにしたもので、荻野さんを知らない、私を含めた新しい会員にとっては彼のユニークな人生を知る縁になった。個人的に最も感動したのは、私の尊敬する中村清太郎氏が引用された写真の中に小さくも写っていたことである。

支部長が執筆した呼びかけを巻頭言に配した。南アルプスの自然を守る活動は、当然のことながら実行と継続性が要求される。会員一人一人が常に心掛けていくべきである。

紙面の都合で第82号には掲載できず本号に掲載した、大根沢山から光岳・茶臼岳周回山行記にある参加者の苦労話は、興味ある話です。

最後に70周年記念行事は、既に準備から実行段階に移りました。会員からの寄付も受け付けています。（長野記）

＊＊＊＊＊ お知らせ ＊＊＊＊＊

**ミスター富士山　實川欣伸の**
**「富士山登頂２０００回　達成記念祝賀会」**

期　日：平成30年7月22日(日)
時　間：午後３時～６時30分
会　場：沼津リバーサイドホテル　３階・香陵
会　費：６０００円
連絡先：０８０-５１１５-５４６５
（長田）

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
有元利通
事務局　〒４２０-０９４８
静岡市葵区秋山町８-13　木村勝利
編集責任者　長野和義
印刷所　株式会社　三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎０５４-２８２-４０３１

題字・牧野衛　背景・長野和義

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2018（平成30）年秋季
第84号

## 巻頭言

# 近代登山創始者はどこの人か

諏訪部　豊

日本山岳文化学会という会がある。山に登るのが目的ではなくて机の上で山を楽しむ会だ。この会が発足してから半年ほどした頃、私は誘われて入会した。この会は毎年十一月に大会を開いて各自が研究したことを発表する。その第1回目の大会で久保利永子さんという京大院研修員が興味深いテーマの発表を行った。

彼女の話によると、生活や信仰のために山に行くのではなくて趣味として山に登るいわゆる近代登山の創始者はイギリス人であったとのこと。なるほどそう言えばマッターホルン初登頂者は版画作家でイギリス人のエドワード・ウインパー（1865年のこと）だし、日本で近代登山を実践して日本山岳会発足の切っ掛けを作ったのはイギリスから派遣された宣教師ウォルター・ウェストンだった。また1953年にエベレスト初登頂を果たしたのもイギリス隊だった（ただし初登頂者は体力と経験を見込んでこの隊に招聘したイギリス領ニュージーランドのエドモンド・ヒラリー）。このようにイギリスでは早くから近代登山が行われていた。このことは既知のことだったが、彼らにとっての登山はジェントルマン意識に深く関わっていた、というのが久保

## 目次

★巻頭言　近代登山創始者はどこの人か　諏訪部豊　1
★随筆　アルプス登山とプリマピッケル　永野敏夫　3
★シリーズ
◆「山への想い」第16話　南アルプスの思い出(2)　加田勝利　8
★富士登山2000回の快挙　長田義則　9
★大石惇先生の講演を聞いて　丹羽忠昭　10
★全国支部懇談会報告　大島康弘　11
★会員山行1　大室山　大島わかな　12
★会員山行2　竜爪山　有元利通　13
★第1回ハイキングセミナー　越前岳　中村博和　13
★こぼれ話　「一期〝二会〟」　木村勝利　14
★会員山行3　夕日峠　海野俊久　15
★会員山行4　南ア聖岳から横窪沢へ　仙石智子　15
★個人山行　愛鷹山塊　勝又千華　17
★山の日記念行事　親子登山　富士山「宝永山」　中野雅章　18
★会務報告と行事予定　19
★【70周年記念行事への募金お願い】　20
★お知らせ　20
★会員動向　20
★編集後記　長野和義　20

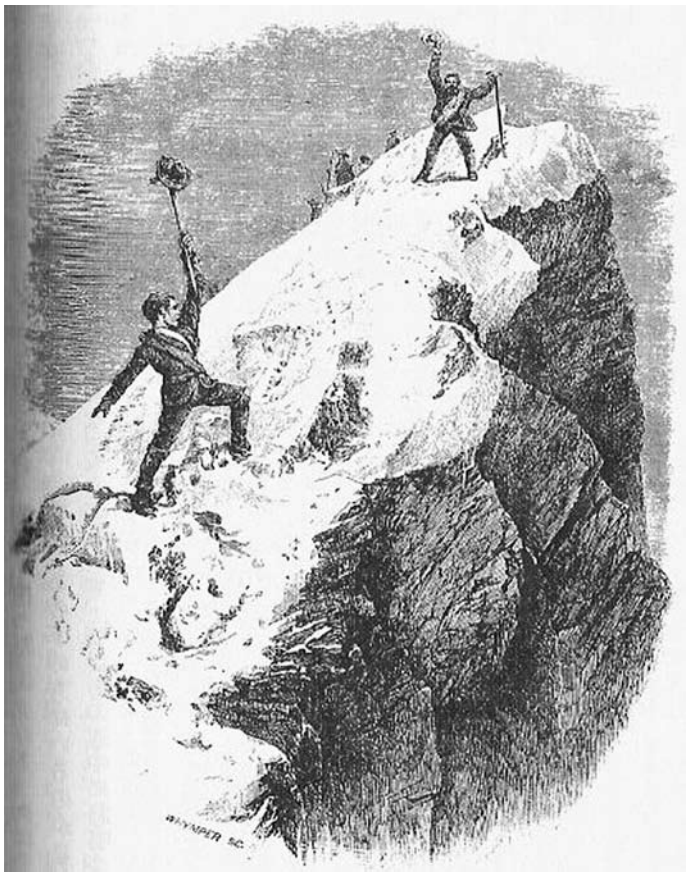
さんの新しい見方だった。

良く知られているようにイギリスでは十八世紀から十九世紀に掛けて産業革命が起こり、それによって多くのミドルクラス（中産階級）が生まれた。そしてイギリスではジェントルマンと呼ばれることが理想とされる。ここで言うジェントルマンとは単に紳士ではなくて「名望家」という意味だ。即ち教養が高く、裕福で、地域のために無給で働くようなごく一部の恵まれた人たちだ。そしてさらにジェントルマンたる者は良きスポーツ（現代の激しい運動を指すのではなく、体を動かす余暇活動という程の意味）に親しまなくてはならなかった。

最も高貴なスポーツは狩猟だった。しかしそれは貴族や大地主しかできないことだった。なぜなら狩猟には広大な土地が必要だ（他人の土地で勝手に狩りはできない）。そして獲物を屠って料理を作り、招いたゲストに供するための使用人たち、さらには客を泊めるためのゲストハウスが必要だ。いかに裕福になった中産階級の者でもこのような王侯貴族の真似はできない。そこで彼らの一部が登山というまったく新しいスポーツを創り出したのだった。

折から鉄道を始めとする交通機関が整いつつあり、旅行がし易くなっていたことも幸いし、彼らは毎年夏になるとドーバー海峡を渡ってスイスやフランスの登山基地を訪れた。そこでホテルや山小屋に泊まり、地元のガイドを雇い、氷河を辿って峰々を登攀したのだった。当時のアルプスには未踏峰がまだまだあったから彼らのやる気も伺えよう。登山の爽快感と共に「どうだ！単に世襲した土地や金があるだけではできないだろう？」と保守的な上流階級を思い浮かべてほくそ笑む彼らの顔が目に浮かぶようだ。こうして登山という新しいスポーツを擁して中産階級の彼らもジェントルマンの仲間入りを果たすことができたのだった。

ところでアルプスの麓に元々住んでいたスイス、フランス、イタリアなどの人たちは、生活のために峠を越えることは



マッターホルン初登頂時のウインパー達

あっても用もないのに峠のその上にある頂に立つ、という発想は持っていなかった。山には悪魔が住んでいると信じ込んでいたし、山中で一泊すると死ぬとさえ言われていた。さらには厳しい自然環境で暮らし、生きて行くのがやっとの生活だった彼らにはそのような経済的、心理的余裕などなかったであろう。

ところが十九世紀中頃から登山シーズンになるとイギリスから旦那衆が続々とやって来るようになった。そして嬉々として山に登っては散財して行ってくれる。それまで寒村だったグリンデルワルトやツェルマット、シャモニーなどは大いに潤った。

やがて麓で暮らす人たちの中から登山技術に優れた者がガイドになり、ベントやウィリッシュと言った鍛冶屋がピッケルを作るようになり、キスリングがザックを作るようになっていった。そして経済的にも心理的にも余裕ができた彼ら自身も近代登山に目覚め、イギリス人に倣って山岳会を立ち上げ、困難なルートを切り開いていった。スイス山岳会とイタリア山岳会が１８６３年、ドイツ山岳会が１８６９年、フランス山岳会が１８７４年の創立だ。エベレストはイギリス隊だったが人類初の８０００メートル峰アンナプルナはフランス隊によって初登頂されたのはご存じの通りだ。

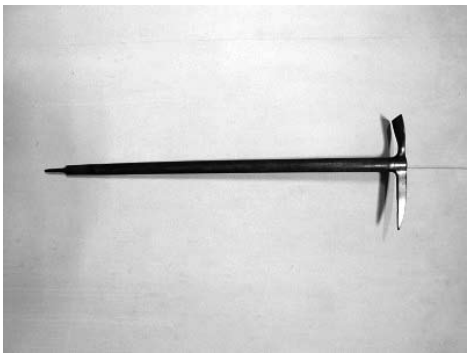
ということで近代登山の創始者はイギリス人であった。話が前後するが世界初の山岳会は当然英国山岳会であり、１８５７年の創設である。そして当時は他国と区別する必要がなかったので単に山岳会（The Alpine Club）と称していた。これはゴルフの全英オープンが The Open であったのと同じであろう。また日本山岳会も最初は単に山岳会と称していたのも周知の通りである。

# アルプス登山とプリマピッケル

永野　敏夫

**【西郷正郎氏から譲りうけたピッケル】**

私の手元に古いピッケルがある。欧州ブランドのプリマである。全長１００センチメートル、ヘッド30センチメートル、重量１３００グラム、ピックに鋸歯を打ち込んだ、見るからに頑丈な代物である。日本山岳会静岡支部に所属していた故西郷正郎さんから頂いたものである。学生時代、神田の片桐で見つけたものらしく、もともとは黒田正男氏が研究用に取りよせたものを店主の仲介で手に入れたらしい。



プリマのピッケル
（西郷さんに頂いたもの）

西郷さんを紹介してくれたのは同会所属の杉本宣明さんである。彼に連れられてご自宅に訪問したのだがペンネームの千坂正郎さんとは聞かされておらず、名刺を差し出され、さすがに驚かされた。当時月刊誌「山と渓谷」や「岳人」等に盛んに執筆された方で、著書の「緑の誘惑」や「山小屋」も読んでいた。その夜奥様の手料理をつまみに杯を傾けながら

顧問をしていた第二次RCC時代のことや造詣の深い山岳本の話、古い時代の18ミリを見ながらの話でつい長居をして夜遅くなったことを覚えている。

翌年私も日本山岳会に入会し、その後亡くなるまで親しくお付き合いをさせて頂いた。１９９７年西郷さんは誤って大腿部に熱湯をかぶり大やけどをして二ヶ月ほど入院された。お見舞に上がった折に「もうピッケルを使う山も登ることは無いだろう。死んだら家内に庭いじりの道具にでも使われたらかなわない。今のうちに君にあげておくよ」と言われた。学生時代から永く愛用してきたピッケルだけに私などが、と躊躇したが、お預かりするつもりで頂いた。プリマはスイス製と言われたが製作地まではご存知なかったようである。書棚にある「登山小史と道具の変遷」西岡一雄著や「岳人」、「山渓」などを取り出して見たがプリマそのものすら見出すことは出来なかった。

**【四十代のメモリアル】**

**単独でマッターホルンを登る**

四十代は子育て山登りの時代、厳しい山からしばらく遠ざかり体力の減退は隠しようもなかった。四十代を締めくくるに当り何か自身のメモリアルとなる山登りをしたかった。ターゲットに浮かんだのがマッターホルン、これを単独で登ることであった。先ずは基礎体力を取り戻すために近くの谷津山を三ヶ月間一日とも休まずトレーニングを積みあげ体重を７キログラム絞り込んだ。１９９１年四十代最後の年であった。満を持して目標を達成すべく仲間とアルプスに向かった。その年は天候に恵まれ、幸運にも目標のマッターホルン・ヘルンリ稜を単独で登ることが出来た。

マッターホルン山頂

モンブラン、ユングフラウ、オーストリア最高峰グロス・グロックナー（東部アルプス）にも登り、前年５０００年前の遺体、アイスマンが発見されたハウスラブヨッホ（３５００メートル）と近くの名峰シミラウン（３６００メートル）にも登った。登山が終わると帰国する仲間を見送り、妻と二人で古い紀行本の写真に魅せられた村を訪れることにした。インスブルックに出て電車とバス乗りかえ一時間半ばかりでお目当ての山村に着いた。森とアルムに囲まれ、小川の畔には尖り屋根の教会が立ち、白壁木組の民家が点在、アルプスの白い峰が小気味よく谷奥に覗いていた。想像どおりの閑静な風景に痛く感動し、その日は地元オベルンベルグのエッグという素朴なガストハウスに泊まった。その後お気に入りの宿となり都合十数回泊まることになった。

実はプリマのヘッドに刻印されたフルプメスが、ここからそう遠くない所にあったことを知るのは数年経ってからであった。

**【プリマを知る山男】**

店に同世代の男性が入ってきた。店名のチロルに惹かれて来たらしいが、たまたまアルプスの写真を展示したときであり、それを見ながら話がつい弾んだ。か

つて大分ＲＣＣに所属していた山男でグランドジョラスオーカー稜とアイガー北壁を登っている。昭和四十年代日本人による本場アルプス岩壁登攀黎明期の申し子である。登山後アルバイトで食いつなぎ、スイスに二年ほど滞在しその折にチロルにも足を運んだらしい。その彼が店頭に置いてあるプリマを見て、珍しいですねオーストリア製ですねと教えてくれた。登攀用具にはめっぽう詳しく、ヘッドに刻印されたFULPMESを見ながら教えてくれた。後日現地で購入したオーストリア地図を広げると、チロルの州都インスブルックに近いシュトゥーバイ谷の一角に確かに同名の村を見つけることができた。

**【アルバータの折れたピッケル】**

１９９７年12月日本山岳会の晩餐会の席上で折れたピッケルの合体セレモニーが催された。槇有恒隊がアルバータ初登頂（１９２５年）の際に記念に残してきたピッケルである。第二登のアメリカ隊（１９４８年）が、このピッケルを抜こうとした際シャフトが折れツァッケの部分を残したまま持ち帰った。その後１９６５年に長野高校ＯＢ隊が登頂。その際このツァッケ部分を持ち帰った。それが一体であることが判明し、72年ぶりに復元された。このピッケルが同じブランドのプリマであった。所有するものよりサイズはやや小さめだが姿、形は同じものであった。山岳誌「山渓」「岳人」にも掲載され、ここでもスイス製と明記されていた。このニュースはフルプメスへの思いをいっそう膨らませた。

**【義姉のマッターホルンのガイド役で再訪】**

翌年の１９９８年、再びアルプスに向かった。義姉のマッターホルン登攀のガイド役である。この時は支部の高須さんも同行した。この年も好天に恵まれヘッドランプでの登攀に下部で迷ったものの無事ルートに戻り登頂してお役目を果たした。ついでにモンブラン三山を縦走した。スイスのブリックで帰国する仲間たちを見送ると、妻と二人で、サンモリッツ経由で国境を越えインスブルックに入った。ここでローカル電車に乗り換えると一時間ほどで念願のフルプメスに着いた。駅舎のインフォメーションで宿を予約しついでにピッケルのことを聞いてみると、街の鍛冶屋を教えてくれた。店はすぐ近くにあった。店頭に実物大の鍛冶工の木彫り像、ウインドウには金属農器具に混じってピッケル、アイゼンが陳列されていた。早速店長らしき男性に取り次ぎメモしてきたプリマの刻印の写しとスケッチを見せると、古いものだが確かにここで作ったものだと即座に答えてくれた。製作者は八十歳を越える高齢だが今も健在である。だがプライベートで住まいは教えられないと言う。私はこのプリマを持っている。はるばる日本からこの地を尋ねてきたのだと、伝えると名前と住居を聞き出すことが出来た。重いザックを宿の部屋に収めると、アポ無しでご自宅に向うことにした。カンプルへは乗り合いバスで20分もかからなかった。セアレス山に抱かれた河岸段丘の閑寂な住宅地であった。ご自宅はチロル特有の木造白壁造りで、屋根の庇下には木彫りのピッケル、とエーデルワイスの花のモニュメントが飾られてあった。玄関口に回りベルを押すと反応はない。たまたま居合わせた隣家の女性に聞くと、夕刻まで帰ってこないだろうと言いわれた。日程に余裕はなく明日はここを発たなければならない。結局製作者といわれ

たハインリッヒ・ワァルナー氏には会わずじまい、プリマの親探しは約束も出来ない宿題として残された。

**【ヘルマン・ブールのピッケルが発見された】**

翌年、ナンガー・パルバットに単独初登頂（１９５３年）したヘルマン・ブールが証拠として残したピッケルが46年振りに発見されたことがトピックスとして報じられ話題に上った。１９９９年日本勤労者山岳連盟隊が登頂した際に見つけて持ち帰った。これがヘルマン・ブールのものと判明した。所有するプリマと同じフルプメスの刻印があるが、これはアッシェンブレンナーであった。

ヘルマン・ブールはインスブルック出身の傑出した登山家で、著書「八千米の上と下」にその時の記録が詳細に語られている。登頂後直下でストックを支えに立ったまま一晩ビバーク、奇跡的な生還をなしている。その二年後ブロードピークに初登頂し帰路ついでに登ったチョゴリザの下山時にスキーをはいたまま滑落して帰らぬ人となった。インスブルックのオーストリア山岳会事務所に高須さんと立ち寄った折、展示室にブールの登山靴があり許可を得て履かせてもらった。

**【鍛冶師ワァルナー氏に会えた】**

２０００年８月義姉からモンテローザ登山のガイド役を頼まれた。魚心に水心、二つ返事で引き受けた。私自身未踏の山でありそれ自体興味があり、ついでにワァルナー氏邸再訪の日程を組ませていただいた。

この年ツェルマットは天候不順、８月に入って30センチメートルの積雪を記録。マッターホルンは今夏登頂者０人と言う状況であった。ところが現地に入って二日後好天の兆しを見せてくれた。翌日早速モンテローザ小屋に入り、翌日九時間をかけてモンテローザの山頂に立った。往復十六時間の苦しい登攀であった。その後オーストリアのチロルに移り、アイスマンの山シミラン峰を前回とは別ルートの氷河から登った。約束の登山を終えると、フルプメスを再訪、先に訪れていただけにカンプルの家には迷うことなく行き着けた。ワァルナー氏はご在宅であった。中肉中背の八十歳を越えたとは思えぬ風格で、赤銅色に焼けた面貌はいかにも鍛冶師らしい雰囲気を滲ませていた。初対面ながら気持ちよく応対してくれたが、今夜は外せない約束があるとのこと、明日改めて訪問することにした。

自作のピッケルを持つワァルナー氏
（2000年8月撮影）

翌朝ホテルの主人が彼は友人だと言って自家用車で送ってくれた。裏庭に通されテーブルを囲ってドイツ語を話せる義姉をなかにアルバムや山岳本や写真集を見ながらの歓談。さて本題のプリマの話に入り、持参した写真を見せるとしばらく目を通して、確かにここで造られた物だが、自分よりも少し古い時代のもので製作者の名前までは特定できないといわれた。期待していただけに正直落胆させられたが、ピッケルの製造の歴史を繋ぐ一人物と知遇を得たことは掛け替えのな

いことであった。伝説的なアイガー初登攀者ヘックマイヤーは氏の友人、ヘルマン・ブール婦人は奥さんの幼い時代からの友達で、其々の写真がアルバムに収められていた。また氏はピッケルの蒐集家でもあり半地下の小部屋には骨董品的価値のあるものから近年の物二００余、シェンク、ウィリッシュ、エルクなどのブランド、ナンガー・パルバット遠征隊が使ったアッシェンブレンナー、自身が製造したシュトーバイ製ピッケルもあった。ところがお目当てのプリマが無かったのはなんとも寂しかった。

**【えー、ワァルナー刻印のピッケル】**

ワァルナー氏と初めて会って15年目、シャモニー、ツェルマットをハイキングして、イタリア北部の南チロルに入る途中、ローヌ川のベルバルド村のワンネンというホテルに泊まった。沿線道から離れくねくねした細い道を車で上ると天空の抜けた集落に出た。この地方特有の黒木木組み造りの民家が建ち並ぶ世界遺産に登録された山村であった。ホテルはその一角にあった。部屋に荷を納め、ホテルのレストランに入ると片隅にピッケルが立てかけてあり、何気なく手に取ってみるとなんとフルプメス　ワァルナーの刻印があり、その奇遇に驚いた。ホテルの主人にフルプメスのピッケルは私も持っている。刻印の製作者ワァルナー氏を知っている。　そのピッケルを譲ってくれぬかと畳み掛けると、先代からの宝物だとすげなく断られた。　翌早朝、後ろ髪を引かれる思いで宿を出立。サンモリッツ経由で南チロルに入り、ドライチンネンなどのハイクを楽しみ、その後オーストリアのチロル州に入った。エーデルワイスの咲くサイレ山などを登り、久しぶりにワァルナー氏の家を訪問した。土産話を持っての訪問であったが、ご本人はすでに亡くなられていた。ご子息に生前にお会いした時の話や先のスイスで出会った故人のピッケルのことなどを話してご自宅を辞した。蒐集したピッケルは今、村のバス停脇の小さな博物館に寄贈されたという。

**【夢はつづく】**

プリマは戦前の１９２０年～３０年代に日本に輸入されたらしい。その本数は決して多くはない。冒頭に挙げた黒田正男氏出処のプリマと婦人初子氏の姉妹村井米子氏（三者とも元日本山岳会会員）が所有していたプリマは両者の関係からして同時期に輸入されたとも考えられるが、村井氏のものは MADE IN SWITZER･LAND　花模様に PRIMA の刻印、黒田氏のものは WERKGEN FULPMES（フルプメス製作）に ARANTIE 意味不明の刻印、ここにヒントがあるかも知れないが明らかではない。

最近ネット情報でプリマの製作者はハプアウフであることを知った。

彼はフルプメス出身で後にスイスのアインジィーデルンに移り、しばらくしてピッケル製造を手がけ、死後息子があとを継いだと記されていた。これにはハプアウフの刻印がある。私が所有するプリマにはその刻印はない。果たして黒田氏から西郷氏そして私に手渡されたピッケルはフルプメスにいた時代に製作されたものであろうか。二十余年、登山人生の三分の一を費やしたアルプス登山とこの一本のピッケルの故郷探しの山旅は未だ終わりを見ない。

「夢は永くつづいたほうがいいですよ」いみじくも西郷さんに言われた言葉を噛みしめている。

シリーズ「山への想い」―第16話―

# 南アルプスの思い出(2)

加田　勝利

## 【信濃俣河内遡行】

信濃俣河内は南アルプスでは、赤石沢に次ぐ大きな沢で、畑薙第一ダムの左手林道から入る沢で、やまめの釣り師が多く入ったと言われている。１９８７年7月中旬仲間三人で入ったのが初めてで、それから回数を重ね十五回目は、２０１３年8月山口県の女性を含め六人だった。沢中で一泊し二泊目は茶臼小屋が決まりの宿となっていた。小屋への手土産は釣ったやまめで、小屋では一升瓶を用意して待っていた。大ヨキ沢が本流に流れ込む所に、井川の加藤商事の山神社がある。一休みしてから沢に入る。赤石沢のように核心部はなく比較的楽な沢と言える。中俣沢をすぎ地形図で左に直角に曲がる間が面白い個所と言える。左手高台に小屋が見えるが何年か前に、夕立に会い泊めてもらったことがある。薪ストーブで衣類を乾かした思い出の猟師小屋だった。左手に西沢を分け大春木沢まで行くと、水量はぐっと細くなり左手の大きなガレを過ぎたら、易老岳、希望峰の稜線にのぼりつめて縦走路へ出た方が早い。希望峰に立てば茶臼小屋へは一時間少々で着ける。下山は一般コースが無難だが、茶臼岳に登り直し鳥小屋尾根を下降するのも趣がある。この尾根は第十二回国体で開かれた。時期の記憶はないが畑薙第一ダムのすぐ井川寄りで、幹線道路が一気に下まで崩れる土砂崩れが発生した。井川の大村保さんは〝猿やせ〟と言うが、約3年間車の通行が出来なかった。信濃俣河内入口のヘリポートから五、六分行った所が、同じ〝猿やせ〟の土砂崩れで畑薙ダム湖に崩れた。１９８７年に信濃俣河内を遡行する時は普通に歩けたが、土砂崩れ後は釣り師達が針金をつけやっと通行出来た。ガレの手前から沢に降りて行くのが賢明で、普段畑薙ダム湖の水は無い。２０１３年以降は行ってないので不明である。

２００９年8月僕らも、やまめの大きいやつを釣った。この時は巻き尺を持参して大きさを測った。一番大きかった、やまめは34センチメートル、次が32センチメートルと尺やまめで、この時は自信をもって茶臼小屋の管理人に差し上げた思い出がある。あれから十年、やまめの大きいやつはもう少なくなったと思う。

## 【中ノ尾根山から合地山(がっちさん)、寸又峡温泉】

２０００年は二回のかもしか山行を組んであった。9月9日は二十時間歩いたが、今回はひと月前の8月20日、中ノ尾根山から合地山を経て寸又峡温泉まで下った山行である。

沼津から鈍行で豊橋駅に13時50分着。この駅で山口県宇部市から来る山仲間と合流し、飯田線で水窪駅に向かった。水窪では唯一のスーパーで食糧を調達し遅い昼食を取り、白倉権現までタクシーを利用した。

ここのゲートは有刺鉄線をつけてあり頑丈なものだった。10分ほど歩くと大きな営林署の建物があり、軒下を借りて翌日の話をしながら眠りについた。

翌日は3時に出発。白倉川に沿った白倉山林道を歩き出すと、間もなく大きな黒沢橋が右手に出てくる。すぐ先にある営林署の休憩所が、左手にある朝日山への登山口である。この先、白倉沢橋までは緩やかな上り道が続く。この橋を右手に直角に曲がり、急勾配となるが林道終点には営林署の休憩所がある。数分手前

の小沢で水がとれるので水筒を満たした。建物のすぐ横から尾根道に取付く。広い道で歩き易く南面がガレている個所をすぎると、大きなカブト岩で黒沢山、丸益岳に通じる稜線に出ると、尾根は広く中ノ尾根山へは緩やかなのぼりでササは深い。歩き易いところを探して進む。ササが薄くなってくると針葉樹林に囲まれた山頂に着く。中ノ尾根山はかなりの登山者がやってくるが、合地山を目指す人はごく少ない。

合地山　P2 2149
AMOやぶこぎ山遊会、H11.5.3

中ノ尾根山周辺は地形図を見ると広くて緩やかでササが深く、獣道が縦横に走っており、合地山へは約１００メートル下って、合地山に通じる尾根に出るが時間をかけて下りたい。この下降が一番厄介である。下りきったら尾根歩きとなり、三つ目のこぶが三等三角点の合地山だ。一息入れよう。一般の登山者は合地山を往復して中ノ尾根山に戻る人が多い。

この先諸沢山（しょのさわやま）へは踏み跡はうすいが尾根上についている。約４時間かけ山頂に到着。広いが樹林で展望は望めない。もう登る山はなく下り一方である。１９９４年８月不動岳山頂から東に張り出した尾根を下って、逆河内に出たが今回も逆河内沿いの林道に下るため、山頂から南に張り出した支稜に入り、２時間ほどで林道に出た。暗くはなったが林道歩きは気が楽だ。千頭ダム経由で寸又峡温泉まで２時間。22時30分着だったが今夜の宿、求夢荘では女将が心よく迎えてくれた。《完》

## 實川欣伸会員
## 富士山二〇〇〇回登頂と祝賀会

長田　義則

平成30年６月23日、實川会員は富士山登頂二〇〇〇回を達成した。前日の22日の朝、小田原市内の「御幸の浜」の海抜０メートルを起点として明星ヶ岳～明神ヶ岳～金時山を経由して御殿場口から富士山頂に不眠不休で登る計画である。

「美幸ヶ浜」に三三五五集合したのは、實川、加茂好清、小曽戸恒夫会員、鶴橋誠会員、加藤ひとみ（女性の富士山登頂第一人者）の挑戦者５人と濱島美樹会員、サポートの関根美千子元会員、長田の合計８人。砂浜での内輪の壮行会では関根手作りの段幕を掲げ、餞に差入れた軽食で腹ごしらえすると、５人の挑戦者は快調に歩き出して行った。金時山頂で合流するサポート組は、遊び心にスイカを担ぎ上げ幾分熱中症気味で登って来た挑戦者の疲れを癒した。時計は17時近くを示し、長休みもできずに御殿場口に向かった。予定時刻は大幅に遅れて23日未明に登山口に着き、ここで濱島と鈴木研が加わり挑戦者は７人となった。

出発前から台風の前兆もあって、八合目辺りから天候は急変し吹雪となり最悪となった。メンバーは４人下山して登頂組は實川、加茂、鈴木の３人となって頂上を目指した。余りの悪天候に實川会員

はルートを御殿場ルートからトラバースして富士宮ルートに移ったところ、幸い風も弱まるのを感じて一気呵成に登りつめた。午後一時、悪天候を耐え抜いた加茂、鈴木と共に登頂の喜びを分かち合った。

富士宮ルート山頂

二〇〇〇回登頂の興奮が冷めやらぬ一ヶ月後、夏山富士も盛りとなる7月22日、沼津リバーサイドホテル「秀麗」で祝賀会が開催された。第一部の富士山登頂二〇〇〇回の軌跡では、スタートから登頂迄のDVD放映の後、實川氏が登壇し挑戦者全員を壇上に招き一人一人を紹介し感謝と労いの言葉を述べた。今回は悪天候下の危険と背中合わせの登頂となり、今までで一番大変だったと回想。次なる目標は二二三〇（ふじさん）回登頂と宣言し、会場から万雷の拍手を貰った。次いで元日経新聞記者の工藤隆雄氏が講演し、實川氏に未踏のエベレストに再挑戦してセブンサミッツ完登を達成して欲しいと激励した。

第二部の祝賀会では、発起人代表・尾上元会長が挨拶。二〇〇〇回登頂は驚異的記録だと讃えた。沼津市長の頼重秀一氏と国会議員の渡辺周氏からの祝辞の後、日本山岳会の小林会長、元越後支部長の山崎・橋本両氏からの祝電が披露された。久保田元支部長の発声で乾杯し開宴した。出し物として實川氏本人がステージに上がり、【二〇〇〇回、頂、2018・6・23】と揮毫して来場者の喝采を浴びた。アトラクションは天城連峰太鼓の演奏。連打、連打で割れんばかりの熱狂演奏に一同喚声を上げた。宴たけなわには大阪からのビデオメッセージが上映された。これは植村直己と共にエベレストの日本人初登頂者になった故松浦輝夫氏の奥さんと米本（元早稲田大学K2遠征隊副隊長）夫妻からの祝辞であった。

祝賀会は實川氏から参列者への謝辞、富士には生涯登り続ける、エベレストへの再挑戦もしたいとの言葉で締め括られてお開きとなった。

實川欣伸 富士山登頂2000回記念祝賀会　リバーサイドホテル　2018. 7. 22

## 大石惇先生の講演を聞いて

丹羽　忠昭

山口康裕さんからお誘いを受けて2017年4月8日㈯に伊東市のひぐら

し会館会議室での大石先生の講演会に出席いたしました。会議室は50名近い出席者で埋まり、その中には静岡支部のモンゴル会メンバー8名も含まれていました。講演のタイトルは「私の人生の師匠は自然だった」です。このタイトルからして、大変親しみを感じました。私の人生を振り返っても、自然から教えられたことがあまりにも多かったと感じていたからです。その上、昨年日本山岳会に入会してから送付して頂く支部報「不盡」に掲載されている先生の書かれた記事も身近に感じられ、共感していた事柄が多かったので期待と興味を持って拝聴することが出来ました。

「何故山に登り始めたのか?」の問いに「人間が自然の一部であり、自然に包まれていると心が落ち着き心地良い」との答えです。自然＝登山、登山から教えられたことは私にとっても非常に大きなものがあります。「登山から得られるものは、苦しさを乗り越えることによってその苦しさの何倍もの喜び、感動を与えてくれる」からです。また山仲間との触れ合いは、同じ苦労、試練を分かち合ったことからの友情です。このことは他のスポーツなどと比べても比較にならないほどの絆となって今でも絶えず私を支えてくれています。社会人になって多くの試練に遭っても、あの苦しかったボッカ訓練、雪上訓練などに比べたら大したことはない、この逆風を乗り越えれば、視界が開け素晴らしいお花畑が広がっていると確信できたからこそ乗り越えてこられたと思っています。

それから「自然界は多様性の世界であり、多様性を失ったら自然ではない」と言われたことに新鮮な驚きを覚えました。動植物・人間も、みんなそれぞれが違う個性を持っています。「自然は多様性の集合体であるがゆえに共生こそが本来の自然の姿です」このことは「他人は他人として認め、自分は自分として生きること」であり、私の今後の生き方のベースとなっていくのではないかと思います。

後半は、スライドを交えて「リンゴのふるさと西域」です。西域は私にとって未知なるところですが、その魅力的なシルクロードという言葉の響きが予てからの憧れとなっていました。その中央アジア一帯は世界の八大栽培植物起源地の一つで、果実の王様リンゴをはじめナシ、サクランボ、アーモンド、クルミ、ソラマメ、ネギ、ホウレンソウなどの主要な作物の起源地であり、さらに日中共同で植物の野生種を保存、調査するための「天山有用植物自然園」を建設してきたとのこと、全て初めて聞くことでしたので、驚きとともに興味深く聞き入りました。リンゴは私の大好物であり一年を通して欠かさないほどです。リンゴの歴史、日本への渡来など、リンゴにまつわる様々の話に聞き入りました。

ぜひ近い将来、西域に旅をして野生種リンゴを見て、味わってみたい、そして標高差を利用した植物園を見てみたいとの思いが募ってきました。前半の「山への想い」、後半の「リンゴのふるさと」、いずれも大きな感銘を受け有意義な2時間の講演会でした。

（編者注：本原稿は昨年の分ですが、入稿手違いのため掲載が遅れました）

## 第34回北海道支部主催 全国支部懇談会の報告

大島　康弘

全国支部懇談会が北海道支部の主催で7月21日～22日にかけて開催された。

静岡支部からは、有元、中野、長野さんが車で7月15日に出発。北海道の室蘭岳、有珠山、羊蹄山、乙部岳を巡り、会場の黒岳の麓、『層雲閣グランドホテル』に到着。青野、畠中、白鳥さんと私は静岡空港から前日に札幌に飛んだ。

私は前北海道支部長の厚意で秀岳荘が管理する支部ルームに泊めて頂くことになり、既に到着していた北九州支部、青森支部、本部の方と愉しいひと時を過ごさせて頂いた。

支部懇談会は山の友との出会いの場でもある。旧交を暖め、また新しい知己を得ることが出来る。それは日本山岳会の特質だと思う。

21日15時、全国から188名が一堂に会し、小林会長に続いて西山北海道支部長の開会の挨拶の後、大雪山写真ミュージアム館長、市根井孝悦氏が『母なる大地、大雪山に魅せられて～その魅力を全世界に～』と題してスクリーンに写真を写しながら講演された。

18時からは懇親会。佐藤芳治上川町長の祝辞、重廣副会長の乾杯、そして賑やかな歓談が始まり、折角の三世代のアイヌ家族による歌と民俗舞踊の演目は喧騒に紛れてしまった。

翌日のハイキングは黒岳往復コースに有元、長野、中野さんが、写真ミュージアム観覧コースに青野、畠中、白鳥さんが、私は銀泉台-赤岳-黒岳コースを楽しんだ後、三々五々、解散。私は千葉支部の友人と津軽の岩木山に向かった。

来年の全国支部懇談会は栃木支部の主催で日光を舞台に開催されるという。どんな出会いと景色に会えるのだろうか。

会員山行①

## 豊かな原生林と富士の大展望「大室山」

大島　わかな

メンバー　有元、荻野、中村、中野、大島わ

4月21日㈯、私の憧れだった「富士山大室山」へ登った。メンバーは5人。静岡支部の藪山好きが集まった心強いメンバーだ。8時50分、登山開始。初めての青木ヶ原樹海へ足を踏み入れる。当初は鬱蒼としたイメージを持っていたが、樹海の中は爽やかな空気で気持ちが良い。まるで森林浴だった。10時、いよいよ大室山の登りにさしかかる。ここから約350㍍標高を上げれば山頂だ。赤ヒモを目で拾いながら登る。11時5分、大室山山頂（1468㍍）に到着した。樹林に囲まれ、展望は望めない。写真撮影を済ませ、続いて三角点へと進む。三角点（1447㍍）から眺める富士山は見事だった。目の前に大きくそびえる富士山。頭には雪化粧。山裾まではっきりと見える。私は、富士山を眺めるなら西側から眺めるのが最も気に入っている。大沢崩れのある富士山。まさに私の好きな景色が、目前に大きく広がっていた。素晴らしい眺めだ。

大室山と富士山の間には樹海が広がっている。一度足を踏み入れたらそのまま迷い込んでしまいそうな程に深く、果てしなく広がっていた。11時30分、富士山の見える緩斜面で昼食。遠くには南アルプスも見える。北岳から間ノ岳、農鳥、塩見、蝙蝠、悪沢岳。手前には毛無山、雨ヶ岳、竜ヶ岳も見えた。こんな展望を独占して昼食だなんて、やはり贅沢すぎる。12時、昼食を済ませ出発。大室山の火口底へ寄り道する。だだっ広く、風のよく通る静かな場所だった。夜中には沢山の

鹿が集まって飛び跳ねていそうな、そんな場所だった。12時40分再び山頂に戻る。帰りは時間があったので、青木ヶ原樹海の風穴を巡りながら下山した。富士風穴では、ちょうど大学の探検部が新入生歓迎会で中に入っていた。洞窟内は岩の保護のためにアイゼンピッケルは禁止。それなのにいたるところアイスバーンで滑りやすそうだった。そんな所をどうやって歩くのか気になった。15時10分、登山口に無事帰着。行動時間はゆったり歩いて約6時間半程だった。念願の「大室山」へついに行く事ができて良かった。

青木ヶ原樹海の原生林は特に印象深い。怖いイメージのあった樹海だったが、これほどまでに豊かな自然を抱えているとは思わなかった。国の天然記念物にも指定されている樹海、まさに守られるべき国の貴重な財産だ。できれば、今後も人目につく事なく、いつまでもこの姿のまま残っていて欲しいと思った。

会員山行 ②

## 竜爪山　竜爪古道～牛妻へ

有元　利通

今年度初めて平日山行を組みました。理由は二つあります。一つは必ずしも土日が休みの人ばかりではない、もう一つは、リタイア組は何も混む土日に行く必要はないからです。

第一回の山行は、5月2日八木さんが安西小学校の五年生以来のコースだというので参加。後は、中野さんと私の三名でした。

八木さんから、暗くなっても穂積神社に着かず食べるものも飲むものも無くなって、学校では遭難騒ぎになった思い出を聞きながら登りました。神社から薬師岳の登りで八木さんが弱音を吐かれたが登り切り、文珠岳に午後1時前に着きました。昼食後は東海自然歩道を牛妻に下りました。下りでは雨に降られませんでしたが、バス停に着いてから降り出したのは幸いでした。

次回は、12月5日富士山の側火山の東臼塚です。

第1回 ハイキングセミナー

## 「越前岳」

中村　博和

5月27日(日)愛鷹連峰、越前岳にてハイキングセミナーを行いました。

当日、8時半に十里木駐車場に集合。ハイシーズンで既に満車。前週の下見で予想が出来ていた為、先行車が駐車場最奥スペースを4台確保し、その前に縦列駐車して事無きを得ました。

セミナー生10名（親子参加2組含む定員10名満員御礼）、会員13名の自己紹介の後、小川さんの指導で準備体操し、二班（一班：セミナー生と公益事業委員及び荻野さん、二班：会員）に分けて出発。

勝又リーダーを先頭に上り一般道、下りバリエーションルートを歩き14時下山。上りで若干疲れた表情を見せたセミナー生もいましたが、最後は皆満足気でした。

又山頂にて諏訪部講師による愛鷹山の成り立ち、平井講師による山のレスキュー装備のミニ講座実施。バリエーションルート休憩ポイントにて荻野講師による地図読み・現在地確認のミニ講座実施。道すがら花や鳥の名も学び、新緑と満開のアシタカツツジ一株（例年に比

べて開花が早く前週が見頃でした)、残雪の富士山を一望でき充実のセミナーとなりました。

参加者　赤堀、市川、海野、小川正、荻野、勝又千、篠原、諏訪部、仙石、中野、中村、原田、平井（敬称略）

越前岳山頂

こぼれ話

## 「一期〝二会〟」

木村　勝利

2018年7月13日、小屋開けの準備も済み、「さあ、今年も明日から営業開始だ」と気を引き締めていた。既に、夏山は始まっていて、何人もの登山者が登って来ている。小屋前は賑やかに登山者の声が飛び交っていた。ふと見ると、その中に見覚えのある顔があった。一瞬、「うん？　前に来たことがあるよね、もしかしたら、ここで誕生会をやったよね？」と声を掛けると、「え、えー、そうです」と彼女は大変驚いた顔をした。何故なら「多くの登山者を相手にする小屋の方が、7年前の出来事など覚えていないのが普通と思っており、小屋へ着いたら、私の方からご無沙汰したお詫びと感謝を述べようと横窪峠を下りてきたのに、木村さんからまさかの先制攻撃を受け、心の底から本当にびっくりした」とのこと。

思い起こすと、それは7年前の2011年8月13日のことだった。彼女は一人でテント泊の受付を済ませ準備を始めた。見ると、テントの設営がままならず、なかなか捗らない。訊くと、テント泊縦走は今回が初めてで、テントも真新しい物だった。見かねて「あぁだ、こうだ」言いながら何とか張り終えた。会話を交わす内に、今日は彼女の誕生日だと知り、従業員と細やかな誕生日パーティーを開いた。（何歳かは聞いてない）何を振る舞ったかも記憶にないが、酒は飲んだ。そのことにえらく感激して大喜びしてくれた。その夜は山の話で持ち切り、時間を忘れるほど盛り上がった。翌日は、茶臼小屋にテント泊して、聖岳への縦走をする予定との事。従業員に断り、私も散歩を兼ね、茶臼小屋まで同行した。彼女の荷物は大きく、重たく、登りがきつくて大変そうだった。しかし、一人でのテント泊はコンロ、ガス、食材等、全部自分で担がなければならない。これも訓練だと思い、一切手助けをしなかった。長い急登を時間かけ登り、何とか茶臼小屋へ着いた。ここでもテント張りを手伝い、茶臼小屋で休憩後私は横窪沢小屋へ戻った。これが7年前の出来事であった。

この度、再会した日の夜は7年前の思い出話しに花が咲いた。そんな彼女が、翌日は「横沢（上河内沢支流）を直登する」と言いだし、びっくりした。「釣り人なら行く人もいるが無理だから」と止める様に説得したが、これまでの7年間で、年中あちこちの谷や尾根を歩き回っているから大丈夫だと言う。仕方なく翌朝、横沢出会いまで、所々、赤布を付け

ながら案内をし「絶対に無理はするなよ」と声をかけ、小屋に戻った。心配をしながら待っていると、15時頃、「上河内岳支尾根の鞍部まで行けた」と、無事帰ってきてホットした。この日はＪＡＣ静岡支部の会員山行で博識なＹさん、Ｓさんが到着して、何故かマリリンモンロー主演のアメリカ映画「七年目の浮気」などの話題も飛び出し、前夜に増して大いに盛り上がった。今回、彼女は２日ほどの滞在だったが、翌日、又の再会を期待し小屋を後にして行った。

私の小屋には「一期一会」の看板を掛けている。私は、今度、いつ会えるか分からない一度の出会いを大切にという思いで登山者に接しているが、大きく成長した登山者との再会も大きな喜びである。

## 会員山行 ③

## 夕日峠

海野　俊久

５月13日(日)、午前８時、山行参加者５名が島田市川根の家山駅に集合。曇り空で、予報によると昼頃から雨とのことであったが、迷わず出発した。

２台の車で、県道63号を西進、塩本から村道に入り登山口のある湯島を目指した。ところが村道は、崩落のため途中で通行止めとなっていた。しかしリーダーの「とりあえず行ってみよう」の一言で、車を路肩に停め村道を進んだ。崩落個所を乗り越え、約40分で湯島入り口に着いた。

桜が寄生したタブの木を見学した後、湯島の集落に入ったが、人の住んでいる様子は感じられなかった。最奥の民家の庭先を通り、９時２０分、登山口から夕日峠に向かった。

登山道は、ほとんど植林の中、単調な登りであったが、よく踏まれており、迷う所はなかった。10時55分、峠手前の三角点（９６６メートル）に到着したあたりから雨が降り出した。このため展望所では、駿河湾や伊豆半島を望むことができなかった。夕日峠には、展望所から林道を横断して藪を抜け、11時３分に到着した。峠は狭く木立に囲まれた展望のない場所であった。

雨が強くなってきたので早々に下山することとし、途中の８９０メートル付近で15分ほど休憩して昼食をとり、登山口には、12時20分に戻った。その後、村道を下り、車を停めた場所には、13時８分に到着して山行を終えた。

帰りは、大井川鉄道家山駅付近の「たいやきや」でお土産を購入し、川根温泉で雨に打たれた体を温めた。

入会後初めての会員山行でした。強い雨が降る最悪の天気でしたが、帰りに温泉に立ち寄るなど楽しい１日でした。夕日峠には、晩秋の天気の良い日にもう一度登りたいと思いました。

参加者：Ｌ荻野俊夫、西村しのぶ
中野雅章、赤堀栄子

## 会員山行 ④

## 南アルプス聖岳から横窪沢小屋へ

仙石　智子

**7月13日(金)**

白樺荘の駐車場に22時30分頃に到着。軽く一杯飲み、軒下の砂利にマットを敷きシュラフにもぐる。完全に野宿だった。

**7月14日(土)**

赤堀さんが６時20分到着。六人揃ったので予約していた井川観光協会の登山バス（ワゴン車）に乗り、聖岳登山口にて下車。

早朝の山歩きは、爽やかで本当に気持ちが良い。聖沢吊橋を渡り、グングン高度をかせぎ滝見台まで登ると、今日の急登を片付けた気がしてホッとした。周りにはシャクナゲが咲き、対岸には一幅の絵を見るような滝が眺められた。

このコースは、聖沢小屋まで7等分に区切られた看板が立っている。その6／7地点あたりに来た時、後の四人が10分待っても来ない。荷を置き、少し戻ると登山者が来たので尋ねると「この下で釣りをしている人と一緒に何人かいましたよ」と教えてくれた。あっ湯山さんだ！と納得して下っていくと、中村さんが登ってきて「イワナが一匹釣れたので下処理をしているところ」とのことだった。安心して諏訪部さんが待っている場所に戻り、テント場に向かった。14過ぎ到着。

やはり三連休はテント場も大賑わい、小屋も一杯とか。テント設営後、諏訪部さんの「脳ミソを溶かそう」とビールで乾杯した。千華ちゃんの塩豚バラ肉はとても美味しい。塩気もあり、疲れも取れて山にピッタリの食材である。他にもいろいろ並び、どれも美味しく頂き、お開きとなった。

**7月15日(日)**

5時出発。聖平に荷を置き、背を軽くして聖岳に向かう。途中に防鹿柵が何ヶ所かありニッコウキスゲが遠目でも分かるほど咲いていた。昨日ボランティアの人達が登ってきていたので、今日は作業日かも知れない。

小聖まで登ると、見渡す限りの山々と高山植物が次々と現れるようになり、いつの間にか前聖に到着、8時だった。360度の大展望にしばし見とれ、自分の歩いた山を眺められることの幸福を感じていた。

奥聖に向かう途中チングルマの群落あり。それまで花後のカザグルマを見ることが多かったが、この一帯は雪解けが遅いらしく咲き始めの様子。花の季節は本当に楽しみが多い。

前聖に戻る時、イワヒゲの花に気づき立ち止まっていると、ハイマツの中からライチョウの親子が目の前に出て来た。ハイマツの中にもヒナが4羽動き回っていた。心和む光景は、山のオマケをもらった気分にさせてくれる。ヒナが無事に育ちますように。次のオマケは聖岳の下りに待っていた。目の上が赤いオスのライチョウが一羽散歩か警戒？しているのに遭遇したのである。実際にオスのライチョウに会ったのは初めてなので大感激!!

上河内岳の肩まで来ると、ガスがかかり頂上は見え隠れしていた。生憎の空模様でもあり、生のイワナを少しでも早くと通過することに決定。

15時、ようやく茶臼小屋に着き格安の越冬ビールを皆で分けて飲む。ここから横窪沢小屋までの下りが何と長く感じられたことか。でも小屋の前で木村さん、先に来ていた八木さんと篠原さん達に迎えられると、疲れがどこかに飛んでしまった。

小屋での心づくしの夕食、デザートのスイカ、イワナを焼いて骨酒、その身も皆で分けて頂きと後は言うに及ばず、楽しい一時はすぐに過ぎ消灯となった。今日は5時から17時までホントにお疲れ様。心地良い眠りに…。

**7月16日(月)**

木村さんに峠まで送って頂き、ひたすら畑薙大吊橋に下った。10時30分予約のバスに十分間に合い乗車する。八木・篠原さんは沼平のゲートにて下車し、我々は白樺荘へ。ここで温泉に入り昼食を済

ませ、帰路に向かった。

横窪沢小屋の前で

今夏の山行は天気に恵まれ、花も楽しみ、渓流のヤマトイワナも食しと本当に感激の多い山歩きだった。山はオマケと言うかご褒美がどこかで待ってくれる気がする。それを一つでも多く見つけようと思う。ワクワク・ドキドキは心の若さを保つ効果があるとか。

これは余談になるが、一週間後の23日の静岡新聞の夕刊に「南アお花畑一部復活」の見出しを目にした。内容は聖平のニッコウキスゲだった。昨年の開花121株が今年は432株に増えたとのこと。花に呼ばれた気がしてきた。2002年から継続しての保護柵の設置・管理など多くの人の力、植物そのものの力に敬服するのみである。

メンバー：諏訪部、中村、湯山、勝又、赤堀、仙石

## 個人山行

## 愛鷹山塊、幻のルート!?

勝又　千華

**6月2日(土)**

須津山荘にメインザックを置き、おそらく最初で最後のコースを行く。ポイントは二か所。大岳と呼子岳を繋ぐ廃道と、通行止めになっている鋸岳周辺。

大岳頂上付近から噴煙が見えるらしい、と中村さん。しかし、一帯はうっそうと木々に覆われており、噴煙の見えるポイントは見つからず。

廃道の看板を横目に歩きやすい道が続く。引き締めた気が緩みかけた頃、突然ルートが切れた。茂みに隠れるロープを見つけ、2メートルちょっとの高さを下りる。足場は崩れており、下りるというよりずり落ちて着地。かすかに人の声が聞こえ、呼子岳までもうすぐというところ。ここからが難所だった。岩や木の根にしがみつきながら登る。

誰かのブログに、「呼子岳からの廃道の尾根は斜度45度くらいに見える」とあったが、まさしく今そこにいる。もちろん道らしい道ではない。なんとか両脚で立てる場所まで着くと、一面にツツジの花びら絨毯の跡が。そこを登り切ったところが呼子岳のピークだった。賑わう人達と一緒に、つかの間の安堵。

休憩もそこそこに、いつも東海道線や国道一号線から見るだけだった鋸岳へ。ガラガラのギザギザをまいていく。呼子岳の山頂直下もそうだったが、やはり足元の岩場はもろい。石を落としやしないか、次の一歩が崩れやしないか、途中何度もヒヤリとした。それでも、安全なうちに距離を稼いだおかげで時間に余裕がある。落ち着いて歩くことができる。でも長居はしたくない。

14時過ぎに位牌岳到着。自分達以外の人の姿を見てホッとする。あとは長いルートを下りるだけ。登ってくるには退屈で辛そうな道だが、我々には小屋に置いてきた飲み物や食べ物の楽しみがある。すたこらさっと下り、その夜は23時近くま

で宴会は続いた。

**6月3日(日)**

須津山荘から駐車場までの道で、荻野さんとばったり会った。「腰をやっちゃってね～」とおっしゃりながら、位牌岳へ行くとのこと。あの、長く急で退屈そうな道を、お腰の調子が今一なのに…？

確かに、登山は免疫力を高めると聞いたことがある。私もかつて、朝から熱があったところで山に行き、昼すぎにはケロッと回復したことがある。そしてその夜の同窓会へ難なく出席した。山好きは山の中が一番ということだ。

メンバー：中村博和、山崎洋、勝又千華、廣岡正敏（ユースクラブ、神奈川支部）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 山の日記念事業・親子登山教室

## 富士山宝永火口　中野　雅章

2018年8月18日(土)

参加　親子参加者14名、

静岡支部会員9名、合計23名

リーダー：小川、サブリーダー：中野

スタッフ：有元、中村、白鳥、篠原、長野、勝又、仙石、原田

8月に親子での参加者を募集し親子登山ハイキングを行うとの計画を立てた。夏休みの時期でもあり、最終的には小学校2年生から中学1年生までのお子様6名、父母8名、合計14名が参加され盛況な山行となった。

早朝の午前7時、水ケ塚公園に集合、全員がシャトルバスに乗り富士山五合目登山口に向かう。バスを降りると雄大な富士山山頂が目の前に広がる。メンバーそれぞれが支度を整え準備体操をして登山道に入る。

ここから六合目を経由して宝永第一火口に至るまでの間は、低木のカラマツが多数見られ、その砂礫の間から富士山を代表するオンタデ、メイゲツソウ、ムラサキモメンズル、フジアザミなどが見られた。午前9時10分宝永第一火口に到着。富士山の生い立ち（富士山は若い青年期の活火山）および宝永山噴火の歴史について支部会員より説明があった。小休止後いよいよ岩と砂礫に覆われた登山道を宝永山山頂に向かう。この時期にしては猛暑が一段落し標高も2500㍍あることから暑さに悩まされることもなく、爽やかな微風を肌に感じながら快適に登山することができた。お子様方の年齢、体力等により到着する時刻はさまざまになったが、全員無事トラブルなく午前10時30分迄に宝永山山頂に到着した。

富士山を背景に集合写真

山頂は雲一つない快晴、見渡す限りのパノラマ眺望の中で雲海の彼方に浮かぶ駿河湾・相模湾・伊豆半島方面を眺め、また富士山本体を背景に記念撮影をするなど、全員山頂からの眺望を楽しんだ。

午前10時55分から下山を開始、特に転倒する等の事故もなく全員しっかりした足取りで下山、午前11時30分宝永第一火口に戻ってきたのでここで昼食とした。

ここから宝永山分岐、宝永第二火口まで歩くといよいよ樹林帯に差し掛かる。

富士山の裾野樹林帯は歩行距離が長い。御殿庭上、三辻、南山休憩所で小休止を取りながら下山し午後3時50分出発点の水ケ塚公園に戻ることができた。樹林帯の中では随所にフジアザミの群生とミヤマアキノキリンソウを見ることができた。

全員無事下山したのち軽体操を行い、最後に親子参加者と中野が所感を述べ締めくくりとした。親子参加者は全員安堵感と充実感にあふれた表情をされていた。自然に笑みがこぼれてくるようでもあった。皆様口々に良い山行になったことを褒めていた。次回も親子登山の企画があればぜひ参加したいとの要望も出されていた。小川リーダー、静岡支部会員の皆様お疲れ様そして有難うございました。

## 会務報告

（2018年4月～）

4月14日(土)～15日(日)　文珠山荘
「清掃、野菜天ぷらの会」
映画「劔岳・点の記」8名参加
4月21日(土)　会員山行「大室山」
5名参加
5月2日(水)　会員山行「竜爪山古道」
3名参加
5月13日(日)　会員山行「夕日峠」
5名参加
5月27日(日)　ハイキングセミナー
「越前岳」セミナー生10名（親子2組）
会員13名参加
6月16日(土)～17日(日)　文珠山荘
「清掃、ヒメ蛍鑑賞会」
映画「MERU（メルー）」
7月14日(土)～16日(月)　会員山行
「南アルプス・聖岳」8名参加
7月21日(土)～22日(日)
全国支部懇談会・北海道　7名参加
8月8日(水)
支部「納涼懇親会」16名参加
8月18日(土)　山の日記念
「親子登山教室・宝永火口周辺」
親子参加14名、会員9名参加
9月8日(土)～9日(日)　文珠山荘
「清掃、納涼祭」、映画「運命の山」
会員13名、会員外2名参加

## 行事予定

（2018年10月～）

10月21日(日)　ハイキングセミナー
「安倍峠～バラの段」
セミナー生17名、会員13名参加予定
10月27日(土)～28日(日)しずおかスポーツフェスティバル登山大会・
京丸山　個人参加
10月27日(土)～28(日)　文珠山荘
「清掃、ハロウィン」映画「氷壁の女」
7名参加予定
11月3日(土)～4日(日)　中部4支部交流会・三保園ホテル
11月4日(日)　満観峰ハイキング
21名参加予定
11月10日(土)～11日(日)
支部「秋の懇親山行」21名参加予定
11月23日(金)～24日(土)
会員山行「池口岳」13名参加予定
12月1日(土)　年次晩餐会
12月5日(水)　会員山行「富士東臼塚」
14名参加予定
12月8日(土)～9日(日)文珠山荘
「清掃、忘年会」映画「運命を分けたザイル」12名参加予定

**【2019年】**

1月13日(日)　支部「新年会」
35名参加予定
2月2日(土)～3日(日)　会員山行
「雪山とスキー」白樺湖方面・

12名参加予定
2月17日(日)　ハイキングセミナー
「竜ヶ岳」18名参加予定
3月9日(土)～10日(日)　文珠山荘
「清掃、山荘をベースに山へ登ろう」
映画「エベレスト～神々の山」
14名参加予定
4月10日(水)　支部「通常総会」

【お願い】

## 七十周年記念行事への募金

静岡支部は七十周年を記念して各種記念行事を行いますが、募金で賄う予定のものは次の通りです。
①記念誌、②記念式典関係、
③記念登山（若干）、④海外登山（中華民国山岳協会との交流会の若干補助）
一口3、000円で何回でも構いませんので下記郵貯口座への振込をよろしくお願い申し上げます。

店名　二三八（ニサンハチ）
店番　238
預金種目　普通預金
口座番号　6082994
口座名義　中野雅章（ナカノマサアキ）

【お知らせ】

## 南アルプス写真展

日　時：2018年11月6日(火)12時から11日(日)16時まで
場　所：静岡市民ギャラリー第2展示室

## 2019年新年会

日　時：2019年1月13日(日)13時受付、13時30分開宴
場　所：静岡市駅前、松坂屋「梅の花」
会　費：5000円
連絡先：申し込みや変更は12月末まで
静岡市葵区秋山町8-13　木村勝利
携帯電話090-2262-0592

【会員動向】入会　三浦　雅司（準会員）

## 編集後記

近代登山の起源を諏訪部会員に書いて貰いました。150年後の現在では登山も大衆化して老若男女誰でもが、それぞれのスタイルで山登りを楽しんでいます。登山の衣類も用具も年々新しいものが開発されています。山小屋も完備してきました。この様なときに安全登山を如何に確保するかを考える必要があると思います。最近、本棚から浦松佐美太郎氏の「たった一人の山」を取り出し読みました。その中に山のあぶなさという一文があります。昔は、山は自然のままであらゆる危険が潜んでいる修行の場でした。痛い目に遭いながら学んでいました。然るに今は自然がどんどん破壊されて一見安全な山になってしまいました。もう元に戻すことはできません。では如何にして安全を確保するか？大きな問題ですが、山に真摯に向き合えば答えは出てきそうな気がします。登山とは、山を見つめ、自分の心を見つめながら、山に登るスポーツであると浦松佐美太郎氏は言っています。
實川会員の富士登山2000回は前人未到の大記録となるでしょう。健康で更に記録を伸ばして欲しいと思います。
（長野）

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
有元　利　通
事務局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町8-13　木村勝利
編集責任者　長野　和　義
原稿は kazunagano@zm.commufa.jp へ
印刷所　株式会社　三　創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031

題字・牧野衛　背景・長野和義

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2019（令和元）年春季
第85号

## 巻頭言

# 『私たち山岳人にとっての課題』

支部長　有元　利通

私たち山岳人にとっての課題はいくつもありますが、先ず

**一、遭難を減らすこと**

八千メートル峰が全て登られた今はかつてのようなジャイアント狙いは減りました。より困難なピークを登る、より困難なルートをアルパインスタイルで登るというのが、熟達あるいは若手クライマーの夢であるかも知れません。しかし、私たちの多くがそうである一般の登山者にとっては第一の課題は、遭難しない、遭難事故を減らすということではないでしょうか。

最新のデータではありませんが事故件数が一番多いのは（平成二四～二八年で）中部山岳国立公園や八ヶ岳中信国定公園などを抱える長野県がいずれの年も最多です。二番目は北海道や富山県が多いですが平成二五年は静岡県が一三九件で二番目でした。二四、二六年が四番目、二八年が五番目、二七年が七番目とでいずれにしても十位以内に入る多い県であることは間違いありません。山域としては、南アルプス、富士山、安倍奥、南ア深南部が多いと考えられます。

事故原因で最多（二八年で）は、道迷いの三八・一％、滑落一七％、転倒一六・

## 目次

★巻頭言
『私たち山岳人にとっての課題』　支部長　有元利通　1
★支部総会開かれる
会務報告と行事予定　長野和義　3
★随筆
「たった一人でつまずいて」　加藤弘司　4
★中部４支部交流会
1．報　告　木村勝利・西村しのぶ　5
2．参加して感じた事　八木　功　6
★会員山行１
大川入山・蛇峠山　中野・有元　8
★会員山行２
側火山３座踏破　長野和義　9
★日本山岳写真協会公募展入賞　山賀一男　10
★第２回ハイキングセミナー　海野俊久　10
★こぼれ話　「登山靴の盗難」　山﨑郁郎　12
★第３回ハイキングセミナー　小川正育　12
★会員山行３
突先山・中村山　赤堀栄子　14
★個人山行　念願の高天原　勝又千華　15
★随筆「聖岳で会った男」　白鳥勝治　16
★文珠山荘だより　諏訪部豊　19
★70周年記念行事
1．募金のお願い　19
2．記念誌への投稿依頼　20
★会員動向　20
★編集後記　長野和義　20

一％、疲労七％、転落三・七％、野生動物襲撃一・四％(以下略)となっています。

さて、そうした遭難を減らすためには

① 登山届けの提出です。本部、支部、所管の警察、そしてもう一つ大切なのは家庭、家族、近親者の誰かにです。

昨年、上高地の山研で連泊していた人が遭難して困ったことが一件あったそうです。帰ってこない一名がどこへ行ったか判らないことと見つかった後の連絡先が不明だったということでした。

② 二つには、山岳保険に加入すること。

捜索がヘリであれ、人手であれ経費は掛かります。保険が出るか出ないかは大きく違います。

③ 自分を過信しないこと。

身体機能のチェックと維持です。歳を取るにつれ、昔出来たことが出来なくなってきます。チェックは難しいですが出来ると自分を過信しないことです。

静岡県を含む各県（中部各県と関東群馬・栃木県など）の山岳グレードのチェックと自己の経験・技術の確認で可能かどうかの判断も必要です。

④ 最新の情報・機器を利用する。

平成27年頃から二・五万分の一地形図が多色刷りで更新されてきて標高も変化してきています。隆起して高くなった山もあれば沈降して低くなった山もあります。高さは遭難には余り影響しませんが、情報の新しいものを求めて利用したいということです。ヤマレコ等インターネットの利用、ＧＰＳの位置情報、スマートフォンの新機能の利用等です。

次の課題は、

二、**自然保護**です。

① 当支部の会員でもある県職員の鵜飼さんが始めた南アルプスの高山植物の保護活動があります。支部としてはボランティアネットワークに加入していませんが、各個人が積極的に加入して防鹿ネットの補強や植生回復の作業に取り組むべきだと思います。

② リニア新幹線を貴重な自然の残る南アルプスを傷つけて大井川の貴重な水を減水させて通す必要はないと思います。減水の部分と残土の問題については、静岡県が出来るだけリスクを減らすために第三者の委員の声を聞きながらＪＲ東海と粘り強く協議をしてくれているので応援するばかりです。

私たち山岳人としては、多くの県民に南アルプスを、静岡県の南アルプス国立公園を（いかに狭い範囲かということも含めて）、南アルプスエコパークを広く知って、理解してもらうように努めることではないかと思います。その為に支部としては他の山岳三団体と協力して昨年に引き続いて今年も南アルプスの写真展を開催します。

③ 自然への負荷を減らす。

当然のことながら登山道以外を歩かない、歩く時に出来るだけストックを使わない、使う時にはゴムキャップを付けるなど山に優しい接し方が必要です。

環境保護の為には、「文珠山荘」をＪＡＣ静岡支部に寄贈頂き、昨年三月に亡くなられた荻野恭一翁が十七歳の時に牛妻の自宅から全行程を歩いて赤石岳に登られ、また全行程を歩いて自宅まで戻られた歩きが理想です。しかし、現今でそこまで求めるのは難しいですから環境負荷を出来るだけ減らすべくディーゼル、ガソリン車からＥＶ車へ、それが難しいならハイブリッドへと切り替えていく。グループ山行時に、車の乗り合わせをすることも有効でしょう。

何れにしても、自分たちが出来ること

を着実に実行していくことが大事だと思います。

**【支部総会開かれる】**

２０１９年４月10日、２０１９年度支部総会が静岡労政会館で（出席者42名、委任状71名、合計１１３名は、在籍者１４７名の過半数を超えて総会は成立）開催された。支部長挨拶に続き、議長に支部長が選任され、

第１号議案：２０１８年度事業報告（案）
第２号議案：２０１８年度会計報告（案）
　　同　監査報告
　２０１８年度文珠山荘会計報告（案）
　　同　監査報告
第３号議案：支部役員改選（案）

が一括審議された。

挨拶する有元支部長

役員選出について、そのプロセスの説明を求める質問があったが、前回決められた支部規約に基づき役員会などを経てなされた旨の回答があった。その後採決、賛成多数で承認された。引き続き

第４号議案：２０１９年度事業計画（案）
第５号議案：２０１９年度予算（案）

の両議案について説明、審議された。

事務局提案の事業計画にある小学校などの遠足引率を支部活動に入れるべきか疑問が出されたが、保険などの安全については主　催者側で充分対応されているので、他にも同等のものがあればそういうものも積極的にＰＲすべきということで了解された。

又、事業計画で雪山・スキー山行が抜けていたが、２０２０年２月１～２日（場所未定）で行うとの説明があった。申し込みは総会資料と共に配布されている２０１９年度事業計画一覧表（Ｂ５版）の空白部に加筆して提出するか、山行委員長に直接連絡して下さい。

宿泊を伴う山行に参加の申し込みをする場合は、キャンセルに伴うキャンセルフィーが発生しますので慎重にお願いしたいとの補足説明があった。

第４号議案と第５号議案について採決、両案とも賛成多数で承認された。

その後、支部会員の動向が説明され、今回新任の委員長、委員が紹介された。

20時半から、「韓唐韓」に移動して懇親会があり、27名が参加した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

**６月以降の主な事業計画**

６月２日　セミナー「天城八丁池」
６月５日　「不老山」
６月８～９日　中部４支部交流会
７月26～29日　「黒河内～広河内」
８月14日　納涼懇親会
８月18日　親子登山「山伏」
９月７～８日　文珠山荘・納涼祭
９月21～22日
　　スポーツフェスティバル
10月20日　セミナー「大札山」
11月５～10日　南アルプス写真展
11月９～10日　懇親山行「三国山」
11月16～17日　深南部「黒沢山」
11月30～12月１日　文珠山荘忘年会
12月18～19日　「長九郎山」
２０２０年１月12日　新年会

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

# たった一人でつまずいて

加藤　弘司

登山を始めて2年目の19歳、3月の単独八ヶ岳全山縦走を計画しました。観音平から入山し、編笠山・権現岳・赤岳を経て蓼科山まで4日間の計画でした。

2日目のキレット通過時、当時の装備の重荷もあり、堅雪のトラバースでアイゼンの歯が浅く入ったのか足を滑らし、雪面を転落してしまいました。岩混じりの雪の斜面はピッケルも刺さらず15メートル程滑ったところで滑落停止姿勢ができ、なんとか自分の体を止めることができました。怖さに寒気が加わって震えが止まらず、長い時間そこにじっとしていました。しばらくして落ち着きを取り戻し、赤岳の氷混じりの岩稜を這い上って行きました。ラッセルに苦しんだ蓼科山山頂では達成感と安堵感が入り混じり、初めて山で涙を流しました。

激しい学生登山も終わった23歳のとき、単独で南アルプス3月の全山縦走を計画・実施しました。北岳から8日間の食糧でどこまでいけるものなのかという少々アバウトな計画でしたが、初日からその甘さを後悔しました。単独でのラッセルは1時間に一〇〇メートルも進むこともできません。軽量化のためオール雪洞としましたが、8日間の食糧や装備品の重さでのラッセルにあえぎ苦しみました。

毎日夕闇が迫る前に雪洞適地を探し雪洞掘りが日課となります。よほどの堅雪でなければ帯のこぎりを改良したスノーソーを使用して、1時間ほどで雪洞は完成します。

入山から誰ひとり会うこともなく、2晩目、3晩目となるとさすがに寂しさがこみ上げてきます。生来さびしがり屋の性格なので、雪洞内の壁をじっと見ていると自然に山の唄が口をついてきます。一晩に何曲も歌い、唸るため、次第にのどが痛くなるほどでしたが、いくらか自分を励まし、慰めることができました。

荒川前岳まで行ったところで最終下山日程が迫っていたので赤石岳は断念し、千枚岳から二軒小屋に下山し転付峠越えとしました。誰もいないしんと静まり返った二軒小屋は美しい雪景色です。広場をとぼとぼ歩いていると、当時自分が吸っていたタバコの〝ハイライト〟が落ちています。何本か抜いた状態でしたので猟師のザックからこぼれたものでしょう。

今回の目的の一つに〝禁煙〟もありました。山にタバコを持ち込まなければ禁煙できる、8日間の禁煙で完全に断ち切るという意志薄弱者の考えでした。拾い上げた〝ハイライト〟はもちろん握りつぶしました。禁煙には強い意志が必要です。ところがしばらく行くと今度は封を切っていない〝ハイライト〟が雪の上に転がっていました。これは自分自身への試練と思い、無視して通りすぎました。一〇〇メートル程行ったところで、「まてよ」と引き返し、拾い上げて試しに封を切ってみると湿気もなくまだ新鮮でした。とりあえず取り出したライターで火をつけてみました。タバコという代物は吸わないと火がつかないので、仕方なく吸い込んだところ、頭がくらくらとし、ここで強い意志はもろくもつまずきました。

ある年の5月に2泊3日の栂海新道の単独スキー縦走を計画しました。栂池ゴンドラ山頂駅から白馬乗鞍岳を目指します。初日は雪倉岳避難小屋泊と予定していましたが、小屋到着が少々早い時間でした。早朝のクラストした雪倉北斜面は

転倒した場合、停止が難しいこともあり、その日のうちに雪倉越えをすることにしました。雪倉岳に登頂し北面を滑り降りました。標高差六〇〇㍍の広大な斜面の単独滑降は爽快感がありましたが、夕暮れも迫る中、寂寥感に押し潰れそうな自分も感じました。ツバメ平ではぽつんと一人用テントを張り、ベーコンを炒め、雪塊ブランデーで寂しさを紛らわす一人宴会でした。

２日目、小桜ヶ原までの標高差五〇〇㍍、朝日岳からアヤメ平までは緩斜面でしたが標高差四〇〇㍍の滑降と快適なスキーイングが続きました。徒歩なら３時間かかるところを30分足らずで滑り抜けました。犬ヶ岳の斜面は少々傾斜もあり、変則的な地形のため慎重に滑降し、下駒岳の小ピークに立ち、久々の休憩をとる事ができました。

ここからも細いながら雪稜が続き、次のピークを快適にスキーで越えたところで眼前に黄色い斜面が見えました。あっという間もなく何かにつまずいたように頭から斜面に叩きつけられました。起き上がってみると雪面が血に染まっています。顔面を触ってみると鼻の下からの出血のようでした。ガーゼを当ててしばらく止血をし、改めて周囲を見ると、西側のガレ場から風で吹きつけられた土砂が斜面に広がっていました。土砂で突然の制動となり転倒し、転倒時に滑落停止用のストックピックが鼻の下に刺さったようでした。怪我をすると今まで順調だった滑降もリズムを無くし、その後なんでもない斜面で何回か転倒するようになりました。西側斜面で横滑りをしたところ、制動が利かなくなり、灌木混じりの雪面を50㍍程下まで転落してしまいました。かけていたサングラスを無くしたので何度か斜面を上下して捜したところ、やっと見つかりました。掛け心地が良くないので改めて見ると他人のものでした。さらに時間をかけて付近を捜すとやっと自分のサングラスを見つけ出すことができました。

たどり着いた白鳥小屋（避難小屋）にガムテープ、顔面ガーゼの異様な状態で入ると、先客がいました。聞けば栂池からワカンジキで歩き始め、今日で４日目とのこと。スキーの威力を実感しました。単独行の青年にこちらの怪我の説明をし、手当てを手伝って頂きやっと落ち着くことが出きました。「この先の30㍍程下の雪の中にこんなものが落ちていたよ」とサングラスをとりだすと、「あっ、それ僕のです！さっきこの先でつまずいて転んだんです」と言われた。別行動の二人が異なる時間に同じ場所でつまずき、共にサングラスをなくしたということになります。山での不思議さに改めて驚かされた親不知の奥山の夜でした。

## 中部４支部交流会報告

事務局：木村勝利、西村しのぶ

越後支部、信濃支部、山梨支部、静岡支部の各支部持ち回りで開催される交流会は８回目で、30年度は静岡支部が担当となった。

山梨支部担当であった29年度は、「５月20日㈯～21日㈰」で開催されたが、春は各支部行事が重なり、都合が付きにくいとの事で、30年度は日程を秋の「11月３日㈯～４日㈰」とした。初日の交流会を「三保園ホテル」で行い、翌日の交流登山は、静岡市と焼津市の境になる「満観峰、４７０㍍」とした。

11月3日㈯世界文化遺産富士山の構成資産「三保の松原・羽衣の松」へ14時に集合して、「羽衣の松」の伝説や環境保全等について、ボランティアガイドからの説明を受けた。その後、海岸線の遊歩道をホテルまで徒歩で移動した。残念ながら期待された富士山はよく見えなかった。

受付後15時30分より静岡支部会員の照内豊氏による「松濤明氏について」という講演会が、プロジェクターを使いながら行われ、松濤明氏の遺書の映像などが見られた。夕食時の宴会では、諏訪部さん、山崎さんのギター演奏や、各支部のエンターテイナーによる歌などが披露されて楽しい交流会となった。

11月4日㈰朝、小雨が降っていて交流登山が心配されたが、出発時には上がり登山日和となった。朝食後、各自の車で用宗漁港駐車場まで移動し、ここで静岡支部会員の車に相乗りし「小坂登山口駐車場」に移動した。小川さん指導によるストレッチなど行い、農道を「満観峰」目指し出発。約30分で東登山道入り口に着いた。ここで2班に分かれて1班は東口登山道、2班は西口登山道からの交差登山となる。約50分で、山頂に着いた。すでに、他の登山者も大勢来ていた。お天気もよく、富士山も見え他支部会員に喜ばれた。

早目の昼食後、集合写真を撮り、各班逆コースで下山し東口登山道入口で合流した。来た道を小坂登山口駐車場まで歩き、小川さんによるストレッチをして、用宗漁港へ移動。有元支部長挨拶、越後支部長、遠藤氏の来年度の開催周知があり解散となった。

至らない点が多々あったと思いますが、皆様のご協力のおかげを持ちまして、無事、交流会が終了致しました。有り難うございました。

参加者：交流会48名、交流登山46名（看護師1名）

## 四支部交流会に参加して
### ―妄想に駆られて思ったこと―

八木　功

平成30年11月3日㈯～4日㈰【四支部交流会】の感想を編集長から頼まれた。三つのことを書こうと思った。

①　嬉々として参加を決めた理由。
②　乾杯の発声を引き受けた理由。
③　松濤明が云いたかったこと。

即刻、参加を決めた。泊まる宿と翌日登る山に惹かれたからである。三保の灯台を沖から眺めることはあったが、灯台側から駿河湾をしみじみと眺めたことはなかった。その灯台の隣にあるホテルに泊まれるのだ。

その昔、山梨の友人の5歳になる息子さんが52号線を下って初めて海を見た時『わあ！河口湖より大きい!!』と叫んだと言う。少年時代に還って世界に広がるその駿河湾を眺めてみたいと思った。

二日目の満観峰登山も世界に目が向う切っ掛けになった。中学一年の時、会津の山奥から転校してきた友人を誘って、朝鮮岩を越えて満観峰に登ったことがあった。朝鮮岩から市街を流れる安倍川を見て、友人が云った。

「こんなに大きな川！初めて見た！」

いつの日かアマゾンやナイルを訪ねようと約束した。

乾杯の発声を引き受けた。受付で行動予定表を受け取る。乾杯の発生役になっていた。参加を早くから嬉々として表明

していたからであろう。死線を超えて来た老登山家諸氏を前に皮肉を交えて一言挨拶をと目論んだ。

講演が終わって宴会会場への移動中に、他支部の人から声を掛けられた。『八木さんですね！昔、テレビで見ました。』登山を始めてから、民間のテレビと、NHKテレビに出演したことがあった。追想と妄想を抱えたまま宴会場へ向かった。副支部長の能弁な歓迎の挨拶があり、料理を前にして饒舌を制するかのように、司会者から乾杯の発声を促された。

『松濤明についての話はいかがでしたか？今日ここに元気で、共に集えたことを祝して乾杯したいと思います。ご唱和下さい。』と、前置きの挨拶を省いて早く飲んで妄想を拭いたかった。

宴会が盛り上がったころ、話題が講演会場の窓から富士山の頂上が浮き上がって見えた話から、私の友人が宝永の肩に眠っているという話になり、問われるままに富士山の大量遭難の話になった。

自然と、涙ぐんでいる自分に気付いた。老いを隠し切れない自分に、隣席の越後支部の多田氏の暖かな視線を感じた。この人なら今日の照内氏の講演をどのように聞いただろうか？と勝手に想像した。

【もしも松濤明が独り生還していたら、その後の反響はどうだっただろうか？救助を求めて単独でアイガーの頂上を極めた、高田光政氏の時のように山岳評論家の餌食なっていたかも知れない。その理不尽な批判は若い登山家の批判を買った。生還を断念した松濤明の心境を如何に受け止めるだろうか？】

松濤明が本当に云いたかったこと。

照内豊氏の松濤明についての講演は，静岡では二度目の事である。（他に、支部報80号に「松濤明さんを想う」の一文がある）前回は、『風雪のビバーク』に対する周りからの批判を紹介するのが、一つのテーマに思えた。それは、遭難者を英雄視することへの配慮であった。今回はパワーポイントを使っての講演で解かり易かった。「遺書にばかり目が行くが、松濤明の並外れた登山実績があってこそ、死に直面して尚冷静に遺書を書き残せたのである。」という主張に思えた。最後に杉本光作の言葉を引用して締めくくられた。長くなるが紹介しようと思う。

**『私はどんな遭難でも、遭難者を英雄視したり遭難を美化することには賛成しないし、この遭難もあくまで山での敗北であり、明らかに彼らの失敗であるが、その最後の沈着さ、立派さは日本山岳遭難史上かって見られなかったものである。さて人間が予期しない死に直面した時、果たしてかくも冷静に処することが出来るであろうか。』**

これは今回パワーポイント作成に力を貸した、もう一人の豊・諏訪部氏から提供を受けたものである。静岡支部には豊を名に持つ三人の個性的な登山家がいる（照内豊、篠原豊、諏訪部豊）

後半部分は全くその通りだと思う。しかし、今日の顔ぶれを見て、遭難者を英雄視したり、遭難を美化したりする心配は無用に思った。

**『・・・冒険とは伝統的な価値の枠をぬけ出し、精神的にも異郷に身をおくことがその第一歩である。・・・』**高校時代友人のお父様から聞かされた言葉である。そして、**『登山でチームを組んで行動する時、一番不道徳なことは、他の人より先にバテルことだ。『風雪のビバーク』を読んで、松濤明が残した自筆の遺書に感動するのは人間の情であろう。しかし、彼が書けなかった、事実の奥にある「真意」を想像する感性が必要である。教訓**

**はそこにしか無いと思う。**』と言われた。

《最後まで闘うも命、友の辺に捨つるも命、共に逝くよ！

だから、そう簡単にバテルな、凍傷には気を付けろよ、滑落するなよ！》

ボクはその様に受け止めた。そして一般山岳会に席を置くようになった。死の危険のない登山なんてあり得ないと訓練に励み、いよいよ燃えた。

杉本光作氏も、著書『私の谷川岳』の中で、「松涛明君と北鎌尾根遭難」の次の章「川上晃良君のこと」で、山に対する考えが私達と若干違うが、と書きながら、川上氏の発言の幾つかを紹介している。「**真意**」はそちらにあると感じた。参考までにその一つを紹介します。

アイゼンを着けての雪上訓練について、

『**馬鹿馬鹿しい。滝沢の下部まで雪渓を登った方がはるかにためになる。**』

滑落訓練について

『**山は登るもので、転ぶ練習などは山に登らない講師の自己満足さ**』

楽しい交流会でした。青年が人生の通過点だというなら、老年だって通過点に過ぎない。

**年ひとつ加ふることも楽しみとしてしづかなる老に入ろまし**

吉井　勇

## 静岡支部懇親山行

**（２０１８年11月10日㈯～11日㈰）**

■健脚組　**大川入山**（１９０８ｍ）

長野県下伊那郡浪合村・平谷村

**中野　雅章**

参加者：古田（Ｌ）小川　篠原　長谷川　白鳥　西澤　諏訪部　大島　中村　仙石　赤堀　西村　中野　計13名

コースタイム

ひまわりの館7：50～車～8：00治部坂峠8：10～9：20横岳9：30～11：40大川入山12：20～13：40横岳13：40～14：30治坂峠14：40～車～14：50ひまわりの館

本年の静岡支部懇親山行健脚組は、長野県下伊那郡の治部坂峠を経由して大川入山を往復した。11日7時50分ひまわりの館を出発、車で10分ほど移動すると治部坂峠駐車場に到着する。幸い晴天に恵まれ空気もひんやりとして清々しい。全員で13名、準備体操をしたのち元気に出発。ここから横岳までは比較的単調な登山道となりゆっくりとした足取りで登る。落ち葉を踏みこむ足取りも軽快だ。1時間強歩くと横岳山頂に到着し小休止を取る。ここから先は稜線歩きとなり、登山道一帯にササが現れダケカンバが目立ち始めた。空も群青色に澄んでおり秋の爽やか山行となった。しかし稜線の距離が思いのほか長い。多少の上り下りを繰り返しながらピークを二カ所通過しやがて山頂直前の鞍部に到着した。途中の樹木の間からは、光岳は雲に隠れていたが、南ア主脈（仙丈岳から、塩見岳、荒川岳、赤石岳、聖岳）が良く見えた。南アを西側から眺めるのは珍しく、しばしその山並みに見とれていた。ここで小休止を取り、最後に２００メートル強の標高差を一気に登り山頂に到着した。稜線歩き全体で2時間強を要するなど思った以上に時間を要する歩行となった。

大川入山山頂にて

山頂はハイキングコースとしても人気があるようで多数の登山客で賑やかだった。山頂のすぐ北側には百名山の恵那山もその姿を見せていた。大川入山は中ア主稜線の最南端に位置しているようである。山頂で約40分休憩し12時20分に出発、ひたすら元来た道を戻った。下山途中に蛇峠登山班からスマートフォンに連絡がありこちらからは「現在横岳に向かい下山中」との返答をした。少し遅れ気味なのが気がかりであるも順調に下山し治部坂峠に到着、14時50分ひまわりの館に戻り蛇峠班４名と合流した。

■散策組　**蛇峠山**（１６６３ｍ）

長野県下伊那郡浪合村・阿南町

**有元　利通**

参加者は、西部地区の担当の福田さん、照内御大、県境を三つ超えて参加の金子さんと、私の４名でした。

治部坂峠を８時10分に出発して、しばらくは舗装された別荘地の間の道を行き、別荘地を抜けると遊歩道として開けた路を登りました。９時05分、馬ノ背に着きました。青空の向こうに大部隊の皆さんが登っている大川入山が良く見えました。どの辺りを登っているのかなどと言いながら眺望を楽しみました。

長く休んで９時30分発、馬ノ背から一度車道に下りて渡って遊歩道を登ると山頂手前に静岡県の大部分までカバーする雨量レーダーがありました。レーダーをやり過ごして10時７分、蛇峠山山頂に到着。

照内さんは10年ほど前に奥さんと大川入山とセットで登られているので二登目、私と金子さんは初。展望台に上がって記念撮影して少し下ってレーダー横の武田勢の狼煙台跡を見て、御岳、中ア、南アの峰々などを眺めながら昼食をとりました。天候、景観に満足して下りにしました。途中、別荘地区の中にある小さな亀池に立ち寄って日向ぼっこをして駐車場に下りました。

参加者：照内、金子、福田、有元

会員山行②

## 側火山３座踏破

**長野　和義**

今年度二度目の平日山行は富士山の側火山でした。初冬の12月５日午前10時、水ヶ塚公園駐車場に男性４人、女性３人が集合、先ず東臼塚を目指しました。落ち葉の降り積もったふかふかの遊歩道はとても気持ちが良い。天気予報は好転し、この季節としては汗ばむ程でした。油断すると道を外れることもありましたが、要所には赤テープがあり、ルートファインディングは特に問題はありません。平日なので他のパーティーには出会いませんでした。コース全体の標高差は１１２メートルしかないので軽いハイキングコースです。途中持参した鋸で倒木処理したり、

苔を観察したり、のんびりの歩きです。一時間半で東臼塚の山頂。ここで昼食し、火口にも下り、駐車場への帰途、２座目の腰切塚へ。この道は手入れが行き届いている。山頂には展望台があり、10分ほどでお鉢めぐりもできました。

３座目は西黒塚。30メートルの登りですが、ちょっとルートファインディングが難しい。ピークハンターのＡさんは、三座の登頂記録に満足（？）。

面倒見の良いＳさんは、全員に昼食時はコーヒーのサービス、新人の準会員３人には荒縄を軽アイゼン代わりに使う方法、足の痙攣防止法など、登山に関する教育も、時間を見て行った。

全行程、丁度５時間の心地良いハイキングでした。糞は見かけましたが、動物の姿を見ることはありませんでした。又季節を変えて訪れてみたいと思いました。帰りには富士山天母（あんも）の湯で汗を流してさっぱりしました。

参加者：有元、白鳥、篠原、原田、市川、小嶋、長野

## 【日本山岳写真協会の２０１８公募展に入賞】

２０１７年９月、山賀一男会員（番号１５８６９）がチベット自治区、ラサ（３５６０メートル）からチョモランマベースキャンプ（５２００メートル）に行き、撮影したエベレストの写真が２０１８公募展に入賞し、２０１８年９月２日表彰されました。

入賞した作品「エベレスト」

## 第2回ハイキングセミナー

## 安倍峠からバラの段

海野　俊久

２０１８年10月21日。第２回ハイキングセミナーは、静岡と山梨の県境にある安倍峠からバラの段の行程で行われた。

この日の朝７時に静岡駅北口に集合したセミナー生10名は、会員の車３台に分乗し梅ヶ島温泉を目指した。８時45分には、現地集合のセミナー生７名と梅ヶ島温泉駐車場で合流した。今回のセミナー参加者は、ＪＡＣ会員13名とセミナー生17名の計30名であった。

今回のセミナーは当初、梅ヶ島温泉から安倍峠を目指す予定であったが、八紘嶺登山口まで車で上がり、そこまでの約１時間かかる急登を避けることとした。

セミナー開会式は、９時40分から始め、有元支部長の挨拶の後、セミナー生の自己紹介を行った。セミナー生は、セミナーの常連から山歩きの初心者まで多彩なメンバーであることが分かった。

開会式終了後、10時00分に出発したが、参加者が多いため、Ａ班（Ｌ中村会員）、

B班（L山﨑会員）に分かれて行動することとした。

林道を10分ほど歩いた後、旧道入り口から安倍川源流の一つであるサカサ川沿いの登山道に入った、沢の渡渉を繰り返し、安倍川水源地を通過して安倍峠を目指した。途中、約15分間、中野会員の「紅葉する葉」についての講座が開催された。セミナー生は、中野会員によるカエデの種類や紅葉の仕組みについての講話を熱心に聞いていたが、残念ながら周りにある木々はまだ緑色であった。

11時05分、安倍峠に到着した。峠での休憩中、有元支部長から地形図の種類についてと山の標高は変化しているという話にセミナー生は感心して聞いていた。約15分の休憩後、バラの段を目指した。バラの段までは、サカサ川沿いの登山道と異なり、急登でバラの段直下はロープが設置されていた。傾斜がきつい登山道であったことから、立ち止まるセミナー生もいた。会員からは、急登での歩行時における、靴紐の締め具合や呼吸の仕方について指導が行われた。経験豊富な会員からのアドバイスを受ける貴重な機会になったと思われた。

12時10分、バラの段に到着した。バラの段は、狭いうえに他の登山者もいたことから分散して昼食とした。セミナー生からは、登りと下山時のストックの長さについて質問が出るなど積極的な姿勢が見られた。また、この日は天気が良く、バラの段からは雪を被った富士山が大きく見え、セミナー生は一生懸命写真を撮っていた。富士山は、いつも見ているが、苦労して登った山頂から見る富士山は格別である。12時55分、バラの段を出発したが、下山しながら、なるべくロープに頼らない歩行を行うよう会員から指導を行った。

バラの段山頂から

13時35分、安倍峠に戻った。ここでは、富士山登頂2千回を越える登山歴を誇る實川会員より「富士山の魅力」についての講話が行われた。實川会員の1日に富士山登頂3回や不眠不休での登山の話が行われ、セミナー生は驚きの表情で聞き入っていた。

14時00分に安倍峠を出発し、八紘嶺登山口に14時40分に戻り、閉会式を開催した。閉会式では、支部長挨拶の後、セミナー生から「山の良い仲間と知り合えた」「天気が良く素晴らしい1日で楽しかった」「初参加だったが、これからも山に登りたいという気持ちになった」「登山について必要なことをいろいろと教えてもらい勉強になった」などの感想が発表された。

このほか、有元支部長や諏訪部会員から、会員以外でも参加できる山行や文珠山荘での行事についての紹介があり、セミナー生に参加を呼びかけた。

今回のセミナーは、17名という多数のセミナー生の参加があり、適宜開催した会員の講話にセミナー生が関心を示すなど充実した内容であった。また、先発の白鳥会員による登山道の枝切りなどの整備があり、日本山岳会の素晴らしさがセミナー生に伝わったと思われる。これを機会に山が好きになり、日本山岳会に入会する人が増えることを願ったセミナーであった。

参加者
会員：有元、中野、岩崎、白鳥、
原田、小嶋、中村、山崎、
篠原、諏訪部、實川、赤堀

こぼれ話

## 登山靴の盗難

山崎　郁郎

三斗小屋温泉に遊びに行き手伝っているとき、（１９６５年頃）大丸温泉までボッカをする為に下った。背負子に相当な荷物を担いで、三斗小屋温泉まで上げるのである。地下足袋姿で峰の茶屋で一服、目の前に休んでいる登山者を見ると、私自慢のナーゲルの登山靴と同じに見える物を履いていた。まさか私の物を履き逃げされているとは思はないので、良いのを履いていますねと言うと本人も喜んで靴談議をやって別れた。

三斗小屋に帰り着き、今日、私の登山靴とそっくりなのを見たとみんなに話すと履き逃げされていないか、自分の靴を確認しておいた方がよい、と言うので確認したら靴が無かった。この時は本当に目の前が真っ暗になってしまった。当時の登山靴は新入社員の３ケ月分の値段であった様に思う。代わりに布の履き古した運動靴がただ一足残っていた。

さあ大変！彼奴だ！と言うことになり、私はおっとり刀（薪）で飛び出した。この頃のバスは便数が少ない。バスの時刻からだと何とか間に合いそうである。剣道部の後輩、長井（ＪＡＣ６２０２）が付いて来てくれた。二人とも地下足袋で木刀の代わりに手頃な薪を持って走った。普通３時間近く掛かるがこの時は50分ぐらいで着いたように思う。其れこそ飛ぶように走って下った。

バスが到着して正に乗り込もうとしている、その時、追いついた。まず飛びかかり引きずり倒した。喧嘩のときには登山靴と地下足袋では敏捷差のうえで問題にならない。こっちは空身で相手はリュックサックを背負っている。そして此方は薪を持っている現役の剣道部員二人である。たちまち打ち込み取り押さえた。後輩の長井は当時十手獲り縄の術を習っていたので、山さん！俺に縛らせてくれ！と言うので彼に任せたら犯人が持っている登山用の縄を使い、ほんの瞬く間に銭形平次（テレビに出てくる）が犯人をおシラスに連れ出すようにぎりぎりに縛り上げてしまった。

直ぐに私の靴を脱がせ、裸足のまま黒磯警察に突き出そうとしたが、警察沙汰だけは勘弁してくれと私にすがるので自宅に連絡をさせ裸足で三斗小屋に連れ帰り、10日ほどただで働く事にして許してやる事にした。

泥棒をするような人間は芯まで腐っているものである。何日か過ぎ、２回程逃げ出したがその頃の手伝いに来ている他の仲間も皆健脚なので決して逃がさなかった。その度に捕まえて焼を入れ、連れ帰ったが３回目は追うのが面倒になり逃がしてやった。泥棒をするような人間の根性は直らないものである。

第3回 ハイキングセミナー

## 竜ヶ岳　雪山登山

小川　正育

平成三十年度ハイキングセミナーは３回を企画し今回は最終回、雪山に親しむのが目的です。

ウエブや新聞紙上での募集も参加者は乏しく会員の知己を頼っての開催は致し

方のない事ですが結果的には開催できたことに感謝です。

２月17日(日)天子山塊北端の竜ヶ岳（１４８５メートル）に雪を求めて８時30分、登山口に集合。参加者はセミナー生７名、会員17名の合計24名、盛況です。有元支部長の開会挨拶の後、セミナー生の自己紹介、うち４名はリピーターのセミナー参加者で注目してくれている様子が伺えます。次いで行動リーダーの小川会員による諸注意とストレッチの後、パーティー編成はセミナー生に公益事業委員会メンバーがサポートする構成で小川を先頭に北尾根ルートへ出発です。

ＪＡＣメンバー班は有元リーダーのもと後ろに続きましたが、程なく先行、和気あいあいに高度を上げて行きました。セミナー班は北面を辿るルート、高度を上げるにつれ、薄いながらも圧雪と凍結面が占め始めた箇所からアイゼンを装着しました。これで雪山セミナーの面目躍如であり、北面ルートを上りに設定した白鳥リーダーのお陰です。

ブナやヒメシャラの森閑とした斜面も傾斜を落とせば山頂部笹原に出ます。途端に全開放の富士山、南アルプス！　皆歓声を上げ凍った登山道もなんのその山頂着、今日は日曜日快晴、富士山、聖～仙丈・南アルプス、の大パノラマ、多くの登山者が憩う山頂広場でセミナー生全員による「竜ヶ岳登頂バンザ～イ」。白鳥、平井両講師による南アルプスの山座同定や雪山装備の講習もあり、あっという間に１時間が過ぎました。

竜ヶ岳山頂での集合写真

「さあ下りましょう」の間際に、山頂にいた３名の若い女性登山者に自分の名刺を渡し、ＪＡＣ入会を勧める支部長の熱意は見事でした。下山は南東面登山道の為、ぬかるみに悲鳴を上げながら石仏東屋着、ここでアイゼンを外します。

軽くなった足元でキャンプ場登山口着。セミナー生に感想を述べてもらった後岩崎会員の秀逸写真パネル〝ダイヤモンド富士〟のプレゼント、白鳥総合リーダーの講評で閉会となりました。終日穏やかな好天のもと２時半でした。

参加者　有元　泉脇　岩崎　大島(康)
小川正　荻野　勝又　小嶋
篠原　白鳥　諏訪部　仙石
中野　中村　長野　平井
山崎

会員山行 ③

# 突先山・中村山

赤堀　栄子

２０１９年３月９日、天気快晴。足久保、奥長島終点のバス停を過ぎ、登山道入り口まで車２台で行く。登山道入口で沢コースと山腹コースに分かれる。８時45分スタート。今回は山腹コース、茶畑の間を抜け、杉林へと入っていく。地面が柔らかく歩きにくい。15分で後方から「もう富士山の頂上を越えたくらいかね」のかけ声で、みな顔がほころび会話も出て来た。突先山までは沢を６回渡らねばならない。今週は雨が多かったにも関わらず、水が流れていたのは２か所だけ。３回目水のない沢を渡ったところでアクシデント発生する。９時30分、ごみ袋が沢に落ちたため拾いに行くＳさんが、ガレ場を下りようとして３㍍近くある高さから落ちてしまう。大腿骨から太腿にかけて打撲している。ガレ場に皆が集まってきたため、支部長から足場の悪いところに皆集まっては駄目だと注意を受けた。15分経過後、再スタートし、10時、沢コース合流地点に到着。計画予定より30分早い。沢コースにはテープが張ってあり、行けないようだ。休憩時支部長からガレ場とザレ場の違い、更にゴーラなどの説明が入会して日が浅い私と小嶋さんにあった。10時20分釜石峠着。休憩後突先山に向かう。この辺は歩き易く足取りも軽くなる。炭焼き窯の跡有。植林されて桧に変わり更に上部は唐松林になった木々の間から右後方僅かに南アルプスが見えた。左は真っ白に雪を付けた富士山。今日は天気も良く、山の白さが眩しい。11時15分、１０２１・７㍍の突先山山頂到着。昼食タイム。富士山だけ見える。11時50分、中村山に向けて下山開始。途中林道合流点がある何ｍかだが、往路時ここは間違えやすいから必ず振り返ってみるようにと指摘を受けた場所、復路やはりそのまま下ってしまうところだった。危ない、下ばかり見ていたせいだと反省する。12時25分、釜石峠。歯痛地蔵（歯痛で頬っぺたを抑えているように見える地蔵さま）に手を合わせて中村山に向かう。ここも植林された桧林だ。だが笹の根が頑丈な輪になっていたり、大木が横たわっていたりで苦労する。大きな石や岩は両手両足を使ってすり抜ける。「なかなか訓練させてくれる中村さん」と声が掛かる。13時、標高１００７㍍の中村山山頂に到着。

ここも展望はないが、太陽の光は十分に注がれるし、木々の間からは富士山も見える。篠原さんは「これで思い残すことはない」とニコニコ顔で言うものだから、皆「わぁー」と歓声を上げる。13時16分、下山開始。13時34分、釜石峠着。再度地蔵さまの顔を覗き、左は玉川村、右は美和村を確認し下山。今日はピストンだ。水仙のつぼみは朝登り始めより帰りは黄色が大きくなっていた。14時30分、駐車場着。お疲れ様でした。

参加者：有元、中村、篠原、仙石、小嶋、中野、赤堀

諏訪部、増田治（二人は突先山まで）

突先山山頂にて

個人山行

# 念願の高天原！
## 北アルプス深部周回

勝又　千華

期間：２０１８年８月10日～14日

一日目、樹林帯を抜ける頃にはすっかりガスに包まれていた。今年は季節が早いようで、一面綿毛のチングルマが広がっている。連休前の平日は歩く人もまばらで、賑やかな上高地とは反対に山深さを感じる。初日は太郎平小屋幕営。

二日目、朝から降ったり止んだりの雨空だったが、黒部五郎岳が近づくにつれ、ときおり薄日のさす時間も増えてきた。かたく閉じていたミヤマリンドウはほのかに緩み、ガスが晴れて見渡すハイマツ帯の青々しさといったら！頂上の肩には、まだ綿毛でないチングルマの小さな群落が。季節が早足で過ぎつつある今季、咲いている花は貴重だ。

道を曲がると視界が開け、深い緑の中に赤茶の小屋が見えた。背後の山に守られているような佇まいは、どっしりとして頼もしく、疲れた体を休めるのに最適な場所のように思う。

道すがら、黒部五郎小屋に泊まるか、計画通り三俣山荘まで行くかを検討していた。今日楽をするなら黒部五郎小屋、明日楽をするなら三俣山荘。まだ13時半ということで、もうひと踏ん張りすることに。私一人、巻き道を行かずに頂上経由で向かう。待ち合わせは三俣山荘で。

一人だとつい急いでしまう。地図上コースタイムを切ることで、時間と気持ちに余裕を持ちたいからだと思う。巻き道と頂上との分岐点を過ぎると、いよいよ人がいなくなった。今まで見なかったハクサンフウロ、イワギキョウ、ウメバチソウを独り占めする嬉しさと、寂しさが少し。

16時半にテント場で合流した。ドッという擬態語が聞こえそうなくらいの疲労度。夕食のビールもそこそこに気を失ったかのように寝る。

三日目、薄明るくなってから行動開始。本日唯一の登りである祖父岳の裾野まで、ゆっくり登る。雲ノ平の各種庭園をこの目で確認。地図上にあったいくつかの庭園の名に、それはもう素晴らしく美しい風景を想像していた。結果が期待以上でもそうでなくとも、気になった場所には直接出向いて見るのがよい。

高天原山荘に到着し、早速お風呂へ。と、その前に、お風呂から徒歩20分のところにある竜晶池を見学しに。池はいいから早くお風呂に入りたい気持ちと、義理人情と、今日を逃せば絶対に行かないだろうから行っておこうという気持ちが順番に押し寄せる。竜晶池は期待以上だった。シンとして、水面下の全く見えない緑の池には本当に竜がいそうだ。サッと見て、お風呂へ急ぐ。

仕切りのない混浴風呂には、男性しかいなかった。明るく開けた沢に肌色の人達がわんさかいる光景も、ここに来たくて大荷物を背負って延々歩いてきた自分も、おもしろおかしい。みんなで渡る赤信号のように、誰も前を隠さない。混浴風呂は薄暗くなってからに入ることにして、簾で仕切られた女湯へ。

神様のいる天国は、何にもとらわれない執着のない世界らしい。湯に浸かっている時間はまさにそんな感じだった。時間に追われて烏の行水になりがちな普段の入浴と違って、ここでは何も考えなくてよい。感じるのは極楽気分だけ。夕食

後に再びお風呂へ。無事に混浴を堪能し、今回の目的はほぼ果たされた。

四日目は朝から雨だった。大東新道を諦め、雲ノ平に登り返して薬師沢へ向かう。ラグジュアリーな雲ノ平山荘へもう一度行けるとは。が、カフェの開店時間を待たずに出発。

薬師沢小屋までの下りには、かなり神経を使った。急な上に岩が濡れている。下のほうでケガをして救助された人がいると聞いて、さらに緊張する。

薬師沢小屋から太郎平小屋までは、笹の間に伸びる木道を行く。いかにも熊の生息域といった雰囲気だ。ときどき遠くを見渡して、笹の中に黒い塊を探してみる。天気の悪い日は熊も雨宿りしているのか、全く見当たらなかった。

懐かしの太郎平小屋は、人がごった返していた。雨でテント泊から小屋泊に変更した人も多いだろうが、世間はお盆休み真っ盛りだ。受付奥のテレビには、炎天下の甲子園球場の映像が流れている。

この日の夕食もご飯をおかわりした。高菜の漬物とふんわり白米が、体に染みるようにおいしい。

五日目、天気次第ではそのまま下ることも考えていたが回復するとの予報。半信半疑で真っ白な薬師岳に向かって歩きだす。

太郎平小屋より薬師岳

するとまもなく、朝日を含んで染まるガスが追いやられ、目の前に薬師岳が、それこそ現れるという表現ぴったりに姿を現した。これほど気持ちの良い太陽光を浴びたのは何日ぶりか。薬師平からは遠く槍の穂先が見える。軽い荷物と青い空、思わずスキップしたくなるような気分だ。

山頂に着く頃には下からのガスに追いつかれてしまったが、いつも遠くから見ていた薬師岳の頂きに立てたこと、穏やかな空と風の中を気分よく歩けたことが何よりも嬉しい。ここで戦後最大の遭難事故があったとは信じがたい。けれど、慰霊碑やケルンを目にしてそうではないと実感する。

太郎平小屋で山中最後の食事を噛みしめながら名残を惜しむ。一日目はガスに包まれていた太郎平小屋までの道が、最終日はガスが晴れて緑の山々を広く見渡せる。「こんな景色だったのか！」とまるで初めての道を歩くような新鮮さで、振り返り、振り返り、帰路をたどった。

メンバー：諏訪部、仙石、赤堀、勝又

## 聖岳で会った男

白鳥　勝治

２０１７年の春、傘寿を迎えたので、ぽつぽつ厳しい山歩きを納めようと思って、若い時代より長い間お世話になった静岡市内にある南アルプスの標高３０００メートル以上の山頂11座に感謝の気持ちをもって訪れて見たいと思い立って始めた。

２０１７年７月18日（晴）

昨夜、椹島で幕営して快適な睡眠をとり、爽やかな朝を迎えた。聖沢の登山口へ車を置いて、歩き慣れた山路をゆっくり登って行くと、二、三のグループが追い抜いて行った。今年、６月の上旬、もう雪も消えているだろうと思って、夏路を登ったのだが、上河内岳北側のトラバースルートに山路が崩れているところがあった。又、急斜で落ちている沢に固い残雪が多くあり、装備も不十分なので引き返して来た。帰途、椹島のＴフォレスト社の事務所に立寄って山路の状態を話したところ「山路のことは市役所の担当へ話しておきます」との返事であった。この辺りの山は、確か島田のＴ製紙会社の社有地内だが、登山路の点検や修理は市役所の仕事らしい事を始めて知った。そこの道普請はどうしたのだろうと思いながら登ったが、すっかり直してあった。

ゆっくり登ったのだが、午後早く聖平小屋へ着いた。管理人は静岡市内に住む旧知の岳友、原田さんだ。「今日は、独りかね？」と彼は訊いた。考えてみたら、数年前の夏、清水山岳会の新人達と６人で市岳連から依頼の登山路清掃を兼ねて、赤石岳から縦走をして来て小屋管理の露営地へ幕営した時に、原田さんから冷たい缶ビールを沢山差し入れて貰った事を思い出した。「そうです、今日は、初めて小屋に泊めて貰おうとして来たのですが、よろしくお願いします。」と言って、今回の目的を話した。彼は、笑いながら「あんたは年を取っても大したもんだ」と言って入り口寄りの壁際に、やや広くスペースを取って寝袋を敷いてくれた。

今回は独り歩きで荷物も軽く、自分のペースでゆっくり登って来たので、思っていたより楽に着いた感じだったが、横になっている内にいつの間にか眠っていた。何か声がするので目が覚めて起きてみたら、隣にがっちりした髭面の男が座ってザックの中身を広げていた。彼は、自分から北海道から初めて来た「八谷と申します」と名乗り、挨拶をしてから「今日は三伏峠から来た」と言ったので、私は、彼の山歩きの速さに驚き、そして称えた。八谷氏は訝し気な顔で、「あなたは、私が歩いてきた道を歩いたことがあるのですか？」と問い、続けて「だいぶお歳と見えますが、独りですか？」と尋ねたので、「80才です」と応じ、「私はその道筋を夏も冬も歩きました」と答えたら、今度は彼が驚いた。それから私は、自分の南アルプス登山経験について、高校１年生の時、地元の清水山岳会に入り、南アルプスの３０００㍍以上の山14座、全ての夏冬の山頂を踏んだ話を長々とした。しかし、「北海道の山は未だ殆ど歩いたことが無い。」と結んだ。

八谷氏は「自分は北海道の１０００㍍以上の山４３０数山を全て登頂した」と話した。さらに山歩きを始めたのは、北大卒業後22歳で就職してからだと登山経歴を話し始めた。最初は我流で夏山を歩いていたが、旭川東稜会で冬山登山の基本を覚え、旭川勤労者山岳会では組織登山を学び、山岳童人チロロの風では自由な山登りを知った。それから25年間、毎月欠かさず登山を続けて、この結果を成し遂げたと話してくれた。

そして、始めて出合った高齢者の私に「北海道の山へ来ませんか」と誘ってくれたのだ。一瞬、私は聞き違いと思い自分の耳を疑った。八谷氏は、ガイドの資格を持っているが、私には無料で北海道の好きな山を案内すると言うのです。本当に嬉しい話で感動したので、その場で

「是非、お願いします。」と答えた。そして、続けて「先ず、来春、簡単な雪山をスキーで登ってみたいですが、如何ですか?」と図々しくも頼んだ。彼は、ややあきれた顔で、「山スキーをおやりになるですか?」と応じたが即座に承知してくれた。そこで改めて住所や連絡先を書いて交換し約束をした。八谷氏は、明日、上河内岳を越え、茶臼岳、易老岳を縦走し光岳を登頂して引き返し、茶臼岳小屋か、下って横窪小屋へ泊ると言うので、両方の山小屋とも私の親しい知人が管理人をやっている事を紹介した。

翌朝、私が目覚めた時には、既に八谷氏の姿は無かった。一番遅い朝食を食べ、日帰り支度で聖岳の頂へ向かった。聖平へ出ると数か所に設けられた防鹿柵の中には、ちらほらとニッコウキスゲの花が咲いていた。環境省、静岡県、静岡市が協力し、県内を中心とする県知事委嘱を受けた高山植物保護指導員が中心になって、ボランティア活動で設置した通称「鹿柵」が功を奏し、ニッコウキスゲが数年かかって復活し開花したのだ。鹿の食害を受けて消えてしまってから、しばらくの間、見ることが出来なかった鮮やかなオレンジ色の花は、このところ夏は緑一色だった聖平の景色に彩を添えて雰囲気を一変した。

昨日の八谷氏との嬉しい邂逅や、復活したニッコウキスゲの開花と、心に嬉しさいっぱいの私は、愛用の握り良い手作りのアラカシ（粗樫）の一本杖を両手で握り、もたりもたりと頂へ向かった。この歩き方は、山岳会の後輩達が、勝新の〝座頭市歩き〟だと私の聞こえないところで揶揄するようだ。その姿は、確かに見栄えはしないだろうが、両手で目丈の長さがあるアラカシの杖を、やや前や横に突きながら歩くので、重い荷を担いだ時の急斜路の登り下りには、年を重ねる毎にバランスが悪くなる自分に納得のゆく安心感を与えてくれるのだ。そのような訳で私にとっては、〝転ばぬ先の杖〟以上に山歩きの安全を保障する〝登山ギア〟なのである。

登りながら若い時代、厳しかった冬の聖岳などを思い出しながら歩き、又、高くなるほど変わる景色を時々立ち止まって眺めながら歩いていたら、知らぬ内に誰かが後ろにいる事に気が付いた。振り返ると、原田さんが笑って後ろに付いて歩いていた。私は感謝の気持ちを含めて「ありがとう!」と言ったら、「やあ、特に心配した訳ではないがネ」と応じた。原田さんが高齢者の私をいたわる心遣いに頭が下がる思いがした。前聖岳の頂上に着いて、通りがかりの登山者に二人で記念写真を写して貰ったが、そのまま帰ることが勿体なかったので、奥聖岳までの稜線にある、お花畑を訪ねて奥聖岳まで行った。頂から、昔の冬、登って来た白蓬の頭へつながる東尾根を見下ろし、大きく深呼吸を二つ三つしてから、ゆっくりと聖平の小屋へ戻って来た。今日の聖岳は、自分の山歩きに終止符を付けることに相応しい、山を愛する人々との出合いに恵まれた山旅であった。

**【追記】**

２０１８年3月、私は北海道の深川市に住む八谷和彦氏の招きに応じて、静岡支部友であり、高校の後輩でもある山梨県北杜市に住む、大澤純二さんと、さな枝さん夫妻の同行を得て、6泊7日の北海道の素晴らしい春山スキーの旅を、八谷和彦氏の案内で楽しんできた。

# 文珠山荘だより

文珠山荘運営委員長　諏訪部　豊

文珠山荘は荻野恭一会員と息子の士郎さん（共に故人）が８年９ヶ月の歳月を要して自力で建てたログハウスです。誰が見ても素晴らしい山荘です。これを２０１５年に当支部で引き継ぐことになりました。大掃除や数々の整備を施してみんなで使える施設にしました。そして年に六回、定期的に行事をすることにしました。当然宴会が主体になりますがそれだけではすぐにマンネリ化するだろうと考え、「この広い空間で山の映画を鑑賞しよう」と考えました。どうせやるなら大きなスクリーンでそして音響効果も充分にしようと企画し、以来次のような映画を上映してきました。邦画では「剱岳～点の記～」「クライマーズ・ハイ」「氷壁」「黒部の太陽」「八甲田山」「Ｋ２～白き氷河の果てに～」「黒い手帳～ある遭難～」「エヴェレスト～神々の山嶺～」などです。洋画では「アイガー北壁」「ビヨンド・ザ・エッジ～歴史を変えたエベレスト初登頂～」「クライマー～パタゴニアの彼方に～」「運命を分けたザイル」「セブン・イヤーズ・イン・チベット」「ＭＥＲＵメルー」「氷壁の女」「星にのばされたザイル」「エベレスト２Ｄ」「ヒマラヤ～運命の山～」などです。

文珠山荘での団欒

山の映画だけに限定するとさすがにいつかはネタ切れになるかも知れませんが、そうしたらアカデミー賞を取ったような良質の映画を上映するのも良い案かなと思います。また試験的に年末に第九を二回ほど上映しました。好評なので第九に限らず別のコンサート映像上映も楽しいかなと考えています。他にもリクエストがあったら是非お寄せ頂きたいと考えています。今後も楽しい山荘行事にして行きましょう。

# 【七十周年行事関係】

**①　募金のお願い**

既に多くの方から寄付を頂いておりますが、諸行事の為に必要な募金を続けています。更にご協力を頂きたくお願いします。一口３千円以上を左記郵便講座に振り込んで下さい。

店名　二三八（ニサンハチ）
店番　２３８
預金種目　普通預金
口座番号　６０８２９９４
口座名義　中野雅章（ナカノマサアキ）

**②　記念誌への投稿依頼**

２０２０年４月１日発行予定で編集作業を進めています。五十周年記念誌に準じて、会員の皆様からは

＊折々の山、折々の人
＊海外遠征の思い出
＊とっておきの山

等の紀行文や随筆の原稿を募集します。**提出期限は２０１９年12月末日**です。字数は特に制限しませんが、出来たらワードで作成して頂ければ有難いです。

また写真があれば２～３枚提出下さい。用済み後返却します。

カタクリ（2019.05.10信越トレイル）

水芭蕉（2019.05.10信越トレイル）

## 【会員動向】

**復活会員**　関根美千子

**新入会員**　竹沢　和也

小嶋　香織（準会員）

**退会**　勝見　幸雄　平井　泰

熊岡　達雄　畠中　智代

吉田　英司　橋本　武（会友）

## 【お知らせ】

### 南アルプス写真展

今年も「山の日」記念事業として県内山岳４団体で南アルプス写真展を開催します。11月５日から10日まで。静岡市民ギャラリー。奮ってご応募下さい。問合わせ先は事務局木村（０９０-２２６２-０５９２）。

## 編集後記

元号が「平成」から「令和」に変わりました。この会報も何か少し変化をと思い、今年１月３日青笹山へ登った時に撮影した富士山を表紙に使いました。

今回初めて会友から原稿を戴きました。また久しぶりに投稿をして頂いた方もあります。支部報は会員相互の交流の場ですから、出来るだけ幅広い声や意見が盛り込まれれば嬉しい限りです。

４支部交流会に参加してという、八木会員のユニークな切り口の感想は誰にも書けるものではありません。些か難解な個所もありますが、熟読して頂きたいと思います。

山行記や事務的な内容の記事の合間に、味のあるサロン的一面を絶やさずに盛り込んで行くのも編集者の役割だと思います。本号へ原稿を書いて頂いた会員への感謝と共に、今後とも会員諸氏の投稿を宜しくお願い致します。（長野）

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
有元　利通
事務局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町8-13　木村勝利
編集責任者　長野　和義
印刷所　株式会社　三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031

題字・牧野衛　背景・長野和義

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2019（令和元）年秋季
第86号

## 巻頭言

# 支部創立70周年を迎えるにあたって

静岡支部長　有元　利通

２０２０年、来年です。一般の日本の人にとって来年は東京オリンピック、パラリンピックが最大関心事かもしれません。しかし、私たちＪＡＣ静岡支部の会員にとっては支部創立70周年の記念すべき年です。皆さんでこぞってお祝いしたいと思います。

１９５０年２月26日、当時、静岡駅前の会場（日興会館説と松坂屋集会場の二説ありますが）に十数名が出席して創立総会を開いて以来70年を迎えます。

創立にかかわられた初代支部長の静岡大学教授、大室貞一郎さん、事務局を引き受けられた歯科医、塩田一二さん、第二代支部長の牧野衛さん、後に三代目支部長に就任の山本朋三郎さん、同じく後に事務局を引き受けられた磯野兼二郎さん、東部の渡辺徳逸さん等々、創立時のメンバーの皆さん、第四代安間荘さん、第五代大石惇さん、第六代児平隆一さん、第七代久保田保雄さん、第八代大島康弘さん、そして、各時代の支部活動に参加し、支えてくださった物故者、退会者を含む多くの先輩の皆さんに敬意を表し深く感謝を申し上げます。勿論、現役会員の皆さんにも深く感謝申し上げます。

## 目次

★巻頭言
支部創立70周年を迎えるにあたって　静岡支部長　有元利通　1
★平成30年度自然保護活動報告書
公益事業委員会自然保護担当　白鳥勝治　4
★シリーズ「山への想い」
私と祖父の「富士登山」　岩見昌樹　5
★会員山行1　深南部「池口岳」　大島わかな　6
★会員山行2　北横岳・蓼科山　大島わかな　7
★第1回ハイキングセミナー
ブナの新緑映える天城八丁池　小笠原誠　8
★山の日記念「親子登山」　山伏　中野雅章　9
★第2回ハイキングセミナー
大札山ハイキングセミナーに参加して　市川啓子　10
★会員山行3（平日山行）　不老山　中野雅章　11
★会員山行4　横窪沢小屋から茶臼岳　赤堀栄子　12
★個人山行　「テント担いで単独行」　長野和義　13
★南アルプス写真展報告　木村勝利　16
★会員動向　16
★編集後記　長野和義　16

さて、70周年を記念して、創立記念日の2月26日の小山行（浜石岳）、小祝賀会（清水区由比、開花亭）を皮切りに記念の行事を4月、5月に集中して行います。多くの会員、準会員、会友の皆さん、退会者の皆さんも誘って参加していただき共にお祝いしたいと思います。

とりわけ4月25日㈯の記念式典、記念講演会・座談会、祝賀会、翌26日㈰の記念登山と構想が固まってきました。別掲のような次第、流れで進める方向です。

25日の式典から記念座談会までは、静岡県男女共同参画センター「あざれあ」大ホールで開催致します（入場料無料）。関係者は勿論、ご家族、友人、知人も誘ってご参加ください。

25日夕刻からの祝賀会は会場を「センチュリーホテル静岡」に移して、参加費7，000円で開催いたします。

26日㈰の記念登山は竜爪山・文珠岳（1040．8m、一等三角点）の集中登山を9コース程からの集中登山としますので、自分の登りたいコースを選んでください。登山口までは会員の車に乗り合わせていきます。予め参加人員を把握しておきたいと思いますので別紙添付の意向調査に、25日に参加いただける部分と共にお知らせください。

記念海外登山は台湾の玉山（3，952m）です。5月1日セントレア出発、5月4日登頂、5月6日帰国、概算26万円前後）もあと数人枠があります。会員以外でも親しい方ならOKですので早急に申し込みください。

もう一つ特記することは、50周年の時点で記念誌を発行しましたが、今回も70周年を区切りとして記念誌を発行します。現在70周年記念誌編集委員会（委員長・長野、委員・山崎洋、小嶋、中野）で編集作業を進めており、2020年4月1日発行の予定です。

準備が整いましたら皆で参加して70周年をお祝いしましょう。そして、今後も息長く支部が活動していけるように新しい一歩を刻みましょう。

**別掲1**

**4月25日㈯　午後**

**式典、講演会、座談会、祝賀会**（案）

総合司会・進行　木村勝利

**（式典　次第）**

13時受付、13時半開会

開式の辞

支部長挨拶

来賓挨拶

公益社団法人日本山岳会　会長　古野　淳様

東海支部長　高橋　玲司様

静岡県山岳連盟　会長　滝田　博之様

静岡市山岳連盟　会長　望月喜久治様

静岡県勤労者山岳連盟　会長　竹本　幸造様

来賓紹介

70周年記念事業多額寄付者へ感謝状贈呈

閉式の辞

14時5分

―休　憩―

**（講演会　次第）**

14時15分　開会挨拶　諏訪部　豊

講師紹介　西村しのぶ

元日本山岳会常務理事・評議員、京都大学学士山岳会員、静岡大学山岳部紫岳会評議員、日本登山医学会評議員、チューレンヒマール登山隊副隊長、テラムカンリ登山隊派遣本部長

講師　山本良三様

演題「**山の文化とヒマラヤ登山の軌跡**」

15時20分　閉会挨拶

―休　憩―

**（座談会　次第）**

15時30分

テーマ「**強者（つわもの）たちの富士の楽しみ**」

司会　諏訪部　豊

コーディネーター　中村博和

出席者紹介（敬称略）

富士山超2000回登頂者　實川欣伸

富士山1000登最年少記録　鈴木靖史

女性で富士山一日3登達成者　平野　都

富士山1日2登が普通の人　加藤ひとみ

一日休みがあれば富士山、二日休みがあれば赤石岳の人　河村菜奈子

富士山900登達成者　オブザーバー　有元利通

16時40分　全体閉会挨拶

16時55分　全員退室

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

**別掲2**

㈱　リーダーは本人了解を得ていない人もあります。

**4月26日㈰　記念登山関係（案）**

L、（リーダー、敬称略）

**第一コース：竜爪古道　往路往復**

L、中野、（未定）

登り2時間～2時間半、下り2時間

**第二コース：文珠岳東尾根直登、下り第一に合流**

L、仙石、山崎

登り2時間半

**第三コース：則沢林道から一般コース　往路往復**

L、木村、長野、西村

登り1時間20分下り50分

**第四コース：則沢林道から東尾根コース、下りは第三に合流**

L、諏訪部、白鳥

登り1時間20分　下り50分

**第五コース：桜峠コース　往路往復**

L、有元、篠原

登り3時間　下り2時間

**第六コース：牛妻・東海自然歩道コース往路往復**

L、西澤、湯山

登り2時間30分　下り2時間20分

**第七コース：森谷沢・幻の寺コース復路は第六に合流**

L、中村、赤堀

登り3時間　下り2時間20分

**第八コース：野田平コース　往路往復**

L、廣澤、平井

登り4時間

下り2時間30分（第九に合流可）

**第九コース：俵峰コース（登山口まで車）往路往復**

L、小笠原、小川正

登り2時間40分　下り2時間

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

# 平成30年度 自然保護活動報告書

公益社団法人日本山岳会静岡支部
公益事業委員会自然保護担当
白鳥　勝治

平成30年度（２０１８年）静岡支部の自然保護活動は、リニア新幹線のトンネル工事がもたらす南アルプスの自然破壊に関する事項で終始した。

**◎トンネル工事の現状について**

２０１９年４月末現在、ＪＲ東海は静岡県内南アルプスの地下を通過する計画のリニア新幹線トンネル（10．７㎞）について本工事の着手をしていない。

その理由は、２０１４年、ＪＲ東海が上記のトンネル工事により、大井川源流域の表流水が毎秒２トン減少すると発表した数値等、大井川下流地域、８市町に住む住民（約63万人）の生活用水等に対する減漏水の根拠や納得性のある対処の説明が出来ていない、と静岡県が判断して着工の許可を出していない事による。

しかし、当該案件の打開策を担当する静岡県の難波副知事は、４月22日「リニア新幹線トンネル工事の影響は完全には回避できない」としながらも「南アルプス・エコパークは世界や県民の宝なので公的な機関が絡んで、ボランティアとも一緒に自然環境を守る体制をつくりたい」として、「枯れる恐れがある沢の流量測定」や「大井川上流部の河川生態系監視」等の項目を挙げ、生物多様性保全のため、将来にわたって継続できる体制の提案として「自然環境保全基金の設立を」をＪＲ東海へ呼びかけて打開策を求めている。

又、南アルプス国立公園内に地域を持つ、静岡市や川根本町など関係市町と基金の詳細について詰める意向を表明した。

一方、静岡市の田辺市長は、井川地区の住民が以前から求めている、市街地から井川地区に通じる県道のうち、富士見峠を越す県道（県道１８９号線～県道60号線）にトンネルを設ける工事の実施を条件に、大井川源流域のリニア新幹線トンネル工事を認める方向に動いた為、残る課題は静岡市のリニア新幹線建設工事に関する事業影響評価協議会（会長・静大客員教授増沢武弘氏）の畑薙第一ダムから二軒小屋に至る、延長約27㎞の市林道東俣線の整備・改良工事が残るまでになった。しかし、４月16日、増沢会長は、第８回目の協議会でＪＲ東海と東俣林道の整備・改良工事等道路の安全確保と貴重な動植物保護について議論した後、「まだデータを基に検証する段階ではないので（対策の詳細は）次回以降の課題。安全対策では災害で林道が寸断することも考慮してリスク管理するよう強く求めた」と述べたに留めた。

**◎以上の状況への対処**

①ＪＡＣ静岡支部は、静岡県内の山岳四団体（県山岳連盟、県勤労者山岳連盟、静岡市山岳連盟、ＪＡＣ静岡支部）で協議をしながら、静岡県民、特に静岡市民について、南アルプスの認識と評価を高めてもらうために、２０１８年11月上旬、山岳四団体共同で、静岡市役所のギャラリーを借用した南アルプス写真展を行った。開催６日間の入場者数は約９００人で成功であったと評価された。

②静岡の南アルプスと称する講演会を２回行った。聴講者数は合わせて２２０人程度だったが、参加者の多くは静岡市内の赤石山脈に標高３０００ｍ以上の山が11座もあることを知らない人が多かった。又、県庁の所在地に標高３０００ｍ

以上の山々が連なっているのは静岡市だけだとの事も知る人が少なかった。

**◎あとがき**

〝地球上の自然は人間だけに存在するものではない〟と考えている私は、ユネスコのエコパークに掲げている「自然と人間の共生」の基本理念に従って、静岡市がこれから、どのような管理計画を掲げて実践するのか注目していきたい。

２０１９年５月19日、井川地区を訪れて住民の意見を聞いた。住民の一人は、「かつての井川村は、数千人が住んでいた村だったが、時代の趨勢で、現在は６００人を割るほどに減った寂しい地区になった」と嘆いていた。又、同日、源流域の二軒小屋まで静岡市の林道を辿り、各所で河川の景色を観察して来た。

国立公園になった昭和39年（１９６４年）の秋、新雪で化粧をした荒川岳、赤石岳で記念の全国登山大会を開催した頃に建設された畑薙第一ダムは、今日、その三分の一程が石ころと砂地の河原になって、水力発電の畑薙ダムは20㎞ほど下流の井川ダムと同様に上流部に水がなく砂防ダムに見えた。赤石山脈は脆弱な地下構造であることは衆知のことなのに、ＪＲ東海はそれでも、このダムの僅か20㎞程の上流に３６０万㎥のリニア新幹線のトンネル掘削土を狭い谷間に積み上げるのかと思うと、いかんともしがたい気持ちになって帰って来た。

## 公益事業委員会

自然保護担当　白鳥　勝治

２０１９年度も自然保護活動計画は、支部公益事業委員会内の自然保護担当として、３人のメンバーで、昨年までの延長線上をたどり、南アルプスを主とする県内中部地区の山々の自然保護活動を重点として、出来そうな事を計画した。

**◎行動予定（現地確認と聞き取りを含む）**

①リニア新幹線トンネル工事の進捗状況の見守り。（３ヶ月に１回程度、５月～12月まで３回）

②南アルプス県内の防鹿柵内の高山植物の開花の確認、（三伏峠、荒川岳、聖平、茶臼小屋）４ヶ所、各１回（７月～９月）

③南アルプス南部のライチョウの観察（荒川岳～イザルガ岳迄）

④一般登山路の塵拾い、風倒木の除去等（南アルプス、安倍奥山域等）

シリーズ「山への想い」

## 私と祖父の「富士登山」

岩見　昌樹

私は、静岡県富士宮市阿幸地出身の41歳。６年前からガイド業を始め、夏季は富士登山と富士山周辺のガイドをしています。私と祖父、そして富士山との関わりと想いを投稿させて頂きます。

富士山に初めて登ったのは、私が８歳の時でした。初めて登った富士山の印象は、疲れた記憶はなく、ただ「富士山が好きになった」という一言に尽きます。その時は、祖父、父、兄、そして私の４人で登り、よくある家族の富士登山だったのですが、普通の家族の富士登山と違ったのは祖父が元「強力」であったことです。私は祖父の足跡をたどり、ただ祖父のペースに合わせながら歩いていました。そして初めての富士登山は、私にとって今後の人生を変える大きなターニングポイントになりました。元をたどるとこの時の登山がきっかけとなり、私は富士登山ガイドになりました。

祖父、岩見功は昭和20年頃から昭和45年頃まで「強力」として活動し、当時は

農家、臼職人、強力を生業としていたそうです。「強力」は荷物を上げる「荷上強力」、そしてお客様を案内する「客引き強力」と別れていたようですが、私の祖父は「客引き強力」でした。

今の「富士登山ガイド」と当時の「客引き強力」の大きな違いはたくさんあるのですが、大きく分けて3つあると思います。一つ目は、「距離」。当時は、2合目下（標高1000メートル付近）から登り始めたこと。行程が長く、強力もお客も体力的な負担が大きかったこと。二つ目は、荷物を持つことが客引き強力の役割として存在したこと。標高が上がるにつれて疲れたお客様の荷物を担ぎ、多い時には山頂付近では50キロ近く担ぐこともあったそうです。そして三つ目が「情報量」にあると思います。当時は、今のような当てになる天気予報や登山道の情報も少なく、強力の判断力が今以上に重要だったこと。風を肌で感じ、雲行きを観察する。感覚的な要素が今より更に重要だったことは間違いありません。

今でもよく祖父とは話をしますが、より感覚的で参考になる話が多く、私がガイドをする際にも参考にしています。風向き、雲の流れを常に確認すること。歩き始めに注意すること。お客様の顔色、息遣い、足の運びを観察すること。感覚的なアドバイスばかりですが、とても役にたっています。今後も祖父の教えとともにお客様に「富士山が好きになった」と思っていただけるような富士登山を提供していきます。

## 会員山行①

## 南アルプス深南部　池口岳

大島　わかな

2018年11月23～24日

南アルプス深南部の1座である池口岳に、1泊2日で登りました。池口岳は標高差1800m程ありますが、尾根が長い分、最初のうちは「急登」を感じる事なくゆったりと高度をあげていくことが出来ました。爽やかな陽気の中、順調に進みます。一度ルートを間違えますが、すぐに気づき登山道へ復帰。14時20分、黒薙通過。南側斜面は大きく崩落しています。池口岳の二つのピーク、そして鶏冠山がよく見えました。本来1838m三角点が存在するようですが崩落で流れてしまったのか見当たりませんでした。北側を見ると、南アルプス南部の山々が見渡せます。16時、ザラ薙平に到着。ここで幕営です。日が暮れる程に気温が急激に下がっていき、夜には吐く息も白く、凍える寒さとなりました。外はやめてテント内で宴会の開始です。皆で持ち寄ったつまみを食べ、野菜やウィンナーを焼き、酒を飲み、大宴会です。お酒もよく飲んで、ほろ酔い気分でぐっすりと眠ることが出来ました。

翌朝6時10分、必要な荷物だけ背負い、山頂アタック開始です。

時折開ける場所から下を見下ろすと、谷間に詰まった雲海が見えます。天空の村と呼ばれる「下栗の里」らしいです。

標高２２００ｍ辺りから、登山道に雪が現れました。８時40分、標高２３９２ｍの池口岳北峰に到着です。樹林帯で特に展望はありません。続いて南峰へ向かいます。北峰から南峰の間は急傾斜、トラバース、滑りやすい熊笹とあって予想よりも歩きづらかったです。こちらも木々に囲まれた山頂でした。北峰へ戻る途中、木々の隙間からチラリと光岳が見えました。帰りは往路を引き返します。12時50分テント場まで帰着。昼食及び撤収作業を済ませ、13時45分、下山開始です。なかなかペースがあがらず、帰りは日没との勝負になりました。17時近くなり、登山口まで後少しのところでとうとう日が暮れてしまいました。ヘッドランプを装着して道間違いに気をつけながら歩き続けます。

17時15分、無事に登山口に到着です。２日目は合計11時間にもなる長丁場になりました。

今回、日没前に下山出来なかったのは反省すべき点でした。しかしやはり南アルプス深南部は素晴らしい場所でした。他には誰も居ない空間、熊笹の広がる場所で一晩過ごすとは、なんと贅沢で幸せなひと時でしょうか。遠くに見える山々も青空の下くっきりと映えており素晴らしい眺めです。来年の秋も可能であれば、またぜひ深南部の山に登りに行きたいです。

参加者：６名
有元、中野、赤堀、長野、大島、中村

会員山行②

## 北横岳・蓼科山
## 雪山・スキー山行

大島　わかな

２０１９年２月２日㈯10時50分、蓼科ピラタススキー場の山頂駅より登山開始。終始快晴の中、気持ちの良い雪山歩きでした。登山者が多く、すれ違う人や追い越す人と挨拶を交わしながら軽快に進みます。12時北横岳ヒュッテ到着。ここで昼食休憩とし、山頂に向けて装備を見直します。必要な人はアイゼンを装着。12時40分いよいよ北横岳の南峰に到着。樹林がまばらになり、素晴らしい展望が広がります。特に南八ヶ岳がよく見えました。とにかく風が強い。続いて北峰に足を運びます。近くに蓼科山が見えました。そのはるか奥には北アルプス、中央アルプス、浅間山、頸城の山々まで見渡すことが出来ました。全員で記念撮影した後、山座同定を行います。相変わらずの強風でしたが、あまりにも素晴らしい景色に見惚れ、ついつい長居をしてしまいます。寒いのを我慢して、山頂には25

分程滞在していました。帰りは、スキー組はゲレンデより滑降、スノーシュー組は登山道より下山しました。

その晩は、白樺湖ビューホテルに宿泊です。夕飯はバイキング形式でたんまりとお腹を満たすことが出来ました。夜は部屋に集まり宴会です。山の歌を歌い、語らい、賑やかで楽しい夜を過ごしました。翌日の3日(日)は、白樺国際スキー場より蓼科山へ登りました。最初は緩やかな登りですが、次第に傾斜が増していきます。11時50分、蓼科山荘に到着。午後から天候が良くない為、下山組と山頂を目指す組に別れます。13時頃、山頂の一角に到着しましたが、予報通り天気が崩れ始め、風が吹き始めます。青かった空もあっという間に雲に覆われてしまいました。スキー組も早々に滑降開始です。しかし残念なことに雪が少なく、滑降予定の北斜面はあちこちにハイマツが飛び出していました。結局ほんの僅かしか滑ることが出来ませんでした。スキーを担ぎ直し、徒歩で下山します。16時、駐車場に到着です。たった2日間でしたが非常に充実した時間を過ごすことが出来ました。蓼科山で思い切り滑れなかったのは残念でしたが、雪不足の中、木々の間を細かくすり抜けて滑っていくのも、冒険みたいで楽しかったです。このような少々スリルのある滑りも山スキーの醍醐味であると考えます。そして初日の北横岳の好天には山の神様に感謝です。ますます雪山が好きになった2日間でした。

参加者：
諏訪部、白鳥、有元、中村、八木、岩崎、長野、山崎洋、赤堀、大島わ、仙石、勝又、畠中、石間、大澤夫妻

## 第1回 ハイキングセミナー

# 「ブナの新緑映える 天城・八丁池」

小笠原　誠

令和元年6月2日ハイキングセミナーを行った。本来は苦手な雨を密かに期待していた。ブナの木に雨の滴が伝う、そんな景色を見たかったが穏やかな登山日和であった。

水生地下駐車場に集まり諸注意、体操の後出発。最初は普段あまり通らない道を登り天城トンネルに着いた。今度は林道を降りて水生地歩道入口まで行く。ここで加田、増田（孝）会員が登山道調査ということで別の登山道に向かう。我々はそのまま登ってゆく、しばらく登るとブナ、ヒメシャラの木が見えてきた。大見分岐を過ぎひと踏ん張りすると寒天林道にでた。八丁池はすぐそこだ。その前に馬酔木のトンネルを過ぎ展望台へ行くが曇っていてあまり遠くは見渡せなかった。八丁池は静かに佇んでいた。

八丁池に着いたが登山客は誰もおらず寂しい雰囲気であった。ここで昼食、加

八丁池にて集合写真

田、増田会員も合流した。帰りは御幸歩道を歩く。途中で中野会員の「八丁池とブナ原生林」のミニ講座開かれ興味深く聞いた。天城山周辺は年間降水量が4000ミリメートルを越えその大量に降る雨をブナの森が食い止めるということなどを聞いた。ここでも温暖化の影響でヒメシャラが標高の高いところに移っていてブナの木の混成林になりつつあるという話も聞いた。また鹿がブナの木の下草を食べてしまうのでブナの新芽が新たに育たないのではないかということも聞いた。分かり易い講座であった。

そして我々は下に向かってずんずんと降りてゆく、杉の植林が増えてきた、しばらく歩くと出発地点に戻る。ここでセミナー生2名の感想、濃い緑、沢のせせらぎ、鳥の声、満足できた。また八丁池は3回目だが歩いたことのないコースで新鮮であった、様々な知識を得られ満足だった。という意見だった。私も山岳会メンバーと一緒の山行であったので新鮮であった。帰りは諏訪部会員のお宅に寄りミニお疲れ様会がありこちらも楽しい会であった。そして最後にLが営林署に出しておいてくれた資料のおかげで助かりました。皆さんお疲れ様でした。

会員　勝又L　有元　諏訪部　長野
平井　中村　海野　中野　仙石
小嶋　赤堀　加田　増田（孝）
小笠原

## 山の日記念
# 山伏親子登山報告

中野　雅章

2019年8月10日(日)
目的の山　山伏（2013m）

参加者　親子10名、静岡支部会員8名、合計18名
リーダー：中野　サブリーダー：中村
スタッフ　有元　諏訪部　白鳥　篠原
小嶋　原田

8:20冨士見峠8:40→9:25百畳平9:45→10:15山伏避難小屋10:25→11:10山伏山頂12:00→12:40稜線分岐12:40→13:20猪ノ段分岐13:40→13:50林道出会13:50→14:20百畳平

昨年8月に続き第二回目の親子登山を開催した。目的地は安倍奥最高峰の山伏（2013m）である。最終的に小学校1年生から中学校1年生までの子供5名、父母5名、合計10名が参加され盛況な山行となった。

8時20分、冨士見峠に集合、6台の車に分乗して百畳平に向かう。百畳平では南アルプス上河内岳から光岳に続く稜線が空に浮かんで見えた。

メンバーそれぞれが支度を整え準備体操をして登山道に入る。

ここから稜線分岐に至るまでの間は、なだらかな斜面にダケカンバが多く見られ、木漏れ日がさすなど樹林帯が美しい。

途中で市営山伏小屋に立ち寄り11時10分、山伏山頂に到着した。この時刻となると既に夏空に雲が立ち上がり、富士山、南アルプスなどを見渡すことはできなかった。

また防鹿棚の中ではヤナギランの紅紫色の花が咲き始めていた。今年は梅雨明けが遅く、日照時間が例年に比べて短いようであり開花時期が多少遅れていた。

山頂での昼食後白鳥講師によるミニ講座があった。南アルプスの地形的・地質学的特徴、ヤナギランの植生等を分かり易く説明され好評であった。

12時から下山を開始、稜線分岐に到着したところで2班に分かれた。体力面も考慮し、白鳥会員が引率して小学校1年生1名、小学校2年生1名を含む合計8名が百畳平に直接下山をした。残り10名は猪ノ段経由で林道をへて百畳平に向かう。途中猪ノ段分岐を過ぎたところで有元講師によるミニ講座があった。登山全般の話、南アルプスを長期間縦走した話などを聞くことができた。

林道まではもう間近である。そして林道を歩き出した頃から大粒の雨に見舞われた。夏の午後の通り雨のようである。雨具を着るまでもなく慌てて小走りで百畳平まで戻った。百畳平に着く頃には雨も収まり落ち着きを取り戻した。

10名全員無事下山をしたので終礼を行う。最後に親子参加者が所感を述べられ締め括りとした。彼らには安堵感があり充実した表情が窺えた。

親子参加者及び静岡支部会員の皆さんお疲れ様、そして有難うございました。

第2回 ハイキングセミナー

## 大札山ハイキングセミナーに参加して

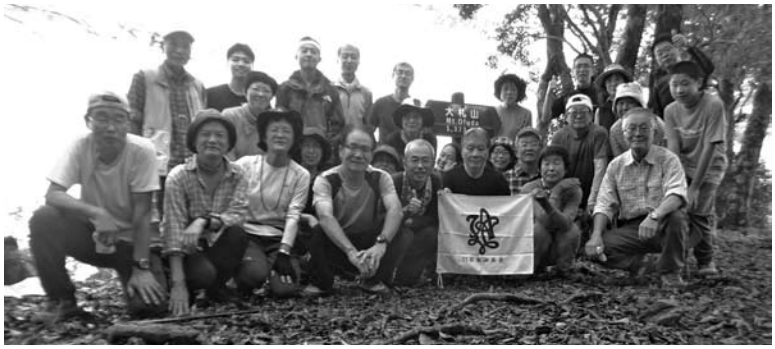
準会員A0105　市川　啓子

2019年10月20日、川根本町の大札山ハイキングセミナーに参加しました。前日までの雨が心配でしたが、当日は、雨もなく、参加者27名（セミナー生14名、会員13名）楽しく一日を過ごすことができました。

私は、今回初めて大札山（1374m）に登りました。行きは尾根まで上がってから歩くコースで、いくつかの直登もありました。途中、景色を眺めるポイントもありましたが、残念ながら雲に覆われていました。尾根を歩く途中には、馬酔木（あせび）が多くみられ、途中りんどうも可愛らしい青紫の花を咲かせていました。山頂について、お昼を食べたあと、ザックの中身についての講座がありました。この講座を聞くのは2回目でしたが、いつも、その入っている量に驚かされます。また、行動食についても、摂取する意味や量など、よく分かってとても勉強

になりました。

帰りは、林道に出るコースを下りました。途中、シロヤシオの見られるポイントもあり、花の咲く季節にも登ってみたいなあと思いました。また、冬になるとそのあたりは、雪が降ることも多いそうで、その様子もとても美しいそうです。肩のコースを下って林道まで出ました。そこからは、林道を下って登山口まで戻りました。



林道の途中には、前日までの雨のせいもあってか、水の流れているところが幾つか見られました。林道は、楽しく、話しながら下りました。

今回のコースは、よく紹介されているコースと少し違っており、尾根を歩けたのが、とても楽しかったです。小学生も参加していて、学校の遠足とは一味違う体験をして貰えたのではないかと思います。また、一般参加者の方から、「アドバイスを頂けることがとても勉強になる」という感想がありましたが、私自身も初心者なので、こういったセミナーでいろんなことを教えていただけるのは、とても良いなあと思っています。ありがとうございました。

参加者：支部会員13名
八木、有元、諏訪部、木村、篠原、小笠原、平井、赤堀、中村、小川恕、市川、原田、小嶋

会員山行

## ③（平日山行）

## 不老山山行報告　中野　雅章

2019年6月5日㈬
目的　不老山（928m）
神奈川県足柄上郡山北町世附
参加　静岡支部会員5名
リーダー：有元　サブリーダー：湯山
会員：諏訪部、篠原、中野
小山町健康福祉会館9:10→生土→谷ケ山→12:20不老山12:40→番ケ平→14:30山市場バス停→15:20ＪＲ御殿場線谷峨駅→電車→15:25ＪＲ御殿場線駿河小山駅→小山町健康福祉会館

6月5日本年度第2回の平日会員山行があり不老山に登った。

午前9時に小山町社会福祉会館に集合、それぞれ支度を整え登山道入口に向かい歩き出す。参加者は静岡支部で活躍されている健脚者ばかりなので遅れてはいけないと思い最初から気合が入る。案内標識がいくつもあり迷うことはない。中には、不老の活路・仙人由来・自然愛語と題した小文も含まれ登山者の関心を誘う。

しばらく上ると比較的穏やかな尾根沿いの道となる。よく整備されていて歩きやすい。このあたりからフタリシズカが何回も現れ、ガマズミ、ヤマボウシ、ウツギなどの白い花を見ながら颯爽と歩いた。

かれこれ3時間を経過し山頂に近づいた頃、サンショウバラが大型の葉の横から顔を出していたので思わずカメラを向

ける。サンショウバラは富士箱根地域にのみ分布するバラ科小高木で日本固有種とのこと。

山頂には12時20分に到着した。山頂全体が樹木で覆われており展望はない。この時期は例年登山客で賑わうとのことであるが平日のためなのか極めて静寂であった。ベンチの先に樹形の整ったサンショウバラが一本あったのでこれを背景に記念撮影をした。

昼食時間は20分であり慌ただしい。SLの湯山さんからヤツガシラ（八ツ頭）の特別差入れがあり感謝、全員で頬張る。下山は東方向に尾根を下り山市場まで、樹林帯の中を黙々と下ること約1時間40分で車道出合に着きその先の吊り橋を渡ってバス停に到着した。怪我・事故・体調不良等なく全員無事下山することができた。

本来であればここでバスに乗るところ、待ち時間が1時間弱あったのでJR御殿場線谷峨（やが）駅まで徒歩で行くこととし、ここから電車に乗り駿河小山駅で下車、小山町健康福祉会館に戻った。

CLの有元さん　SLの湯山さん、静岡支部会員の皆さんお疲れ様そしてありがとうございました

会員山行④

## 横窪沢小屋から茶臼岳

赤堀　栄子

L：中村、SL：諏訪部、会員：赤堀

２０１９年７月14日。昨夜からの強い雨も少し弱くなった。出発予定は40分を過ぎたが、鳥小屋尾根分岐迄の道を確かめたいとの皆の意見で横窪沢小屋を出る。地図上には登山道の記載なし。赤布を持ち尾根伝いに進む。地面は柔らかく足場が悪い。石に手を置くと崩れた。這いつくばってリーダーの後を追う。雨は止む気配なし。出発して2時間急登の連続。ふとリーダーが「あったー」と檜の小枝にテープを見つけた。小指の先ほどの小さなくすんだた青テープ。嬉しかった。…誰かがここを歩いたと思うと急に力が湧いて来るのを感じた。程なく分岐を確認すると、リーダーは「これなら茶臼岳まで行きましょう」と言われた。私は分岐を過ぎ、ピンクテープをあちこちに見て楽観し後に続く。そして、初めてのハイマツ漕ぎを体験する。

道が見えない。枝から枝へ渡る。すぐ

前にリーダーがいるのに追いつかない。手探り状態である。おまけに岩稜迄出てきた。手足の置き場に四苦八苦。冷や汗でバンダナはぐっしょり。せめて天気が良ければ周囲も見渡せるのに、ハイマツ漕ぎがこんなにも大変とは…。その時リーダーから横のハイマツに移れとの指示があった。あれ?!頂上?何と頂上を示す標柱の真後ろに出た。ドン・ピシャである。こんな登山はしたことがない。突然現れた標柱にしばし呆然…。嬉しさも束の間。これが下りだったらハイマツ漕ぎは横窪沢峠までも迷ってどこかに行ってしまうだろうと恐怖を感じた。今回は二人のベテラン先輩方と一緒だったから登れたと改めて感謝します。貴重な体験をさせて頂きました。登頂出来て本当に良かったです。

## 「テント担いで単独行」

長野　和義

**2019年7月12日(金)**　晴れ

自宅を5時30分に出て、先ずは2時間半の運転である。沼平に8時に着いた。今日はまだ山開き前の為、ゲートに一番近いところに駐車することが出来た。支度を整え、8時20分ゲート近くの登山ポストに登山届を提出し一歩を踏み出した。あの三浦雄一郎氏も80歳を過ぎたらエベレスト街道を歩いてベースキャンプまで行くのに、昔は2日の距離を3日掛けてゆっくり歩くと言っていた。とにかくマイペースをキープして歩こう。

畑薙大吊橋を渡る。2年前JACの山行で上河内岳と茶臼岳に登って以来であるが、何だかもっと前のことの様に思われた。やがて、左前方に鉄塔が見えてきた。ここから鳥小屋尾根が始まる。4年前の2015年3月には「島田しらびそ山の会」の山行で、茶臼岳迄一泊二日でピストンした。

トラバースの後、緩やかに登っていくとヤレヤレ峠、ここで一休み。沢へ降りて行くと、昨年の台風で鉄橋が流されて仮の丸太が2本架けられていた。事前に入手していた要注意個所の一つである。ここで墜落したら沢の下流に流され、誰も目撃者はいないと思うと途端に慎重にならざるを得なかった。

ウソッコ小屋着11時40分、一息入れる。小屋を出て直ぐの鉄橋も完全に破壊されており、少し下流に仮橋が設置されていた。これからの登りは急で背中のザックが肩に喰いこみ辛い。中の段着13時10分。休憩を取りながら歩を進める。鉄の階段が連続するところは、台風でルートが大きく変わっていた。さらに横窪峠に着くと小屋までの登山道が崩落した為、別の新しい道が作られていた。横窪沢小屋着14時30分。安全第一で歩いた為、コースタイムより約一時間は多い。小屋番のKさんは心配して一度峠まで様子を見に来てくれたらしい。

明日からの小屋明けに備え、横窪沢小屋には3人が応援に駆け付けていた。窓ふき、トイレの掃除、寝具等の準備で小屋番と共に走り回っている。それにしても、今年はヘリが飛んでくれないから食糧などが無く小屋は大変だという。ただ嬉しいのは、昨日NTTが工事をやってくれて、ドコモの携帯が小屋から通じるようになったとKさんが話してくれた。電話を借りて家に連絡を入れた。

**2019年7月13日(土)**　曇りのち雨

天気予報は雨、Kさんはテントを置い

て茶臼岳のピストンを勧めるが、自分はテント泊が今回の目的なので、出来るだけ軽量化して7時15分出発した。お手伝いの2人が、上の茶臼小屋から降ろして来る荷物があるということで私に同行してくれたのは心強かった。3時間弱で茶臼小屋に着いた。東の方角を臨むと、富士山が顔を出していた。何年か前に小屋から素晴らしいご来光を拝んだ記憶が甦ってきた。テント場は、昨日からというカップルの一張だけで、場所は好きなところが選べた。小屋に近い場所に10時30分、テントを設営した。(幕営料¥700)今回のテント山行に備えて、事前に自宅の庭にテントを張って確認しておいたから、設営に問題はなかった。この時点では、未だ雨は降っていなかった。

そのうち、お昼頃より予報通り雨が降り出した。ボランティア活動で何回かこの防鹿柵の設置に来たことがある。今年は、冬の間降ろしておいた防鹿柵の引き上げは未だ為されていない。ヘリが飛ばず、小屋への食糧なども届いていないからだろう。

小雨になった頃合を計り、茶臼岳へピストンして来た。山頂では、鳥小屋尾根を登って来た二人の若者にシャッターを押して貰った。明日は好天が望めないので今日のうちに下山してしまうとのこと。今年は花はあまり沢山見られないようだ。テント場に戻りながら何枚か写真を撮る。14時頃にはテント場に戻って来た。2人用のテントを1人で使うと贅沢だ。テントの中央に横になり、周りに必要なものを配置する。手を伸ばせば何でも手に入る。お湯を沸かして持参の泡盛で一人宴会を始める。生憎、つまみを忘れたが塩入パンを齧ったり、行動食のグラノーラを口に入れたりで間に合わせる。飲んでいると、いろんな考えが次々と浮かんでくる。「歳を忘れた老人」。意識ばかりが高くても身体が付いて行かない。足を引っ張るにも限度がある。ならば一人で行けばよいではないか?そして、今回の単独行となった。

雨がテントのフライにパラパラと音を立てて落ちている。土砂降りの雨の中をトイレに行くのは大変。でも、非常用として妙案を思いついた。小用ならアルファ米の空き袋を尿瓶として利用できた。しっかりしたファスナーが付いているので安心である。

離れたトイレに行く途中に、板張りの場所にテントを張っている人を見かけた。その下の段にも同じように板張りの場所があった。北海道や海外のタスマニアでもテント場は板張りのプラットフォームであった。小石なども無く、フラットでこの方が良かったかなと反省する。夕食はアルファ米とレトルトカレーであった。ご飯が大盛だったので、半分だけを夕食にして残りは翌日の朝食に回した。少し早かったが何もすることがなく、睡眠導入剤のハルシオンを1錠飲んで19時10分に就寝した。

**2019年7月14日**(日)　雨のち曇り

雨は相変わらず降り続いている。風も少しある。昨夜早く寝たので3時過ぎに目が覚めた。4時半には、昨夕の残りのご飯を今回初めて使うお椀ヌードルに混ぜると、即席のラーメン丼が出来た。なかなかの美味であった。今日の予定を決め兼ねていた。コースタイム的には、上河内岳をピストンして横窪沢小屋まで降りるのは出来そうであった。しかし、一応昨日の内に茶臼岳のピークを踏んだし、雨中ではあったがテント泊も経験した。行ってみたいと思う私と、無理をす

るなと言う私が葛藤していた。結局、セイフティファースト、慎重派が勝利し下山することになった。6時前、コーンスープを食べた。丁度雨も小止みになったのでテント撤収を開始した。テント内での行動とテントの撤収、ザックのパッキングも手際よくやれた。濡れたテントとフライをレジ袋に入れてパッキング終了。私より1日早く入山した隣のカップルも撤収して下山するとのこと。食糧が減ったにも関わらず濡れたテント類が重量を増してザックは軽くならず。7時15分、下山開始。濡れた樹の根は滑りやすいので、慎重に足を運ぶ。同行する人はいないが、特に滑落の危険がある場所はないので心配はいらない。ダブルストックでバランスを取りながら歩く。昨日あった左膝痛は、今日は感じない。晴れ間が出て来た。ちょっと癪な感じだ。濡れた落ち葉は滑りやすい。何回かズルーと滑る。同じ日本山岳会静岡支部の3人が昨日のうちに横窪沢小屋まで来ており、今日は小屋から鳥小屋尾根に取り付き茶臼岳に登り、茶臼小屋を経由して横窪沢小屋に戻ってくることになっている。荒天の場合は一般ルートで茶臼岳をピストンすると言っていたが、私が横窪沢小屋に戻る途中で出会うことは無かった。やがて横窪沢小屋の赤い屋根が樹間から見えてきた。茶臼小屋から2時間強、9時30分帰着。早めに戻って来た私を見て小屋番のKさんはホッとしたようであった。

小屋についてからは、アンパッキングして濡れたものを干す作業があった。一時的に晴れ間が出ることもあったので、特にテントとフライの水切りに努めた。昼食は家から持参したアルファ米。食後は寝袋にくるまり昼寝、登山の原点や今後の活動などについて考える。

ＪＡＣの3人は14時30分頃、小屋に戻って来た。藪漕ぎが大変だったが、充実感があったそうだ。ゼロ次会は15時から始まり、16時半一旦休憩に入った。今日から小屋明けで，男性の宿泊客が2人いた。彼らの食事が終わると、我々の夕食と二次会が始まった。一期一会は今日もあった。徳島から小屋明けの応援に来たという54歳のH女史は、酒も強いが、登山もなかなかの強者で「黒部下の廊下」など毎年歩いているし、数々のバリエーションを踏破しているらしい。談笑は延々と続き、20時40分頃やっとお開きとなった。

**2019年7月15日**(月)　小雨のち晴れ

夜中に2度、トイレに起きた。何故だか、変な夢を見てなかなか眠れない。思い起こしてみると、今から15年前に北アルプス雲の平周辺を5泊6日で歩いて以来の単独行だったので、クライマーズハイになっていたのかも知れない。

5時40分朝食。小屋の前で記念撮影をして7時に小屋を出発。雨は大分小降りとなった。Kさんが峠まで見送りに来てくれた。下山は応援に来ていた3人を含み、7人が行動を共にした。鉄梯子は特に慎重に下る。恐怖の丸太橋も今日は目撃者が6人もいるので、大変心強い。ヤレヤレ峠に9時20分着く。大吊橋を渡り林道に出ると、土砂崩れが起きた直後であった。巻き込まれなくて良かった。人間は歩けるが完全に道が塞がれていた。沼平への途中で道路修復に向かうブルドーザに出会った。10時50分、沼平着。ここで解散式を行い、個別に白樺荘で汗を流した。私は昼食を食べて13時、帰途に就いた。

# 南アルプス写真展

木村　勝利

今年も山の日記念事業として、＊＊未来に残そう美しい山河、南アルプスは静岡の宝＊＊のキャッチコピーで「南アルプス写真展」が、静岡市民ギャラリーで11月5日～11月10日の6日間、開催されました。総来場者は６３２名（昨年は８８３名）でした。

公益社団法人・日本山岳会静岡支部として、公益事業の一環として、写真展の開催を進めていくべきだと思いますが、問題点もありました。第一に、作品の応募数が非常に少なかったことです。締め切り日を延期して、特定の会員が走り回ってやっと何とか、恰好が付きました。４団体の総出展数は約90点、内日本山岳会は36点、でした。（昨年は１００点）

次に、会場への作品の搬入・飾り付け及び展示終了後の撤収が、一部の人の献身的な協力で賄われたことです。

会期中は、会員に交代で会場に詰めて頂きました。この場を借りて御礼を述べたいと思います。この会場が会員間や来場者との交流の場として、大きな役割を果たしたことも付言しておきたいことです。わざわざ大阪よりお見えになった方もありました。

今後さらに、静岡県山岳連盟、静岡市山岳連、静岡県勤労者山岳連盟と連携を深め、南アルプスの自然保護に努めていきたいと思います。日本山岳会静岡支部としてもその責務があります。

来年の開催をどうするかは、これらのことを考慮して決定をして頂きたいと思います。

**【会員動向】**

**新入会員**　桐下　昌幸（準会員）

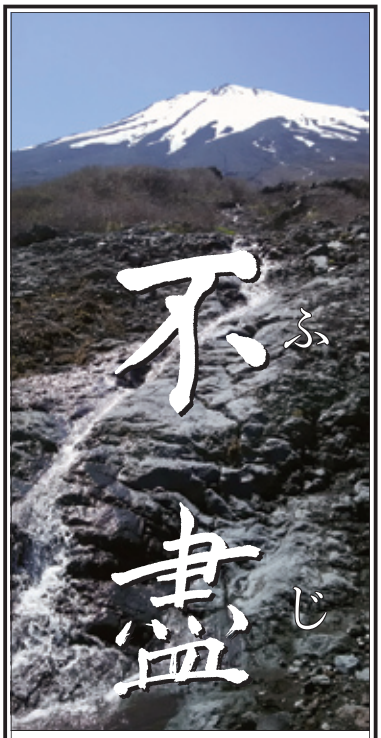
## 編集後記

今号は、編集委員の努力不足でページ数が16の縮小版となってしまいました。折角の貴重な紙面を十分に活用できなかったことを、深くお詫び申し上げます。

しかし、本号には初めて投稿して頂いた岩見会員の非常に興味ある話があります。編集子としては、こういう原稿を大歓迎します。今後ともより一層のご協力をお願い申し上げます。

（長野）

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
有元　利　通
事務局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町8-13　木村勝利
編集責任者　長野　和　義
原稿は kazunagano@zm.commufa.jp へ
印刷所　株式会社　三　創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031




題字・牧野衛　背景・西村しのぶ

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2020（令和２）年春季
第87号
支部創立70周年記念号

## 巻頭言

# 静岡と四国、静岡の山と四国の山

静岡支部長　有元　利通

二〇二〇年、静岡支部の七十周年の年です。大変な年になりました。記念すべき年に新型コロナウイルスによって、世界中の多くの人々が、社会が、困難と迷惑を受けています。

当静岡支部も七十周年記念式典や祝賀会等を延期せざるを得なくなりました。また、記念の海外登山（台湾・玉山登山）も中止せざるを止むなきに至り残念に思っています。

しかし、コロナウイルスばかり考えていても私たち、山屋の世界が新しく開けてくるわけではありません。

静岡に生まれ育った人にとっては、静岡の山は当たり前かもしれませんが、たまには違うところから見てみませんか。ヒマラヤから見ても良いし、アルプスから見ても良いし、北海道から見ても良いですが、私が足繁く通っている四国の山と対比してみます。

私は天邪鬼のこともあるし、田舎が岡山県のこともあるので四国の山を一九八三年から今年二〇二〇年まで登ってきました。（最初、四国の高松に足を踏み入れたのは、小学校六年生の修学旅行の時、屋島、栗林公園、金刀比羅宮です。）

山の前に、面積と人口を見ます。静岡

## 目次

★巻頭言
静岡と四国、静岡の山と四国の山　静岡支部長　有元利通　1
★静岡支部通常総会　3
★解説
会報「不盡」・題字の謂れ　安間　荘　6
★随筆
【ラグビーと登山】　大石　惇　7
【ヒマラヤ三つの初登頂】　山本良三　8
【登山追憶】　實川欣伸　10
★個人山行
【開山祭と蝶ヶ岳】　赤堀栄子　13
★懇親山行
【三国山塊】　湯山直文　13
★平日山行
【伊豆・長九郎山】　小嶋香織　15
★冬山山行
【入笠山・守屋山】　中村博和　16
★七十周年記念　小山行
【浜石岳】　長野和義　17
★文珠山荘報告
【記録番組上映と山田明氏講演】　諏訪部豊　18
★静岡支部ユニフォーム販売中　20
★会員動向　20
★編集後記　長野和義　20

県は旧三ヶ国（伊豆、駿河、遠江）、人口は約三百七十万人で四国は「古事記」に「この島は、身一つに面（おも）四つあり」と記された（伊予、讃岐、阿波、土佐）所です。四国の人口は、四ヶ国（四県）で約三百七十二万人です。ほぼ同じです。静岡県の面積は四国の面積の二分の一弱です。

次に山です。静岡には、富士山と南アルプス、三千メートル峰が10座以上あります。（そんな県は静岡県と長野県くらいです。）深田百名山は８座、ＪＡＣ選定の三百名山は21座もあります。一方、四国では西日本の最高峰の石鎚山の１９８２メートルで、静岡市・安倍奥の最高峰の山伏（２０１３メートル）より低いです。あと、剣山が１９００メートル台で百名山はこの２座で、三百名山はこの２座プラス７座の９座です。

地形はどうか。静岡は東西から圧力を受けた褶曲の赤石山脈＋南からやってきた伊豆半島、その影響を受けた伊豆、箱根、愛鷹、富士山の火山列、駿河湾は深く入り込みなかなか複雑です。片や、四国は南からの圧力によって出来上がった四国山地と阿波、讃岐の間の阿讃山地と四面を海に囲まれています。四国山地は高さこそ高くはないですが急峻です。

気候はどうかと言えば、静岡の平地は温暖です。中部の平地に至っては特段に温暖で十年に一度も雪が降らないくらいです。南アルプスに沿って富士川沿いに入ってきた寒気が駿河湾で水分補給されて伊豆半島の標高の高いところには降雪がありますがまず温暖です。片や四国はどうか。静岡の人は、四国は暖かく雪など降らないと思っている人が多いと思いますが、四国は山でも平地でも、瀬戸内側でも太平洋側でも雪が降ります。結構寒いです。冬の寒気が日本海から低い中国山地（最高峰は大山の一七〇〇メートル台、次は一五〇〇メートル台の氷ノ山（ひょうのせん）、後は一三〇〇から一二〇〇メートル台）を越えて瀬戸内海で水分補給して、四国山地や阿讃山地にぶつかり雪を降らせます。一月、香川県の平地で吹雪に出合ったこともあります。そして、四国山地もそれほど高くないので寒気はこれを越えて太平洋側にも雪を降らせます。静岡県には天然のスキー場は一カ所もありません。（かつて、富士山に御殿場市営スキー場がありましたが数度のスラッシュ雪崩で壊され撤去されました。）ところが、四国には石鎚山山系にも剣山山系にも数ヶ所の天然のスキー場があります。

静岡の、特に中部の平地の気候が温暖なのは駿河湾という海のせいともう一つ、南アルプス・赤石山脈という大障壁があるからです。赤石山脈の三〇〇〇メートルの壁、二〇〇〇メートルの二枚、三枚の壁があるからです。静岡県民は、多くはそれを忘れていないでしょうか。県の徽章にも富士山、伊豆半島、駿河湾、浜名湖は入っているようですが南アルプス・赤石山脈は影も形も見えない感じです。静岡県民の皆さんには是非とも想起して欲しいものです。

さて、もう一つ触れておきます。

歴史です。静岡は「東関紀行」の昔から東西の街道としての歴史があります。伊豆・富士川の辺りには源平の戦い等にかかる歴史が残っています。それから戦国時代、武田、北条、今川、豊臣、徳川氏らの争乱の歴史。一方、四国には「土佐日記」の昔から本州と離れた歴史が有り、源平の争乱もこれに関わってきます。アスピーテ・溶岩台地、屋島の源平の合戦の跡、平家の落人集落が至る所にあります。四国の山に登っていると良く分か

ります。平家の落人集落と安徳帝の行在所跡、ですね。静岡には、南北朝時代の宗良親王の足跡はありますが天皇はどうでしょう。女帝の関係は山梨・奈良田温泉にありますが静岡にはない感じです。

静岡と四国が歴史で繋がるのは掛川と土佐。山内一豊が土佐の藩主に任じられて土佐に赴きます。船で土佐の高知に入ります。高知県には工石山（くいしやま）という山が二つあります。共に県立自然公園で「四国百山」（高知新聞社）に入っています。１５１６．９メートル（奥工石山）と１１７６．４メートルの工石山です（共に一等三角点本点）。低い方の工石山が山内氏入土佐に関係があります。工石山から高知の港が見下ろせます。工石山山腹、南面に鏡岩という岩があります。この岩を目指していけば土佐の高知の港に入れるのです。そうして、土佐の藩主に収まったのです。

高知市内に掛川神社というのが有ります。二代藩主、山内忠義（彼は掛川で誕生）が静岡・掛川の（忠義の産土神の）牛頭天王宮（現、龍尾神社）の分霊を勧請し、高知城の鬼門鎮護として奉ったものです（後に、徳川家康も合祀）。さて静岡県と高知県の浅からぬ縁ですが、山内氏の参勤交代は大変でした。室戸岬が今でこそ、国道が出来、車で高知から徳島へ簡単に抜けられますが、ここは岩の要害の地です。参勤交代は大勢の一行が通過します。海上より安全な陸路を選びます。阿波・徳島経由にせよ、讃岐・香川経由にせよ、陸路は主に三つ。いずれも千メートルの山、峠を越えて行きます。阿波へ抜ける野根街道、四国百山に途中のピークが入っていますから登りました。驚きました。北へ、工石山横から（奥）工石山東を通っても千メートルを越えての参勤交代です。そして、幕末、坂本龍馬は脱藩します。西へ抜けます。今は「龍馬脱藩ルート」として少し整備されています。四国百山を登っていると時折、これと交差します。

四国から静岡と静岡の山を見てきました。私の四国行きも小学校の修学旅行以来、16回ほどになりました。四国百山も70座ほど登りました。四国の人が四国百山をやる。関西や中国、九州の人がやる。近いから分かります。静岡の人間がやるから面白いのです。「北海道の百名山」（北海道新聞社）をやっているのと同じです。天邪鬼の精神、臍曲がりの精神、意地っ張りの為せる技ですね。

本稿により、静岡支部の会員が自分の県を見直し、又四国のことをより良く知って頂けたら幸いです。

（二〇二〇年四月）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 静岡支部・通常総会開かる

四月八日㈬六時半から、労政会館にて通常総会が開催された。

**開会の辞　総会成立の確認**　（木村勝利）

出席会員24名（決議権の無い５名除く）、委任状57名、合計81名は、会員総数１４２名の過半数。よって本日の総会は成立。

**支部長挨拶**　（有元利通）

コロナ問題で全国支部懇などが延期となり、当支部の七十周年記念行事も12月に延期した。海外登山は中止となった。そういう中で、事前の浜石岳小山行は出来たし、記念誌の発行も予定通り行われたのは喜ばしい限りだ。４月26日の竜爪山集中登山は屋外活動なので予定通り行う。⇩**延期となった**

挨拶をする有元支部長

**議長選出**　（木村勝利）

有元利通氏が選出され、議事進行。

**第一号議案　２０１８年度事業報告（案）**　（木村勝利）

**第二号議案　２０１８年度会計報告（案）**　（西澤祥陽）

**２０１８年度文珠山荘会計報告（案）**　（諏訪部豊）

**２０１８年度会計監査報告**　（青野興喜、杉本孝夫）

**支部創立70周年記念会計・状況**

寄付金56万、支出26万、残30万　（中野雅章）

**質疑応答**

第一、第二号議案一括して質疑。提案通り承認された。

**第三号議案　支部役員、委員会構成（案）**　（有元利通）詳細は別紙。

**第四号議案　２０１９年度事業計画（案）**　（木村勝利）詳細は別紙。

**第五号議案　２０１９年度予算（案）**　（西澤祥陽）

**質疑応答**

第三、第四、第五議案一括して質疑。付帯意見（玉山に代わる海外登山検討、記念行事寄付金受付継続）を付けて承認された。

**会務報告と意見交換**　（木村勝利、有元利通）

1. 支部会員の動向
2. 各事業参加申込みについて
3. その他

記念式典・祝賀会の延期について

4月26日「竜爪山」集中登山について

＊総会後の、恒例の懇親会は中止。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（別紙）

**第三号議案　支部役員及び委員会構成**

**支部長**　有元利通

**副支部長**　諏訪部豊

**事務局**　◎木村勝利　○西村しのぶ

**【公益事業委員会】**

◎有元利通　○中村博和（セミナー担当）、岩崎充弘、小笠原誠、平井隆一、瀬田（旧姓、勝又）千華、中野雅章

○白鳥勝治（自然保護委員、山の日行事担当）、仙石智子、三浦雅司

木村勝利　西村しのぶ（植林事業担当）

**【山行委員会】**

◎諏訪部豊、湯山直文、仙石智子、赤堀栄子、有元利通、平野雅俊

**【会報出版委員会】**

◎長野和義、○山崎　洋、小嶋香織

**【文珠山荘運営委員会】**

◎山崎　洋、○諏訪部豊（兼務）、小柳清人、小柳奈津子、平井隆一

**【会計・集会委員会】**

◎西澤祥陽、市川啓子、原田裕子

**【七十周年記念式典会計】**

◎中野雅章

【会計監査】
◎青野興喜、杉本孝夫

【役　員】
有元利通、諏訪部豊、木村勝利、西村しのぶ、中村博和、白鳥勝治、長野和義、山崎　洋、西澤祥陽、中野雅章

## 第四号議案　事業計画

**㈱事業計画は、「コロナ」を考慮して日程内容に変更があり得ます。事務局に確認して下さい。**

【公益事業委員会】
5月30日㈯　植林下草刈り
坂ノ上公民館前8時30分集合　**中止**
（他6月14日㈰、7月18日㈯、9月19日㈯予定）
6月7日㈰　ハイキングセミナー
「大丸山・金丸山」**中止**
8月10日㈪　山の日記念・親子登山教室「安倍峠」
日程別途　山の日記念・しずおかスポーツフェスティバル登山
10月25日㈰　ハイキングセミナー
「愛鷹山」山田明氏同行
2021年
2月14日㈰　ハイキングセミナー
「高鉢山・西臼塚」

【山行委員会】
4月26日㈰　支部創立七十周年記念・集中登山「竜爪山」**延期**
日程別途　会員山行
「小無間山、大無間山」山中一泊
5月1日㈮～6日㈬
支部創立七十周年記念
海外登山「玉山」**中止**
6月3日㈬　平日会員山行
「コース未定」**中止**
7月17日㈮～19日㈰　会員山行
「横窪沢小屋を訪ねる」コース別途
7月23日㈭～26日㈰　会員山行
「南アルプス南部縦走」コース別途
9月19日㈯～22日㈫　会員山行
「南アルプス白根南嶺」コース別途
11月14日㈯～15日㈰
懇親山行「安倍奥・大光山」
12月16日㈭～17日㈮
平日会員山行「伊豆・猫越岳」
2021年
2月6日㈯～7日㈰　会員山行
「雪山とスキー」高峰温泉

【文珠山荘運営委員会】
4月11日㈯～12日㈰
「山菜天ぷらを食す会」
9時、安倍ごころ集合
6月13日㈯～14日㈰
「ヒメ蛍鑑賞会」
6月28日㈰　「天気・天気図学習会」
「三角点について」**延期**
9月5日㈯～6日㈰　「納涼祭」
10月31日㈯～11月1日㈰
「ハロウィン」
12月12日㈯～13日㈰　「忘年会」
2021年
3月6日㈯～7日㈰
「文珠山荘をベースに山に登る会・下十枚山」

【会報編集出版委員会】
会報「不盡」春号（第87号）
5月末発行予定
会報「不盡」秋号（第88号）
12月発行予定

【集会委員会】
8月12日㈬　「納涼懇親会」
2021年
1月10日㈰　「新年会」会場別途

**【事務局】**

4月25日(土)　創立七十周年記念式典・講演会・座談会及び祝賀会

**(12月6日に延期)**

6月20日(土)　本部総会
東京四谷プラザエフ

9月26日(土)～27日(日)
全国支部合同会議
東京四谷プラザエフ

10月3日(土)～4日(日)
第36回全国支部懇談会・宮崎支部

10月17日(土)～18日(日)　中部4支部交流会・信濃支部、別途案内

11月10日(火)～15日(日)　山岳4団体主催「第3回・南アルプス写真展」
市民ギャラリー

12月5日(土)　全国支部連絡会議
新宿京王プラザホテル
(支部長、事務局長)
年次晩餐会、新宿京王プラザホテル

**【定例会】**　原則4月、8月を除き、毎月第2水曜日（労政会館）

**【役員会】**　原則毎月第4水曜日「チロル」

解説

# 公益社団法人日本山岳会静岡支部報「不盡」題字の謂れと揮毫

元日本山岳会静岡支部長　安間　荘
（会員番号五五七六）

二〇〇〇年、日本山岳会静岡支部創立五十周年記念事業の一環として、支部創立以来の歴史の書証である「日本山岳会静岡支部報」の集成合本が企図された。

また、合本を期に、以降の支部報に連番に加えて静岡支部報に相応しい名称を付けてはどうかとの提議がなされた。

そこで私は「不盡」を提案した。静岡県の山と言えば誰でも「富士山」となるが、世界的にも著名な山でかえって静岡としての地域性が薄れる。

万葉歌人、山部宿禰赤人が、駿河田子の浦から見た富士山の気高さと移り行く美しさを詠んだ「望不盡山歌一首幷短歌・万葉集巻三」の不盡に勝るものはないと思ったからであった。

富士の語源は、アイヌ語のフチ（火）にあると云われる。天空にまで達する純白壮麗な山頂から時たま赤熱の炎を噴き上げる高山に、古代の人びとが深い畏敬と篤い信仰の念を抱いたのは当然のことと思われる。

フチの山に、万葉仮名不盡山を当てた赤人の感性と学識に頭が下がる。

支部報題字不盡の揮毫は、牧野衛名誉会員（会員番号三一九四、元日本山岳会静岡支部長）にお願いした。牧野会員は、一九〇六年九月三〇日生まれで、当時九十四歳でしたがかくしゃくとされ、静岡支部の大長老とも云うべき方でした。残念なことに二〇〇七年六月、一〇一歳で永眠されました。

静岡支部報「不盡」は、静岡山岳人の新たな挑戦に対して盡きざるエネルギーを与え続けてくれることでしょう。

令和二年三月

山部宿禰赤人望不盡山歌一首并短歌

天地之　分時從　神在備手　高貴寸
駿河有　布士能高嶺乎
天原　振放見者　度日之　影毛隠比
照月乃　光毛不見　白雲母　伊去波代加利
時自久曽　雪者零家留　語告
言継将往　不盡能高嶺者
田兒之浦從打出而見者真白衣
不盡能高嶺禰雪波零家留

（万葉集　巻三）

山部赤人　富士山を望む歌

天地の　分れし時ゆ　神さびて　高く貴き
駿河なる　富士の高嶺を
天の原振りさけ見れば　渡る日の影も隠らい
照る月の光も見えず白雲も　い行きはばかり
時じくぞ　雪は降りける　語りつぎ
言い継ぎ行かん　富士の高嶺は
田子の浦ゆうち出でて見ればま白にぞ
富士の高嶺に雪は降りける

随筆

# 「ラグビーと登山」

大石　惇

２０１９年秋、日本でラグビーのワールドカップが行われた。

日本中の国民が熱狂した一ヶ月半だった。それは何を置いても日本代表の大活躍があったからに他ならない。力と力のぶつかり合い、タックルのド迫力、そしてあのスピード、息もつかせぬ攻防、ボールの形も他のスポーツには見られない楕円球で、蹴り方によってはどちらに飛ぶか、どんな転がり方をするのかも予測すらできない不確実さ、一方で、蹴り方次第ではそれをもコントロールできる面白さ（賭け的な一面）もある。しかも、ゴールは相手陣地の最奥にあってそこまでボールを運ばねばならないのに、自分より後ろの味方にしかパスは出来ない。常に味方の選手がボールの後ろに居て働き、相手の防御を突き破って進まねばならない、前にパスをすれば反則となり、ボールを受け損ねて前に落としても反則になる。またタックルを受けて倒れたらボールを放さなければならない。ボールは前には蹴れるが相手にボールを支配され易くなる。陣地を一気に挽回しようとして自陣の22メートル区域以外からキックしたボールがタッチラインを越えて直接出しても、元の蹴った位置まで戻される。

一つの動作、ちょっとした時間のずれによって大きく展開が変わってしまう。そのために両チームの選手30人がそれぞれの持ち場を守りながら攻撃、防御を予測して動かねばならない。いつどんなところからボールが飛んでくるかわからない。選手たちの緊張の連続が１６０分間続く。観客の我々にもその緊張が伝わり、心が引き付けられてしまう。

激しい戦いであるだけに両チームの選手たちに相手に対する尊敬と称賛が、芽生えノーサイド後の互いに称え合う姿に我々も感動する。危険でもあるため実に制約の多いスポーツといえる。レフリーには絶対服従であるがレフリーは選手たちにきちんと説明をする。日常の社会生活の縮図でもある。

ヒマラヤなどの高峰の登山活動にも似たところがあるように思う。まず、第一に雨でも雪でも風があっても行う。第二にレフリーに絶対服従であるということ。

山登りのレフリーは自然であって、逆らってはならないし逆らいようもない。第三は、ゴールは山頂で、攻撃と防御が刻刻と変わる。第四は、そこに到達するまでに何度も登り下りを繰り返さなければならない。そして、トライ（登頂成功）が出来るかどうかは分からない。第五に、意思統一の無い個人プレーや連帯感の無い唐突な攻めは反則で失敗する。第六に、敵は山ではなく自分自身にある。疲れや寒さに対する準備や作戦の緻密さなどすべてが自分にまかされている。

基本的にはボールをもって相手側のゴールラインを越えてボールを地につける。目の前にある山に登る。これら単純そのもののスポーツに、人々が何故引き付けられるのだろう。

随筆

## 「ヒマラヤ３つの初登頂」

山本　良三

私が、静岡大生であった頃の話です。１９６１年、或る日、実験していた私の処へ同期生の安間敦子さんが来て、「兄が酒戸先生の処に来ています」と教えてくれた。安間さんのお兄さん(荘さん)が、浜北高校から、北大へ進学し、山岳部員であることは聞き及んでいた。

早速、酒戸弥二郎教授の部屋へ行くと、荘さんが立っていた。挨拶の後「今度ネパールのチャムラン（７３１９メートル：未踏峰）へ行くことになりました」とのことで、京大学士山岳会員の酒戸先生へ挨拶に見えていた。

これが私と安間荘さんとの初対面でした。25歳の安間さんは既に北大理学部を卒業して深田地質研究所勤務でした。北大ヒマラヤ遠征隊の隊長は医師の中野征紀(57)で、７人の隊でした。１９６２年５月31日、初登頂に成功しました。ＢＣ建設から22日間での登頂で、北大初のヒマラヤ遠征隊でした。

酒戸先生(54)は、１９６０年　京大学士山岳会が派遣したアフガニスタンパミール遠征隊を率いて、ノシャック（７４９０メートル）の初登頂に成功した。８月17日、岩坪五郎(26)、酒井敏明(28)が頂上に立ちました。隊員は６名でした。作家の深田久弥が【将官級の登山家】と称した酒戸弥二郎は、お茶の旨味成分であるテアニンの発見者、命名者としてその筋の人たちに知られた化学者です。明治39年（１９０６）大阪生まれ、天王寺中学から旧制三高入学、山岳部員として活躍した。今西錦司、西堀栄三郎らの２年後輩です。京都帝大農学部に進学、農芸化学科を専攻し、卒業後は宇治茶業研究所に入り、長く研究所長を務めたが、昭和59年（１９５６）静岡大教授に招かれた。

酒戸隊長はワハン谷に入る計画を持っていたが、当地の外国人の間では、果たして日本隊が許可を得られるかどうか、だいぶ問題になっていたようだ。フランス、ドイツ、アメリカ人の間では、京大のワハン計画は否定的な見方が大半であった。カブールに着くや否や、隊長は窓口の文部省へ旅行計画書を提出した。だが、担当課長はこの計画の許可は簡単ではないと言った。なぜなら、文部大臣は何とかして、この計画を許可したい意向だが、内務大臣と国防大臣は、国境地帯に外国人が入り込むことを何としても食い止めたい、という立場である。加うるに、この国にはスポーツというものがない。近代スポーツとしての登山という

ものがない。登山の目的でこの国に入る初めての隊である。そういう状態なので許可は簡単ではない、と。

業を煮やした酒戸隊長と仲内大使は、6月18日に文部大臣に会いに行った。そこで酒戸隊長は仲内大使と相談して、一計を案じて、関係省庁の大臣たちを大使館に招待する壮行パーティーを企画した。これは、仲内大使の外交手腕によるものである。彼らが出席すれば、我々の旅行を公認したことになるし、出席しないと外交上の儀礼に反するというので、結局文部次官が出席した。緊急閣議が召集され、閣議決定となった。結果、ワハンの谷に入ることは許可できないが、山は登ってよろしいという内諾を得た。6月21日のことである。

これから2ケ月後の8月17日に初登頂に成功した。現地でポーランド隊と鉢合わせするというハプニングなどがあり、今年は偵察の予定であったが、急遽登頂隊に切り替える。8月9日ポーランド隊との合同登山について話し合うが、決裂したという経緯付きであった。

最後に、チューレンヒマール（7371メートル）はダウラギリ山群の西部に位置する未踏峰で、1970年10月28日、静岡大学山岳会隊によって初登頂された。31歳になった私が副隊長（登攀隊長）として参加するヒマラヤ初陣であった。それだけに強烈な印象があり、私の海外登山のベースとなった遠征であった。

それは、出足から波乱含みのスタートであった。手頃な未踏峰であったせいと思われるが、登山申請が目白押しで、1970年のポストモンスーン期にのみ空席があった。私はそこに狙いをつけて申請したが、なかなか許可の内諾は来なかった。内諾電報を受けとったのは8月13日であった。既に、通常の遠征隊ならBCを建設する頃である。この時期的な遅れが、我々の気持ちを焦らせた。募金計画の遅れが資金不足を来たし、装備不備を来たし、隊員のリクルートへも影響を与えた。

私は20歳代でのヒマラヤ初登頂を目指したが、既に31歳であった。ネパール政府の登山禁止令やインド・パキスタンの国境紛争などの余波でヒマラヤには手が届かなかった。今回は、1967年アンデス遠征に次ぐ二度目の遠征であった。隊員6名、隊長が早期帰国予定だったので、実質5人であった。それゆえに荷揚げ要員も兼ねてシェルパ6人を雇用した。このシェルパ起用は的中し、荷揚げは順調に進んだのは、二つの要因が考えられる。シェルパ頭：サーダーのリーダーシップが優れていたこと。今一つは、我々隊員がシェルパに舐められないように一生懸命に荷揚げしたことによると思われる。

初登頂成功の要因は、長大なルートであったが、難場がなく、天候に恵まれたことが大きい。

今回はひょんなことから、人生の一時期、静岡に滞在した3人（酒戸弥二郎、安間荘、山本良三）の出会いを思い出したことが発端で、原稿を書く気になった。我々3人が関与した遠征隊がいずれもヒマラヤの7000メートル峰の初登頂という栄誉に浴したという事実を、書き残すことにした。地球上に人類が存続する限り、これらの記録は決して二度と破られることのない登山文化の記録として存続する。ロンドンに行っても、ニューヨークに行っても、これらの記録は保管されており、見ることができる。　完

随筆

# 【登山追憶】

實川　欣伸

終戦直前に生まれ、少年時代はお金も物も無い時代で横浜市の京浜工業地帯のど真ん中で育つ。生家の脇は臨港線（鶴見線）でラッシュ時には２～３分置きに電車が走る。前は産業道路を大型トラックが走り回り、道路の前は日本鋼管、旭硝子等の大企業が立ち並ぶ。家の前に広場があり学校から帰ると野球や缶けり等で日が暮れるまで遊んだ。日曜日は鶴見駅前の総持寺のお墓やその先には二つ池や三ツ池公園があり、又当時は田畑も多く自然の中を遊び回っていた。

昭和32年（中学二年）仲間５人で奥多摩の三頭山へ行くとき鶴見駅前のＩＢＳ石井スポーツでテントを借りた。（当時プレハブで営業）当時の登山用具のテントは勿論、靴やウエアーも全てが重かった。中学を卒業、三井系の企業に就職、部活はソフトボールと山岳部に所属。山は丹沢山系の沢登りがメインだけど、私は鶴見川の傍で育ち小学生の頃、学校から帰ると釣り竿とバケツを持って川に行きハゼを釣り川遊び中に２、３回溺れ、水と高所恐怖症になり部の集中登山の時は一人で尾根を歩き山頂で合流していた。

当時休日は日曜日だけなので土曜日の朝ザックを背負って出勤、終業時登山仲間とザックの重量を計測し重さを競い２尺４寸のキスリングの上に炊事用の大きな鍋を載せて出発。鶴見線、京浜東北線、相鉄線、小田急線と乗り継ぎ渋沢駅へ２時間程で着く。昔は大倉口までのバスがなく１時間ほど歩くと大倉登山口だ。いよいよ懐中電灯を点けて登山開始。真っ暗な大倉尾根・通称バカ尾根との悪戦苦闘が始まる。当時、高校や大学山岳部の歩荷訓練がよく行われて疲労等により遭難事故も多くありシゴキではと問題になった。天気が良ければ夜のバカ尾根は星空の中を天に向かって登ってゆくようで疲れも忘れさせてくれる。私にとって好きなルートだ。急登を登り切ると花立山荘に着く。ここからの登りは少し楽になる。30分程歩くと金冷やしの分岐点だ。左に曲がり現在は木道で整備されているが昔は自然のままで急な下り坂なので金冷やしと付けられたのだろう。10分程で大丸に着く。ここが今夜の幕営地だ。小高い丘の林の中、無風で最高の場所だが、現在の丹沢はテント禁止になっている。この場所は丹沢登山の度にテント泊をして朝方まで酒を飲み交わした等、多くの思い出がある。然し私にとって一生忘れることのない哀しい場所でもある。私が磐梯山で使用したテントを持って私が帰宅した二日後に山岳部の部長が那須へ同僚とキャンプに行く予定だった。私の磐梯山が良いよの一言で磐梯山に変更して、山麓の檜原湖へキャンプに行き、仲間と湖の中ほどから泳ぎ船と競争をして岸に向かった部長の姿はなく探したところ湖底に沈んでいた。白馬岳と丹沢山系を愛した意志に沿い、この大丸に名板とセメント水を上げ墓碑を設置した。私が塔ノ岳に登る際は今でも下山時に立ち寄って手を合わせるが、60年前と変わらず立っている墓碑の傍で平らな場所に幕営する。ここは真冬でも天気が良ければ防風林に囲まれているので朝の目覚めは温かくのどかな気分だ。食事を済ませテントをたたむと昨夜の急坂を登り返し金冷やしの分岐点に戻りバカ尾根に入る。20分程登ると視界が開け山頂に着く。３６０度のパノラマで右に相模灘、左に富士山が見

える。また昔は人に慣れた山頂の主のような鹿がいて食事をしていると寄ってきたが、最近は鹿や猪が増え食害で鳥獣駆除が盛んに行われた結果、姿を見ることはない。山頂の尊仏山荘はトイレが新しくなったが昔と変わらない。主人は花立さんと言う方で温厚な人だ。最近は昼食にカップラーメンを頂く。登りで登山者に「花立さんいる」と訊くと「いるよ」と答えるが交代勤務でいないことがある。多分登山者は途中の花立山荘と勘違いしているようだ。

昭和40年頃ヤビツ峠から、ニノ塔、三ノ塔、塔ノ岳と表尾根を縦走して夕方、塔ノ岳に着くと高校、大学を卒業した女性達が懐中電灯等の装備を持たずに来て困っている。そのような女性達の手を取り下山させ好意を持たれ交際をした。中には当時の東京オリンピックで東洋の魔女と言われた日立バレーボール部二部の女性にも交際を求められた。春の丹沢はガールハントのメッカだった。当時の仲間は大倉口の脇にある水無川でキャンプをしていた際に知り合った女性達の一人と結婚した。

青春時代の土曜の夜には毎週男女５～６人が私の家に集まって来る。多い時には15人で磐梯山、山麓の秋元湖には２年続けて一週間のキャンプに行った。出発の二日前から食料の買い出しやパッキングで大騒ぎだ。上野駅発、最終列車に乗りゲームをしたり、歌を唄ったりして終点の郡山駅まで眠らず、早朝の駅を降りてトラックを停めてヒッチハイクだ。荷台に載せてもらい秋元湖の近くで降ろしてもらい千円を払った。湖畔にテントを張り登山の準備をしてキャンプ場の管理人に小型のトラックの荷台に載せてもらい、磐梯山の登山口へ。小雨模様の中、登る途中、火口から硫黄の臭いがする。無事山頂に着き昼食を済ませ、下山を開始すると直ぐ女性３人が歩行不能になった。元気な女性５人と男性２人を先に下山させ、補助の女性１人と体力のある男性４人で３人を交代で背負い下山。日暮れ間近か、登山口まで後１キロメートル近くなった時、松明を持った５人の男性が登ってきた。先に降りた仲間から事情を聞き救助に来たと。迷惑を掛けたくないので自分達で背負っておりますと言ったが、安心感からか力が抜け背負うことはできず、救助をお願いした。登山口の山小屋に着きウイスキー入りのおじやを食べさせられ皆、元気になった。救助隊は明治大学自然研究サークルと聞いた。キャンプ場に戻ってからのキャンプファイヤーでそれぞれ分担の作業に夢中になっている時、私が闇鍋を作っている鍋の中に大きな蛾が飛び込み、死んだ蛾を取り出し皆に食べさせた。事の成り行きを話した時の悲鳴に近い叫び声は忘れられない。当時も同級生だけのキャンプ等は禁止されていたが塾の講師の振りをして電話で親の承諾を得ていた。帰宅後女性達は親に登山中の出来事を話したらしく電話で感謝された。

若い頃は無茶をよくした。天気が悪くても決めたら出かける。女性１人と男性３人台風接近中の雨の中、軽井沢駅に降

り歩き始める。荒船山（１４２３㍍）を過る頃は夏とは言え避暑地だけあって肌寒さを感じる、そんな悪天候の中お互い励まし合いながら今回の目的地、神津牧場に着き管理棟にテントを張る許可を貰いに受付に行くと、台風が通過するから山小屋に泊まれと言われる。テント泊の予定なので余分なお金が無いと言うと金は払わなくてよいと言われ泊めてもらう。翌朝台風一過の晴天で眺める牧場の景色は牧草に覆われた高原で、眼下には緑に囲まれたネギの産地、下仁田の町並みが限りなく見渡せ吹く風も爽やかだ。そこに当時名犬ラッシーで人気のコリーがいておとなしく人に良く懐く可愛い犬だった。然し無料で泊めてくれた管理人には頭が下がる。神津牧場は女優の中村メイコのご主人で音楽家の神津義行氏の牧場と知り管理人の優しさに納得。今も心に残る感謝の気持ち！！

推薦で大学に入る１年前、同級生たちとキスリングに50㌔ほどを背負い上越線の沼田駅に早朝降りバスで菅沼へ。ここから歩いて金精峠に向かう、峠には男性のシンボルが祀られていた。女性達は見て見ぬ振りをしているようだった。今までは平坦な道だったが、金精山までは急登の藪漕ぎの連続だった。五色沼では視界も開け標高２５００㍍程の火山湖周辺の景色はこの世の楽園だ。五色沼の傍にテントを張りキャンプを楽しんだ。翌日、日光白根山に登り祝杯をあげた。酒が無くなり湯本の酒屋へ行く。主人にどこまで戻ると聞かれ五色沼と言うと驚かれた。藪漕ぎの直登でキャンプに戻る。自然を満喫し下山を始めると山頂直下で爆発音が響き巨大な落石だった。絶景に別れを惜しみながら湯本を通り戦場が原を抜け竜頭の滝、中禅寺湖へ。以前中禅寺湖の千手が浜でキャンプ、悪天候で寒い想い出が、、、

高校３年の10月初旬、女子高の２人から山に行きたいと言われ親友を誘い４人で谷川岳へ。女性は登山経験少なく体力も無さそうなので食料、テント等の装備は男２人で分担。上野駅から最終列車で高崎、上越線の土合駅下車、なだらかな道を進むと緑が深くなり朝なのに何と無く薄暗く感じられる。登山道の斜面に慰霊碑が数多く並んでいる。日本で有数の遭難者を出している一の倉沢と気が付く。クライマーが滑落事故で宙刷りになり確か自衛隊が射撃でロープを切断し遭難者を収容した事故もあった。間違って通り過ぎた。巌剛新道に戻り登山開始だ。登り始めると心配だった女性達は快調だが、相棒が登山口を間違えて体力の消耗からか思うように登れない、彼は小学校からの親友で何回となく山に登っているが一度もバテた事はなかった。仕方なく、相棒のザックを登山道脇に置き、みんなで１００㍍程登っては、私が戻り背負い上げる。その繰り返しで日没前に山頂の肩の小屋に着く。時間も遅く疲労気味なので幕営は諦めた。山小屋の主人から谷川岳のこの時期にテント泊とはとんでもないと小言を言われた（内心そうは思わないと自信過剰な自分がいた）快晴の朝、上越の山脈を眺めながら相棒には昨日の不甲斐無さに苦言を呈しながら天神尾根を下りる。女性達はまた来年、卒業前に丹沢登山に連れていって欲しいと言った、、、春になり連絡するとお嫁に行ったと！！

年を重ねると共に思い出を語る友が減り淋しい限りだ、、、、

完

個人山行

## 開山祭と蝶ヶ岳

赤堀　栄子

２０１９年４月27日は開山祭と相成り、上高地は雪の舞う中大賑わい。幾種類もの樽酒を振舞われ、ルンルン気分で徳澤のテント場へ。

４月28日午前４時出発、雪の樹林帯をひたすら歩くこと一時間ほどで、夜が開け始め、木々の間から明神岳がドカーンと姿を現す。モルゲンロート、綺麗で迫力を感じる。長塀山を過ぎると展望が少しずつ開けてきた。妖精の池を過ぎ、ハイマツの稜線に出た。この時期は雪で真っ白、今日は快晴、風もなく素晴らしい展望にうっとり、山頂にて山座同定。常念岳から中央アルプスまで15座。昨年登った大川入山も見え、只々感激する。

名残惜しいが今日の宿は山研泊まりの為、予定時間までに下りたい。最初の計画は２名であったが、３月末から４月に雪がどんどん降り山研の安井さんより誰か熟練者を連れて来いとメールが届き、急遽諏訪部さんにお願いするとメンバーは７人に、お蔭様で途中挫折することなく無事下山し、山研着16時。蝶ヶ岳山頂からの素晴らしい３６０度の展望、この時期だからこそ見ることが出来た風景、いつまでも残しておきたい山旅でした。メンバーの皆様に感謝します。

参加者：諏訪部、中村、仙石、山崎、大島ゎ、石間、赤堀

蝶ヶ岳山頂にて

懇親山行

## 山中湖周辺・三国山稜

湯山　直文

２０１９年11月９日(土)　長野さんに手配してもらった日機装山中湖保養所「一樹山荘」に各自集合。山中湖村役場近くの明るいカラマツ林のなかにあるモダンな建物で、中は掃除も行き届いており貸切状況でした。

一樹の陰一河（いちが）の流れも他生（たしょう）の縁

夕食・宴会は〈人の世にたのしみ多しされども酒なしにしてなにのたのしみ〉―若山牧水のほろ酔い学会メンバー多く（記録係の自己推察）、差し入れの日本酒・ワイン・ネパールのラム酒等飲み放題でした。

11月10日(日)　天皇陛下の即位を披露するパレード「祝賀御列（おんれつ）の儀」が行われた日であった。

７時、朝食　はし袋には英語で箸の使い方が書いてあり外国人客も見えるとの事でした。

８時、今年同じコースを歩いた加田グ

ループは別コースへ、先発班は篭坂峠へ、後発班は下山地・山中湖交流プラザきらら駐車場へ車を回送して、９時10分アザミ平で後発組と合流しました。〈酒のみて高嶺の上で吐く息は散りて下界の雨となるらん〉―大町桂月の農鳥岳頂上の歌碑を思い出しました。二日酔いで、アザミ平で吐く息は下界の須走・御殿場方面に流れて行きました。

登りの途中で鹿を二頭見ました。三国山稜（富士山北側）東方には、富士霊園・富士スピードウエイがあり新東名高速道路を活用して、災害に強い地域づくりの静岡県内陸フロンティア構想で現在、小山スマートインター・工業団地開発等（３００ヘクタール）の工事が進んでおり、その開発で追われた鹿が仕方（鹿た）無く山梨に出稼ぎに来たのかも知れない。

雪をかぶった富士山は快晴の中いつもより大きく聳えていました。

ここからはアップダウンの少ない歩きやすい尾根道であった。台風19号の被害かブナの木が何本も倒れていました。根が出ていました。＝ブナが風に降参して音（根）を上げた状況でした。

11時、ヅナ峠→11時20分三国山。20人位の人がおり賑やかでした。長谷川さんのキノコ汁で昼食。この味は知る（汁）人ぞ知る味です。

三国山山頂にて集合写真

12時10分、出発。三国峠へ、ここと出発点の篭坂峠は東京オリンピック（２０２０）自転車競技で武蔵野の森公園（東京都）から富士スピードウエイ（小山町）までの２４４キロ（男子の場合、女子は１４７キロ）の自転車ロードレースのコースです。

私、昔、自転車操業をしていました。

×うそー折れた煙草の吸がらで　あなたの嘘がわかるのよ・・・山口洋子作詞

7月25日(土)～26日(日)私はコースサポーターで協力する予定なので楽しみにしています。○本当

明神山へ登らないで下山する照内グループと分かれススキの中の道を登る。

さくらと一郎の昭和かれすすきを思い出した。まずしさに負けたいいえ世間に負けた・・今は令和かれすすきだ。

明神山（鉄砲木の頭）。祠が富士に向かい誇らしげに鎮座していました。

頂上には富士アザミが咲いていました。山には山のうれいあり・・・あざみの歌

パノラマ台経由三国山ハイキングコース入口に。途中照内グループと合流。14時20分到着。後発班の車で篭坂峠へ戻り、解散式を行い終了。

今日の日はさようならー2．空を飛ぶとりのように　じゆうにいきる

今日の日はさようなら　又会う日まで・・・・

【まとめ】　自由生（星）人（記録係の自己推察）→又会う日まで

大勢の仲間と良い宿に泊まり、良き酒を飲み、良い懇親山行でした。

参加者：照内豊　中村博和　長野和義

中野雅章　土屋勇　長谷川広司
篠原豊　小嶋香織　西村しのぶ
赤堀栄子　湯山直文　増田治郎
増田孝治　加田勝利　西澤祥陽
諏訪部豊　有元利通　大島康弘

## 平日山行

# 「伊豆 長九郎山」

小嶋　香織

２０１９年12月18～19日、１泊２日の平日山行に参加した。有休をとってまでとも思ったが、いろいろと楽しく、参加して良かったと思う。

12月とは思えないほど、とても暖かい日差しの中、10時45分発の駿河湾フェリーで土肥港へ出航。駿河湾フェリーに初めて乗ったが、海からの清水と富士の眺めはいつもと違い面白い。山々も見え、沢山の山を教えてもらったが、富士山の周りにだけ雲が覆い、海からの富士山が拝めず残念だった。

土肥で諏訪部さんと合流して烏帽子山へ。近づくにつれ見えてきた烏帽子の形のぽっこりした山。案内板には標高１６４ｍとある。大した事ないと登り始めたが、ひたすら続く狭い階段が辛かった。頂上には雲見浅間神社の本殿があり、展望台からの景色は海の青さと山々の緑が本当に綺麗だった。直線階段を恐々降りて本日の登山は終了。

宿泊場所の下田海浜ホテルへ、はやばや３時にはホテルにチェックイン。お風呂を満喫した後はお待ちかねの０次会がスタート。小川さんの雪山写真のスライドショーがあり、山岳ガイドになった過程のお話もあり、初心者の私にはわからない事もあったが、景色の素晴らしさ（写真家白籏史朗を超えたとの声も）や登山への心構え等とても参考になった。

夕食は食べ放題飲み放題で存分に食べ飲み話しをした。その後は二次会になると思いきや、卓球対決があり、中学卓球部の私が本気を出したが、皆さん負けず嫌いなためか、なかなか強い。小川さんは隣のグループに飛び入り参加し、汗を流した。

２日目は松崎の長九郎山へ、登山口の宝蔵院から出発する。宝蔵院には１００体以上の石仏があり、苔むしていて趣がある。

宝蔵院の石仏群

ここで説明しておくが、この日はフェリーの最終便が欠航なため、午後３時出航に間に合わなければ、陸路を帰ることになる。しかし、計画表では宝蔵院着が２時30分となっているため、しかも朝食の開始時間が30分遅かったため、運転手となる有元さんには申し訳ないが、私は陸路での復路を予想していた。

長九郎山は植林された杉の中を登っていくが、坂は緩やかで、とても歩きやすい。途中から大きなシャクナゲの群生地が続く、きっと開花の時期には綺麗だろう。頂上は木が茂り眺望はないが鉄製の展望台に登れば伊豆の山々が見られた。

長九郎山山頂にて

昼食をとり、下山することになったが、有元さんのペースが早い。緩やかな下りのため危なくはないが、まさか最終フェリーに間に合わせるのか?と思っていたら、宝蔵院に到着次第、靴も替えることなく、車に乗るようにとの指示。

この時の時間は2時20分、宝蔵院から土肥港フェリー乗り場までは約50分かかるため、私が乗った諏訪部さんの車中では無理だよねと半ばあきらめていたが、前を走る有元さんの車は飛ばす飛ばす！土肥港近くになってもカーナビの到着予定時間は3時3分（そこまで短縮するほどの飛ばしっぷり）、乗船券とか買わないとだし、無理だよ～と言っていたら、フェリーが私たちを待っていた。

諏訪部さんへの挨拶もそこそこにフェリーに飛び乗り出航。ゆっくり話しを聞いたところ、小川さんがフェリー会社に電話をし、交渉してくれたらしい。フェリーを待たせてしまう交渉術がすごいと感心するしかない。1時間弱で無事清水港へ着岸。最後まで笑いの絶えない山行だった。

ありがとうございました。

参加者：有元ＣＬ、諏訪部ＳＬ、中野、小川、西村、赤堀、仙石、小嶋

冬山山行

## 入笠山・守屋山雪山山行

中村　博和

二月一日(土)～二日(日)、雪山ハイク・山スキーを楽しむべく、初日は富士見パノラマスノーリゾートのゴンドラ終点から「入笠山」を往復した。

白鳥氏、八木氏は終日ゲレンデスキー。多くの登山者で賑う山頂では小川氏による雪山歩行・滑落停止訓練を実施。富士山・八ヶ岳を展望しつつ昼食。

快晴の入笠山山頂

スノーシュー・ヒップソリを楽しみながら下山した。山スキー組は先行して下山したが、午後二時の集合時間になってもなかなか降りてこず、上部の雪不足笹斜面とゲレンデにてクラストした雪面に苦戦したとの事。増田氏と中村はゴンドラ駅にてデポしていたスキー装備に変え、麓まで気持ちよく滑り降りた。

宿への道すがら諏訪大社下社春宮と万治の石仏参拝。今宵は「日本秘湯を守る宿」の毒沢鉱泉神の湯に宿泊。温泉は鉄分を含み土色の湯。飲泉すると酸っぱい味がした。夕食前、就寝前、翌朝と3回堪能し、湯殿の奥にある神社にも参拝した。

０次会では諏訪部氏が抱き合わせ販売でようやく手に入れたと言う「而今」を美味しく頂き、宿の夕食へ。大ざるに供せられた滋味あふれる旬菜の数々。白鳥・八木両氏から宿の日本酒一升瓶一本買いのプレゼントもあり、盛り上がる。

二次会は旧館離れの角部屋をいいことに皆で山の歌から我が母校の校歌まで次から次への歌合戦となった。

二日目は雪不足のため山スキーは諦め「守屋山」に登った。

白鳥氏、八木氏は北八ヶ岳に場所を移し、ゲレンデスキー。

守屋山山頂にて集合写真

## 「浜石岳」

長野　和義

山梨支部の大澤夫妻の導きで尾根ルートではなく、奇岩散策ルートにて山頂へ。北・中央・南アルプス、八ヶ岳など三六〇度の大展望を眺めつつ昼食をとり、途中から迂回コースで下山。荘厳な雰囲気に包まれる諏訪大社上社本宮も初めて参拝した。好天に恵まれ多くの神・仏に接する充実の二日間となりました。

参加者：諏訪部、増田治、中野、赤堀、小川正、仙石、白鳥、八木、山崎、岩崎、小嶋、石間、大澤純、大澤さ、中村（敬称略）

2月26日は静岡支部創立70周年の記念小山行の日である。有元支部長は二、三日前から天気図を念入りに調べていた。そして前日の夜、天気に大きな崩れがないとみて山行は予定通り決行する旨の通達を参加予定者に発した。

当日、天候は曇り。参加者は9時にJR由比駅に集合。22名の会員と1名の入会希望者の合計23名が参加した。駅横の公園で開会式の後、例によって小川会員の掛け声の下、準備体操をして浜石岳に向けて9時半に出発。多少霧雨混じりの天候だが、全く気にならない。歩くペースは各人が決め、それぞれおしゃべりをしながら歩く。時々休憩を取り、振り向くと駿河湾が望まれる。浜石岳の標高は707メートルで上りのコースタイムは3時間だ。浜石野外センター（旧青少年野外センター）まではコンクリートの車道を歩

霧の浜石岳山頂にて

き、そこでトイレ休憩。そこから山頂まではトラバースして尾根に通じる登山道を歩き、12時半に山頂に着いた。一面霧が立ち込め眺望はないが、新品の派手なユニフォームが目立つ。全員集合の写真を撮って下山、再び浜石野外センターまで戻り遅い昼食を摂った。

昔の青少年野外センターには、嘗てＪＡＣ静岡支部の《不盡文庫》があったそうだ。その顛末は、70周年記念誌の「静岡支部20年を振り返る」に前大島支部長が書いている。

高齢者の中には膝に問題を抱える人が多く、コンクリートの下りは負担がかかる。しかも登りの時には気が付かなかったが、その傾斜は思った以上にきつかった。それでもやはり日本山岳会、80代には達者な人が多かった。下りは大きく列が乱れ、一部レスキューされた人もいたが、15時半には全員が懇親会場の開花亭に戻って来た。（山行のみの３名はそのまま帰宅）

16時からは、懇親会のみ参加の照内長老を迎えて宴会が始まった。今では希少価値となった桜エビ料理に舌鼓を打ちながら、好みのアルコールを注文して談笑は続いた。編集途中の70周年記念誌の試し刷りの披露もあった。参加者の一人一人が指名を受け、簡単なスピーチをして、最後は木村宴会部長の一本締め。ＪＡＣの旗をバックに記念写真を撮り、先行行事は無事終了した。

参加者：諏訪部、白鳥、小嶋、有元、八木、増田治、中野、赤堀、赤石、小川、仙石、小西、青野、篠原、海野、西村、實川、木村、長谷川、市川、原田、長野

（会員外＝入会予定＝薮崎）

ユニフォームを着て集合写真（開花亭）

文珠山荘報告　令和２年３月７～８日

## 【記録番組上映と山田明氏講演】

諏訪部　豊

毎年三月の文珠山荘行事は近くの山に登ることになっているが、今年は少し事情が違った。それは茨城県在住で国土地理院元職員の山田明さんを山荘に招待したからである。山田さんは二〇〇四年に剱岳登頂百年を記念して剱岳山頂に三等三角点を設置するプロジェクトを提案・推進した人である。

新田次郎の「剱岳・点の記」でも知られているように剱岳は一九〇七年に近代登山としての初登頂がなされたが正式な三角点が設置されず、ずっとそのままになっていたのである。山田さんのこの三角点設置活動は「剱岳～百年目の真実」というテレビ番組になり、二〇〇五年にＢＳ－ｉ（現ＢＳ－ＴＢＳ）でハイビジョン放送（当時はまだアナログ）された。私はそれを録画して見ていたので山田さんの名前が記憶にあった。そして二〇一七年一〇月、茨城支部が全国支部懇を開催した際に講師の一人として参加

していた山田さんに会うことができた。またその後、日本山岳文化学会会長酒井國光さんの出版記念会でもお会いすることができた。

一方、白鳥さんは二〇一九年夏、南アの植生保護ボランティア活動に出掛けた際に同様に参加していた山田さんと知りあった。その際、山田さんが静岡県の一等三角点を巡ってみたいとの希望を持っていることを知った。そこで白鳥さんと私は「しからば山田さんに一等三角点のある文珠岳に登ってもらうのを兼ねて文珠山荘に招き、剱岳の件を講演してもらったらどうだろうか」と計画を立てた。と言うことでこの三月の文珠山荘行事は山田さんを招いての講演と文珠岳登山という計画になった。

山田さんとは事前に半年近くメールでやり取りをして当日を迎えたが文珠岳に登る予定の二日目（三月八日）は天気予報がとても悪かった。せっかく茨城から来るのに雨では楽しくないだろう、ということで山田さんには白鳥さんと一緒に初日に文珠岳に登ってもらうことにした（この案はピタリと当たり、二日目は未明から雨だった）。

初日に文殊岳登山を果たした山田さんは午後三時頃やま山荘に到着した。支部会員への山田さんの紹介の後、録画したテレビ番組を早速放映した。これは先に述べた番組で富山のチューリップテレビという地方局が制作したもので一時間を越える見応えあるものだ。山田さんは当時、富山市にある国土地理院北陸地方測量部の部長職で若手職員や地元高校生を率いて見事にこのプロジェクトを成功させた。三角点設置後、剱岳の標高が改めてＧＰＳ測量された。その結果、惜しくも三千メートルに足りない二九九九メートルという結論になった。

講演する山田明氏

録画番組上映後、山田さんの講演があった。山田さんの話では測量は既にＧＰＳを用いた電子測量の時代に入っていて山野を巡る測量官は山田さん達が最後くらいになるそうだ。また地図の川道や等高線などの作図は手作業によるものであり、爪の面積と同じ範囲を描くのに丸一日掛かるそうだ。その他諸々有意義な話が聞けた一夜だった。

翌日は予報通り雨となったので登山は諦め、初の試みとして山の本の朗読を行った。長編は無理なので新田次郎の短編「春富士遭難」を諏訪部が朗読した。その後、解散となったが長野さんの発案で牧之原市大字坂部にある標高１５０．９４メートルの「高根山」の一等三角点を山田さんに訪ねてもらうことにした。同行したのは、長野、有元、白鳥の三会員だった。山田さんからの後日のメールには「図らずも二つの一等三角点を訪ねることができました。楽しい二日間でした」と記してあった。

なお山荘行事参加者は山田さんを含めて十名だった。（他には有元、諏訪部、白鳥、長野、中村、西村、山崎、小嶋、会員外・中川

## 静岡支部ユニフォーム販売中

支部創立70周年を機に作製したユニフォームは今年の新年会から頒布して、既に支部行事等に会員の間で使用されています。追加注文が可能ですので、ご希望の方は事務局木村勝利（０９０-２２６２-０５９２）までご連絡下さい。

左胸に静岡支部名、左腕にJACマーク

品物の詳細と代金および支払い方法は、次の通りです。

① サイズ：S-M-L-2L-3Lの５種類
② 色：萌黄色のみ
③ 価格：３３５０円（送料３７０円）
④ 支払い方法：郵便振替
店名（二三八　ニサンハチ）
店番（２３８）
預金種目（普通預金）
口座番号（６０８２９９４）
口座名義（中野雅章ナカノマサアキ）

**【会員動向】**　令和２年５月１日現在正会員１３５名（団体会員１、永年会員14名、家族会員７名、青年会員４名）準会員８名　会友３名＝１４６名

**【新入準会員】**
桐下昌幸（２０１９年10月）
薮崎眞弓（２０２０年４月）

**【物故者】**
登　三郎（令和２年１月１日）

**【退会】**
長丸とも子（会員番号１５２９３）

**【七十周年記念誌正誤表】**

118ページ　第１次及び第２次隊員：（誤）横井孝江→（正）横井孝恵　第３次山岳：（誤）チャラカラガイムスターク→（正）チャウカラガイムスターグ

119ページ　第５次隊長：（誤）山田徹→（正）山田透　第６次結果：（誤）アスラルトハイルーン→（正）アスラルトハイルハーン

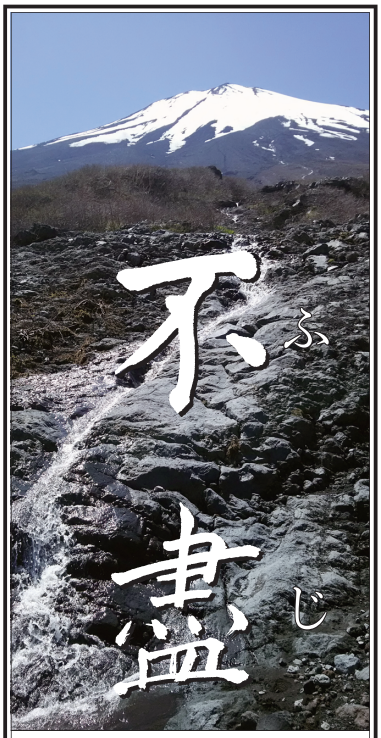
## 編集後記

行事予定が、新型コロナウイルスのせいで、日に日に×印になっています。これから後もキャンセルや延期は続くでしょう。しかし、２月には70周年記念の小山行（浜石岳）が挙行でき、そして４月１日には予定通り、七十周年記念誌も発行できました。多少ともイベントが実施できたのは良かったと思っています。

コロナが収束し、完全に終息するまでは長い付き合いになると思われます。自粛をしながら、我々の活動をどうしていくのかは、その時々の状況を考えて決定・実施していかねばならないでしょう。

今号は70周年記念号としてフルカラーで発刊しました。題字の背景は西村会員の「幻の滝」を採用させて頂きました。（長野）

発行者　公益社団法人 日本山岳会 静岡支部
有元利通
事務局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町８-13　木村勝利
編集責任者　長野和義
印刷所　株式会社　三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031




題字・牧野衛　背景・西村しのぶ

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2020（令和２）年秋季
第88号
支部創立70周年記念号

# 《七十周年記念式典・講演会及び祝賀会》開催される

挨拶をする有元支部長

令和２年12月６日(日)、静岡市葵区七間町毎日江崎ビル９Fの江崎ホールで、14時から、来賓・会員・一般の総勢約60名が出席し、日本山岳会静岡支部七十周年記念式典と講演会がコロナ対策を講じて開催されました。

有元支部長より、当初４月に予定していた創立七十周年記念行事をコロナ禍の為約半年延期して、規模も縮小したが本日この様に開催できたことを会員と共に喜びたいと挨拶がありました。

来賓として、公益社団法人日本山岳会の古野淳会長、静岡県山岳・スポーツクライミング連盟の滝田博之会長、静岡県勤労者山岳連盟の竹本幸造会長、静岡市山岳連盟の望月喜久治会長他２名が出席されました。

## 目次

★《七十周年記念式典・講演会及び祝賀会》開催される　1
★随筆
【敗退の山・敗北の山】　有元利通　4
★平日山行
【高ドッキョウ（高ドッキョー）】　中野雅章　6
平日山行『高ドッキョウ』に参加して　八木　功　8
★こぼれ話
【犬も歩けば棒に当たる】　長野和義　10
★「山の日」記念親子登山
【市民の森・高山】　赤堀栄子　11
★会員山行
【白峰南嶺縦走】　山崎　洋　12
★ハイキングセミナー
【愛鷹山】　小川　恕　14
★初心者登山教室　西村しのぶ　15
★第三回南アルプス写真展開催　木村勝利　17
★懇親山行
【十枚山直登コース】　小嶋香織　17
★ニュース【定例会に講話復活す】　18
★文珠山荘報告
【文珠山荘の行事】　山崎　洋　19
★2021年　山行・行事計画　20
★お知らせ　20
★会員動向　20
★編集後記　長野和義　20

各団体の古野会長、滝田会長、竹本会長、望月会長よりそれぞれ祝辞を頂きました。また東海支部の支部長からは祝電を頂きました。

古野会長の祝辞

次に、式典は記念事業に多大の寄付を頂いた会員に支部長より感謝状が授与されました。該当者は、岩崎充弘、小西晃、木村勝利、青野興喜、青島秀夫、久保田保雄、八木　功、熊岡達雄、實川欣伸、有元利通の10名の方々です。

第一部の式典は滞りなく約30分で終了して10分間の休憩に入りました。

第二部は日本山岳会評議員、元常務理事、京都大学学士山岳会員、日本登山医学会評議員、静岡大学山岳部紫岳会評議員などの多くの肩書を有する山本良三様の講演会です。（海外遠征の肩書は後述）

タイトルは**【山の文化とヒマラヤ登山の軌跡】**で、スライドを使って行われました。

挨拶をする山本良三講師

前段の話としては、２００名のエコノミストを育てた経済学者竹内宏氏に請われて静岡に戻って来たことから、消滅した３組織（静岡師範学校、歩兵第34連隊、旧制静岡高等学校）などに言及し、山の文化の話になりました。登山の文化には登山、スキー、森林、里山の４つの種類があるが、いずれもそこには人が絡む。

講師は京大の今西錦司氏や西堀栄三郎氏に師事して、特に今西氏の「山岳省察」を座右の書としている。自分の山の目標を７０００㍍級の初登頂と決め、しかも仕事と登山を両立させることとした。

海外遠征は１９６７年コロンビアの５０００㍍から始め、１９７０年に７３７１㍍のネパールにあるチューレンヒマールに登山隊の副隊長兼登攀隊長として初登頂に成功。その後、奥アマゾンの探検やカラコルムのテラムカンリは、登山隊派遣本部長を務めた。１９８７年47歳の時、西域学術登山隊でラクダキャラバンも経験した。

約一時間の講演は「人生を振り返って自分は人と時代に恵まれた。竹内宏氏の再評価を次の仕事にしたい」と結ばれました。

## 引き続き祝賀会へ！

江崎ホールでの式典・講演会の後、祝賀会は会場を静岡駅南の「ホテルグランヒルズ静岡」に移して挙行されました。

祝賀会は午後５時、来賓と会員を合わせて34名が富士山、赤石岳、荒川岳などのテーブルに着席して、有元支部長の挨拶で幕が開きました。

有元支部長の挨拶で祝賀会開始

古野会長からは、ＪＡＣは古きサロンの時代から変革した。ウィズコロナでは正しく恐れることが大切との話がありました。

来賓紹介や式典で感謝状を渡せなかった久保田元支部長への感謝状授与があり、愈々乾杯です。当年88歳、井川山岳会会長の長島吉次氏の発声で祝宴が始まりました。

司会を務める木村事務局長

## 新入準会員、伊東見奈子さんの紹介

コロナ対策で各テーブルには、４～６名が座り、隣の人との間には透明板が設置されており多少違和感がありましたが、皆さん工夫して対処していました。

東海支部よりお酒２本が提供されたとの御披露がありました。

## 出席者のショートスピーチ

絶妙の祝賀会を演出した木村事務局長のお蔭で楽しい祝宴はあっという間にお開きとなりました。本当にお疲れ様でした！

## 随筆「敗退の山・敗北の山」

有元　利通

山登りを始めて登頂できればうれしい。達成感、満足感に浸れる。成功の山、幸運の山と言えるだろう。まして、未踏の山に登頂できれば記録に残るし、幸運の山と言える。

私などは比すべくもないが、本会の副会長も務められた重廣恒夫氏の「登山家・重廣恒夫のアーカイブVOL．７～幸運の山①」「・・幸運の山②」などがインターネットで見られる。カンチェンジュンガ（８，５９８メートル）南峰から中央峰縦走、間をおかずマッシャブルム（北東峰７，８２１メートル北西壁から初）、ブロードピーク（８，０５１メートル）、ガッシャブルム峰連続登攀など力があってのことだが幸運の連続でもある。

また、広島三郎（ミツオ）著「Ｋ２．登頂と友情の山」等々、幸運の山というものは多くの人が一定程度経験している。

しかし、記録にあまり残されない表だって読まれることもない、知られることもない敗退の山、敗北の山というもの

もある。イギリスのエベレスト登山隊は１９５３年の第９次隊のヒラリーとテンジンの初登頂までは敗北の山であった。敗退・敗北の後、幸運の山を手にしたのだった。（そういえば、今年は１９７０年のＪＡＣ植村、松浦さんが登頂してから50年の記念の年でした。）

ナンガパルバット（８，１２６メートル）も１９５３年にヘルマン・ブールによって登頂されるまで６回は敗退の山であった。

そういう山の偉人たちの敗退の山・敗北の山は別格としても、常人の私のような者の場合、より多くある。他の多くの人にもあるだろう。今や世の中には「失敗学」という学問さえあるという。目的の基本は失敗の原因を探る、克服するというところにあるだろう。

一般的に山で敗退・敗北する原因は、天候と雪崩、体調と体力、装備、時間によるものが多いだろう。

私の、人によっては大したことのない、海外登山の中で３回程敗退の山・敗北の山というのがある。

一つ目は、１９８０年のハワイ・マウナケア（４，２０６メートル）登頂後の次のマウナ・ロア（４，１７０メートル）で、これはマウナ・ケア登頂前日から使ったハンター小屋の天水、それによる下痢のせいだった。下痢による、特に硬水のための下痢による体調不良、脱水による敗退も多いものだろう。

二つ目は、１９８８～８９年のアルゼンチン・アコンカグア（６，９５９メートル）、高度順応に失敗して５，４００メートルのＣ１の上で敗退した。同時期にＢＣにいた横浜・ベルニナ山岳会のメンバーの一人は肺水腫でムーラの背に乗って下されてしまった。

三つ目は、静岡支部の２００２年の海外山行、天山山脈の未踏峰（仮称）チャウカラガイ・ムズターグ（５，１８２メートル）。これの第一因は、自ら下見を行っていなかった故に安易に登頂可能な山と見誤ったためであろう（下見は新疆登山協会の林さんに委託した、ゴルジュの手前までのもの、そこからの写真では饅頭のような山、モンブランのような山と誤ったのである。その結果は岩登り用の装備を減らし足りなくなる、日数が不足し敗退することとなった。

四つ目は登山でなくエベレストＢＣトレッキングだったがＢＣの手前の（チベット）４，２００メートルのロンブク寺で敗退した。（高地性）肺水腫だった。チベット鉄道でいきなり３６００メートルのラサに着いて少しは馴化のために市内を歩いたが、翌日からは車で４２００メートルを二度ばかり越えていく中で自力で歩いていないことによって馴化できなかったと思っている。そういう点ではネパール側の方が良いのかとも思っている。・今でもよく生きて帰って来られたと思う。途中の夜間診療の人民解放軍の病院に23時半到着、即入院。酸素吸入と点滴だった。翌日戻ったラサのホテルでも医務室のドクターに部屋まで来てもらって酸素吸入と点滴と続いた。夜半過ぎに落ち着いてドクターは帰った。

海外での敗退・敗北はそんなものだったが（それにしても、モンブランをソロですいすいと登ったのとは大違いだった）、国内でも無い訳でもない。足繁く通っている富士山も登頂９０８回（２０２０．９．22現在）だが、他に未登頂も50回程ある。新５合で酷い風雨で歩きもせず撤退したものから、１９９７年４月12日のように御殿場口頂上直下からブルーアイスでアイゼンの爪もピッケルの

石突も入らず８合の上まで滑落（自力下山）したものから、８合上で凍傷になりそうで撤退したもの、８合上や元祖７合で強風で砂が飛ぶ天候で撤退したものも複数ある。その内１回は翌日、奈良の男性が新５合目で車に乗ったまま落石で圧し潰されて死亡した時だった。大岩は石ころや砂礫の上に微妙なバランスで乗っているのだ。砂が飛ぶとその上の、間の石ころが動く、その上の岩が動くということがある。前日、敗退・撤退して幸運だった。敗退・敗北の幸運もあるかもしれない。登頂・幸運の後の不幸もあった。

登頂イコール幸運かというとそうでもないことは登山家、山屋、岳人の諸氏はご存じのとおりです。

１８６５年イギリス人、エドワード・ウインパー一行によりマッターホルンは初登頂された、幸運！だったがこの下山時に７名のうち４名が転落死した悲劇はあまりに有名です（この事件は無罪に終わりましたが裁判にかけられたということでもあります）。

エベレストも１９２４年にA．アービンとG．マロリーによって登頂されていたかもしれない。登頂後に二人が消えたかもしれない。

登頂イコール幸運であるためには無事に下山しなければならない。ナンガパルバットのヘルマン・ブールは、登頂後立ったまま８０００メートルのビバークの後、奇跡の生還を果たしている。現千葉支部長の松田宏也（ヒロナリ）氏はミニヤコンカで登頂はならなかった。サポート隊が遭難したとしてテント撤収後奇跡の生還を果たしておられる。敗退の山、敗北の山ではあるが、生還で幸運の山なのである。

登頂イコール幸運のみでなく、また、敗退イコール不幸、不運とも言えないのである。

## 平日山行

## 「高ドッキョウ（高ドッキョー）」

中野　雅章

日　時　２０２０年６月３日(水)

山　名　高ドッキョウ（１１３３メートル）

静岡・山梨県境興津川沿いの山

（山名については、高ドッキョウと高ドッキョーの両説があるので、表題部のみ両説併記、以下は高ドッキョウとする）

参加メンバー　静岡支部会員８名

有元（リーダー）、八木、長野、篠原、木村、西村、仙石、中野

コース

ＪＲ清水駅⇩ＪＲ興津駅⇩但沼車庫⇩和田島車庫⇩板井沢→樽峠登山口→ヒュッテ樽→樽峠→展望所→湯沢分岐→高ドッキョウ（１１３３ｍ）→湯沢分岐→湯沢峠→出羽⇩和田島車庫⇩但沼車庫⇩ＪＲ興津駅

**思い出に残る山行であった！！**

６月３日、本年度第１回の平日会員山行である。静岡県と山梨県の県境興津川沿いにある高ドッキョウに登った。地形図に山名の記載はないが、従来から「高ドッキョウ」と呼ばれハイキングコースとして人気を得ている。

新型コロナ対策緊急事態宣言の解除を受けて漸く登山再開となって、みんなの表情は明るく会話も弾んでいた。

今回は参加者８名全員が70歳代、80歳代の高齢者集団であった。

ＪＲ清水駅から但沼車庫までは静鉄バスで、そこから先は静岡市自主運行バス（８人乗り、他の客もいたので全員乗れず）とタクシーに分乗して終点の板井沢に到着、そのまま林道を歩く。

林道沿いにはヒメウツギ、ホタルブクロの花が咲き、マタタビの白い葉も目に留まった。

９時過ぎに林道終点の樽峠登山口に到着、小休止後樽川沿いに登山道を登る。しばらくして杉林に入り、30分ほど進むと個人所有の無人小屋ヒュッテ樽に到着した。

この頃から全員がヤマビル（以下蛭）の侵入に悩まされてきた。何時も沈着な長野氏が用意した虫よけスプレーを靴や衣服に散布し、付着した蛭を取り除く作業を繰り返した。虫よけは蛭に効果を発揮した。それでも次々に出没してくる蛭に思いのほか悩まされた。

そしてヒュッテ樽から更に登山道を登り、漸く尾根上の樽峠に到着した。周辺は杉、桧に覆われており展望はない。ここで小休止を取り、体調管理・水分補給などを行った。多少の疲労感と登り詰めた安堵感があり、全員落ち着きを取り戻したようであった。

ここから高ドッキョウへ向かう道は尾根伝いの道であり、30分ほど進むと、６月の木漏れ日が差し込む明るい雑木林となり快適な尾根歩きとなった。ヤマツツジ、サラサドウダン、ギンリョウソウなどに出会い、イワカガミの光沢のある葉も随所に見ることができた。

樽峠から１時間ほどで展望所に到着、雑木林の一部を切り開いただけの展望所であり、尾根から南側清水方面の山々を一望することができた。ずっと雑木林の中を歩いてきただけに、一時の開放感を味わうことができた。

ここから先は最後の急登となり力を振り絞って湯沢分岐まで登った。高ドッキョウの山頂標識はそのすぐ先にある。やがて12時30分、全員トラブルなく高ドッキョウ山頂に到着した。山頂には他の登山客の姿はなく、大変静かで落ち着いた雰囲気が漂っていた。

有元リーダーから良く冷えたアサヒスーパードライミニ缶の提供があり山頂標識を囲んで祝杯を上げた。落ち着いたところで、静岡支部ロゴ入りジャケットを持参された会員もいたので、それを着用の上写真撮影をした。

高ドッキョウ山頂での集合写真

そして13時15分、予定の湯沢分岐経由で湯沢峠まで下ることにした。その後は湯沢川の支流を下り湯沢集落を経由して板井沢バス停まで戻るべく下り始めた。

この湯沢峠までの登山道は地形図に記載がなく、藪漕ぎ・ルートファインディングなどを伴うため相当困難な歩行となった。特に境界見出標・赤色テープの絶対数が少なくルートファインディングに思いのほか時間がかかり疲労感も急速に高まってきた。それでも相互に助け合いながらこの難所を下山し15時には湯沢峠に到着した。

湯沢峠での案内板

ここから湯沢集落までは地形図に登山道の記載があり、また湯沢と記載された案内板も掛けられており特段の問題はないと考え下山を始めたが、実態は全く異なり、その後標識・テープが全く見られなくなった。

この先のルートの手掛かりが得られない状況となり、また時刻も15時を過ぎていたので、安全第一の観点から一旦元の湯沢峠に戻り、反対側の出羽（イズッパ）集落に向けて下山を開始した。台風による登山道の崩壊などの為、ルートファインディングに時間が掛かったが常に現在地を確認しながら進んだので、暗くなる前に無事出羽集落に辿り着いた（下山時刻18時30分）。

歩行距離12・4キロメートル、変化に富んだ長いコースであった。

リーダーの有元さん、そして静岡支部会員の皆さんお疲れ様でした。

平日山行『高ドッキョウ』に参加して

## 【反省と想い出話し】

八木　功

『高ドッキョウ』も『二王山』同様、想い出の山となった。

里山は気が緩んで迷い易い。申込者が高齢者８人と聞いて即参加することにした。

樽峠からのルートは初めてのコースであった。同じ道を戻るなら、疲れたら途中で待てばよい、荷物も最小限にした。二王山では持参した、ツエルト、細引き、非常用品等々を省いた。今回は、四千円強で買った腰用のサポーターを用意した。それが後で功を奏した。

帰路は違う道で、地形図には明確なルート記載が無いと長野氏が云う。私は湯沢分岐からの近道があるのだろうと、その時点では思っただけだった。

頂上への道程は厳しかった。山蛭の大歓迎を受ける中を黙々と歩く、山蛭との初見参は中学３年15歳の春、奈良県吉野北山の山林でのことであった。山林管理のおじさんから『先ビル後ダニ』の話を聞いた。（先頭を歩く人に蛭は取り付き、最後の人にはダニが上から落ちてくる）

その教訓が生かされた形になった。先頭には着いて行けなかった、しんがりはベテランの篠原氏が務めてくれた。予定より１時間遅れで頂上に到着、なんと、蛭が私のズボンの裾にも数匹、後先の差別なく歓迎してくれたのだ。

全員が登り切ったところで、先ずはリーダー有元氏差し入れのビール（ミニ缶）で乾杯。篠原氏からはコーヒーと大福餅が振る舞われた。人数分担ぎ上げてくれたことに感激だ！喜びと感謝の歓声が上がる。

大休止の後、記念写真を撮り終われば、後は下るのみ。新調した腰のサポーター

を装着して万全の構え、下りには自信があった。何と言っても『人生の下り坂をゆっくりと』既に20年余も歩き続けて来たのだから。

恒例の西村さんの夏みかんのピールと、篠原氏のハチミツにはいつも元気づけられる。下りは快調であった。

登山道の状況が急に変わって、藪漕ぎと急斜面になって来た。転倒、転落してはならぬ、と気が引き締まった。南アルプスの前山や、北アルプス餓鬼岳の下りで、転落死した先輩や後輩のことが頭を過る。よくぞ今まで生き延びたと思う自らの体験が、歳を取ったとは言え、こんな所で転倒するものかと、気を落ち着かせてくれた。

それに、何よりベテランのルートファインディング力を信じて安心していた。ところが、リーダーから『来た道を分岐まで、登り返す』と指令が出た。道に迷ったらリーダーの判断に従うのが常道である。全員の行動も躊躇なく素早かった。

ルートは大平の出羽に下るコースに変わった。昔登ったコースだからほっとした。下り始めると全く覚えのない道に思えてきた。稜線でなく沢伝いに近道を取ったのだろうか?それにしても荒れ方がひどい。最近登山者が入ったとはとても思えない状態が続く。標識や赤布が足元に落ちていて、ルートは間違っていないことを示してくれた。

リーダーが最終バスの時間を心配し出した。急斜面のところで、リーダーが布をつなぎ合わせてロープを作り出した。私は細引きを持ってこなかったのを悔いた。しかし、リーダーは下るルートを確信したのだと、ホッとした。

やや安定したところに出た所で、いつでもライトを取り出せるように全員に促して、自分のヘッドランプが点かないのに気付いた。何時もポシェットに入れている、棒状のライトもない。

**今回の山行で初めて焦った。**前を行く女性二人から離れないように急いだ。黙々と下った。堰堤が遠く下方に見えた。工事用道路が近く迄入っている筈だ。

無事下山が出来て、先ず自宅に電話を入れる。『どうぞごゆっくり、どうせどこかで飲んで来るのでしょう!』だと!!これから車道を何時間かかるのか分らないというのに・・・

**蛭の話**

木村さんがセットしてくれた和食の店で、全員が参加して反省会が開かれた。季節料理の御馳走を食べながら、何匹の山蛭にやられて、何匹殺したか、同じ体験を持つ者同士がいかにも愉し気に語り合った。敵を殺すのに何の躊躇もいらない?死刑だ!と勝ち誇って裁いた人もいた。

**『世の中には必須の殺生もある。蛭を殺したら自分の血の匂いがした』こんなにも楽しい山行をさせてくれたのだから、蛭塚くらい建てるべきかもしれないと思った。**

高野山の奥の院への道に、有名企業の墓が並び、いろいろな職業の人の墓がそれに続く。そのまた外れに、動物の墓がある。その動物の墓の隣に白アリの墓がある。シロアリ駆除会社の協会が建てたのだという。

そんな話を知ってなんだか変な気持ちになった。防虫剤の会社が金を出すと

言ったら全員が断るだろう。我々の血を吸った奴だけの塚ならと思ったが止めようと考え直した。

今回の山行は何よりメンバーが良かった。資質と性格が純粋で下りに強い人ばかりだった。人生の下り坂を一緒にゆっくりと共に歩みたいと思った。　以上

（続編）

その後、木村さんから、バスやタクシーの手配をして下さったお礼を兼ねて下山ルートを確認したいという提案があった。

**苦労した、死にかけた場所には行ってみたいものだ。個人的にはそんな思いに駆られた山行は何回かあったが結局果たせなかった。時間の経過が気合を削ぐということか？ゆっくりしていてはダメ！ですね。**

われわれとはレベルが違う登山家（冒険家）服部文祥の言葉を紹介して、とりあえず楽しかった山行報告の終わりとします。

『困難や恐怖の中で自分を見失わず、生き続けること。これは生物の基本的な喜びだと私は分析している。窮地を脱出することに肯定的な感情がなければ、命が今までつながっているはずがないからだ。「いまのはやばかった」というのは恐怖の残像ではなく、生きる喜びなのである。登山の愉しみはそこが背景だと私は思っている。――

正直なところ自分の登山が負っているリスクの強度が高いのか低いのかは、現場を見てもよくわからなかった。私はもう少し自分の登山を信じてもいいのかもしれない…。答えはあるのだろうか。あるとすれば、自分の思う登山を、自分の感覚を頼りに、実践していく先に待っているのだろう。だがその答えは、やはり死という形をとるのだろうか。

この先を考えるのは怖い。だが大丈夫だ。私は死んではいない。少なくともまだ死んでいない。もう少し登ることができる。』

今は廃刊になってしまった季刊誌「考える人」２０１２年冬号の特集、『ひとは山に向かう』の中で「死にかけた場所へ」というタイトルで書かれている文章の一部を拾い出したものです。

氏は１９６９年生まれですから、43歳の時書かれた文章です。長生きして活躍してほしい人です。その他に角間雄介氏なども活躍を期待したい人です。余談ですが、私が今一番心を惹かれる登山家は、写真家でもある石川直樹氏です。

こぼれ話

## 犬も歩けば棒に当たる

長野　和義

日本山岳会静岡支部の会合や行事で静岡まで出かけることが多い。２０２０年９月23日の夜、役員会があった。その時、一会員から明日開店する書店の案内ハガキを貰った。翌日歯の治療で静岡まで出かけたついでに、その書店に立ち寄ってみた。

地図で場所を確認すると、何と昔良く通った山の店「かじわら」の跡地であった。倒産する前のその店は、裏手に数台の駐車場があることを知っていた。裏口

から入ると、丁度静岡第一テレビが取材していた。大型書店が姿を消す中、敢えて街の小さな書店が生きて行けるか？というテーマで番組を制作しているようだった。私は、書籍は大体アマゾンを通じて購入しており、めったに本屋を利用しない。しかし、今日は雑誌「山と渓谷」10月号を買った。この店の名前はTUBAKI、店主は登山が趣味で、南アルプスを中心に歩いている。永野敏夫さんの深南部の本も置いてある。その他の特徴は、奥のコーナーでコーヒーを飲むことが出来る。注文で淹れてくれたコーヒーを飲みながら、購入した本を読んでいた。ペラペラとページを繰って行くと、コーヒーグッズの紹介が載っていた。以前、ドリップで淹れたコーヒーを山頂でゆったりと飲んでいる岳人をテレビで見たことがある。その時、私もこの様な贅沢をしてみたいと思った。これだ、これを購入しようと決めた。店内で至福の時を楽しんでいると、テレビ局から撮影しても良いかと，訊かれたのでＯＫした。

私は、店を出る前にもう一度ぶらりと店内を見て歩いた。その時、バラで陳列されていた一冊の本が私の目に入った。【Your Lone Journey】という薄い本で、老夫婦が一人になった時に読む一種の絵本である。谷川俊太郎の訳が付いている。この本を購入した。私はここに来た甲斐があったと思った。

この日の取材の様子は、９月29日夜のEveryしずおかで放映された。他の書店も紹介されていた。果たしてこのような書店が生きる手はあるのか？購入するものが分かっていれば、アマゾンなどのネットでも良い。街の本屋の意義は陳列されている本棚から、現物を見ながら宝物を発見できることではないだろうか。とにかく犬も歩けば棒に当たる。

## 「山の日」記念親子登山

# 市民の森・高山

赤堀　栄子

２０２０年８月10日、晴れ

午前９時30分水見色（山の神平）集合、７歳から11歳までの子供４人と保護者６人、会員９名、総勢19名が参加。篠原会員のリードで軽い準備体操の後、高山山頂を目標に出発する。

連日の猛暑、熱中症に気を付けて農道を15分ほど歩き登山道に入る。幸い風もあり子供たちは元気一杯有元支部長の後について行く。登山道周辺は地元の方が草刈りや、滑りやすい場所に丸太の階段を付けて下さり、安心して登れることを感謝しながら森の中のハイキングコースを歩く。林道を横切り、程なく高山の池に到着。中野会員から竜伝説の紹介があった。この付近には散策の森、遊びの森、水源の森、竜伝説の森など四方に伸びている。休憩時間を多めに取る。再び森の中を緩く上がり30分で標高７１７㍍の高山山頂に到着。２階建ての『星の展望台』に上ると、駿河湾、清水の港、日本平、静岡の街並みなど展望抜群。親子、会員など皆の歓声が上がる。広い山頂では、各自が好きな場所で昼食を摂った。食後、牛ヶ峰の大きな一本桜の下で白鳥会員の周囲の山の説明と支部長の山講座があった。子供達には難しいかに思われたが親子共々真剣に考え、聞き入る。

牛ヶ峰での集合写真

帰りは『森の恵み』学習展示施設に立ち寄った。林道を少し歩き、午前中に歩いた登山道を引き返して下りて来た。子供たちから「又、来年も来られるかな」「おじさんに聞いて」等の声が聞こえた。暑い中であったが、幸い風もあり気持ちよく、熱中症になることも無く、又事故も無く何より。子供たちの満足げな得意顔が印象に残った良い親子登山でした。

参加会員：有元、八木、白鳥、木村、篠原、長野、仙石、中野、赤堀

会員山行

## 白峰南嶺縦走

山﨑　洋

白峰南嶺は、２０１９年度から会員山行が計画されていたが、台風のせいで２回順延になっていた。今回、良い天気予報ではなかったが、ついに実行に移すことができた。９月18日、金曜日の夜に、仕事終わりで駆け付けた者も含めて４名の参加者が集合し、車１台で移動後、目的地の奈良田までの途中でテント泊。テントの外で寝る前に歯を磨いていたら、急にパトカーが現れて中から出てきた警官２人にここで何をしているのか聞かれるという経験をしたが、事情を話したら特に事件性はないと判断したのだろう、２人は立ち去った。仲間は皆テントから一切出て来ず私１人で対応したのだが、心臓に悪いのでできることならあまり経験したくないものだ。

翌朝４時ごろ車で移動し、奈良田温泉近くの駐車場から行動を開始する。車を降りると、隣に停めていた車からも１人の男性登山者が現れ、準備を始めた。天気は小雨だったが、これから始まる冒険に胸が高鳴る。少しもやがかかった中、吊り橋を渡り、笹山登山口に到着。そこからどんどん登る。最初の頃はあまり体調が良くなく、パーティーの足を引っ張り気味だったが、何度も休憩を繰り返すうちに徐々に良くなり、目に入る情景を楽しめるようになった。数時間登ったところで、前から登山者が下りてくる。なんと今朝駐車場で隣になった彼だ。聞くと、我々がこれから２日かけて歩くルートを、逆からもう歩いて来てしまったという。世の中にはとんでもない健脚者がいたものだ、と目を丸くした。やがて稜線に出、笹山（黒河内岳）南峰山頂に辿り着いた。北峰まで足を延ばして山頂からの景観を楽しんだ後、風がそれほど強くない南峰に戻って幕営。重いザックを背負いひたすら登って溜まった疲れを酒とつまみで癒す。メンバーが作ってくれたサラダに砕いたポテトチップスをかけて食べ、明日の行動予定を話し合う。すぐに夜が訪れ、皆寝息を立て始めた。

２日目は悪天候が予想されたので、できるだけ早くテントを畳む。ヘッドライ

トを点けて、3時台から行動を開始した。道中、獣が逃げる音を聞きながら進む。暗い中、ペンキマークの跡を見失いそうになることもあったがそのたびにパーティーでルートを探し、軌道修正する。

白河内岳付近から見た朝日と富士

まだ夜が明けないうちに雨が降り出した。今思えばここからこの旅の苦難の道のりが始まった。途中、とても近い距離から見えた大きな虹や予想外の雷鳥との邂逅という嬉しい自然のプレゼントもあったが、足元はずっと続く岩場、雨風の勢いは強まるばかりで、だんだん気が萎えていくのを感じた。この日の行程は笹山出発後、白河内岳、大籠岳、広河内岳のピークを踏み、大門沢下降点を経て大門沢小屋を目指すというものだった。白河内岳に着く頃にはますます風雨がひどくなり、体温を奪っていく。ただの雨ならまだしも、これまでに経験したことがないような強風。経験豊富なメンバーも、この風の強さは尋常ではない、と顔をしかめる。やがて、これは冗談抜きで低体温症の発生がありうる状況だとわかってきた。こういう時に一番大切なことは、無理して歩き続けることではなく、まずちゃんと装備を整え、少しでも温かくすること。そして、カロリーを摂ること。これらが今回の山行で身に染みてわかった最も大事な教訓だ。気づけば、震えが出ているメンバーもいた。皆で声を掛け合い、態勢を整えて進む。広河内岳山頂に着いても、寒さでまともに写真も撮れず、こんな風の強い所にはいられない、早く風を避けられるところまで行かねばという状況だった。壮絶な自然の力であった。なんとか下降点まで辿り着くと、その後は嘘のように風がなくなった。そこからは、暴風で波風が立った心と体を鎮めるようにゆっくり降りる。大門沢小屋が見えた時には心から安堵した。小屋に辿り着き、皆無事を喜び、担いできた酒を全て飲み干す勢いで宴会を始めた。装備を乾かしながら話が盛り上がっていたところ、小屋にはいつの間にか自分たちだけでなく5人以上の他の登山客が入って来ていた。あまりどんちゃん騒ぎを続けるわけにもいかず、就寝。心地よい疲労だった。夜中、登山者達は皆真っ暗なうちから出発していく。皆とてもチャレンジングな登山をしているのだなと感心しつつ、もっと寝たいと耳をふさいだ。

最終日の朝、ゆっくり準備。小屋を出発し、のんびり下る。天気も良く、樹林帯の木漏れ日は心に平穏を取り戻させてくれた。道中、大きく回り道をしてしまう場面もあったが、昨日のとてつもない体験を思い出しながら、それに比べれば今は安全だ、と感じ入った。やがて奈良田に到着し、もしかして農鳥小屋の主人かも?という人が軽トラの中から、邪魔な車両に怒声を浴びせている場面に出くわす。ひたすらにリニア工事のため土を運ぶ巨大なダンプカーの往来もあり、肝を冷やしながら、下界は騒がしいなと嘆息。下山後は奈良田の温泉を楽しみ、赤

沢そば処武蔵屋まで移動し美味しいそば定食を頂く。いつもなら山行後は肉などのたんぱく質が豊富な料理を食べに行きたいと主張するが、あんな美味しいそばならまた食べに行きたい。今回の山行は得るものが多かったなと悦に入りながら家路についた。

参加会員：諏訪部、中村、仙石、山﨑

## ハイキングセミナー

# 「愛鷹山」

小川　恕

10月25日㈰8時に愛鷹教会水神社に集合、参加者はセミナー生13名と会員11名、ゲストに元国土地理院職員で一等三角点を巡り歩いているという茨城県在住の山田明氏の計25名、天気は晴天、本日のリーダーは愛鷹山を知り尽くす中村さんでした。

最初は軽い道のりであり、参加者が各々アイスブレイクをし、林道に咲く竜胆等を見ながら雑談をし、水神社から1時間かけて第二桃沢橋に到着しました。ここに愛鷹山の登山口があり、目の前に急登、山頂まで約2時間と書かれ、これから険しくなるのだろうかと思わせる雰囲気を醸し出していました。

そんな登山道では、すれ違う団体がいくらかおり、中高年だけでなく高校生や小さな子供連れの親子等、実際は誰もが楽しめる山であることを教えてくれるように思いました。

愛鷹山の謂れを説明する中村会員

10時半過ぎ頃、鞍部まで到着すると、長泉沼津方面は晴れ、富士山方面はガスっており、富士山を眺める事は出来なかったです。頂上までは約15分ながら、ロープをしっかり掴んで登るという、その日一番の険しさでした。

頂上（1，188㍍）において昼食をとりつつ皆に温かいコーヒー（篠原氏提供）＆紅茶（有元氏提供）が振る舞われ、講習として、一つは山田氏による三角点に関連する国土地理院の管理状態について教わり、もう一つは諏訪部氏に文献から見る愛鷹山（山名は端高（はしたか）山に由来する説等）の講習を頂きました。このような知識は、自分が面白い所にいる、登っている、そのように楽しむのに大変良いものになると思いました。ちなみに今回来た愛鷹山の山頂方面と、鞍部で逆方向に進むとある袴腰岳（1，248㍍）方面には、越前岳（1，504㍍）が最高峰となる愛鷹連峰が続いています。記念撮影も終えた頃、富士山は裾野だけ程度に晴れ、もう少し粘ればと内心思いながらも下山を開始することになりました。

下りは崖じみた大きな溝の上を行く細い道、あるいは泥濘と笹が足元を狂わせており、疲労に負けない集中力を要しました。

登山道から林道に着き小休止。ロープを活用した傷病者の救助に関する篠原氏の講座を挟み、「ここまで歩いてきた道を、人を担いでも降りることが出来るだろうか？」と思ったのは私だけではないはず。

行きに通ることになった登山口まで更に65分、ずっと愛鷹山の裾野を歩き続け、山の広さを体に染み渡らせることになりました。

ここで帰りは、この登山口近くにある、行きの林道の横道から帰還し、更に途中ルートを変え、旧道を通る選択が行われ、もう少しかもう少しかという気持ちで30分と少々歩き、ようやく水神社へ戻る事が叶いました。

セミナー参加者の言葉にもありましたが、私も私で少々の運動不足を感じた登山であり、反省です。

一つ悔しかったのは、帰りの車で富士山が頂上まで見えていた事です。ただ、それも一つの山の思い出とも言えるでしょう。

この度は、楽しい山行を企画し、準備して下さった公益事業委員の皆様に心からお礼申し上げます。

参加者：有元、仙石、山﨑、赤堀、篠原、小嶋、原田、小川恕、諏訪部、八木、中村

## 初心者登山教室

西村　しのぶ

浜松市積志協働センターから「初心者登山教室」を開きたいので、講師をお願いしたいとの依頼を受けた。

山を安全に登る為の基礎知識、技術を学ぶ座学を3回、4回目に登山実習を行うといった内容である。

受講生は20代、40代から70代の男性9名、女性12名、計21名である。定員20名をオーバーする参加者に講座への期待の大きさを感じた。

**第1回講座**　10月24日　講師　平井隆一

スライドで説明する平井さん

一　地図の見方と使い方
地図は必ず持っていくこと。ヤマップ、ヤマレコなどスマホアプリ地図の活用が有効である。

二　山登りの歩き方
登りは体力、下りは技術。

三　いざという時に知っておきたい救急時の対応
まずはセルフレスキュー。不可能としたら迷わず救助要請をする！

**第2・1回講座**　11月7日　講師　篠原　豊

一　初級編のロープワーク
初心者として、ブーリン結びなど知っておくと良い

二　ツェルトの張り方と使い方
ツェルトを張り、図解をもとに説明を受けた。

三　山で遭遇するかもしれないトラブルの対処法

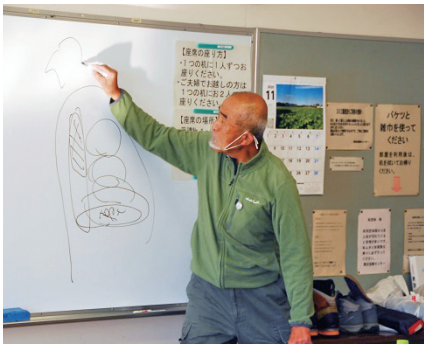
**第2・2回講座**　11月7日　講師　有元利通

一　天気図の基礎知識
山に行く時は天気を予測する、大切なこと！予測は難しく外れることもある。天気の急変に備え悪天候下での行

動の仕方を知っておくことが大事である。

有元さんがラジオの気象通報で記した天気図が配られその細かさに驚く。

**第３回講座**　11月21日　講師　小川正育



ボードで説明する小川さん

**一　登山計画の立て方**

計画書は２通作る。１通は家人にもう１通は入山ポストに入れる。

**二　登山装備の選び方**

**三　食料**

のど越しが良くすぐにエネルギーにかわるもの。

**四　山でのマナー**

**五　心の持ち方**

助け合う心が大前提となる。

登山前、ウォーミングアップのストレッチ、休憩後のストレッチ、下山後のクールダウンは大切です！

**３回の講座を終えて**

受講生から丁寧で楽しく分かりやすかった、スクワットで体力づくりをしたいなどの感想の他、ストレッチ、ロープワークをもっと知りたい、第２回講座望む声も聞かれた。

講師の皆さんは自身の体験を踏まえて講座のテキストを作ってくださった。初心登山者にとってこれからの登山にとても良い教本になると思う。

**第４回登山実習**

11月28日㈯　**湖西連峰・神石山登山**

梅田親水公園に８時20分集合する。

センターの有海さん、有元支部長、木村事務局長の挨拶の後、小川リーダーの軽快なストレッチで体をほぐす。　受講生11名は各リーダーの下４班に分かれ、支部会員も各班につき８時45分順次出発する。

緩やかな広い道を木々の観察などしながらゆっくりと歩く。登山道脇に地元の子ども達制作のたくさんの阿羅漢像が並び、ほっこりする。仏岩は展望も良く、遠く薄化粧した富士山も望めた。

雑木の小尾根を進み、白く大きな岩が３つ並ぶラクダ岩に立ち寄る。岩の先には浜名湖が広がっている。

急登の後、10時30分神石山着。小休止して普門寺峠へ向かう。階段状の急坂を下り緩やかな尾根道となり、望寺岩が現れる。名の通り嘗ては普門寺が見下ろせたのかな？普門寺峠10時50分着。糖分補給してまた来た道を戻る。足元には、ヒトツバが多く見られた。歩き方など講習を受けながら11時15分神石山に着く。神石山は愛知と静岡の県境に位置し標高３２５メートル、一等三角点がある。今日は天候も良く、南面からは湖西ののどかな風景を望み、海も光っていた。

昼食の後、篠原リーダーによるロープワーク、ツェルトの活用法など講習を受ける。

12時15分下山開始、親水公園に13時30分、全員無事下山して小川リーダーによる入念なクールダウンを行う。　持ち味豊かなリーダーの下、各班パワフルな山行でした！

湖西連峰は人気のハイキングコースで今日も老若男女、親子連れで賑わっていた。受講生の皆さんも晩秋の山を楽しんでいただけたと思う。リーダーの皆さん、お疲れ様でした。

神石山山頂での集合写真

## 第三回南アルプス写真展開催

【静岡アート&ネイチャーフェスティバル「未来に残そう美しい山河」】

南アルプスエコパーク、全日本山岳写真協会、静岡版画クラブ、グループ樹（ウッドバーニング等）と共同企画の中で、県山岳４団体の南アルプス写真展が11月３日㈫～８日㈰まで、静岡市民ギャラリーで行われた。

本年で３回目を迎え各団体も展示要領がわかってきて準備、展示もスムーズに進んだ。新型コロナ禍の中で開催期間中の来場者は延べ、７０２人となり昨年を上回る来場者となった。

その後の反省会で、来年も更に「自然保護」を観点に作品の展示をしていこうとなった。

事務局　木村勝利

## 懇親山行

## 十枚山直登コース

小嶋　香織

今年の懇親山行は中部地区担当、11月14日～15日安倍奥の十枚山への山行である。お宿は梅ヶ島温泉「湯の華」古い民宿だが、お湯も食事も良く、気持ちよく過ごせた。

一日目はお宿に４時集合だったが、すでに２時頃から酒宴が開かれていたようで、参加者は到着次第、諏訪部さんご提供の日本酒で乾杯となった。その後は例年通り、懇親会から二次会となり思い思いに呑んで語り、それぞれ就寝となる。二日目は六郎木で登山のみの参加者３名と、梅ヶ島在住の若者２名と合流し、登山口の中の段へ、前日の疲れ（お酒）が残っている方や膝に不安をかかえる方も若干いたが、概ね元気に出発。

木の切り立ての良い匂いがする林の中をひたすら登る。林業をしているゲストのＯさんは毎日通う職場のようで、ガソリンのボトルを重機のある場所まで運ん

でいた。柄スウェット上下で地下足袋姿の若者なので、話すとき緊張したが、穏やかな感じであった。

分岐点から直登コースへ、その名のとおり更に登る。急登の合間の視界が開けているところで見渡すも、ガスが増えてきて嫌な予感。まだかまだかとひたすら登り、やっと頂上に到着したと思ったら、みぞれのような雨が降り出してくる。当然ご褒美となる眺望もなく、寒い中風を避けての昼食となった。

有元支部長から柿と紅茶のサービスを受け人心地つくも、やっぱり寒いからと早々に集合写真を撮り、下山となる。

まずは稜線歩き、葉っぱ仮面に驚かされつつ十枚峠へ、そこからは昨年の台風被害から修繕されたばかりの沢コースとなった。

沢がいくつかあり、崩落したような箇所もあったが、ロープがあるのでなんとか下っていく。複数人から昔はこんな所は通らなかった。こんな危険な感じではなかった。などの話しを聞き、昨今の台風の猛威を考えると、道はもっと悪くなっていくのかと危惧する。

分岐点前ではカモシカ発見！一段下にいたので顔が確認できなかったけど、私にとっては初のカモシカとの遭遇で嬉しかった。

十枚山山頂での集合写真

再び伐採中の林の中を下り登山口に到着。全員無事に下山できた。楽しい山行をありがとうございました。

参加会員：有元、木村、中村、長野、篠原、白鳥、西澤、増田治、岩崎、八木、諏訪部、仙石、小嶋
（山行のみ）平野、中野、赤堀
（ゲスト）工藤、小倉

ニュース

## 【定例会に講話復活す】

10月14日㈬「あざれあ」で開催された定例会の議事終了後、八木功会員より講話がありました。定例会がサロンであった頃は、いろんな人の講話で盛り上がったと聞いています。山行や行事計画の報告のみでなく、有意義な講話を是非復活して欲しいとの要望で今回再開されました。当日の話は、講師の最近の身の回りのことから起こし、9月5日～6日の文珠山荘での納涼会で幅広い年代の会員で展開された談論におよび、若い人の発言にはショックを受けたとのこと。講話の合間に、蟻はどの足から歩き出すか？などのクイズもありました。配布された資料には、八木会員の過去を語ってくれる記事や写真などが添付されていました。特筆すべきは、１９６９年８月、小西隊員とアイガー北壁の日本人第４登を成し遂げたことでしょう。

僅か15分足らずの時間では語り切れません。会場を変えて潤滑油を指しながら更に盛り上がりました。

今後事務局では、当支部の会員だけでなく、他支部や本部から講師を招いて年に数回は開催していきたいと考えています。ご期待ください。

## 文珠山荘報告
# 【文珠山荘の行事】

山﨑　洋

文珠山荘の運営委員長を昨年度から務めているが、不盡で山荘報告の原稿を書くのは初めてである。今回は、今年度に入ってから実施した行事を報告したいと思う。行事の開催は、いずれも土曜と日曜である。

4月11日、12日に「山菜天ぷらの会」を実施。会員の小柳さんご夫妻のご協力を頂き、その名の通り山菜を天ぷらにして山荘で食した。写真は２０１９年の開催時のものであるが、大量の天ぷらを肴に昼間からビールが進んだ。なんといっても収穫したてのタラの芽がおいしい。「山でうまいはオクラにトトキ、里でうまいはウリ、ナスビ」という格言？もこの企画で小柳夫人から学んだ。私は余った天ぷらを自宅に持ち帰り、2日ほど、山菜天ぷら蕎麦を作り七味をかけて楽しんだ。好評の企画ではあったが、例年、ご夫妻の負担が大変大きいため、代替企画を検討中である。

新緑の４月、山菜でビールを頂く贅沢

続いて、6月13日、14日に「ヒメホタルを観る会」を実施。山荘周辺で夜に飛ぶヒメホタルを観察するという名目で開催しているが、近年、タイミングが合わず、なかなかその姿を確認できていない。山荘付近の林の伐採により、飛んでいるか怪しいという声もある。近頃、看板に偽りがある状態が続いているので、こちらも良い開催名目があればそちらに乗り換えたいと考えている。

9月5日、6日は「山荘納涼祭」を開催。今年度の企画中最多人数の13名の参加があった。納涼というにはまだ暑さのピークが続いていたが、人手の多さを活かし、大掃除を行った。労働の後に昼間から頂くビールは格別。夜には議論が白熱し、恒例の山の歌を歌う時間を省略した初めての会となった。

10月31日、11月1日には「ハロウィン」を実施した。今年の31日はちょうど、1ヶ月に2度満月が見られる珍しい「ブルームーン」と重なった。寒くなってきたこともあり、皆で今季初の鍋をつつく。栄養満点で風邪予防になる。その後は夜、外に出てキャンプファイヤを楽しんだ。近年、直火で火を点けられるキャンプ場も減少している中、お酒を飲みながら皆で火を囲み好きなだけ歌唱し談笑できるのは、文珠山荘行事の大きな魅力の一つである。また、この日に前山荘運営委員長の諏訪部氏のセレクションで上映した映画「ザ・マウンテン 決死のサバイバル21日間」は、飛行機事故での遭難後、雪山からの生還の間に登場人物の男女に生まれる愛情をテーマにしたもので、参加者に大変好評だった。

さて今年度は、12月12日、13日の「山荘忘年会」と、新年3月6日、7日の「山

キャンプファイヤー

荘をベースに山に登る会」（下十枚山を予定）の開催を控えているが、新型コロナウイルスの感染拡大に歯止めがかからないため、動向を注視している。早くコロナ禍が終息し、登山の装備にマスクが必須となる異常事態に区切りがついてほしいものだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## ２０２１年　山行・行事計画

前半の計画は次の通りです。

２月６日㈯～７日㈰　会員山行
「雪山とスキー」高峰山
２月14日㈰　ハイキングセミナー
「高鉢山・西臼塚」
３月６日㈯～７日㈰
山荘をベースに山に登る「下十枚山」
４月10日㈯～11日㈰
文珠山荘行事、敷地内桜の花見
４月14日㈬　支部総会
４月20日㈫～21日㈬
平日山行「神津島・天上山」
５月９日㈰　会員山行「岩岳山」
５月16日㈰　第一回ハイキングセミナー
安倍奥「突先山」
５月30日㈰　会員山行
東御市「信州大室山」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## お知らせ（集会委員会）

**令和３年１月10日　静岡駅前松坂屋８Ｆ「梅の花」開催予定の新年会は、コロナの関係で中止となりました。**

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 【会員動向】

**【新入準会員】**

伊東　見奈子（２０２０年10月）

**【退会】**

高須　梧郎（会員番号１１３９７）
杉浦　實（会員番号１４８７０）

## 編集後記

４月に予定していた七十周年記念行事は新型コロナの関係で12月に延期されましたが、この記事をトップにして春号に続き秋号もフルカラーで発行しました。そういうわけで発行が年末ぎりぎりとなってしまったことをご理解いただきたいと思います。当初予定された行事の中には中止となったものもありますが、支部の歴史に区切りを付けられたのは喜ばしい限りです。

今号で高ドッキョウ山行に関連して大分紙数を費やしましたが、一つの山行を深く掘り下げるのも偶には良いのではと思いました。

２０２０年も年末になり「はやぶさ２」のミッション成功の明るいニュースが飛び込んできました。そして会報不盡は88号、末広がりの目出度い数字で、今年を締めくくることになりました。来年が会員や家族の皆様にとって良き年となりますようにとお祈りします。（長野和義）

発行者　公益社団法人 日本山岳会 静岡支部
有元利通
事務局　〒420-0948
静岡市葵区秋山町8-13　木村勝利
編集責任者　長野和義
印刷所　株式会社 三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031

題字・牧野衛　背景・長野和義

公益社団法人
日本山岳会
静岡支部会報
2021（令和3）年春季
第89号

## 【通常総会開催・新体制決まる】

総会会場風景

２０２１年４月14日、18時30分より「あざれあ」にて令和３年度通常総会が昨年制作された支部旗を掲げ開催された。開会に先立ち昨年暮れにご逝去された青島秀夫名誉会員に黙祷を捧げ、有元支部長の司会で、令和２年度の活動報告、会計報告があり、質疑応答の後承認された。次いで次期役員・委員会構成案の議案が審議され、質疑応答の後承認された。

ここで、議長は新支部長の中村博和さんに交代して、令和３年度の事業計画と予算案を審議、質疑応答の後承認された。

最後に支部規約の改正、有元前支部長提案の【リニア中央新幹線南アルプストンネル工事中止を求める特別決議】案が採決、承認された。《注：この決議は16日の静岡新聞と中日新聞に掲載された。》

## 目次

★通常総会開催・新体制決まる　1
★新役員一覧　2
★就任挨拶（新支部長・新事務局長）　2
★退任挨拶（旧支部長・旧事務局長）　3
★令和３年度事業計画　4
★会員山行１　高ドッキョーの検証　仙石　智子　5
★随筆　密　漁　山﨑　郁郎　7
★特別寄稿　令和元年日本山岳会年次晩餐会のメインテーブル「富士山」　北海道支部　芳賀　孝郎　9
★会員山行２　平日山行「伊豆・猫越岳」　諏訪部　豊　11
★静岡の森づくり（川合山）　山本　良三　12
★個人山行【痛恨の釣り山行】　加田　勝利　15
★紀行文　如月の焼岳　白鳥　勝治　16
★会員山行３　山荘をベースに山に登る会　山﨑　洋　17
★文珠山荘便り　山﨑　洋　18
★ニュース・会員動向　20
★お知らせ　20
★編集後記　長野　和義　20

## 【2021～22役員一覧】

支部長…中村博和
副支部長…当面欠員（候補が決まれば、定例会で追加承認をする）
事務局長…諏訪部　豊
事務局員…小嶋香織（ＩＴ担当）

**公益事業委員会**
委員長…有元利通
（ハイキングセミナー担当）
副委員長…白鳥勝治
（自然保護、「山の日」行事担当）

**山行委員会**
委員長…諏訪部　豊
（合宿山行、休日山行担当）
副委員長（休日山行担当）…仙石智子
副委員長（平日山行担当）…有元利通

**文珠山荘運営委員会**
委員長…山﨑　洋
副委員長…白鳥勝治

**会報編集出版委員会**
委員長…長野和義

**会計・集会委員会**
委員長…伊東見奈子

**会計監査**
西村しのぶ、増田治郎

## 就任挨拶

中村新支部長

### 支部長就任にあたり　中村　博和

支部総会でご承認いただき支部長に就任いたしましたが私を知らない方もおられると思いますので紙面を借りて自己紹介と抱負を述べたいと思います。昭和43年申年生まれ、七月で53歳。山は高校山岳部入部を機に始め、大学では山岳サークル、社会人になって友人及び個人山行にて月2～3回の里山低山山行、夏はアルプステント縦走というスタイルを36年間続け、ＪＡＣには深南部に行きたく入会しました。仕事は29年間人材サービス会社でキャリアコンサルタントとして就職支援を行っています。

ＪＡＣは単に山登りを楽しむだけでなく、社会への発信力をもつ団体です。「山の日」の記念行事やリニア問題に絡む南アルプスの自然保護を呼びかけ、岳人のみならず山登りをしない一般の方にも山の素晴らしさをアピールできるイベントを創って行きたいと思います。静岡支部は文珠山荘という夜通し飲み歌い語り合うサロンとしての場もありますし、会員山行も目白押しです。より良い支部運営を行うべく皆様からのご意見、ご提案、各種行事へのご参加をお待ちしております。

### 事務局長　諏訪部　豊

今期の事務局長を拝命することになった諏訪部です。不慣れではありますがよろしくお願いします。

振り返れば事務局長は前支部長の有元さんが若い頃から長年に渡ってこなして来た会務です。また有元さんの後を受けて木村さんが大島元支部長の時に一期二年、有元前支部長の時に二期四年、合計三期六年事務局長をやって来ました。私はこの二人しか当支部の事務局長を見ていませんが痒い所に手が届くような気配りと煩雑な書類作りが必要であり、元来大雑把な私にこなせるかどうか今でも心配しています。

ともかく私は良い意味で手を抜くことを考えながら進めたいと思います。例えば私がもう一つ所属する日本山岳文化学会の事務局長、中岡久さんのやり方です。中岡さんは三役会や常務理事会（私も常務理事の一人）にはＰＤＦファイルの議案書を事前にメール添付で送っています。それを各自がプリントアウトするかタブレット端末に転送するかして会議に臨んでいます。それによって事務局の印刷作業がなくなるのです。いきなりは無理でしょうが当支部の定例会もこんなやり方にして行きたいと思います。また議事録も残した方が議論の後戻りが発生しなくて良いと思いますし、議事録を会員にメールすれば定例会に出席しなかった人も様子が分かると思います。

また各行事の参加者把握は年度当初は事務局が行いますが各会員からの年間行事参加希望がある程度出揃ったらそれ以降は各委員（公益、山行、山荘等）に任せてしまって事務局の負荷を低減して行きたいと思います。

事務局長は正に「労多くして功少ない」損な役回りだと思います。だから誰もが敬遠してしまってなり手がいないのです。しかし三国志の諸葛孔明のように格好良く立ち回れば（私には無理か？）、「次は私がやります」と言う奇特な御仁が出て来るかも知れません。それを期待して今後の活動を進めて行きたいと思います。支部会員諸氏のご協力を切に願う次第です。

## 退任挨拶

### 支部長退任のご挨拶　有元　利通

二期４年の任期満了まで支部長を務めさせて頂き有難うございました。これもひとえに会員の皆さんのお陰です。

就任以来気になっていた七十周年記念事業については初期の計画から、募金への協力、実際の講演会、式典、祝賀会と様々変更したり中止したりと紆余曲折したにもかかわらず会員の皆さんのご協力のお陰で曲がりなりにも実行できたことは誠に嬉しく、感謝に堪えません。

七十周年記念事業で良かったのは過去七十年に亘って支部に関わった人たちを記念誌で少しは顕彰できたことではないかと思います。二つには、新しく支部名入りの旗が出来たことです。三つには、これが一番かもしれませんがこれまでなかったユニフォームを、希望者のみとはいえ作ったことです。

今後は、新支部長を中心に益々の支部の発展を期待しております。当方も微力を尽くしたいと思います。

### 事務局退任に向けて　木村　勝利

２０１５年度より事務局を務めさせていただきました。

経験豊富な有元さんの後を受けた木村ってどんな奴だろうと思った事でしょう。最初の１年は大島支部長（当時）に兼務をしていただきながらのスタートとなりました。

定例会での進行、レジメの作成、資料作成、会報の発送作業手伝い、総会資料作成発送、本部への連絡や会議の参加、神奈川支部との交流会、中部４支部交流会、全国支部懇談会参加者の取りまとめなど準備に追われました。

２０１８年11月３日㈯～４日㈰中部４支部交流会の幹事支部となり、「三保園ホテルでの交流会」や「満観峰ハイキング」の開催、２０２０年、静岡支部創立七十周年を迎え、２年前より役員で実行委員会を立ち上げ、式典、海外登山、そ

の他、記念事業を計画し、当初４月25日に「記念式典、講演会、祝賀会」の予定で会場の準備、その他を進めてまいりましたが、新型コロナ感染症の影響で延期となり、開催が危惧されましたが、12月６日㈯開催になったこと、浜松市積志協働センターの依頼による「初心者登山教室」開催、「森づくり事業」に参加、支部会員の呼びかけによる、県山岳４団体（県岳連、市学連、労山、日本山岳会静岡支部）主催による「南アルプス写真展」の開催等々、充実した貴重な経験をさせていただきました。

至らぬ事務局でしたが、会員の皆様のご理解、ご協力に感謝を申し上げ、退任の挨拶とさせていただきます。有り難うございました。

## 令和３年度事業計画

**【公益事業委員会】**

5月16日㈰　第1回ハイキングセミナー「安倍奥・突先山１０２１㍍」

6月5日㈯　浜松市積志協働センター、登山講座「富士山・村山古道」講師・西川卯一

8月9日㈪・㈷　山の日記念、親子登山教室「富士山周辺・高鉢山～西臼塚」

10月31日㈰　第2回ハイキングセミナー「川根・八高山８３２㍍」

11月2日㈫～7日㈰　山岳４団体「第４回南アルプス写真展」市民ギャラリー

令和４年

2月20日㈰　第3回ハイキングセミナー「雪山入門・三国山稜」

★静岡県スポーツフェスティバル登山、日程は未定

★森づくり事業「静岡流通センター敷地内、植樹、整備」作業日はその都度設定実施

★本会１２０周年記念事業、古道調査「村山古道」「大日古道」日程はその都度設定実施（会員外歓迎）

**【山行委員会】**

4月20日㈫～21日㈬　平日会員山行「神津島・天上山５７２㍍」、中止

5月9日㈰　会員山行「春野・岩岳山１３６９㍍」

5月30日㈰　会員山行「東御市・信州大室山１１４６㍍」（大室山シリーズ３座目）

7月22日㈭～25日㈰　中央アルプス全山縦走　コース別途（21日夜発）

9月18日㈯～20日㈪　後立山連峰縦走コース別途（17日夜発）

9月28日㈫　平日会員山行「滋賀県・日本コバ８３２㍍」（日本シリーズ１座目）

10月20日㈬　平日会員山行「山形県、新潟県境・日本国」（日本シリーズ２座目）（19日夜発）

11月13日㈯　懇親山行、西部地区担当コース別途

11月27日㈯～28日㈰　深南部「房小山」

12月1日㈬　平日会員山行「富士山周辺・片蓋山～腰切塚」

令和４年

1月19日㈬　平日会員山行「静岡三山・舟山、木枯らしの森、諸岡山」長靴必要

2月1日㈫　平日会員山行「日本平・有度山」（日本シリーズ３座目）

2月5日㈯～6日㈰　雪山と山スキー「黒斑山・東篭ノ塔山」高峰温泉泊

**【文珠山荘運営委員会】**

4月10日㈯～11日㈰　「花見の会」山荘敷地内に咲く桜の花見

6月12日㈯～13日㈰　「ロープワーク講座」

9月4日(土)～5日(日)「納涼祭」
11月6日(土)～7日(日)「ジビエ料理を味わう会」
12月11日(土)～12日(日)「忘年会」
令和４年
3月5日(土)～6日(日)「山荘をベースに山に登る会・欅立山889(メートル)」
4月2日(土)～3日(日)「花見の会」山荘敷地内に咲く桜の花見

**【会報編集出版委員会】**

(1)ＤＴＰ（Desk Top Publishing）２０２１年3月より勉強会開始、継続する。２年後を目途に、自前で印刷原稿を作成し、オンライン印刷による会報発行を目指す。
(2)委員会の開催（適宜開催、メール、LINEも利用）
(3)会報の発行
5月、支部会報「不盡」89号発行
11月、支部会報「不盡」90号発行

**【会計・集会委員会】**

8月11日(水)「納涼懇親会」会場未定、別途お知らせ。
令和４年
1月16日(日)「新年会」会場未定、別途お知らせ。

**【事務局】**

4月14日(水)　支部通常総会
6月19日(土)　本部総会
9月未定であるが例年支部合同会議
12月4日(土)　年次晩餐会未定であるが同日支部連絡会議
★全国支部懇談会、中部４支部交流会は日程未定
★定例会
原則：4月、8月を除き毎月第2水曜日に行う。（基本、労政会館）
★役員会
原則―毎月第４水曜日に行う。（基本、チロル）
令和４年
4月13日(水)　支部通常総会、会場未定

①

## 高ドッキョーの検証
### ～湯沢から湯沢峠を目指す～

仙石　智子

令和2年6月3日に平日山行として高ドッキョーに行き、下山ルートの変更を余儀なくさせられたので参加者全員の胸にくすぶる思いが残ってしまった。後日の反省会で、下山する予定だった湯沢より湯沢峠のルートを検証しようではないか、いうことになり、山蛭が活動しない初冬を選び、11月30日に決まった。メンバーは中野さんが都合悪く不参加だったが、新たに白鳥さんが加わり前回と同じ8人となった。

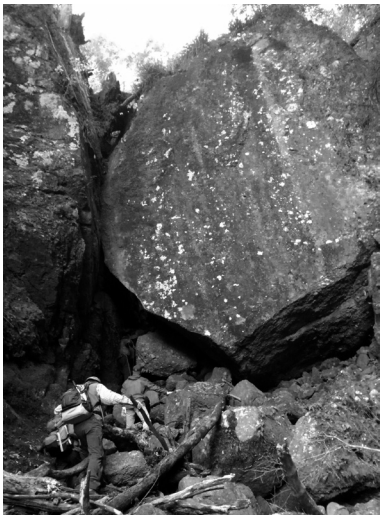
当日は興津駅8時半集合、ＪＲ利用組を乗せて車2台で湯沢の集落に向かい湯沢橋の手前に駐車。11月末にしては暖かい日が続いたせいか、道路沿いにアジサイの青い花が咲いていた。時季外れに咲くのを「狂い咲き」と口にするがもう少し他の言葉はないのだろうか。今年の秋以降スミレ、タンポポ、ツツジなどの花が見られた。温暖化の影響が花にも及び、これからは二季咲の花が多くなるかも知れない。

橋を渡り近くの民家のおばあさんに登山口を教えて頂くと「今は歩けるかどうか分からないよ」との事。前回もタクシーの運転手さんに「通れるかどうか」と言われたので一抹の不安を覚えた。右手の民家の雨樋に朱の字の看板が掛けてあり、お地蔵様の絵も描かれてあった。9

時半民家の横から裏山に入り登り始めると、先ほどのおばあさんが下から見上げていた。一緒にいた犬は、我々の姿が見えなくなるまで吠え続けていた。

草が刈ってあったのも少しの間で終り、先頭を歩く有元支部長の枝払いのお蔭で林の中へ進めたが、直ぐに阻まれた。その時、木村さんは猟師のカンが働くのか「こういう林は尾根を歩ける」と上に登っていった。残る7人は眼下に堰堤を見つけたので、木を頼りに河原に降りて小休止、10時だった。涸れた沢沿いに登山道らしき踏み跡は見当たらず、行けるところまで行ってみよう、と沢を詰めることになった。

快調に進んでいくと、突然目の前に垂直の壁、いや大岩が沢の中いっぱいに鎮座していたのだ。もはやこれまで？いやこれまでではなかった。昔取った何とやらで、白鳥さんの血が騒ぎ「オイラの出番だ！」と一人偵察に行った。（あくまでも私の推測にすぎない）。岩の左側に空間があり、丸太が足掛かりになりそうに見えた。皆で行方を見守っていると木村さんからの電話、彼は尾根を登り峠の手前まで来ているとのこと、何か安心した。



偵察に行った白鳥さんから「大丈夫」との声、ゴーサインが出た。先ずロープを持参の篠原さんが上がって確保の体勢を取り、一人ずつ引き上げて貰った。私が丸太に乗せた靴が滑り困っていると、後続の八木さんが靴の底に手を置き、足を支えて下さったので無事に上がることが出来た。八木さんに謝謝。その先で白鳥さんが手を差し伸ばし一声「左へ」と言われたので左に上がると「右だよ」と。えっ？確かに白鳥さんは左だけど、ま、上がれたから…。でも次の人に「仙石さんは小さいから左に行けたけど右へ」と指示を出していた。

難所は無事にクリアできたが、この先も沢を行くか尾根に登るか、となった。白鳥さんと八木さんは、沢を詰めた方が楽そうだと、そのまま先に進んだ。後の5人は、木村さんの声が上から聞こえて来たので枯葉の斜面を尾根に向かって登った。やはり沢の方が近いのか、我々より先に二人は木村さんの場所に来ていた。

これでやっと全員が揃い湯沢峠に行き、おにぎりを両手で持っているお地蔵様と再び御対面、手を合わせた。12時、峠は薄暗いので日当たりの良い場所に移動して昼食。

さぁー下山開始、木村さんが登って来た登山道と思われる尾根道を下る。何ヶ所か赤テープもついていた。前回では地図上の登山道があるものと沢沿いの道を探したが分からない訳である。大分下がってくると、木に掛けられた上着が目に入った。木村さんが「尾根に出た時に掛けてきた」との話であった。この先の下りも安心である。だが、ここでまた二手に分かれることになった。5人は木村さんが来た道に入り、3人はそのまま尾根を下った。私は村の何処に出るか興味があったので尾根ルートを選んだ。もう少しというところで踏み跡は消えてしまったが、村のどん詰まりであろう道沿

いのお墓の横に降りられた。車道歩きとなり、見送って下さったおばあさんにお礼をと寄ってみたが不在だった。

13時30分、全員車に戻って来た。歩くコースは色々だったが、湯沢から湯沢峠を目指す、という目的は達成できたのではないだろうか。同行の皆さんお疲れ様でした。でも、楽しかったネ！

参加者：有元、八木、白鳥、木村、篠原、長野、西村、仙石

随筆

## 密　漁

山崎　郁郎

三斗小屋温泉で居候をしていると、主人の一平さんに明日は早くから出発してイワナ釣りに行こうと声がかかった。彼と行くときは何でも現地調達でご飯の他は味噌、塩だけをもって行くが味噌汁の実などは色々獲ったものを入れるので豪華である。大きなイワナの時は刺身にする。

焚き火を囲んでそれらを食べるのは私のような山好きには最高の楽しみである。大概、まだ暗い３時頃には出発した。おにぎりにするには面倒なので湯治客用の小さな３人前のお櫃にご飯をぎゅうぎゅうに入れてそのまま持ち出した。初夏と言っても那須の夜明けは寒いので吐く息は真っ白である。

夜の明ける前から釣り場に着いて、まず石の裏側に付いている餌になる虫を捕まえた。薄暗い内から釣り始め、彼は名人なのでかなりの勢いで釣り上げて、６時頃には30匹は釣れていた。私は釣りをやらないのでイワナを焚き火で焼くのを楽しみに、そして無論イワナ酒にする焼酎も用意している。

８時頃にはもう40匹ほど釣っていた様に思う。沢を遡っていると出会い頭に知らない釣り師が釣りを終えて道具などを整理していた。その釣り師は私達を見て気まずく、そして少し慌てていた。私は整理中の道具の中にオートバイ用の小型電池があるのを見逃さなかった。彼の釣果は凄くて約１００匹、石の上に置いてあった。

私達はそのまま挨拶をして通り過ぎたがイワナ釣りにかけては自信を持っている一平さんは自分より上手な釣り師が居る筈がないと普段思っているので内心穏やかでは無かった。しばらく黙々と歩いていたが山崎さん、さっきの人を見て凄い人もいるものだと思い、私はショックだと悔しがっている。私は電気で獲ったと心得ているので、あれに勝てるわけがない、相手は釣り師ではなくて、電気師だと言うと一平さんは驚いてしまった。電気仕掛けを持っていなかったと言うのでそんなことはない、私は気が付いたと言うと、最近イワナが激減して困っていると言い出した。本当に電気仕掛けで獲っているなら捕まえようと言うのである。私は祖父の池で実際に仕掛けを作り、散々いたずらをやった経験があるので自信があった。捕る道具は自動車のスパークプラグに高圧電流を送るのと同じ原理である。道具は魚をすくう網の先に片方の電極、もう片方には釣り竿を持ってその先に反対の電極を付けておく、両電極を水面に浸けてスイッチを入れるとその間にいる魚が掛かる訳である。

この道具の命はポイントの部分で、この接触部分のポイントをいかに綺麗にしているか、コンデンサーで接触部分の火花をいかに殺すか等まで私はよく知っている。一平さんが、自信があるなら捕ま

えようと言うので引き返した。例の釣り師は整理も終わって引き上げるところだった。私達は電気で獲るのは違法だ！と言うと、そんなことはしていない、この通り釣り竿を持っている、と言い張る。確かに怪しまれないために釣り竿を持っていた。もう電気仕掛けは分解してあるのでまさか私が組み立てられると思っていないらしい。今度は相手が自信を持ち反撃に出てきた。一平さんは私の見立てが間違ったと思い心配顔である。私は呼び鈴のベルに酷似した物が出てきたので安心した。私は素早く電気仕掛けを相手の前で組み立ててしまった。

今日は相手が悪いと思ったのか、観念したふりをして、やってみせるから一緒に来て下さいと誘う。彼は私たちを誘い込み、二人を魚に見立てて電気ショックをかけ、その間に逃げる魂胆で、これをやられたら大変である。一平さんには決して川に入らずに岸で見ているように指示し、私がやられたら陸に上るのを待って木で装置をたたき落としてからやっつけて欲しいと耳打ちをした。私は相手と沢に入って行った。

彼は胸まである長靴を履いて電気には重武装である。水に入ったら絶対に私は不利なので、すかさず倒れそうになったふりをして飛沫を彼に振りかけ長靴の電気抵抗を弱めた。相手はまだ私のことを甘く見ている。それならと私の前に来たところでマイナス側の電極だけを水面に浸した瞬間、相手が持っている道具のスイッチを私が入れた。電気は流れるところがないので彼の体内を伝わって流れることになる。電流は少ないが電圧は凄く、1万ボルト位はあると思われ、相手はいっきに尻餅を付いてしまった。これで勝負は終わりである。一平さんは電気仕掛けを初めて見るので驚きも大変なものであった。試しにやらせたが、大きなイワナが掛かり喜んで電気を切らずに電極を水面から持ち上げてしまった。こうすると先ほどと同じ原理で、ぎゃっ、と声をあげて水面にもんどり打ってぶっ倒れた。普段は熊など恐れない勇猛をもってなる彼も電気には勝てなかった。岸に上っても長い間、拷問にでもあったように暫く起きあがれなかった。この時、私も試してみて大きなイワナが掛かったので嬉しくなり、同じ失敗をしてしまった。私は声こそ出さなかったが同じくぶっ倒れた。後で考えると、人間には電気に対しても抗体が出来るものらしい。密漁者は抗体が出来ているので腰を抜かしただけだが、電灯線も引けてない三斗小屋の一平さんは電気の抗体が全くないのでショックが一番凄かった。私は弱電ではあるが電気メーカーのコンピューターの技師である。少しは抗体が出来ておりショックは格段に少なかった。

この密漁者に、もうここではやらないと誓わせてから、持っていた沢山のイワナを3人で分け、焚き火でイワナ酒を作り仲直りの宴をやった。この密漁者から、私が素早く装置を組み立てたので、舌を巻いたと凄く誉められ、貴方も本当は密漁をやったでしょうと言われてしまった。電気に掛かるイワナは気絶して白い腹を出すので直ぐ分かる。この状態のイワナは気絶しているだけなので電気を切ってしまうと2分ぐらいで元通りに元気になって泳ぎ出す。このため小さいのを逃がしてやれば良いわけで、薬で皆殺しにするような密漁ではないので少しは救われる。電気仕掛けの経験から大きいイワナが何故こんなに狭い、そして浅い所に居るの？と思うような所にも居るの

で驚いてしまう。私にとっては随分緊張もしたけれど気持ちの良い、思い出に残るイワナ釣りであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

特別寄稿

# 令和元年日本山岳会年次晩餐会のメインテーブル「富士山」

北海道支部　芳賀　孝郎

令和元年の日本山岳会年次晩餐会は天皇陛下をお迎えして開催された。

公務で多忙な中、陛下のご臨席に皆驚かされた。それについては下記のようなエピソードも少しは関わっているのではないかと思う。

昨年チョゴリザ登頂60周年記念にあたり、晩餐会の前に「花嫁の峰チョゴリザ」が上映された。皇太子さまはこの映画をご覧になられた。当時の隊員5名、中島道郎、平井一正、高村泰雄、岩坪五郎、芳賀孝郎は皇太子様との懇談の機会を与えられた。

皇太子様から登山の困難なこと、その当時の装備、食糧等についていろいろ質問を受け、緊張したが楽しい時であった。終わりに隊員一同「来年は天皇陛下になられご多忙とは存じますが是非晩餐会にご出席していただきたくお願い申し上げます」と頭を下げた。

12月7日17時10分、日本山岳会新会長・古野　淳と私が京王プラザホテルの前に立ち天皇陛下をお迎えした。陛下は山岳写真展と自然保護委員会の活動展示をご覧の後に晩餐会のメインテーブル「富士山」のお席に着かれた。

「富士山」の席は天皇陛下、古野会長、日本山岳・スポーツクライミング協会会長・八木原圀明、日本エクアドル遠征隊隊長・渡邊雄二、第21回秩父宮記念山岳賞受賞者・安間繁樹、北極南極探検家・舟津圭三、極地冒険家・荻田泰永、ラカポシ南壁初登攀者・中島健郎と私の9名であった。

テーブルマスター古野会長の司会で、会長自身の自己紹介から始まった。

八木原日山協会長の紹介になり、八木原氏は今回の乾杯の壇上での挨拶で言葉が詰まったドジをしたことを反省しお詫びした。私は「エヴェレスト冬期南西壁隊長も上がるのですね」と云った。すると、陛下も「八木原さんが上がるとは意外です」と付け加えられた。八木原氏は「陛下の前なので上がりました」と頭を掻いたので、テーブル一同を笑いに誘った。

八木原氏はスポーツクライミング競技の種目で金メダル候補がいること、選手は一般社会のクラブチームで育った人たちである。学校クラブ出身者との違いを説明した。

続いて秩父宮記念山岳賞の安間氏が紹介された。安間氏は西表島のヤマネコの研究の第一人者である。ヤマネコを山中で夜間観察し、世界最初の動画撮影に成功したお話をした。山中、一人で夜間での観察の恐さをお聞きになり、陛下はそのご苦労をねぎらわれた。安間氏が１９８５年ボルネオ島に渡り足かけ25年、10年間はＪＩＣＡ専門家としてボルネオ島に暮らし、若手研究者の育成に努めたことを熱心にお聞きになられた。

カラコルム・ラカポシ（７７８８メートル）南壁初登攀者・中島健郎氏は悪天候で雪が深く登攀の困難さを説明すると、陛下はその困難はどのようなことかと聞かれた。ベースキャンプから頂上まで４０００メートルの標高差に苦しめられたこと、更に岩壁、氷壁との違いを緊張することもなく、自然な調子で説明した。

舟津圭三氏は犬そりでグリーンランド横断、犬そりとスキーによる南極大陸６０００キロメートルの横断のお話しで、陛下はお喜びであった。犬そりのことをお聞きになり、犬は目標物が無いと走らないので人間がスキーで犬そりの前を走ること、現在南極へは犬を持ち込めないことになり、雪上車の時代になったことを話した。陛下は南極の探検時代は終了したことを再確認されたようだ。

荻田泰永氏は極地冒険家として、カナダ極北からグリーンランド極北までの単独行のこと、北極点と南極点への無補給、単独歩行で成功したことをについて話した。陛下は単独行に驚き称賛し、強い精神力と体力と用意周到の計画を褒め称えられた。

日本山岳会創立１２０周年国際交流事業として、日本エクアドル外交関係樹立１００周年記念友好合同登山隊隊長の渡辺雄二氏は富士山とそっくりな６０００メートル級の山があり、合同登山を果たし友好を深めた報告をした。来年はエクアドルから登山隊が来日し、富士山を合同登山する予定である話をした。

陛下は登山を通しての国際親善を賛辞し、労いのお気持ちを表された。尚続いて渡辺氏は赤道直下での氷河のある山の魅力を語った。

次は私の番と思いきや、古野会長は「先日芳賀さん出身の学習院山岳部１００周年記念祝賀会に参加しました。なかなかスマートな良い祝賀会でした」と話した。陛下は「前回90周年記念には出席したが今回は公務多忙で参加できませんでした。『立山松尾峠の遭難について』の講演をお聞きしたかった」と話された。すると、会長は「会場のマイクが悪く、良く聞き取れなかった」ことを話し、更に「松尾峠で若き優秀な板倉勝宣氏が亡くなったこと。三田幸夫氏も危なかった。もしあの時三田幸夫氏が亡くなっていたならば芳賀さんの奥様は存在していなかったしょう」と云ったので皆が驚き笑った。

陛下は「古野会長はユニークな発想をする方ですね」とおっしゃった。私は考えてもみない面白い話をする会長に「お歳はいくつですか」と聞くと、「陛下より一つ下です」との返事があった。その事を聞いてふと思い出したことがあった。それは、いつぞやの陛下からのお願いごとであった。私は陛下から「若い人たちとの登山を計画して頂きたい」とのお言葉を思い出した。「陛下のご希望を学習院の後輩に伝えたが今日まで実現出来ず申し訳ありません」と謝った。今回古野会長の年齢を聞いたので、私は「陛下これからの登山は、若き会長をお供にしては如何ですか」と提案した。すると陛下は「それは良いお考えです」と云われお喜びになった。

私は昨年「花嫁の峰チョゴリザ」の映画をご覧になっていただいたことと、懇談の時間をいただいたことにお礼を申し上げた。本年は中島、平井の両氏は風邪

を引き、岩坪は脚が悪く、高村は亡くなり私一人ですと申し上げるとくれぐれもお体を大切にとのお言葉をいただいた。

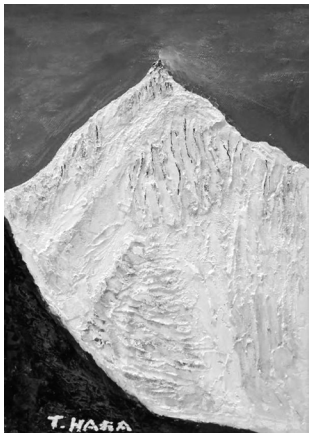
古野会長のウイットとユーモアに富んだ司会でメインテーブルは話が弾んだ。

陛下は動物学者、探検家、冒険家、登山家の率直なお話を喜び楽しんでいらした。

会長と私はホテル前で陛下をお見送りした。その時「今日は楽しかった。有難う」と仰ってお帰りになった。

今回陛下は予定より30分も長くご滞席された。多くの会員からメインテーブルで何を話されたかを聞かれた。ここに報告した次第である。

令和2年（2020）正月記



チョゴリザのヒマラヤ襞

会員山行②

## 平日山行「伊豆・猫越岳」
## 2020年12月16日㈬～17日㈭

諏訪部　豊

猫越岳（一〇三四メートル）は有元支部長の提案で今年度の平日会員山行に組み入れた。支部会員にはせっかく伊豆まで来て頂くので昨年の長九郎山同様に一泊の計画にした。そして二日間を有効に使ってもらうために猫越岳を含む伊豆山稜線歩道を二日に分けて歩いてもらうことにした。参加者の出入りは若干あったが合計12名での開催となった。

初日山行は7名が参加した。新天城トンネル近くの水生地下駐車場（水生地とは狩野川源流のこと）に車を駐め、旧天城トンネルを経て天城峠に向かった。天城峠からはここが起点となる伊豆山稜線歩道を西に向かい、二本杉峠（ここが、旧天城トンネルができる前の旧天城峠で吉田松陰やハリスもここを通った）、滑沢峠を通過し、三蓋山に登った。

スマホアプリを使って一〇一三メートルの三蓋山二等三角点に達したがなぜか山頂看板がなかった。風が冷たく気温も低いまだったので昼飯休憩もそこそこに切り上げた。

山頂看板がなかったので「この山は不遇なんだな。今度設置しに来よう」などと冗談を言いつつ下山を始めた。帰路は滑沢峠から山葵田沿いに下り、水生地下駐車場の車を回収した。

宿は旧国民宿舎「木太刀荘」を改修した「リブマックスリゾート天城湯ヶ島」で中々良い宿だった。ここには直接来た会員が既に到着していて一風呂浴びた後、全員で夕食宴会となった。コロナ渦でなおかつ平日とは言えGoToトラベルのせいかそこそこの泊まり客がいた。宴会が終わって部屋に戻って二次会となった。部屋のベランダには露天風呂もあったがあまりの寒さで誰も入らなかった。

翌日は車四台で仁科峠に向かった。8時30分にここの駐車場に駐め、スズタケの刈り開きを登り始める。素晴らしい晴天で、登り着いたナベ岩からは富士山や雪を被った南アルプスが塩見岳から光岳まで見渡せた。

昨夜の冷気のせいでこれから向かう後

藤山の木々には霧氷が着いていた。後藤山の中段からスズタケがアセビの林に変わる。昨日と打って変わって無風に近い快晴で、往復登山でもあるので隊列がばらけることを気にせず各自のペースで歩くことにした。後藤山と後藤峠を過ぎ、猫越岳火口湖に寄り道する。丸い小さな池で、表面は凍っていた。

猫越岳山頂

仁科峠を出発して一時間半で猫越岳山頂に到着した。先着組は記念撮影の後、先を急ぐ。猫越峠を過ぎ、一〇一四メートル峰下の見事なブナ林でしばし休憩する。この地点は廣澤和嘉会員と児平隆一会員の共著「しずおか低山ウォーク・ベスト二〇」で「大ブナの森」の名で紹介されている。大きな木は樹齢約二〇〇年とのこと。

ここまでで戻る会員と別れ、もっと歩きたい会員は計画通り昨日のピーク、三蓋山を目指す。歩道は殆どが山腹を巻いていて水平で気持ち良く歩ける。やがて登りに転ずると広々したブナ林の中に三蓋山の立派な山頂看板が現れた。昨日登った三角点のあるピークよりも五〇メートルほど西にあった。やはり山頂看板はあったのだ。ここで昼食にした。ついでなので昨日の三角点ピークにも行ってみた。

復路はサクサクと飛ばし、14時40分に仁科峠に戻り着いた。解散式の後、各自家路に就いた。

伊豆の天城山域はスズタケ、アセビ、ブナ、ヒメシャラ、シャクナゲなど植生が豊かで変化に富んでいる。今回はその一面を披露できて良かったと思った。

山中で赤堀会員から「先日のハイキングセミナーで登った愛鷹山にしても昨日・今日のこの山にしても県東部にはこんなに良い山があったんだ！東部の会員はなぜもっと宣伝しないのよ？」とのお褒めとも叱責とも取れる話を聞いた。「なるほど、その通りだ」次の機会はシャクナゲの咲く頃に天城山縦走を計画しようと思った。また今回の伊豆山稜線歩道の続きである仁科峠から達磨山までを歩くのも良い山行になると思う。

参加者：有元、大島、白鳥、八木、長野、加田、増田孝、中野、西村、仙石、赤堀、諏訪部

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

## 静岡の森づくり（川合山）

山本　良三

なぜ、川合山なのか？市街地に隣接し、よく目立つ場所に放置竹林が山全体を覆っている山がある。それが川合山だったというのが理由である。このような山は静岡県では随所に見られる風景の一つかもしれないが、交通至便で多くの車が駐車できる場所であることも選定理由である。

## 1、現状

静岡市葵区瀬名地区の川合山（標高１２４．９ｍ）は住宅地に近接していながら、その西面は竹林に覆われている。その昔、明治29年の地図では西北に浅畑沼が広がり、付近一帯は沼地であった。今はその地に静岡卸売センターや協同組合静岡流通センターがある。

特に西面からの見晴らしは遮るものとてなく、山全体の放置竹林状態が手に取るように見える。

麻機遊水池から

放置竹林はそもそもミカン畑や茶畑であった処が、長年放置状態にされていたせいで、竹林が繁茂したもので、全て民有地で、幾多の地主がいる。今も筍を収穫する地主もいるようだが、大半は放置状態と見られる農地である。

これらの放置竹林を伐採するには、地主の了解が欠かせないが、余りの地主の多さに手を出す人がいないのが現状のようだ。ではどうすればいいのか。

地元川合地区には部農会という地主の会がある。部農会長に話を通し、了解を得た上で、地区の市会議員出席のもとで、説明会を開く。

そして、質疑応答を繰り返しながら、最終的には全地主の了解を得て、契約書を交換し、ようやく伐採できる状態になる。道のりは果てしなく遠いようだが、やって見なければどうなるかわからない。多様な考え方の地主がおられようが、放置竹林状態が望ましいと理解している地主は多くはないと思われる。

集中豪雨に放置竹林が脆弱であることは常識である。竹の根は浅くて横に伸びる性質があり、雨水が根の下の土壌面を流れると、斜面全体が大崩落を起こす可能性がある。竹林を伐採して深根性の樹木を植樹して、斜面の崩落を事前に防ぐことが必要である。

これは地域防災の一つの形である。

本来、山には樹木が繁茂しているのが常態であり、東海地方から西に多い放置竹林は、どこも集中豪雨に弱い。竹林を伐採して郷土の樹木を植樹する対策を講ずるのが地域防災の基本であろう。

## 2、ＪＡＣの森づくり

公益社団法人日本山岳会は２０００年６月から、公益的観点から高尾の森づくり（１７８ヘクタールを林野庁から譲り受けた）を開始した。

２００４年には東海支部が愛知県と協定書を締結して猿投の森づくりを始めた。今日までに表明された各支部の森づくり活動は、次の通りである。

(1) 支笏湖復興の森づくり（北海道支部）
(2) 白神山地ブナ林再生事業（青森支部）
(3) 緑の森づくり活動（埼玉支部）
(4) 里山の復活を目指す森づくり（福井支部）
(5) 権現の森づくり（岐阜支部）
(6) 本山寺山森林づくり（関西支部）
(7) 水源の森づくり（熊本支部）
(8) 水源の森づくり（宮崎支部）

10支部の森づくりが展開されている

が、中でも出色は高尾の森づくりで、その規模においても参加する員数においても、関東圏を背景に交通の便利さから、会員外の参加者も多く、親子森林教室などは世代を繋ぐ貴重な取り組みである。

いずれの支部にあっても、交通至便の立地は重要な要件である。

## 3、静岡の森づくり

静岡の森づくりは、既に森づくり事業を決めた支部執行部が、仕掛け人となって、静岡山岳3団体(旧静岡県岳連、静岡市岳連、静岡県労山)に呼びかける形で展開されるのが望ましいと思われます。

私は、ＮＰＯ法人静岡山の文化交流センター代表という立場で、そのための事務局を担おうと考えています。森づくりというボランティア活動を基本とする事業を継続するためには、それ相応の資金が必要になります。会費だけで賄うことは無理で、民間企業からの寄付や助成金、行政からの補助金などを獲得しなければなりません。

そのための事務局機能は重要かつ必須で、誰かが担わなければなりません。

資金を得て、ボランティアに１０００円、２０００円の日当補助が支払えるようなシステムがなければ、長期的な森づくりは継続できずに、中断状態になってしまいます。そんなことにならないためにこそ、資金集めが鍵となります。

## 4、流通センターの森

川合山の西面の放置竹林に隣接する流通センターの森（約1万坪）の大半の放置竹林は伐採済みで、崩れそうな場所はモルタルで補強されている。伐採跡地にこれから深根性の樹木（欅、楓、紅葉）等の大きな根巻き苗を植え込み、斜面崩壊防止の基幹樹木とし、順次コナラ、クヌギ、山桜、椎、粗樫、白樫、山栗等の植林を行うことにより、法面整備事業に協力する。２０２１年3月から当該事業はスタートする。その後3年程度の間、残置竹林の伐採・除去、竹の粉砕・圃場への散布、植樹（根巻苗）・植林、下草刈り等の作業を継続する。協同組合静岡流通センター理事長、専務理事の理解を得て必要経費は寄付願えることになっているので、当面資金に困窮することはない。ボランティアには２０００円日当補助の支払いが可能です。取り敢えずは、流通センターの森づくりから開始することになります。

頻回参加の場合には交通費の補助も出す予定にしています。ボランティア作業の内容につきましては、その都度、作業要領書をメール添付で流し、要員募集を行います。多くの会員の参加を期待しています。作業は午前中２時間、午後２時間程度を考えています。

以上

2021.03.14　第１回植樹作業

個人山行

# 【痛恨の釣り山行】

加田　勝利

創立七〇周年記念誌『不盡』の三九頁に書いた沢に、昨年六月二七日に仲間三人で入った。この日は天気が良く青空が広がっていた。

ひと休みしてから竿を出して、二八センチ位の山女を四匹釣り上げ、マキ集め、寝場所をつくりビバークの準備は出来た。六年前の山女釣りでいちばん大きかったのは、三六センチだったがだんだん小さくなって来た。天気予報は、明日は雨とのことだ。各自持参した四合瓶の日本酒で乾杯し、自分は二〇時には眠くなるので、先に骨酒と焼き上がった山女を頂く。釣りたては格別に旨い。仲間より一足早く寝袋に入った。天幕は持参せず、寝床を平にならし、寝袋にもぐるのが僕らのビバークである。ここ六、七年は来ているが、最初に入ったのは山日誌を調べると、一九九一年八月二四日で、三〇年も前のことだった。大きい山女を七、八匹釣り上げた思い出の沢である。雨が降り出したのは予報より早く、夜中の二四時頃だった。例年六月下旬と言えば梅雨の頃で雨は仕方ない。寝てはいられずザックに腰をおろし、ポンチョをかぶり、朝を待つ。白々明けた四時頃やっと雨も上がった。仲間もびしょ濡れだ。後片付けを済ませ四時三〇分、尾根を目指し登り返す。

いつもなら一人二、三匹釣りながら遡行するが、今回はやめた。三時間もあれば尾根に着くが、五時間かかり九時三〇分だった。しばらく休んで下り出す。この頃から右足の裏が痛くなり出した。夜中の二三時頃まで歩き、それからは仲間二人が両肩を支えてくれ、翌朝二時半頃、仲間に迷惑かけられず登山道でビバークとした。仲間には宿へ帰ってもらったが、六時頃着いたと言っていた。ビバーク中三人の登山者に声をかけられたが、足が痛くて歩けないと答えた。

六時頃から目標物の太い木を目指して、一五メートルから二〇メートル歩いてひと休みし、三時間程下った所で仲間が登って来た。宿の主人が役場に連絡してくれ、昼頃には飯田広域消防本部から僕を背負いにやってくると言って、ここで待つように指示されしばらく待った。役場の職員も数名見え時間は覚えていないが、背の高い若い消防本部の方々が七名登って来てくれた。ここから一時間程背負われ世話になったが、背負う時間は五分程で順次交替し、先頭を歩く人はここに段差がある等指示した。消防車、パトカー、救急車と三〇名程の人が下山地に集まっていた。お礼もそこそこに救急車で約二時間、飯田市の健和会病院へ運ばれ、病院に着いても三〇分程車の中で検査し、ようやく二〇時頃レントゲンを六枚撮ってもらいどこも異状はないとのことだった。七八才で二二時間は歩き過ぎだと医師は言った。痛み止めの薬をいただいて持ち合せがなく、後日診察代二一〇〇〇円を送金したら、おつりが一八三〇〇円振り込まれた。個人負担は僅か二七〇〇円で、大勢の人達に出てもらい申し訳なく思う。仲間が迎えに来てくれ宿へ着いたのが二二時頃。翌日飯田警察署地域課の村松課長より電話が入り、いろいろ確認されたが、僕らの会のことを知っており、びっくりした。紺の上下を着て赤いザックを背負って山を歩いている等、「東京に居た時『山と渓谷』を見た」のでは

ないかと思った。
　今年の六月二十六日は世話になった役場の職員、飯田広域消防の職員、飯田警察署の地域課長を呼んで塩湯荘で一杯やる計画です。

紀行文

# 如月の焼岳

白鳥　勝治

　二人の誕生月に記念山行をするようになってから久しいが、この時期の山は、寒さは勿論のこと風雪ともに厳しいので、登頂にはあまりこだわらず幕営をしてスノーシューで雪山を歩く楽しみと、雪山の美しい景色を眺め愛でることを主にして続けてきた。今回、早い時期より焼岳を選んだ理由は、アプローチが容易で降雪に安全な駐車場があり、そして樅や栂など好きな針葉樹が多い林に積雪量が豊かな事と穂高、槍など北アルプス主峰の眺めが良いことで決めていた。

２月５日、晴れ

　前夜、乗鞍高原の駐車場で幕営し、朝、予め頼んでおいた中の湯旅館の駐車場に車を入れスノーシューを履いて出かけた。辺りの積雪量は予想した通り多かったが、幕営予定地の炭焼き平を目標に15時頃まで歩き到達した所で幕営すればよいと考えていたので気にはならなかった。中の湯ルートの登り口は、焼岳の南峰より南東に伸びている尾根が、安房峠を越える旧国道の下から10番目のカーブの上に当たる所から始まっている。夏路は旧国道の登山口から平坦な山路で安房山から北に落ちている尾根裾を東側に廻り込んで、焼岳の南峰につながる尾根に取り付いている。この尾根は登り始めの斜度がきついので、積雪の多い時期は雪崩を避けてアカンダナ山や白谷山へ連なる谷の狭い入り口より尾根に取り付き、なるべく斜度の緩い木立の中を登るのが良い。今日の積雪量は数年前の冬山合宿や山スキーで訪れた時よりも多く、今の自分にはテントを担ぎスノーシューで直登するのは大変なアルバイトだ。幸い最近山スキーに訪れた人のシュプールがかすかに残っていたので、それを辿って登ることによってスノーシューの浮力で沈み込みがだいぶ緩和できた。それでも木立からの落雪や飛雪によってシュプールが消えたところのラッセルには汗を流した。天気は穏やかに晴れて風も無く針葉樹の枝に積もった雪が落ちてこないのが幸いであった。彼女はよく「晴れ女」を自讃するが、確かに一緒に歩いた山々は晴天の日が多い。今日も二月には珍しいほど静かで穏やかな天気である。このような日和でも古稀を過ぎてから一段と足腰が弱くなり一日中もたりもたりと遅い足取りで歩く自分を承知のうえで、毎年同行してくれる彼女に感謝しながら時間を費やすうちに幕営予定地に着いた。思ったより早く着いたが雪が深く、踏み固めて地拵えをするのに時間がかかり丁度良い按配で一日の行動を納めた。テントの中が明るいうちに雪を溶かして水を作り、明朝までの必要量を確保した後、早めの夕食をしながら一杯飲んでゆっくりと静かな夕べを過ごした。

２月６日、晴れのち曇り

　昨夜は風が吹かず静かな夜だった。寝る前に明るくなったら歩き出そうと決めていたので５時に起きて手早く朝食を済ませた。アイゼンとピッケルを背負いスノーシューを履きストックをもって出かけた。綿のような雪を枝に載せて着飾った針葉樹の林を抜けると間もなく下堀沢

との合流点についた。視界が広がって穂高連峰や霞沢岳がよく見える。焼岳の頂を仰ぐと晴れ上がった青空に真っ白に雪を被った南北二つの峰がきれいに見えた。北峰の頂上直下の山腹から白い噴煙が立ち昇っていた。時折、風に乗って硫黄の臭いが漂ってくるが、あそこからだなと思いながら南峰の稜線へ取り付いた。山スキーのシュプールから外れるとスノーシューでも膝上までもぐるラッセルだ。尾根の急斜面は膝を使って一歩を拾う輪かんじきの歩き方で登った。彼女もトップに出てラッセルをしてくれたが体重が軽いので、後を歩くとかなりもぐった。稜線をたどって標高２３００㍍にある南峰のザッテル（肩）につくと風の通り道と見えて、地表は辺り一面シュカブラで覆われ、立っている杭には長い「えびのしっぽ」が着いていた。彼女が気にしていた風も弱く問題はなさそうなので、スノーシューを脱いでデポしアイゼンを履いて頂上へ向かう。所どころ岩が露出している稜線筋は雪の状態もよく順調に登る。引き返す予定の時間近くになったので「もう戻ろうか」と話しているうちに頂稜へ出た。夏は一般の登山者があまり訪れることがない南峰の山頂には古い小さな木板の標識があるだけだが、ここからの眺望は目を見張るものがある。目前の北峰は、山腹にある周りが黄色になった噴穴からボーボーと音を立てて水蒸気を噴出し迫力がある。その後方には西穂高から奥穂高や前穂高までの穂高連峰が見える。又、奥穂高のかなたには槍ヶ岳や双六岳、三俣蓮華岳が連なって見えた。頭をまわすと笠が岳や乗鞍岳、そして遠くには白山や御岳も見える。空は巻層雲が広がり青さが薄くなってきたが頂上の展望は素晴らしかった。11時半前、下り始めザッテルでデポしたスノーシューに履き替え、雪が軟らかい尾根筋の急斜面をスノーシューの浮力を効かせて快適に下ってきた。森林帯に入ると風を殆ど感ぜず汗が出るほど暖かかった。幕営地に戻りテントを撤収し、登りのトレイルをゆっくり下って来た。中の湯旅館の駐車場に着き装備を解いていると待っていたように雪が降ってきた。中の湯で温泉にゆったりと浸かりながら今日の山歩きを寿ぎ一日を納めた。

（２０１１年）

## 山荘をベースに山に登る会「下十枚山」

山﨑　洋

２０２１年3月6日土曜日、朝8時に安倍ごころに集合後、数台の車に分乗し移動を開始する。今日は文珠山荘の行事「山荘をベースに山に登る会」で、いつもより集合時間も1時間早い。まず登山をしてから山荘に行くことで、心地よい疲労の中で夕食を楽しめる算段だ。

途中で、赤堀さん特製、夕食の芋煮に使う里芋を調達したり、道を間違えて戻ったりしたこともあって、出発から1時間程度かかってしまったが、無事目的地の下十枚山（天津山）地蔵峠登山口駐車場に到着。軽く準備運動をして9時過ぎに行動開始。

天気は曇り時々晴れ。ちょうど花粉の飛散シーズンであり、心配していたが何とか行けそうであった。足元に多少のぬかるみはあったが、体を慣らしながら歩みを進める。メンバーと最近の登山について話をしているうちに時間は過ぎ、地蔵峠（1，414㍍）に10時過ぎに到着

した。なかなか気温も高く、ここで休憩中に1枚上着を脱ぐことでより快適に歩けるようになった。

さらに歩みを進めること1時間。岩岳（1，653㍍）を通過。この頃には日が差し、春の訪れを感じさせた。展望も良くなり、富士山の眺めに足を止めるところもあった。道中、地図上では1，682㍍のピークが表示されていたが、特に標識がなく、どこがピークなのかわからない箇所もあった。

最初の目的地の下十枚山（1，732㍍）には正午前に到着。ここで少し長めの休憩をとり、ここから十枚山まで進むグループと、談笑しながらゆっくり往路を戻るグループに分かれた。二等三角点を写真に収め、行動食を口にする。計画書では、ここから先のコース上で積雪や凍結があり得るため、アイゼンやピッケルの携行を勧めていた。

私は下十枚山、十枚山ともに初めてであったため、十枚山まで歩くグループに入った。下十枚山から十枚峠に向けて出発した直後は、日光が当たりにくい斜面を通過する箇所もあり、残雪、凍結、降霜が見られた。途中、滑りやすく急な坂の通過に細心の注意を払い、転倒を避けながら十枚峠を目指す。

気持ちが良い景色に足が軽くなる

大変見晴らしがよい箇所もあり、梅ヶ島方面を一望できた。この日は富士山の眺望も良かったが、個人的にはこの写真のように、反対側の景色が素晴らしく、今日一番の収穫だった。

十枚峠には12時30分過ぎに到着。結局、幸いなことに、準備していたアイゼンを出すような難所はなかったが、滑りやすく転倒を警戒すべき箇所が少しあったため、またこの時期に歩く場合には注意しておきたい。パーティの最後尾に位置取り、ゆっくりと山頂を目指す。

最終目的地、山梨百名山にも選出されている十枚山（1，726㍍）には13時頃到着した。先客の登山者も少しあったが、思ったより少なかった。山頂からの風景を写真に収め、皆で登頂の労をねぎらう。少し長めに休憩し、帰路に就いた。

15時30分過ぎにスタート地点に到着。皆で記念撮影し、山行は終了となった。この季節、本当に暖かくなり、途中から上着は不要だった。花粉症の症状が出てその度に点鼻薬や目薬を使うため足を止める必要があったが、それ以外は気持ち良く歩ける行程で満足した。この後、「真富士の里」でトイレ休憩し、安倍ごころから山荘へ向かった。当初の目論見通り、芋煮を食べながら一日の疲れが癒せ、気持ちよく眠ることができた。

（支部会員参加者11名：赤堀、有元、伊東、小嶋、篠原、仙谷、中野、長野、中村、八木、山﨑）（会員外参加者3名：工藤、前田、脇葉）

## 【文珠山荘便り】

文珠山荘運営委員長　山﨑　洋

今回は、山荘に一度も足を運んだことがない会員に向けて、どのように山荘行

事の参加者が会員同士の交流を楽しんでいるかを紹介したいと思う。

文珠山荘は、故 荻野恭一会員から日本山岳会が寄贈を受けたログハウスで、支部会員の憩いの場として使われている。竜爪山文珠岳の登山道付近に立地しており、道は狭いが、自動車でアクセスすることができる。静岡駅から車で行っても30分程度の距離。電気が通っており電灯、冷蔵庫、掃除機などの電化製品が役立っている。スマホの充電も問題ない。ただ水道は引かれておらず、付近の山中から採水し、タンクに水を溜めて利用する仕掛けが作られている。降雨がない日が続いて、タンクの水が少なくなっている場合には、ふもとからポリタンクに水を汲んで持ってくることもある。最近までガスの契約をしていたが、最近解除したため、調理の際にはカセットコンロを用いることにした。

この山荘で、年6回ほどの行事を企画し、支部会員の交流を深めている。多くの場合、行事がある日の朝9時に付近の「賤機都市山村交流センター 安倍ごころ」に集合し、複数の自動車で山荘に移動する。午前中は山荘の内部や周囲の清掃を行い、必要に応じて採水地の様子を見に行く。最近は、それが終わったタイミングで各委員会の会合を行うこともある。これらの用事が終わったら、正午前後からお酒を飲み始めて昼寝、ということも。

前運営委員長の諏訪部さんが精力的に設置した山荘内の映像・音響機材を利用し、夕方から山荘の中で山の映画を観る、というのが恒例行事となっている。最近では『ＢＯＸ 袴田事件 命とは』や『八甲田山』が上映された。プロジェクタや5．1ｃｈサラウンドで映画を観るためには環境の整備が必要で簡単にはできないため、これだけでも未経験の人に山荘行事への参加を勧めたい。

映画の上映が終わったら、事前に買い出しを済ませていた食材を利用して、夕食の準備に取り掛かる。調理の手間、負担を一部の会員の厚意に甘えて押し付けてしまっているとの反省があるため、普段料理をしない人でも積極的に準備や片付けに関わることが課題。

その後は参加者で語らいながら、宴会となる。先ほどの映画を振り返るのも良し、最近登った山の話で盛り上がるのも良し。この時間が一番、過ぎるのが早く感じる。宴たけなわになったあたりで、どこからともなく楽器が準備され、ギターの演奏に合わせて山の歌や昭和の懐メロを歌う、というのが定番になっている。実は私も何を隠そう、毎回家からベースとアンプを持参して演奏に参加している。山荘の周囲に民家がないため、心置きなく大きな音を出すことができる。今後、山の歌の演奏を本格的に練習するなどして、山荘行事の魅力の一部として確立できればと思う。

夜遅くまで宴会は続くが、眠くなってきたら各自が持参した寝袋を広げてお開きとなる。風呂には入れないが、それも山の醍醐味ととらえて楽しめるようになれたら一人前だ。

翌朝、前夜の料理で残った鍋のスープなどを利用し、うどんなどの朝食をとり、掃除、片付けを経て7、8時頃に散会となる。

山荘での集まりはいつもこんな感じで時間が過ぎる楽しいひと時になる。ただ、コロナ感染症対策という側面で見ると、改善すべきことばかりなのが現実である。今後、6月、9月と山荘の行事が予定さ

れている。楽しい集まりが今後も継続できるよう、終息を願うばかりである。

## 【ニュース】

### 照内明良会員、日本登山医学会奨励賞を受賞

鹿屋体育大学の大学院に在籍の照内さんは、昨年十月三日、四日にオンラインで開催された第四〇回日本登山医学会学術集会で、奨励賞を受賞しました。

研究の内容は、登高速度のわかる機器を用いて体力相応の歩行ペースで登山することで、心臓突然死を起こすリスクを軽減することに寄与できる可能性があることを示した。中高年者を対象に実施・検証をした。登山中に心臓が苦しい、息切れがするという事案がなくなるので、山岳遭難対策の一助となることが期待される。

## 【会員動向】

**退会**　会員番号１５２９３　長丸とも子
会員番号１４８７０　杉浦　寛
会員番号１１３９７　高須梧郎
会員番号９３４２　河合俊男
会員番号１５０４３　小川三千男
会員番号１５０４４　小川峰子

**新入準会員**
会員番号Ａ０３３１　薮崎眞弓
会員番号Ａ０３５４　伊東見奈子

**新入会員**
会員番号１６７０８　山田藤夫

## 【お知らせ】

**①富士山写真・原稿募集**

会報表紙を飾っている富士山の写真と原稿を募集します。原稿は、紀行文や随筆、本の紹介等どんなものでも結構です。字数は２５００字程度。

**②支部会報不盡88号の訂正**

こぼれ話に誤りがありました。お詫びして訂正します。11ページ、1段目9行TUBAKI（誤）→ HiBARI（正）

**③8月11日の納涼懇親会について**

コロナの終息が見通せぬので、２０２１年度行事計画表兼参加表明書から割愛しましたが、一応実施する方向で検討します。詳細は後日決定・連絡します。

## 編集後記

今号のトップは、新支部執行部の誕生です。静岡支部に新しい血が投入されて、より一層活発な活動が展開されるものと期待します。今期限りで、退任された有元さん、木村さん、西澤さんには、任期中のご労苦に深く感謝します。

もう一つの注目は、元副会長で現北海道支部の芳賀孝郎会員による特別寄稿の【令和元年度の年次晩餐会のエピソード】です。天皇陛下が臨席されたテーブルでの話はとても興味深いものです。筆者と親交のある山本良三さんを介して特別に入手できました。締め切り間際に届きましたので、旬が外れない内に執筆者の了解を得て掲載しました。（K・N）

発行者　公益社団法人 日本山岳会　静岡支部
支部長　中村　博和
編集責任者　長野　和義
事務局　〒410-2144
伊豆の国市韮山土手和田114-5
諏訪部　豊
印刷所　株式会社　三創
静岡市駿河区中村町一六六-一
☎054-282-4031